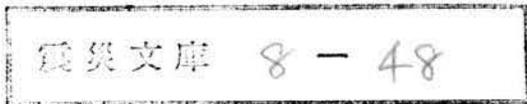




本校の庭園は久原房之助氏（実業家、政友会総裁）によって築かれたものです。この庭園の湧水は、床下に流して冷房するために、彼が住吉川上流（白鶴美術館北方）から隧道を作って引いたものです。今日も清冽な水が四季を通じて湧き出しており、本校生の憩いの場となっています。また、水質も良く、飲料水としても秀れていることが、市立環境保健研究所の検査の結果、証明されています。

※ なお、この湧水は阪神大震災後、水脈が変わったためか、現在は涸れています。



目次

卷頭言

震災記録文集を発行するにあたって	学校長	川崎 凱史	4
震災を振り返って	楠高等学校長	和泉元 眞	6

第1部 避難所となった学校

(1) 学校日誌から		8
(2) 教職員の行動		17
・長い長い一日、1月20日	辻本 正子	17
・震災後一週間の職員の動き	長尾 洋治	21
・阪神大震災とレクリエーション	渡辺 眞一	24
・物資テントでの1ヵ月	田中 孝明	31
・震災後の三ヵ月を振り返って	此松 信孝	33
・避難者名簿の作成	山品 利男	35
・避難者だよりの発行に携わって	磯野 修亮	39
(3) 避難者の声		40
・ご援助・ご激励下さった皆様に	避難者一同	40
・若いボランティアに感謝	河村 博行	41
・市立神戸商業高校での思い出	山名 ハナ子	42
・神商グラウンドでのテント生活	安田 筆一	44
・神商での186日、ありがとうも言えないままに	中野 茂美	44
・神商避難所暮らしー思いつくままー	永岡 幸生	46
(4) ボランティアの声		48
・神戸市立神戸商業高校でのボランティア体験記		
名古屋市立名東高校	岡田 晴彦	48
(5) 報道関係者の声		50
・地図の向こう側	名古屋CBCビジョン 友松 裕喜	50

第2部 震災後のおもな教育活動

(1) 震災直後の教育活動		54
・生徒の安否確認と授業再開	田中 孝明	54
・おもな避難所と生徒の安否確認	笠井 大三郎	66
・イラストで綴る生徒の安否確認	木村 廣太郎	70
・震災前後の進路指導	岡田 靖夫	72

(2) 卒業式	75
・震災の中の卒業式	太田 嗣夫 75
・平成6年度卒業式	田中 義人 78
・送辞	(在校生代表) 北尾 陽子 80
・答辞	(卒業生代表) 加藤 ゆかり 81
(3) 入学式	82
・入学式の思い出	教頭 岡田 孝久 82
・避難者とともにいった入学式	濱口 直子 83
(4) 野球部、岩手遠征	84
・岩手遠征を終えて	松田 幸太郎 84
・岩手合同合宿	由井 秀弥 84
・岩手に行って	福井 基之 85
(5) 本山第二小学校との交流	88
・対面式	うれしかったよ、対面式
本山第二小学校5年	池内 愛佳 88
・お別れ会	ありがとう神商のみなさん
本山第二小学校5年	斎藤 宏樹 88
本山第二小学校5年生のみなさんへ	中野 聡美 89
・神商祭	ネバーギブアップー負けないぞー
本山第二小学校5年	數越 慶子 90
神戸商業高校から帰って	
本山第二小学校5年	清水 径 90
(6) 不況に震災追い打ち	92

第3部 生徒の見た大震災

(1) 弔辞	平野 聡 94
(2) 震災体験作文	96
・震災を乗り越えて	堀家 名穂子 96
・大地震に遭って	細 畠 智琴 96
・テレビが伝えた神戸商業	永澤 久美子 97
・人間の助け合い	宮本 文美 98
・加古川での受験	塩谷 理紗 98
・不安だった受験	大西 美里 99
・亡くなった友達	渡海 博司 100
・みんなのぬくもり	片山 志乃 100
・地震で失ったもの、得たもの	山本 佳奈 101
・呼びかけに応える神戸	井上 幸 102

・震災のあとで	中西祥子	102
・受験と阪神大震災	有野真矢	103
・人間って意外に強い	松下亮子	104
・避難所は一つの家族	高木恭子	105
・ありがとう	藤村昌司	106
・忘れられない大震災	福井義人	108
・なくなってわかるもの	牧野美沙子	108
・勇気づけられたボランティア	越川佳代	110
・家族一緒に暮らしたい	中井敦子	112
・同じ神戸なのに	龍田香織	113
・そこにいる筈の人	梨木翠	114
・11人と1匹の共同生活	大谷昌世	114
・平成の戦場の中で	川崎恵子	115
・本当の優しさ	吉岡沙緒里	115
・おばちゃんなんで泣いたん	藤岡愛子	116
・家族を好きだと思った	平野真由	116
・大震災にあって	立山優子	117
(3) 震災レポート		118
・大震災に学ぶ	東條紀子	118
・被災後のライフライン	駒形由紀子	119
・多くの人に感謝	奥村秀人	120
・震災当時の近所のように	森安晃久	121
・被災状況と被災後の居住環境	鎌倉桂子	122
(4) ボランティア体験記		125
・ボランティアをして	脇谷朋子	125
・生きることの尊さ	小幡寛満	126
・ボランティアによって得たもの	長間宏則	127
・母校でのボランティア活動	卒業生 橋田一義	128

第4部 教育活動に関する報告・研究

・災害時の学校管理をめぐって	川崎凱史	132
・「心の傷のケア」の調査と考察	内藤美朝子	139
・震災後における体育授業の創意工夫	宮崎仁史	147
・震災を事例とした地理学習の教材開発	伊藤善文	152
義援金を送っていただいた団体・個人一覧		158
編集後記		159

震災記録文集を発行するにあたって

学校長 川崎 凱 史



あの『1.17』から1年が経過した。月日の過ぎ行くのは早いものである。しかし、こうしてペンを執るとあの日の出来事が鮮やかによみがえってくる。『1.17』は我々教師集団にとって、また生徒達、いや全神戸市民にとって生涯忘れることのできない大惨事であった。そして、この体験をささやかであれ一つの記録として残し留めて置こうということも体験をした者

誰しもが思うところである。本校においてもこうした思いが深まり、記録文集作成に取り掛かったのが2学期に入ってからであった。それから4ヵ月、教職員、生徒を始め多くの人々の手によりこの文集は完成した。

ところで、あの日の夜明け間近な朝5時46分に突如として最大震度7という直下型地震が神戸を中心に、阪神、淡路を襲い、神戸市全域で4319人の死者を出したが、とりわけ東灘区では死者1414人、倒壊家屋30,000戸という大きな被害が発生した。

学校も例外ではなく、本館管理棟はまさに倒壊寸前の大被害を受けたのである。1階部分の全ての窓枠が例外なく「く」の字に曲げられ、さらに内部に入ると壁は崩れ、柱は傾き、梁は落下し、廊下に並んでいた教職員のロッカーは全て転倒している有り様であった。

本館以外の校舎や施設等も例外ではなく、南館の巨大な柱には至るところに不気味なまでの亀裂が走り、グラウンドにも地割れが生じ、ブロック塀やフェンスもあちこちで倒壊していた。このような惨状を呈した学校に、夜明けと共に付近住民の避難が始まり、その数は見る間に増加して行った。17日の午後には凡そ500人となり、さらに翌日には東灘区沿岸部に在るLPGタンクのガス漏れで避難勧告が出されたこともあり2000人へと膨れ上がって行ったのである。

こうした事態の中で、体育館の掃除、ストーブやゴミ入れの用意など避難住民の受け入れ準備から始まる避難所としての諸々の業務に教職員は懸命に従事した。

しかも、一方では生徒の安否確認と授業再開、卒業式や入試の準備といった学校本来の業務も急を要する状況にあり、文字通り皆は不眠不休の状態で毎日の仕事に取り

組んで行った。今、私は本校の教職員一人一人に対してただただ感謝の念を覚えるばかりである。

あれから7ヵ月過ぎた8月20日、神戸市は学校の避難所解消を打ち出し、それに伴って本校で避難生活を送っていた地域住民は全員移動され、体育館もまたグラウンド南側のテント跡地も生徒達の下に帰って来た。しかし、グラウンドフェンスの修復など学校が完全に復旧するにはまだかなりの手立てと日時とが必要である。

また、こうして筆を執ると、家屋の倒壊により青春の夢を胸に秘めたまま若い命を奪われてしまった二人の女子生徒のことを、私はどうしても思い出さずにはおられない。倒壊した自宅の下で、父母を求め、親しかった友人の名を心に浮かべながら、命の消え行く瞬間を体験したであろう二人のことを思う時、何とも言いようがなく、胸ふたぐ思いがする。今はただ安らかに眠れと祈るばかりである。

さらにまた、震災直後から炊き出しや食料の配布、あるいは風呂の世話などと親身に働いてくれたボランティアの方々や激励の便りや義援金、救援物資をお送り頂いた全国各地の人々に心からお礼を申し上げるものである。

最後になったが、この文集に納められた一つ一つの作品から、「助け合う心の大切さ」、「生きることの素晴らしさ」、そして「大自然への畏敬の念の大切さ」を読みとって頂くことをお願いして、この『巻頭言』を閉じることにしたいと思う。

震災を振り返って

神戸市立楠高等学校校長

和泉元 眞

(前神戸市立神戸商業高等学校教頭)

いま、1月17日の大震災発生から3月末までを振り返ってみると、様々なことが次から次へと頭に浮かんでくる。

正門前の山手幹線道路から見ると、なんの変化もない、いつものように見える校舎が、校門に入ると、警報器や電話が、むなしく鳴っていて、窓枠は「く」の字に曲がり、今にも倒壊しそうな本館（管理棟）を見て唾然となる。出勤していた教職員で体育館をモップで掃除しているところへ、避難者がどんどん集まり、見る見るいっぱいになる。翌日には約2,000名にもなり、南校舎・北校舎にまで入る状況となる。教職員でトイレの清掃をしたり、プールからトイレ用の水を運んだり、本館が立入禁止であり余震があるにもかかわらず、職員室や校長室、事務室などから必要な書類などを運び出したこと、講堂のパイプ椅子や図書館の書物をリレー式で運び出したこと、一つ運び出したらもう一つ、あれもこれもと、きりが無い。口では危険だから立ち入らないようにと言いつつも、心の中では、もっともっと運び出したいという矛盾した気持ちであった。

1月21日の職員会議で、生命の尊さ、避難者への対応、学校再開の三つを柱にして全教職員が力を合わせてやっていくことを決める。生徒の安否確認のために、担任が中心になっての避難所巡りや家庭訪問。残念であったことは、2名の女子生徒が自宅全壊のために死亡したという悲しい知らせであった。

2月9日の最初の登校日には9割の生徒が登校してくれたことは何よりもうれしかった。体育教官室を本部兼宿直室として、電話の対応、情報機器を持ち込んでの避難者名簿などの作成、その中で食べた温かいインスタントラーメンの何とおいしかったことか。

避難者代表、役所、ボランティア代表、教師との会議が夜に開かれ、時には激論となることもあった。避難者に対して、毎日、朝夕のつどいを行い、諸連絡や「被災者の皆様へ」のプリント配布、ラジオ体操、また少しでも明るさを取り戻そうとして「ちびっこ広場」をテントのある狭いグラウンドに作り、ドッジボールや凧あげなどをやり、テレビにも放映された。そして、御影工業高校での卒業式、本館の解体工事など……。

以上思い出すままに書き、まとまりのない文になってしまったが、校舎は大きな被害を受け、自慢の庭園の水も涸れ、湧水も出なくなったが、避難者は勿論、全教職員が心を一つにして本当によくがんばったと思う。互いに励まし、助け合ったお陰である。

時々、学校を訪れ、更地になった本館跡を見て淋しくもなるが、元気な生徒達の姿に勇気づけられる。がんばれ 神商。／

(1) 学校日誌から

1月17日（火）

5時46分 阪神淡路大震災発生

7時00分 和泉元教頭、田中（義）教諭の車で学校へ。

8時頃 教頭学校到着、管理棟の一階は窓枠や防球・防犯ネットが曲がり、北側へ傾き、ロッカーなども倒れて内部には入れない状態。警報鳴りっぱなし。北川教諭ほか数名第一職員室に入り止める。

学校の電話が使えないので、西門前の公衆電話に並ぶ。10円玉のみ使用可。それもすぐに一杯になって使用不能。学校東側のマンション（ラシーヌ岡本）の以前本校の講師をしていた赤田先生宅の電話を借りる。校長に被害状況を電話連絡。指導第一課への連絡を依頼。

本校が緊急避難場所になる。体育館を開放するためモップで掃除をし、ストーブ3台とゴミ入れなどを用意する。避難者どんどん増える。

水が出ないため、トイレ悪臭。使用方法を説明し、協力をお願いする。プールより水をくんで、ポリ容器やバケツをトイレ内に用意する。丸尾さん管理員室より鍵ボックス持ち出す。

14時頃 校長、学校到着。校長・教頭で校舎点検。一緒に御影工業に行き、指導第一課高橋主幹と中山指導主事に状況報告。

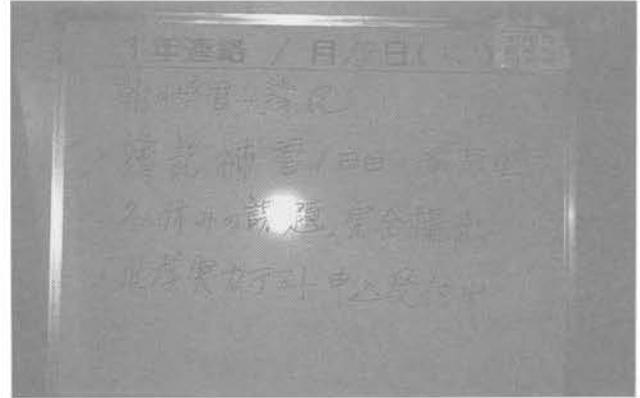
渡辺教諭、自転車で来校。保健室より毛布・布団を体育教官室へ搬入。始終余震続く。

（宿直者）教頭・渡辺 体育教官室にて。

1月18日（水）

2時頃 電気がつく。一時、余震のため消える。水道・ガス不能。

8時00分 東灘区役所よりパンと水の配給。



震災前に書かれていた連絡白板

各自治会役員にパンは全員にあたらぬこと、水は子供優先の指示をして配る。

体育館500名以上の避難者。グラウンドに100台余の車が駐車。

御影南のガス貯蔵タンクのガスもれのため第2国道より北へ避難勧告が出たので、避難者どんどん増える。グラウンドにあふれて、南校舎が使用出来ないか教頭・渡辺教諭で点検したが、柱に大きくヒビが入り無理と判断。しかし、すでに南館一階教室の窓から椅子を持ち出して使用。体育館2階席もどんどん入って満席。辻本・渡辺両教諭でプールのトイレを開放する。

11時30分 赤田先生宅の電話を借りて、校長より施設課へ電話の設置を依頼。

避難者約2,000人。体育館以外に北館1階～4階の教室を開放する。ショートして停電。余震続く。

12時00分 校長・教頭・長尾・上元・北川・渡辺各教諭ほか管理棟へ入り、公印・学校日誌など持ち出す。余震続く。

14時30分 赤田先生宅より再度施設課へ電話設置のお願い。NTTへ直接電話してほしいと言われたが、連絡がとれないので施設課からお願いしてもらうことにし、体育教官室の番号を伝える。

事務長に電話。明日、丸尾（管理員）さ

んの車で学校へ行くとのこと。

15時00分 緊急に会議をもつ。校長・教頭・宮崎・磯野・岡積各教諭（生徒の安否、避難者の対応など）。職員室を社会科講義室へ。来田・長尾・西明・山品・田中（孝）各教諭ほか中心に仕事。交通機関が復旧次第、会議室に集合することを確認。

16時00分 神戸市教育委員会より1月21日（土）まで市立学校休校の指示あり。（テレビ）

18時00分 食料届く。全員に配給されたか心配。

18時30分 御影南のガスタンクのガスもれ避難解除。（テレビ）

19時00分 牛乳・パン届く。千里丘協立診療所小川機生事務長来校。薬品などを福井先生（医師、ご家族が体育館に避難）に渡したいとのこと。不在のため預かる。

20時00分 校長・教頭帰宅。余震続く。
（出勤者）校長・教頭・辻本・上元・斯波・長尾・田中（義）・寒川・内藤・木村（史）・北川・田中（孝）・太田・宮崎・岡積
（宿直者）川井（家族）

1月19日（木）

14時30分 田村指導主事来校。プール～校舎を案内。

15時00分 営繕より5名校舎点検。調査結果は次の通り。管理棟（本館）は使用不能。



くの字に曲がった本館1階窓枠

立入禁止。南館は立入禁止。（東側特に危険）。

宮崎教諭を中心に辻本・磯野・長尾・上元各教諭ほか体育館トイレの掃除。保健室より薬品、トイレトーパー等を運ぶ。教頭・岡積教諭、帳簿類を搬出。（出席簿、出勤簿、研修簿、年休簿など）教職員の確認。連絡のとれないのが島田・結城・此松・馬場各教諭。あとは全員無事。

17時30分 学校振興室前田主査より電話あり。営繕の調査結果を再度報告する。教職員4名の確認ができていない。交通機関が復旧してから集合することを再確認。生徒は現在10名ほど無事の連絡あり。授業再開は未定。

避難者約1,000名。体育館・生徒会室（食堂2階）・南館（数名）。北館は停電。

東灘区役所職員2名、20時30分まで勤務。

22時00分 岡山県より救援物資5,000食。おにぎり、牛乳ほか。

大阪大正区民小川立義氏よりおにぎり。ボランティアの人などで配給する。

※トイレは前日までに比べて気持ちよく使用出来た。医師・看護婦も全日待機する。

※御影工業電気科の川畑教諭に本館より電話機を引き出して修理してもらう。一台使用出来るようになる。感謝。

（宿直者）教頭・川井（川井さんの親戚浜田・住田）余震続く。

1月20日（金）

14時30分 神戸市教育委員会より連絡あり。明日（21日）10時に職員集合して協議するように。11時に集合するよう連絡を取り合う。

教職員全員無事の確認終わる。遺体安置所南館東1階 60名まで収容。

（宿直者）川井・辻本（浜田・住田）

1月21日（土）

10時00分 打ち合わせ。プリント用意。

11時00分 職員会議（34名出席）経過報告。被害状況報告。生命・避難者・学校全体のことの順位で今後の取り組みを協議。終了後、分担して仕事に当たる。（トイレ、教室内の掃除など）

13時頃 県福祉部地域福祉課長永峰郁子氏他1名来校。事情聴取。

14時00分 再度集合。学年団中心に生徒安否確認のため避難所や家庭訪問へ2名ずつ割り当てて実施。報告は上元教諭まで。万一、不幸があった場合は学校へ連絡。

※医務室（体育館東側更衣室） 患者 1月19日 57名、1月20日 84名、1月21日 26名

14時20分 神戸市教育委員会へ職員会議の報告。

15時00分 小野教育長、金芳総務部長来校。管理棟を中心に校内巡視。

17時00分～ 避難所などから先生もどる。生徒の安否報告（名簿に記入）883名の内495名確認出来る。高野恵美子さん（2B）の死亡確認。（1月17日11時）父が遺体を大阪へ。田村指導主事に報告。南館（2B教室）へ遺体41名安置。

20時00分 中川前校長より電話あり。状況報告する。

21時すぎ 黒田人事主事来校。（宿直者）教頭 余震あり。

1月22日（日）

4時30分 体育館西側雨もり。ビニールシートので東灘区役所へ連絡。5枚届けられる。大変な作業。

7時00分 問い合わせなど電話はっきりなし。一人で対応できないほど。

9時30分 校長より電話あり。体調不良。NHK千葉よりテレビを1台貸与。体育館内へ設置。計2台になる。

15時00分 校長より修学旅行のキャンセルをJTBと小玉教諭に連絡したこと及びサン

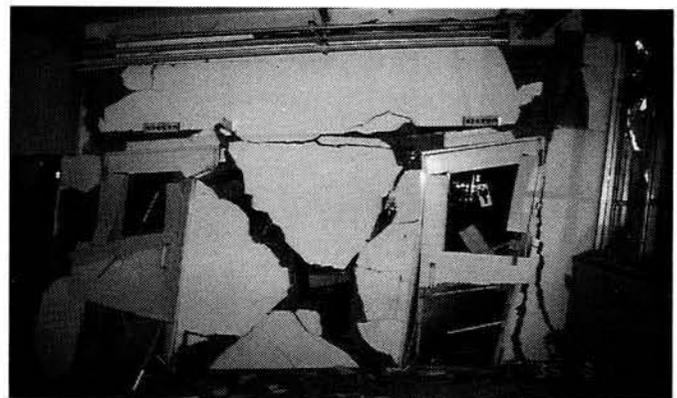
TVにファックスで学校休校を送ったことの連絡あり。

18時00分 兵庫商業山田校長より見舞の電話。NTTにより避難者用公衆電話を体育館玄関前に4台設置。

21時00分 校長より電話で 1. 電話1本増設（441-5181）になった。2. 使用出来る教室の数を調べてほしい。3. 授業再開についての見通しはどうか。特に3年生についてはレポートなどの方法を考える必要がある。4. 体調悪く、明日の職員会議に行けそうにない。以上の連絡あり。

田中淑子さん（1E）の死亡確認。（1月17日当日、家屋倒壊のため下敷き。他の家族は無事。1月25日火葬。）

（宿直者）宮崎・山品



本館1階トイレ

1月23日（月）

11時00分 第2回職員会議（35名出席）1日の行動予定、生徒安否確認報告など。その後、役割分担して仕事開始。

14時00分 再度集合して連絡会。不明生徒78名。

入試要項、願書等を葺合高校へ持参。

※東灘区区役所職員2交替（9:00～20:00）
（20:00～9:00）

18時00分 たたみ約100枚、体育館へ搬入

19時00分 タベのつどい

※出勤表（出退の時間記入）作成。生徒不明者一覧表作成。

※ 1日の行動予定として、次の点を確認。

1. 8:00 朝の連絡（宿直者が担当）、ラジオ体操
2. 11:00 学校・東灘区役所・被災者打合せ
3. 19:00 夕べの連絡（宿直者が担当）
4. 19:00~24:00 宿直勤務（日誌をつける）

（宿直者）長尾・上元・此松

1月24日（火）

10時00分 入試の中高連絡会。会場、御影高から神戸高に変更。校長体調不良のため田中（孝）教諭出席。芦屋の各中学校へ願書等持参。

御影工業田中校長が校長会の報告で来校。

11時00分 連絡会。余震のため本館のガラスが所々落下している。絶対に中に入らないように。（今後、立ち入り禁止。）清掃。生徒不明者のため避難所へ。

11時30分 避難者に対してラジオ体操、子供達にドッジボールをすることが伝わり、教頭インタビューを受ける。（MBSテレビ）

中村指導主事来校。入試関係のプリント持参。

13時30分 グラウンドの空いている所に「チビッコ広場」を作り、ドッジボールをする。30名参加。4歳の中井大介ちゃんが人気者。本校生徒会も参加。教頭・宮崎・横田・笹部各教諭他参加。



本館1階職員室前廊下

自衛隊より飲料水1トンタンクをグラウンドバックネット付近に設置。

生徒消息不明7名（1年4名、2年1名、3年2名）

テレビ取材。テレビ車グラウンドに。（宿直者）北川・渡辺・此松

1月25日（水）

11時00分 連絡会。現在、生徒7名未確認。

2年高野お通夜。大阪にて本日16時、その後火葬。小玉・磯野・此松各教諭・生徒数名参加。

食堂を避難者の子供達の自習室に。

この後、南館・北館のトイレ、教室の清掃を教師全員で行う。昨日に続き、毎日テレビで「チビッコ広場」放映。（渡辺教諭指導のゲームなど。）

15時30分 管理課橋口氏、産振について調査。第2情報処理室写真撮影。第2ワープロ室のドア開かない。

16時00分 管理課肥塚氏ほか5名校舎点検。学校長名で立ち入り禁止の張り紙とロープ。

19時00分 夕べのつどい。教頭より諸連絡。

19時30分 校長へ報告。体調不良のため明日も無理な様子。

（宿直者）此松・磯野

1月26日（木）

11時00分 連絡会。（昨日、管理課来校。明日、校務委員会。など）

京都から日用品ワゴン車にて。体育館照明は昼は半減する。昨夜、震度4。

14時00分 兵庫県よりホームスティ受け入れ。県外公営住宅情報など。

14時40分 簡易シャワーについて。水が必要。グラウンド東側。レンタルのニッケンに聞く。

16時00分 中村指導主事来校。状況聴取。南館点検。生徒、教職員安否。入試関係など。中川前校長より電話あり。

東灘区役所の要請で東京電気技術者2名、

体育教官室の放送設備修理したが直らず。
北館普通教室のみ電気がつくようになる。
1階のコンセントは使えない。キュービクルや管理員室外側のジョイントボックスが壊れたら体育館を含めて学校の電気は全滅する。市や区役所本部へ連絡すべきである。

19時30分 校長へ電話。
(宿直者) 此松・渡辺

1月27日(金)

10時00分 朝日新聞記者取材。「家族」をテーマとして。

11時00分 連絡会。

11時30分 校務委員会。

・宿日直のローテーションについて

(10:00~17:00日直 17:00~10:00宿直)

13時00分 今まで有志でやってきたが、明日の連絡会で申し出てもらう。なるべく多くの人で。宿直者の弁当について考慮。1月27日(金)より夜は1名体制を原則。

・生徒関係 震災後の生徒状況調査を学年団へ。

3年 生徒の居場所が変わるので連絡をとるのに困る。3F浜田さんの母の葬儀本日。

松本さん1名未確認。

2年 修学旅行中止。高野さん(2B)葬儀昨日営まれた。兄も死去。

1年 田中淑子さん(1E)死去。牧野睦子さん(1E)両親死去。本人と弟のみ。

・入試関係

教務より日程について、理科準備室を入試関係の室に。

・各部より

庶務部→「入学のしおり」について。

進路指導部→企業に対して生徒自ら安否を連絡する。進学について。

教務部→生徒登校について。生徒連絡す



体育館前

るには1週間は必要。

(案) 3年 2月2日(木) 11:00

2年 2月3日(金) 11:00

1年 2月3日(金) 13:00

家族状況、連絡場所、制服・教科書、家屋被害状況などの調査。

生徒の連絡方法→報道機関へ学校より依頼する。張り紙など(内容を出来るだけのせる)避難場所と人数など(本校の生徒を中心に)まとめる。

※校務委員会は当分(月)・(木)連絡会終了後。

※学習室は食堂より理科講義室に変更。社会科学講義室のカギをつけてほしい。

※教職員のローテーション1~3班に分けて1月30日(月)より実施。

※明日28日(土)10:00~12:00ボランティア看護婦2名 健康相談と血圧測定。

14時30分 ちびっ子広場のボーリングゲームを放映。毎日テレビ再度来校 取材。

食堂業者来校。食器類と在庫の材料がない。営業は平常にもどるまで無理。大事な

ものは整理して管理しておいてほしいとのこと。

姫路商業松本校長より電話。一時的に1名本校へ希望している生徒がいる。

15時10分 大和出版山本氏より電話。卒業証書の件。会社は無事。一度、来校したい。

15時30分 関西電気保安協会、点検。現在の使用状態で北館普通教室を使用してもよい。サンケイ新聞（関西テレビ）より取材依頼。2月14日～16日の3日間（11時より）。

16時50分 日本テレビより電話。教頭が対応。避難者名簿671名。遺体、最後の1体を灘高校体育館へ。

育友会久恒さんより電話。何か育友会で役に立つことがあれば言ってください。

（宿直者）此松・岡積・結城

1月28日（土）

9時00分 校長より連絡。肺炎の危険性あり。28日（土）～30日（月）休養する。1月31日（火）の全市校園長会には出席したい。

11時00分 連絡会。

- ・昨日20時より避難者代表・ボランティア・学校と話し合い。自主的にトイレの掃除をする。当分先生方もよろしく。
- ・風呂の設置。明日か明後日。
- ・グラウンドの整備を本日やる。駐車線の引き、机・いすの片付け。
- ・校務委員会の報告。（教頭より）
- ・自転車協会より自転車100台寄付。今日か明日。（小玉教諭）
- ・本館より必要書類の持ち出しは無理。絶対立ち入り禁止。万一の場合、保障はない。

12時30分 御影工業田中校長より電話あり。生徒登校についての質問。次回の校務委員会で決定すると返事。御影工業は1月30日（11時）、2月4日（10時30分）と考えている。葺合高校1月27日61%、1月28日52%、自宅から登校75%、その他25%。

本館立ち入り禁止の仮囲いの設置完了。

グラウンドフェンス（東南）の撤去は業者まだ来ない。

17時30分 中村指導主事より依頼。商業関係の実習に必要な備品の調査について（2月4日まで）。関係の担当者に依頼。森脇教諭にまとめてもらう。

19時00分 タベのつどい。朝日新聞社・毎日テレビ取材する。

（宿直者）此松・笠井・北川

1月29日（日）

本日、連絡会なし。

甲南小から避難者のためのテント30張をグラウンド南側に自衛隊が設置する。風呂設置は灘高校へ変更。

9時20分 施設課肥塚氏より電話。本館3月末までに解体予定など。

11時00分 県対策本部より2名来校。状況調査風呂設置なし、管理棟使用不能の不自由な中で教職員も頑張っていることなど強く訴える。

13時20分 大阪ガスより、ガスの元を3ヵ所止めに来る。宮崎教諭、灘高校へ風呂の件で行く。

13時50分 東灘区役所秀石氏、ボランティアリーダー藤井氏、テント入居者の件で打ち合わせ。

14時15分 単車3台購入のため宮崎・長尾・上元教諭で店へ。

（宿直者）此松・笠井・磯野



自衛隊の救援基地（グラウンド）

1月30日（月）

11時00分 連絡会。

- ・今日と明日の夕食の炊き出しについて。
1時30日夕食炊き出し 加古川農業改良普及センター 山崎敏行氏 豚汁。

1月31日夕食炊き出し 和田山農業改良普及センター 大原博幸氏 豚汁。

サラダ。米飯は自衛隊。

- ・体育館を4つに分割して自治活動を充実していきたい。（リーダー川村氏より。）
- ・灯油倉庫をバックネットの倉庫へ移動。
- ・理科室の薬品撤去。

11時30分 校務委員会（第2回）校長不在。

- ・1年より 転学希望者3名。牧野 両親死去。

- ・生徒登校について

2月9日（木）11：00～15：00

北館1階 1年：2階 2年：3階 3年
市教委等への連絡は教頭。掲示物作成は学年・教務・指導で。

次の一斉登校は2月2日の校務委員会で決める。

- ・灯油をポリ容器に入れ体育倉庫へ。
- ・実習関係の備品破損状況調査依頼。
ワープロ室→田杼・島田 情報処理室→山品・森脇 調理室→井上(裕)・藤原(美)
美術室→此松

- ・卒業式関係準備等の依頼。事務長、田中(義)、那須両教諭

14時00分 黒田人事主事より電話あり。校長の健康状態について。

施設課より連絡。1月30日～2月3日の間に文部省より技術職員2名来校。校長か教頭待機のこと。

15時30分 奈良医療班交替。

16時40分 読売新聞より取材。生徒安否について。2名死去、1名両親死去を伝える。

17時00分 校長へ連絡。

※グラウンドテントリーダー 藤井氏・安田氏

（宿直者）此松・鈴木・結城

1月31日（火）

11時00分 連絡会。校長は全市校園長会出席のため不在。

- ・10：00～15：00 東灘警察の車5台駐車。
- ・2月1日（水）職員会議 11時～ 生徒登校日について

- ・文部省技術職員視察について

- ・実習室・特別教室の備品破損調査について
- 14時00分 卒業証書印刷 大和出版へ注文する。

先生達で書道室の整理。

14時10分 電気の配線工事（北神電工）。本館が倒壊してもよいように。

14時30分 御影工業（定）奥田教頭来校。

15時30分 長田工業宮崎校長より電話。2月2日（木）進路指導の会。13時30分～摩耶兵庫高校にて。校長と進路指導部長出席のこと。

理科室の薬品処理18時終了。業者21箱に入れて持ち帰る。

18時30分 医療班閉室。本日43名診療する。
※御影工業より連絡あり。「被災生徒の教科書等必要数の調査」を学校振興室田村指導主事まで提出のこと。田中（孝）教諭に頼む。

（宿直者）此松・南野・田杼



解体中の本館

2月1日(水)

11時00分 連絡会。

・グラウンドのテントへ2月6日までに約100名が入る。

・水道11時から工事。

11時10分 職員会議

・生徒登校日について 2月9日(木) 11時～15時

・卒業式関係

12時10分～13時30分 文部省より2名来校。

校舎点検。写真撮影。

16時00分 NHK福岡放送2名取材。

2月2日(木)

11時00分 連絡会。

・自衛隊によりグラウンド東側にテント設置。

・プールへのポンプ明日もう一度。(新明和工業)

・ダスキンよりサービスとして下着の洗濯(週2回)

・14時30分よりちびっ子広場にてタコ上げ。

11時30分 第3回校務委員会。

・第2回以降の生徒登校について

2月13日(月) 13時

1年:14日(火) 13時

2年:16日(木) 13時

3年:20日(月) から授業

3月3日(金)

1年:10時～12時 2年:13時～15時

学年末考査は考えていない。

・卒業式2月26日(日) 13時 御影工業高校にて

14時00分 石井一衆議院議員来校。教頭より状況説明。

15時00分 稲森実業より畳220枚体育館へ搬入。NTTデーター通信保田主任(東京)文字放送テレビ設置。

16時19分 余震。震度3。

2月3日(金)

入試面接中止を各中学校へ連絡。田中(孝)教諭。(願書受付の日にも伝える)

プールポンプ設置(南校舎より電源をとる)豆まき・タコ上げ。先生も協力、参加。

2月4日(土)

卒業式について打ち合わせ。校長・教頭・3年主任太田教諭・庶務部長田中(義)教諭職員室など各部屋を決める。

社会科教室→ボランティア、役所関係。会議室→職員室。社会科講義室→学習室。理科室→事務室、入試関係の教務部。体育教官室→本部。

自宅にいる生徒。1年97名。2年60名。3年75名。合計232名。

2月6日(月)

谷岡主席指導主事・施設課肥塚氏来校。今後の事で校長・教頭と話し合う。プレハブ教室の設置場所。特別教室の優先順位。新館を管理棟として考える。新学期(4月以降)のことなど。第4回校務委員会(プレハブ教室について、ほか)

2月8日(水)

職員会議・学年会・商業科会議(授業について)。

校長・教頭・事務長で仮設校舎など4月以降の管理棟、教室などを相談。

2月9日(木)

本日より教職員10時30分出勤。第5回校務委員会。

第1回生徒登校。(11時～15時)出席率1年90%、2年84%、3年90%

グラウンドへ仮設教室を建てるため、テントの移動について打ち合わせ。

2月10日（金）

御影工業へ卒業式についての打ち合わせ。
校長・事務長・太田・田中（義）両教諭

本館は解体決定（3月末には完了）。南館は検討中、立ち入り禁止。

2月11日（土）

校長出張（県教育研究所 高校入試に関する校長会）

2月12日（日）

仮設トイレ3基（1基4人分）設置。テント移動。

施設課藪下係長ほか来校。仮設校舎5棟×5教室の25教室をグラウンドへ。本山第2小も使用。

2月13日（月）

第6回校務委員会。1年登校日（13時グラウンド集合、学年集会）。

本山中3年授業（10時～12時10分 北館にて）

2月14日（火）

校長出張（中高連絡会 総合教育センター）
2年登校日（13時）。本山中3年授業。電話設置。

2月15日（水）

卒業認定会議。職員会議。本山中3年授業。
講堂（本館3F）よりパイプ椅子搬出。

2月16日（木）

第7回校務委員会。全国自動車連合会より避難者へ自転車50台。

2月17日（金）

震災後1ヵ月、黙祷。図書館より図書を搬出し、書道室へ。

中央図書館より避難者用図書約400冊、体育館玄関へ。

2月18日（土）

京都大学地震計2ヵ所に設置。本山中3年授業。

2月19日（日）

東京大学小谷教授、田才助手ほか8名来校。校舎検査。文部省へ報告。

2月20日（月）

本日より授業（商業科目中心に45分授業2限）。1年10時・2年13時登校。

第8回校務委員会。

2月21日（火）

1年・2年授業。

2月22日（水）

1年・2年授業。職員会議。解体工事のため北館から新館、体育教官室、グラウンドへ行くのが遠回りになり大変。格技室避難者に3月には体育館へ移動してもらうよう要請。

2月23日（木）

1年・2年授業。放送設備工事。

2月24日（金）

1年・2年授業。3年学年会議。

2月25日（土）

3年登校日。同窓会入会式。各種表彰。卒業式予行。

2月26日（日）

卒業式。御影工業高校体育館にて、13時より実施。

(2) 教職員の行動

長い長い一日 1月20日

辻本 正子

・1月17日(火)

ジェットコースターに乗っている夢をみていた。ジェットコースターのいすから体が浮き上がり、何度もバウンドする。落ちそうなくらいだったので「すごいジェットコースターだな」と夢見心地で思っていたような気がする。

「大丈夫？」という声で目が覚めたのが、朝の6時頃だった。気がつくやとベッドの横に母がろうそくを持って立っている。いったいどういうことなのかわからなかった。「すごい地震だったでしょう。台所なんかめっちゃくちゃよ。一緒に来てみて。」と言われて、さっきのジェットコースターの夢は夢ではなく、本当に地面が揺れていたのだとわかった。

ろうそくの薄暗い明かりを頼りに母と階下の台所へと行った。台所はすでに割れた食器だらけで足の踏み場がない。水屋の中の食器も全て割れていた。ラジオを聞いてみたかったが、電源が切れ、電池もなかった為、聞けないまま黙々と後片付けをした。そうしているうちに7時になり、周りも明るくなって少しずつ様子が分かってきた。家の中は、タンスなどの引き出しの中身は飛び出しているが、倒れている物はほとんどない。家の外も特に変わった様子はなかった。

とりあえず時間になったので学校に行く事にした。かなり大きい地震だったので、たぶんバスは動いていないかもしれないから、歩いて行った方がよいと言う母の忠告を聞き、家を出た。

私の自宅は神戸商業高校の北西にあり、徒歩でも30分くらいである。学校に行くには山を下っていくのだが、歩道横の山がかなり崩れて歩道に土砂の山を作っていた。ただその

時も、今日の地震はすごかったね、と朝のショートホームルームで生徒に言おう、とぐらいにしか思っていなかった。

学校の門をくぐっても特に変わったところはなく、「今日は休校になるかもしれないな」と思いながら職員室のある校舎を見て、唖然としてしまった。一階の壁に無数の亀裂が走り、斜めに傾いて扉が半分はずれ、飛び出していたのである。どうしたらいいものかわからず、何となくその場をうろうろしていると教頭先生が近づいてこられ、運動場、体育館など一回りしてこられたらしく、ものすごい地震だったこと、あちこちに亀裂があることを教えてもらった。教頭先生と話している間、職員室の警報機がずっと鳴りっぱなしだったが、入れないためそのまま放っておくしかなかった。とにかく今日は休校になるので、自宅待機するように言われた。その時校内に一般の人はまだ誰も入っていなかったが、運動場の端の方で、一人の人が廃材を使って火をおこそうとしているのが見えた。これからどうなるんだろう、と何となく不安になりながら、もと来た道を歩いて帰った。

・1月18日(水)

前日の夜、ラジオで震度7の地震があったことを知り、大惨事になっていることがやっと分かった。交通機関もたたれ、全ての機能が麻痺していると聞き、多くの先生が学校に来るのが困難であると思った。とにかく私は学校へ歩いていけるのだから、早く行かなければと思い、急いで家を出た。前日と同じ道は、土砂崩れがひどくなって道がふさがれて通れなかった為、遠回りをしながらやっと学校へ着いた。学校はすでに避難勧告が東灘区の浜の方ででていた為、避難場所となっており、ものすごい人であふれかえっていた。

とりあえず体育館の教官室に行くと、管理

員さんとその家族、友人の方が避難しておられた。ほとんどの教室、運動場、体育館が避難場所となっていたのだが、職員室が潰れてしまって使えない為、教官室が本部のようになっていた。しかし、神戸商業の先生方はやはり数人しか来られておらず、とてもじゃないが避難者の人員整理など出来なかった。

厳しい寒さの中、暖をとるため沢山の物が燃やされていた。最初は廃材だったが、それらがなくなると教室の扉がはずされ、生徒の机、椅子が分解されて燃やされていた。会議室の窓が割られ、中にあったポット、コーヒーマーカーなどがなくなっていた。非常事態ということで、いろいろと考えるよりも先に、「生きる」ということが優先されていたように思う。

夕方になり、一段と寒さが厳しくなっていく中、教官室に「一体食べる物はどうなっているのか」「こんなに寒いのに毛布などはないのか」と尋ねてくる人が増えてきた。区役所へ連絡を取ってみても様々な対応で手一杯なのだろうか、救援物資の話がなかなかでこない。どうも来たとしても明日になるだろうということである。管理員さんとその友人の方が、避難している人達にそう説明するのだが、これからの不安、現実の寒さなどでみんな少しヒステリー状態になっていたと思う。

管理員さんたちに暴言を吐く人たちもいて、パニック状態だった。そんな中での夕方頃、体育館の電気が突然切れてしまった。ブレーカーがとんだのかもしれない、と管理員さんたちが調べにいつている間、教官室に私一人になった。しばらくして、一人の中年の男性が、教官室にもものすごい勢いでいきなり入ってきて、私に向かってこう叫んだ。「電気が切れたやないか、飯も食べられへんし、暖もとられへんやろ、わしらを殺す気か、」

管理員さん達が今調べにいつている事、もう少ししたら回復するだろうという事を言うと、教官室から出ていったが、その人が出た

瞬間、私は心から恐ろしいと感じた。ただ単に怒っている、というのではなかったからだ。目がつり上がり、つばを飛ばしながら大声で怒鳴り、本当に殴られるのかと思うくらい拳を握りしめていた。殺気だって髪の毛が立っているようにも見えた。生死をかけた人間の本性をみたような気がした。

・ 1月19日（木）

朝の7時くらいに学校に着いた時には、すでに救援物資が到着しており、配っている真最中であった。避難者の中から自発的に手伝っている者もあり、このころからボランティアの顔ぶれが決まってきたように思う。学校内にいる避難者、そして学校外からの人々も、持ち切れないほどのパン、コーンフレーク、水などを抱えて持って帰っていった。中には何度も往復をしている人もいた。

救援物資が届いたこともあり、前日より人々はまだ落ち着いた雰囲気になっているように思えた。しかし避難所としては依然として混乱しており、危険だと思われる校舎に沢山の人が入っていたし、お手洗いもすでに使えない状態になっていた。



玄関付近（本館1階）

・ 1月20日（金）

今でも一番忘れることの出来ない、長い長い一日であったのが、地震から4日経ったこの日である。

朝、いつも通り学校に着くと、前日より多くの先生方が教官室にいておられた。まだ

「避難所」と呼ぶにはほど遠い学校を、自分ではどうすることもできなかったので、こられた先生方の顔を見てとても頼もしかったし、やっとどうにかなる、と安心した。

役割分担を決めてもらい、掃除をし、電話番号、名簿作り等たくさん整理していくと、徐々に学校が「避難所」として機能するようになってきた。

お昼頃、人伝えに近くの東灘区役所と灘高校の体育館が、遺体安置所になったというのを聞いた。あまりの遺体の多さで安置する場所がなく、まして棺桶なども追いつかずに毛布にくるんだままだということだった。改めてこの地震の大きさと悲惨さを痛感したが、まさか自分が身近に関わることになるとは、その時は少しも思っていなかった。

夕方の4時頃、何台ものトラックが学校に到着した。それまでも沢山のトラックが行き来していたので、今度は何だろうと本部におられる先生に聞くと、「遺体」だということだった。安置する場所がないので、300体ほど、身元が分かるまで教室に安置するということだった。全てを失って、凍えそうな体育館や教室で毎夜を過ごす人、その人達を思うだけでもやりきれない気持ちで一杯だったのに、今度は命まで失った人達がここに来るといふ。ほんの何日か前では考えられないほどの非日常の中に、現実として自分がいるのだということが信じられなかった。

遺体が運び込まれた後、とにかく指示をもらったことを精一杯こなすことだけに集中した。気がつくと夜の9時頃になっていた。先生方は、まだ落ち着いていないであろう自宅へと、何時間もかけて帰られていった。そして本部の教官室には、地震初日からおられる管理員さんとその友人方が残っていたのだが、夜も関係なくかかってくる電話の対応で、地震後一睡もしていないと聞き、自分はこのまま帰ることは出来ないと思った。電話の対応なら昼もやっていたし、何とか出来る。管理

員さんの反対を押し切って、その夜を教官室で過ごすことに決めた。

10時頃晩御飯を食べ終わると、電話番号が今日はある、ということで、管理員さん達は10秒も経たない間にすぐに寝られた。やはり電話のかかってくる量は昼と全く変わらない。避難者の安否、尋ね人、神戸商業の生徒等、内容は様々だったが、受話器を置いてすぐに次の電話がかかってくる状態だった。

電話のかかってくる量も徐々に減ってきたな、と思って時計を見ると12時をすぎた頃だった。その時、中庭から何かを動かす音が聞こえてくる。中庭には、様々な救援物資をテントの中においてあった。気になったので、申し訳なかったが管理員さんを起こし、テントまで行ってみた。すると石焼き芋屋の軽トラックがテントの横に止まってあり、若い男性が必死で救援物資をトラックに積み込んでいる。管理員さんが強い口調で何をしているのかを聞くと、学校以外で避難している人はなかなか物資が届かないから、自分が代わりに届けてやるんだという。いいことをしているのに何で文句を言われないとだめなんだと怒鳴ってきた。管理員さんが丁寧に、それなら本部を通してほしい、と一言を説明しているのを聞きながら、何気なくそのトラックを見ていると、「震災の為、特価、牛乳50円、紙おむつもあります」という張り紙が何枚かトラックの横に張り付けてある。明らかに物資からぬすんだ物を売りつけている。管理員さんの説明が終わったら、強くどういうことか問いただしてやろうと思ったが、説明が終わるとそれまでの横柄な態度とは違って、へらへらと笑いながらびっくりさせて悪かった、と言いき、逃げるように出ていった。管理員さんに張り紙のことを言うと、管理員さんも気づいておられたが、ああいう人たちに強く言うと、かえって仲間達と何か仕返しに来るから、放っておいた方がいいと言われた。そんなものかと思ったが、怒りは後

から後からこみ上げてきた。沢山の物を失い、食べるものも、寝るところもない人達に、まだ何かをむさぼり取ろうとする人がいること、そんないやらしい人がいるんだということにもものすごい嫌悪を感じた。

教官室に帰るとすぐに、今度は運動場がなんだか騒がしくなっている。確認しに行こうかと言っているうちにノックがして、自衛隊員が一人入って来た。炊き出しの援助に来たが、どこに用意すればいいか、と聞いてきた。テレビで見たことはあっても、本物の自衛隊員を間近で見たのはこの時が初めてだった。救援物資のおかげで、なんとか「食べる」という事は達成されていたが、それもおにぎりやパンだけである。小さい子供やお年寄りもいる中、暖かいものを食べることが出来るなら、こんなにうれしいことはなかった。

管理員さんと場所を決めて、ぜひお願いしますと言うと、「それじゃ、皆さんを起こしてきて下さい」と言う。夜中の1時である。私も管理員さんも、てっきり明日の朝御飯のことだと思いこんでいた。自衛隊員が、今すぐに、と言う要請を受けて、そのつもりで用意もしてあるので、明日の朝は無理だと言った。それなら、ということで帰ってもらうことにした。皆、精神的にも肉体的にもかなり疲労しているのである。それをわざわざ起こして食べてもらうものでもない。役所も大変なのだろうが、配慮のない要請をしたことに多少がっかりした。

管理員さんは再び睡眠に入り、私は電話番にかえた。電話の音もほとんどしなくなった3時頃、ドアの外から「すみません」という声がした。出てみると、親子であろう中年の男性1人、中学生くらいと小学校低学年の男の子が一人ずつ、外に立っていた。「朝から遺体を捜して東灘中を回っているのですが、見つかりません。ここが最後なので探させてもらえませんか。」ということだった。遺体のある場所を説明しようと思ったが、暗くて

たぶん分からないだろうと思い、一緒に行くことにした。

安置所になっている教室には、それまであった机や椅子は全て出され、毛布にくるまれた遺体が整然と並んでいた。私はどうしても教室の中まで入ることが出来ず、「ここです」とだけ言って廊下に立ち止まった。「ありがとうございます。本当に遅くにすみません。帰って休んで下さい。」と父親と中学生の男の子が深々と頭を下げたが、そのとおりに教官室に帰って休める心境ではなかったので、そのまま廊下に立っていた。3人は端から順番に毛布をめくって行って顔を確認していった。廊下にいた私もそれはほとんど見えていた。中には血にまみれている人もいた。その人達を、毛布をめくってはまた丁寧にみるみながら、3人は一体ずつ確認していく。たぶん30体目くらいだったと思う。小学生の男の子が、父親が毛布をめくってすぐに「おかあさんだー！」と叫び、そのまま泣きじゃくった。中学生の男の子は声を出さずに泣いていた。父親は冷静な声で「お母さん見つかって良かったな。迷惑になるから、早く車まで運ぼうな。」と言ってその遺体を担ぎ上げた。私が泣いてもどうしようもないし、家族が悲しみをこらえているのに、失礼だと分かっていたが、涙が止まらなかった。私のそばを通るとき、父親が「本当にありがとうございました。」と言った。中学生の男の子は小学生の男の子の手を引いて、私に深く頭を下げた。私は頭を振るのが精一杯だった。3人は門の前に止めていた車に乗って、遺体とともに帰っていった。

ものすごくつらい思い、悲しい思いをしている人が余りにも多いのに、天災だからとあきらめるしかないことが、どうしてもやりきれなかった。まだ憎む相手がいる方が気を紛らわすことが出来るのではないかと思った。

少し落ち着いてから教官室に帰ると、管理員さんがうなっておられ、腰のあたりがかな

り痛いと言って、寝ていられないと座っている。私は急いでお医者さんと呼ばに行った。地震後すぐに、救急靴一つを持って駆けつけて下さったお医者さんが、体育館の更衣室で常時待機して下さっていた。管理員さんは診てもらった結果、尿道結石であるということだった。やはりここ何日間のストレスと疲労が原因だった。注射を打ってもらい、少し楽になられると、管理員さんは眠ったようだった。時計を見るともう朝の5時頃だった。後2時間もすれば顔身知りの先生方が来られると思うと少しほっとした。今まで生きてきた中で一番長い一日だった。

今思うと本当に貴重な体験をしたと思うが、あのときは毎日が必死で、自分の家族、家が無事だった分、避難者の人たちに何か自分の出来ることをしたいという気持ちで過ごしていた。それまで、ほとんど毎日テレビで悲惨なニュースが流れ、口ではいろんな感想を言っている、あくまでもそれらは自分とは関係のない、テレビの中の出来事ではなかった。この震災を体験して、今までよりも人の痛みを少しは自分なりに分かることが出来るようになったのではないかと思う。

震災後一週間の職員の動き

長尾 洋治

信じられない光景

平成7年1月16日（月）の夜、すなわち3連休最後の夜、床に入ってもなかなか眠れなかった。明日は朝から生徒の指導があり、その指導方法などで頭がいっぱいだった。寝ついていたのはたぶん午前2時を回っていたと思う。うとうとしたと思うと、はっと目がさめ、またうとうとするという、すっきりしない寝方で床の中でいらいらしたのを覚えている。

3回目、うとうと寝かけた時、身体を強く持ち上げられ、そしてかなり激しくゆすぶられた。とっさには何が起きているのかわ

からず、棚の上の物が落ちたり、コップが割れる音でそれが地震であることがはっきりした。もちろんこれ程の地震を体験するのは初めてであり、床から一步も離れることができなかった。ただただ、この揺れが早くおさまることを一心に願うだけだった。揺れがおさまると、家の中がどうなっているか心配になった。暗い中、割れたお茶わんやコップをスリッパでふみしめる音のみが暗闇に響き渡った。

ふと学校が心配になった。早朝、指導のため保護者と生徒を呼んでいることも気がかりであった。暗闇の中、急いで着替えて車を走らせた。午前6時30分頃だったと思う。（私の住居は北区であり、物的、人的被害は極めて軽微であった。）

山麓バイパスを東へ車を走らせ新神戸に出た。山手幹線を東へ進むにつれて今まで目にしたことがない光景が飛び込んできた。阪急王子公園を少し過ぎてからだと思う。道路まで倒れかけた家、まるでキャラメルの箱を押しつぶしたようなマンション、赤々と燃えあがる商店……。それでも学校は大丈夫という安心感が心の中にあっただ。信号の故障とひび割れた路面、道路いっぱい広がった瓦礫で車は思うように進まなかった。

それでも午前8時過ぎには学校に到着できた。何人かの先生方が校門前で出迎えてくれた。車を校内に入れると信じられない光景が目に見え込んできた。管理棟の一階部分、すなわち職員室が押しつぶされていた。その前に立っておられた和泉元教頭の背中が妙に印象に残った。危険とは思いつつ、本部棟の中に入ったが天井が落ち、ロッカーが倒れて散乱している為、奥へは進めなかった。つぶれたうす暗い事務室の中で、2台の電話が競うように鳴り狂っていた。

9時頃になると先生方の数も10名程に増えていた。とりあえず本部棟は危険であるということでビニールひもで校舎を囲うとともに「立入禁止」の表示を各箇所に表示した。

り痛いと言って、寝ていられないと座っている。私は急いでお医者さんと呼ばに行つた。地震後すぐに、救急靴一つを持って駆けつけて下さったお医者さんが、体育館の更衣室で常時待機して下さっていた。管理員さんは診てもらった結果、尿道結石であるということだった。やはりここ何日間のストレスと疲労が原因だった。注射を打ってもらい、少し楽になられると、管理員さんは眠ったようだった。時計を見るともう朝の5時頃だった。後2時間もすれば顔身知りの先生方が来られると思うと少しほっとした。今まで生きてきた中で一番長い一日だった。

今思うと本当に貴重な体験をしたと思うが、あのときは毎日が必死で、自分の家族、家が無事だった分、避難者の人たちに何か自分の出来ることをしたいという気持ちで過ごしていた。それまで、ほとんど毎日テレビで悲惨なニュースが流れ、口ではいろんな感想を言っている、あくまでもそれらは自分とは関係のない、テレビの中の出来事ではなかった。この震災を体験して、今までよりも人の痛みを少しは自分なりに分かることが出来るようになったのではないかと思う。

震災後一週間の職員の動き

長尾 洋治

信じられない光景

平成7年1月16日(月)の夜、すなわち3連休最後の夜、床に入ってもなかなか眠れなかった。明日は朝から生徒の指導があり、その指導方法などで頭がいっぱいだった。寝ついていたのはたぶん午前2時を回っていたと思う。うとうとしたと思うと、はっと目がさめ、またうとうとするという、すっきりしない寝方で床の中でいらいらしたのを覚えている。

3回目、うとうと寝かけた時、身体を強く持ち上げられ、そしてかなり激しくゆすぶられた。とっさには何が起きているのかわ

からず、棚の上の物が落ちたり、コップが割れる音でそれが地震であることがはっきりした。もちろんこれ程の地震を体験するのは初めてであり、床から一步も離れることができなかった。ただただ、この揺れが早くおさまることを一心に願うだけだった。揺れがおさまると、家の中がどうなっているか心配になった。暗い中、割れたお茶わんやコップをスリッパでふみしめる音のみが暗闇に響き渡った。

ふと学校が心配になった。早朝、指導のため保護者と生徒を呼んでいることも気がかりであった。暗闇の中、急いで着替えて車を走らせた。午前6時30分頃だったと思う。(私の住居は北区であり、物的、人的被害は極めて軽微であった。)

山麓バイパスを東へ車を走らせ新神戸に出た。山手幹線を東へ進むにつれて今まで目にしたことがない光景が飛び込んできた。阪急王子公園を少し過ぎてからだと思う。道路まで倒れかけた家、まるでキャラメルの箱を押しつぶしたようなマンション、赤々と燃えあがる商店……。それでも学校は大丈夫という安心感が心の中にあつた。信号の故障とひび割れた路面、道路いっぱい広がった瓦礫で車は思うように進まなかった。

それでも午前8時過ぎには学校に到着できた。何人かの先生方が校門前で出迎えてくれた。車を校内に入れると信じられない光景が目に見え込んできた。管理棟の一階部分、すなわち職員室が押しつぶされていた。その前に立っておられた和泉元教頭の背中が妙に印象に残った。危険とは思いつつ、本部棟の中に入ったが天井が落ち、ロッカーが倒れて散乱している為、奥へは進めなかった。つぶれたうす暗い事務室の中で、2台の電話が競うように鳴り狂っていた。

9時頃になると先生方の数も10名程に増えていた。とりあえず本部棟は危険であるということでビニールひもで校舎を囲うとともに「立入禁止」の表示を各箇所に表示した。



震災直後ということもあり避難されてくる近所の方はほとんどなく、わずかに数名を数えるにすぎなかった。とりあえず体育館に入っていたが暖をとるものもなく体育用のマットをひくのが精一杯であった。

昼まえ、車のラジオが事態が只事ではないことを伝え始めた。死亡者の数の急増、数箇所燃え広がる火災、そして救出できない人々の悲痛な叫びが次々に飛び込んできた。にわかには自宅が心配になり、一旦帰宅することにした。部屋の後かたづけと食料の確保を済ませると、再び学校の状況が心配になり、午後4時40分、車を東へ走らせた。

しかし、今朝よりはるかにひどい渋滞に合い、学校に到着したのは午後7時を少しまわっていたと思う。朝と違い避難された住民が校内にあふれかえっていた。特に「立入禁止」の管理棟にまで避難住民が入り込んでしまい、出てもらうのにひと苦労した。体育館は停電の為、真っ暗であったが、その中に約500人の避難住民の方々がひしめき合っていた。体育館だけでは入りきれず格技室まであふれかえっていた。

とりあえず出勤している教職員で話し合い、本校の災害本部を体育教官室に設置することにした。しかし、水無し、ガス無し、電話無しでは本部の機能は皆無に等しかった。教頭を含む数人の先生方が泊まり込むことで一旦自宅へもどることにした。

翌18日（水）早朝より学校へ向かった。渋

滞を予想して通勤ルートを変更し、急いで車を走らせていると、ラジオが東灘区の臨海部に設置されているLPG（液化石油ガス）のタンクの破損による避難勧告を報じていた。どうも地震の振動でタンクが破損し、ガスが流れ出しているらしい。山手幹線で住吉川付近までくると目をみはる光景が飛び込んできた。南から北へまるで民族が大移動するように人々が上がってくる。手には持てる限りの荷物を持ち、子供の手を引き悲壮な顔で皆、足早にどンドン北へ北へと上がってくる。ラジオの避難勧告などにより、深江、魚崎方面の住民が移動を開始したかららしい。

あふれる避難者と排便処理

学校は避難勧告により、避難してきた住民で昨夜の3倍の約1500人程の人々が集まっていた。当然、体育館のみならず格技室、北館、食堂の2階など、学校の全ての校舎を開放してもまだ入りきれない状態であった。幸い、電気は復旧したが暖をとるものは何も無く、とりあえず風から身を守る程度のものでしかなかった。食料の配給は無いが皆、手持ちの食料で空腹をいやした。一部でグラウンドのすみに火をおこす人々が目に入ったがいたしかたの無いことであった。また立ち入りを禁止している南校舎にも約30世帯、100人程が入り込んでしまった。南館は倒壊こそしていないものの主要な柱のキレツもひどく壁は剥落し、南へ傾斜して、非常に危険な状態であった。とりあえず教職員が手分けして南館からの移動を勧めたが、なかなか理解してもらえず、かなりの時間をとられる結果となった。

一方、本部となった体育教官室では校長、教頭をはじめ、出勤可能な教職員で今後の対応策を考えたが、その中で特に問題となったのが「水」の問題であった。食料用の水もさることながら、問題はトイレの「水」が「出ない」「流れない」ことであった。17日の夜、そして、避難勧告が出された18日の午前7時

頃より避難住民が殺到し、一時は約2000人に溢れかえった。生理現象としての排便は止むに止まれぬものであり、使用不可であるかどうかにかかわらず、そこにトイレがある以上、排便せざるをえない状況であった。避難住民の健康管理、保健衛生上、真っ先に解決しなければいけない問題であり、とりあえず若手教職員中心にトイレの使用状態をチェックすることにした。結果はこれ以上使用することは不可能であり、とりあえず体育館の男女のトイレを中心に北館、南館の排便処理を行うことにした。異臭と便が硬化しているため作業はなかなかはかどらなかつたが、それでも一時間余りで元のきれいな便器の状態にもどすことができた。取り除いた便はポリ袋に入れ、庭園に穴を掘って埋めた。南館、北館のトイレについては職員の人手の問題もあり次の日にもち越すこととした。

排便処理に使用する水の確保も問題であった。とりあえず庭園の池の水をくみ上げ、体育館入口に一日の必要量だけ準備することにした。しかし、2つある池の底にも亀裂が走り、みるみる水量が減少し、いつまで排便処理の水が確保できるかが問題であった。少し離れた場所にプールもあるが、やはり亀裂により水量は著しく減少し、くみ上げるのには非常に苦勞しなければならなかつた。

夕方の6時30分頃、ガスタンク漏れの避難勧告が解除され、これに伴い校内に避難されていた住民のうち、3分の1にあたる約500人は自宅にもどりはじめた。

その夜、トラックによって大量の救援物資が届き、一同をほっとさせた。

遺体安置要請と生徒の安否確認

翌19日(木)、念願の電話回線が2本復旧した。御影工業高校の先生が崩壊した管理棟内の事務室に入り込み、配線等を修理してくれた。使用可能になった電話は鳴りっぱなしで、安否確認の対応で大わらわとなった。電

話回線の復旧にともない本部では体育館、格技室をはじめ校門に避難されている住民の名簿を作成することにした。それぞれ職員で手分けして用紙を配布し、一冊の名簿を作成することができた。電話は相変わらず鳴りっぱなしであったが名簿の完成により安否確認は容易にできるようになった。

20日(金)、本校に遺体安置要請が入った。灘高校で収容できない遺体が60体程ありその収容要請があつたが、実際には40数体が収容された。収容する場所に困つたが、とりあえず南館1階の教室をかたづけ、そこに収容することにした。棺桶が間に合わず、毛布や布団にまかれただけの状態、事の異常さを改めて実感した。遺体の身元確認が続いたが、確認できる状態にない遺体もあり心が痛んだ。

21日(土)、出勤できた教職員は半数にも満たない23人余りであつたが、緊急の職員会議が開かれ、教職員の安否確認が行われた後、「神戸商業災害復旧連絡会」が組織された。被災者対策機能も重要であるが、学校である以上、学校再開機能もまた重要な問題であつた。まずは、生徒の安否確認を実施した。二人一組となり87箇所の避難所を廻り、学校で作成した連絡用のポスターを貼付を依頼するなどして生徒の確認にあつた。その結果、約半数の500名弱の生徒の無事が確認された。

22日(日)、仮設の公衆電話が4台設置された。これにより避難所と外部との連絡が一層便利になり、本部にかかる電話の本数も激減した。前日、生徒の安否確認を実施したが、時間的な制約と交通事情により廻りきれなかつた箇所の確認を急ぐ一方、残念なことに2年生女子1名と1年生女子1名の死亡が確認された。全壊した自宅の下敷きになって死亡したものであつた。

23日(月)、排使用の水を住吉川からポンプでプールに配水した。これにより一時的だったが、ある程度の水の確保はできた。また庭園の池の水についても簡易ポンプにより配水

できるようになり、以前より水の運搬が楽になった。体育館に避難されている方の中にも手伝いをしてくれる方が出て自治活動の兆しもみえてきた。

1月21日の職員会議以降、毎日10時30分より職員連絡会がもたれるようになった。震災直後から一部の職員が本部に宿直されていたが、負担を考慮して当番で宿直にあたることになった。また、避難者のリーダーと学校、またそれ以外の関係者との間で毎夜、その日の報告と明日以降の打合せがもたれるようになった。救援物資も質はともかく、量は安定して供給されるようになり、飲料水も自衛隊が給水タンクを設置してくれる予定であった。また、体育館にたたみが100枚搬入された。ライフラインの復旧のめどはたっていないものの、避難所の生活は徐々に安定してきた。

心配であった学校再開についても学年別登校日が設定され、ようやく「生徒の学校」が動きはじめた。

阪神大震災とレクリエーション

渡辺 真一

1. 阪神大震災と私

午前5時46分、「ドーン」という大音響の後、縦に3回、その後、横に激しく揺れを感じた。「ガス爆発？」布団の中で、まどろみながら、さえぬ頭で考えたが、激しく揺れている最中、わけのわからぬまま大きな声で「何じゃこりゃ!？」と叫んでいた。と同時にタンスの上から、段ボール製の衣裳ケースが落ちてきて、思わず布団を頭まで、すっぽりかぶった。妻が「地震や」と言ってから、「ああ……そうか。」とやっと気づいた。起き出して見ると、家の中はグチャグチャで、食器棚から食器が飛び出し、粉々に砕けているし、電気・ガスはすべて停まっているしといった状態で唾然としてしまった。幸い、私の部屋は、いつもの学校の机の上と同じ有様な

で、大した被害もなかった。というのも、部屋に物がありすぎて、足の踏み場もなく、本棚も倒れなかったのである。

しかし、一番心配だったのは娘の真衣子のことである。発熱とけいれん発作で、1月14日（土）から関西労災病院へ入院していたからである。夜明けと共に、自動車で病院まで向かった。途中、信号のない道路を走り、火災現場で消火活動をしている横を、火の粉をあびながら、ようやくたどりついた。病院もパニックで、1階の受付は、どこからか水が漏れて水びたし、ガラスはほとんど割れているか、ヒビが入った状態であった。急いで、小児病棟への階段を駆け登り、部屋へ行くと、娘の方はケロツとした顔で元気だったので、安心した。

さて、私が学校を訪れたのは、1月17日の夕闇迫る、午後4時30分であった。病院から自宅へ戻り、尼崎の自宅を自転車で午後2時30分頃に出発した。途中、西宮から芦屋へ向うにつれて、その惨状はますますひどく、思わず目を覆いたくなるような光景ばかりで神戸の方は、空が赤黒く、幾条にも黒い煙が上がっていた。地獄絵というか、世紀末とはこんなものかも知れないと感じた。と同時に、自分が生きていることを感謝した。

学校は、すでに避難者であふれかえり、その中で、忙しそうに動き回っておられる和泉元教頭（当時）の姿を見つけた。学校の様子などの話をして、「和泉元先生、今日はどうされますか？」とたずねると「今日は泊まる。」と言われたので、私も一緒に泊まることにした。まだまだ、震度4クラスの余震も頻繁で、これから帰る途中に日が暮れてしまうことを考えると泊まる方が安全だと判断したからだ。

しかし、それからが大変で、いつ倒れてもおかしくない管理棟に入って、保健室から毛布を出したり、職員室から晩ごはんにするカップラーメンを出したり、結構、命がけの仕事

できるようになり、以前より水の運搬が楽になった。体育館に避難されている方の中にも手伝いをしてくれる方が出て自治活動の兆しもみえてきた。

1月21日の職員会議以降、毎日10時30分より職員連絡会がもたれるようになった。震災直後から一部の職員が本部に宿直されていたが、負担を考えて当番で宿直にあたることになった。また、避難者のリーダーと学校、またそれ以外の関係者との間で毎夜、その日の報告と明日以降の打合せがもたれるようになった。救援物資も質はともかく、量は安定して供給されるようになり、飲料水も自衛隊が給水タンクを設置してくれる予定であった。また、体育館にたたみが100枚搬入された。ライフラインの復旧のめどはたっていないものの、避難所の生活は徐々に安定してきた。

心配であった学校再開についても学年別登校日が設定され、ようやく「生徒の学校」が動きはじめた。

阪神大震災とレクリエーション

渡辺 真一

1. 阪神大震災と私

午前5時46分、「ドーン」という大音響の後、縦に3回、その後、横に激しく揺れを感じた。「ガス爆発？」布団の中で、まどろみながら、さえぬ頭で考えたが、激しく揺れている最中、わけのわからぬまま大きな声で「何じゃこりゃ!？」と叫んでいた。と同時にタンスの上から、段ボール製の衣裳ケースが落ちてきて、思わず布団を頭まで、すっぽりかぶった。妻が「地震や」と言ってから、「ああ……そうか。」とやっと気づいた。起き出して見ると、家の中はグチャグチャで、食器棚から食器が飛び出し、粉々に砕けているし、電気・ガスはすべて停まっているしといった状態で唾然としてしまった。幸い、私の部屋は、いつもの学校の机の上と同じ有様な

で、大した被害もなかった。というのも、部屋に物がありすぎて、足の踏み場もなく、本棚も倒れなかったのである。

しかし、一番心配だったのは娘の真衣子のことである。発熱とけいれん発作で、1月14日(土)から関西労災病院へ入院していたからである。夜明けと共に、自動車で病院まで向かった。途中、信号のない道路を走り、火災現場で消火活動をしている横を、火の粉をあびながら、ようやくたどりついた。病院もパニックで、1階の受付は、どこからか水が漏れて水びたし、ガラスはほとんど割れているか、ヒビが入った状態であった。急いで、小児病棟への階段を駆け登り、部屋へ行くと、娘の方はケロツとした顔で元気だったので、安心した。

さて、私が学校を訪れたのは、1月17日の夕闇迫る、午後4時30分であった。病院から自宅へ戻り、尼崎の自宅を自転車で午後2時30分頃に出発した。途中、西宮から芦屋へ向うにつれて、その惨状はますますひどく、思わず目を覆いたくなるような光景ばかりで神戸の方は、空が赤黒く、幾条にも黒い煙が上がっていた。地獄絵というか、世紀末とはこんなものかも知れないと感じた。と同時に、自分が生きていることを感謝した。

学校は、すでに避難者であふれかえり、その中で、忙しそうに動き回っておられる和泉元教頭(当時)の姿を見つけた。学校の様子などの話をし、「和泉元先生、今日はどうされますか？」とたずねると「今日は泊まる。」と言われたので、私も一緒に泊まることにした。まだまだ、震度4クラスの余震も頻繁で、これから帰る途中に日が暮れてしまうことを考えると泊まる方が安全だと判断したからだ。

しかし、それからが大変で、いつ倒れてもおかしくない管理棟に入って、保健室から毛布を出したり、職員室から晩ごはんにするカップラーメンを出したり、結構、命がけの仕事

をした。

何度も強い揺れと、ゴォッという独特の音を聞きながら、長い眠れぬ夜を体育教官室で教頭先生、事務の染川さん一家と過ごしたのは、生涯忘れ得ぬ思い出となった。

翌1月18日(水)には、学校の西南部のガスタンクからLPガスが漏れ出し、避難勧告が出た為に、一時は2000人近い人々が避難してきた。しかし、その騒ぎも徐々に落ち着きを見せ、夕方には避難者も少し減ったように思う。この日は、北川先生と自転車を連れ自宅へ帰った。帰る途中、甲子園口にいる西村(昌)先生の家をたずねた。全壊した実家の上で、ガレキを片づけている彼の姿は印象的であった。

それからずっとほぼ毎日、学校へ通った。トイレの掃除、消毒、避難者への対応、救急室の設置、職員室の設置、宿直、食料の配給……無我夢中、何が何だかわからないうちに毎日が過ぎて行った。(資料1)

2. 被災地におけるレクリエーション

地震の日から1週間がたち、余震も落ち着きを見せ始めた。それと共に生きる為だけに力を注いできた避難者は、安らぎと安心を求め、触れあいを求めるようになった。

自分たちだけ良ければといった状態から、少しずつ周りの人々にも気遣いが出てきた。特に子供たちの表情にも、少しずつ明るさが戻り、グラウンドで駆けまわったり、2～3人の仲間と遊ぶようにまでなった。

この期をとらえて、「ドッジボール大会」を企画し、試みることになった。近隣の小学校(避難所)にも声をかけて、約30人ほどの子供(下は幼稚園児から小学6年生くらいまで)を集めた。グラウンドをフェンスで仕切ってチビッコ広場と称し、教職員と避難者、そして子供たちの触れ合いが始まった。久しぶりに学校に子供たちの歓喜の聲がこだました。終わってから体育館の倉庫に眠っていたメダ

ルを一つ一つ手渡し、楽しいひとときが過ぎていった。

この様子は、テレビにも取り上げられ、明るいニュースとして全国に流れ、私もよく「ドッジボール見たよ。」と言われたが、実はこの日は、私は出勤していなかった。発案者は此松先生か宮崎先生だと伝え聞いた。

次の日(1月25日(水))から、レクリエーションの担当として私が選ばれた。そして、毎日、午後2時からの活動が始まった。(資料2)毎日、計画的にとは言いがたいが、様々なプログラムを用意した。私自身、大学生のキャンプリーダーの経験とその後レクリエーション活動の知識の蓄積で、ネタに事欠くことはなかった。ただ、幅広い年齢層の子供のどこに照準を当てるか色々苦勞した。

活動の中でも特に、1月27日(金)のボーリングは好評を得た。避難生活で大量に出たペットボトルを、ボーリングのピンに見立てて行うというもので、テレビでも生中継された。

1月30日(月)に行った飯盒炊さんは、子供から大人までの、かなり幅広い年齢層の参加が見られ、カレーライスもあっと言う間に売り切れてしまった。終わってから、子供たちのお母さんが、まだ水も出ていない不自由な中で「いつも子供がお世話になってます。」と言って、丁寧に鍋を洗ってくださったのはとてもうれしかった。

その後、このレクリエーションは2月の連休前(2月10日(金))まで続けられ、計16回を数えた。しかし、小学校も再開され、私たちが小学校に代わって果たしてきた機能を元に戻す為、2月17日(金)からは週1回、金曜日に行くことにした。

このレクリエーションと並行して、避難者への健康づくりの一環として、1月25日(水)からラジオ体操も朝の連絡会の中で始められている。これは、4月の新学期までは宿直者が行い、新学期から生徒会へバトンタッチさ

れ、避難所解散まで、日曜日以外、ほぼ毎日実施された。

3. 児童館との連携

2月17日（金）からのレクリエーションは、児童館と共同で行うことにした。児童館も、この震災で本来の活動ができず、新しい試みとして「移動児童館」として活動場所を求めていた。今までのレクリエーション活動の実績が有り子供たちも集まりやすいという利点もある。さらに児童館の指導員の1人が本校の卒業生、本林（現姓 藤本）由紀（平成2年卒）さんということもあって、話はスムーズにまとまった。

「移動児童館」の活動は、資料3に記載されているとおりである。最終的には、8月25日（金）のサマー子供フェスティバルを以て、終了となる。（資料4）

天候や学校側の事情もあって、必ず毎週1回、開催できたとは言えないが、ほぼコンスタントに、毎回、工夫を凝らした企画は、私自身も大いに学ぶものが多かった。また、田中児童館の左近先生やその他、多くの指導員やこべっ子ランドのボランティアの人々が熱心に取り組む姿を見て、私自身、自分のレクリエーションに取り組む姿勢を問い直すよい機会となった。

さらに、この活動を影で支えて下さった岡田教頭先生をはじめ、教職員の皆さんにもこの場を借りて、御礼を申し上げたい。

本当にありがとうございました。

4. 阪神大震災の経験を踏まえて

今回の震災で、私自身、様々なレクリエーション活動を行ってきたが、その中で学んだことを、最後に結論として述べたい。

① レクリエーション活動を行うにあたっての雰囲気づくり

何をするにおいても雰囲気は大切である。先に述べたように、地震の日から、わずか1

週間でレクリエーション活動を始めている。うまく行った秘訣は何か？

それは、レクリエーションを始めるまでの雰囲気づくり、コミュニケーションにつきると考えられる。本校では、1月17日当日から早々と教職員が寝泊まりし、特に最初の1週間は被災者の為に骨身を惜しまず働いてきた。その姿勢が避難している人々から賛同を得、信頼関係ができたきっかけと言える。本校に滞在していたテレビ局や新聞社の人が、しきりに「ここは雰囲気がいいですね。」と言っていたが、それは、まさしく我々、教職員ひとりひとりの努力の賜物だと言える。

② 専門知識を持った指導者と協力者の必要性

「レクリエーションとは何か？」「ゲーム指導の組み立て、流れ」「幅広い年齢層への対応」など今まで自分が学んできた知識が、このような場面で役に立つとは思わなかった。毎日のプログラムを振り返ると、反省点も多々あるが、全体的には成功をおさめたと思われる。ただ、やはり、自分一人ではなかなか成し得なかったように思う。様々な場面で、色々な人が、自分の持っている専門知識、能力を発揮してくれたことが良い結果を生んだ。

③ 地域重視の活動とネットワークの必要性

このレクリエーションの途中、いろんなボランティアから、レクリエーションをやりたいと言う申し出があった。しかし、その大半は断わった。その一番の理由は、ボランティアの質に疑問を持っていたということである。まだまだ日本では、ボランティア教育が一般化していない。乱暴な言い方かも知れないが、得体の知れない人が1日来て、私たちが積み上げてきた信頼関係を壊して欲しくなかったというのが正直なところである。

その点、児童館などは地域での活動実績を持っているし、専門知識を持った指導員がいるので安心してまかせられる。地域に根づいた活動こそ、こういう場面では活かされる。

ネットワークも今回は大いに必要性を感じた。様々な情報は、毎日のように入ってくるが、必要な情報の取捨選択は難しい。日頃から、レクリエーションの特定チャンネルを持っていれば、こんなに苦労しなくて済んだかもしれない。

5. 今後の私の目指す方向

楽しくなければレクリエーションではない。私にとっては、レクリエーションは人間が生きて行く上で必要不可欠なものだと思う。よくレクリエーション=遊び、学校生活、特に勉強に対して対義語ととらえる人がいるが、それは大きな間違いだ。

文部省も生涯スポーツ課を新設し、今まで

競技スポーツと明確に区別した形で、スポーツをとらえている。その中にレクリエーションも一つの分野として位置づけられている。

今回の震災を契機に、私は、いかに人々の生活の中にレクリエーションが必要かを学んだ。そして、その中で、教師としての立場でレクリエーションを広めて行こうと思っている。10月25日（水）本山第二小学校との送別会の最後に花火が上がり、たれ幕がおりた。子供たちは、笑顔で神商を去っていった。私は、子供に笑顔と感動を与えるのが、レクリエーションの本質だと思っている。学校行事が、簡略化されていく今日、子供たちに何を与えればよいのか、これからもずっと自分に問いかけていきたいと思う。

資料 1

神戸市立神戸商業高等学校における避難所の状況・被災者の心境

月日	できごと	被災者の心境・状況	避難者数
1 17	午前5時46分阪神大震災 本館管理棟倒壊寸前 体育館・生徒会室・格技室に避難	不安・生への執念 恐怖心	1,000
18	午前6時22分東灘区のカスタックガス漏れの為、避難者増加 緊急対策本部設置 教職員・生徒の連絡をとる 食事の配給が始まる	混乱・パニック 食事の配給には慣れていないので必要以上に取ろうとする	1,500 1,000
20	全教職員無事を確認		↓
21	職員連絡会開始 生徒安否確認の為避難所巡り (883名中495名確認)	このあたりから少し落ち着きを取り戻す	↓ ↓ ↓
22	避難者用公衆電話4台設置 生徒2名死亡確認		徐々に 人数は 減少
23	避難者用畳100枚搬入 夕べのつどい(連絡会)開始	長期戦の構え とりあえず1週間がすぎ安心と安らぎを求める	↓ ↓ ↓ ↓ ↓
24	レクリエーション開始 自衛隊飲料水タンクをグラウンドに設置		↓ ↓ ↓ ↓ ↓
25	教員で南館・北館のトイレ清掃消毒	子供はレクリエーションを楽しみにする	↓
26	電気修理点検(東京ボランティア)		↓
27	コンピュータ処理による避難者名簿		↓
28	本館管理棟立入禁止フェンス設置		↓
29	甲南小より避難者用テント30張り設置		↓
30	理科室薬品撤去		↓
31	奈良県医療班常駐開始	医者がそばにいるためずいぶん安心感が違う	671

資料 2

神戸市立神戸商業高等学校で行ったレクリエーションプログラム

月	日	曜	本校で行ったプログラム	場 所	感 想 ・ 記 事	
1	24	火	ドッジボール	グラウンド	レクリエーション 初日 久しぶりに子供の笑顔 MBSの取材（テレビ放映）	
	25	水	ゲーム大会	グラウンド	鬼ごっこ中心	
	26	木	キックベースボール	グラウンド	幼稚園児には難しい	
	27	金	ボーリング	グラウンド	空いたペットボトルに少し砂を入れてピンにして MBSの取材（テレビ放映）	
	28	土	サッカー	グラウンド	幼稚園児には難しい	
	30	月	飯盒炊さん (女の先生の協力)	グラウンド	調理室で下準備 大人から子供まで参加	
	31	火	ポートボール	グラウンド		
	2	1	水	ホッケー	グラウンド	ホウキをストックにしてボールを打つ
		2	木	凧作り（美術の先生協力）	特別教室	ビニールのごみ袋・竹ひご セロテープを使って製作
		3	金	豆まき・折り紙	グラウンド	MBSの取材（テレビ放映） 折り紙で鬼を作る
4		土	綿菓子（失敗）	特別教室	テレビを見た人が子供のため機械を送ってくれたが、残念なことに故障していた。	
6		月	マット遊び	グラウンド	体育のマットを使って	
7		火	ポートボール	グラウンド	生徒の協力参加多数あり	
8		水	バスケットボール	グラウンド	ゴールは美術の先生が自作	
9		木	綿菓子・バスケットボール	特別教室 グラウンド	綿菓子の機械は、おもちゃ屋で購入して 実施	
10		金	バスケットボール	グラウンド		

☆グラウンドはちびっこ広場で行う。

☆いろんな面で経費がかかったが、昨年度の文化祭での売上を使っても良いということだったので、それに対応した。

☆参加者の子供の数は正確には把握していないが、5人～40人くらい参加していた。



資料 3

移動児童館と協賛して行ったレクリエーションプログラム

月	日	曜	プログラム 場 所	参加者	感想・記事
2	17	金	ゲーム他(グラウンド)	57	紙芝居・パネルシアター 戸外で実施したのもう少し活動量のあるプログラムが良かった。
	24	金	ぬいぐるみ劇団(グラウンド)	30	東京からボランティアが来てくれた。時間が少し短かったが、子供らは楽しんでいて良かった。
3	3	金	ひなまつり(調理室) おだんご作り・記念撮影	55	ベニヤ板にお内裏さま、お雛さまの絵を書き、顔を出して記念撮影。
	19	日	チーム対抗ゲーム大会 (午後1時～3時・グラウンド)	72	最大の参加者。生徒会役員の補助有り。各班にリーダーが1人ついたのでスムーズにいった。
	24	金	ゲーム・ビンゴゲーム	47	並び競争など。
	31	金	グループ対抗クイズ大会 (午後2時～グラウンド)	32	ポスターなどのPRの方法によって参加者数が違う。春休みに入ってゆったりと遊べた。
4	7	金	ミニ・運動会 (午後2時～・グラウンド)	20	PR不足。人数の少ない割に手のかかる子供が多くて困った。
	21	金	工作「皿まわし」 (仮設校舎)	20	仮設校舎を使っでのプログラム。皿まわしの道具を作ってから、実際に皿回し大会を行う。
5	2	火	子供の日工作	35 (人)	かぶと作り。前日に学校からビラを配布したので、本来の学童保育以外の子がたくさん参加

- ・だいたい、平日は午後4時からプログラムを始めた。毎週金曜日に実施する予定であったが、学校の都合等で実施できない日も多かった。
- ・雨天のため中止した日は、3月10日・4月14日・5月12日の3回である。
- ・様々な経費については、移動児童館の方ですべて負担してもらった。

東灘の
神戸商高

「移動児童館」幕閉じる

思い出胸にお別れ会

被災地に遊び場を提供

神戸市東灘区西岡本の市立神戸商業高校で二十五日、震災後、週一回開かれてきた「移動児童館」が幕を閉じた。九月の新学期を控えて閉鎖することになったもので、この日は、区内の児童館指導員らのほか同校の教師、生徒らが協力してヨーヨー釣りや輪投げなどの催しを開催、訪れた大勢の親子づれと「お別れ会」を楽しんだ。

同区には常設の児童館が九カ所あるが、震災でほとんどが避難所となった。子供たちの遊ぶ場所が不足した状況を見て、同高卒業生

で同区渦森台児童館の指導員本林由紀さん(三巴)が「私たちが外に出向いて子供たちに楽しんでもらおう」と、震災後、同様にボランティア

で遊び場を提供してきた同校教諭の渡辺真一さん(三巴)らと協力して、二月下旬から開催を始めた。三月のひなまつりには団子を作ったり、五月のこどもの日には紙でかぶとを作るなど身近な児童館の役割を果たしてきた。

子ども二人と来た中島ヒトミさん(三巴)は「震災で遊べる公園はないし更地は危ないので、こんな移動児童館があるといい」と話していた。

児童館指導員らは「これから安心して遊べるように今後も月一回程度、空いている公園などでも開きたい」と移動児童館を継続したいとしている。



親子づれでにぎわう「移動児童館」＝神戸市東灘区西岡本、市立神戸商業高校

物資テントでの1ヵ月

田中 孝明

震災後1月19日までは家族や自分と妻の両親の安否確認や田舎へ送り届けるために時間を割かれ、1日数時間しか勤務できませんでした。1月20日より実質的な勤務を始めるが、授業があるわけではなく、周りには避難者の方が寒さや情報不足に不便をされていたことから、全壊した本校舎から職員室用の石油ストーブを3個取り出し体育館等に設置したり、すべてのテレビが落下していましたが、そのうちまだ使えるものを引っ張り出し体育館に設置しました。これが物資テントへの道の始まりでした。

本来の職務（生徒の安否確認）も思うようにはかどらない時に、自分の体を動かす目標を見いだした気がしたのでした。

震災後3日目に本校職員により、トイレに溜まっていた排泄物を除去し、使用方法も定めが設けられ、季節も幸いし衛生的には環境が整備されました。但し、トイレの使用方法が定められたことにより苦悩したのもいました。庭園に放されていた鯉たちでした。

当時、まだ液化ガス漏れの避難勧告による避難者が依然相当数にのぼりトイレの使用回数も相当な回数になっていました。池の水位は泥の底に今にも届きそうな状態であり、鯉は背鰭を水面上に出して泳ぐありさまでした。

震災後最初の雨が降りました。とゆを伝えて雨が地面に降り注いでいました。急いで各ホームルーム教室を回ってごみ箱を集めました。15ほどの大型のごみ箱を集めることができました。

とゆから雨水を採るにはそれを壊す以外に方法がなかったので、申し訳ないが金槌で叩き割ってしまいました。その後、消防車による住吉川から池やプールへの揚水によってなんとかトイレ用の水の確保がなされ、鯉等に対する影響もすくなくなりました。

救援物資も届くようになり、中庭に張られたテントの周りに散らかっているダンボール箱等の片付けや避難者の自治会運営を円滑にする書式を作ったり、遺体安置場の設置や遺体運搬、救援物資を載せたトラック到着時の手助けをしている間に自然と救援テントで丸一日を過ごしていることが多くなりました。

救援物資を載せてくるボランティアの人からは不足物資についての質問を受け必要物資の要請をしていましたが、暫くすると一部の救援物資が余るようになり、保管場所の食堂を満たすようになりました。物資の区分けが必要となり、物資入庫伝票と物資出庫伝票による在庫管理をするに至りました。

避難者の方の生活が安定するにつれて、本校の周囲の避難場所の状況が把握できるようになりました。最初の避難者リーダー河村さんの内諾もあり近辺の救援物資の届いていない協会へ救援物資を届けたり、賞味期限のあるミルクを無駄にしないために近くの酒屋さんに持って行って、近所の人に配ってもらったりして頂きました。小さな教会には多くの信者が避難していたため、寒さと食料不足とりわけ乳児のミルク等に困られており、ミルクや毛布が少し役だったようでした。

そうするうちに畳が届き、当初各人に1枚の配布ができたりと避難所の環境も整備されていきました。

ボランティアも各地から来られ体育館等での避難者との交流も得られるようになった1月末、甲南小学校から移動されてきた避難者用テントの設営が自衛隊により行われました。天気予報では夕刻から雨天の予報でしたので、ボランティア等とテントに水が入らないように急いで横に溝を掘りました。若い学生も手に豆を作りながらの作業でしたが、移動されてきた避難者の方と話を交えながらのことでしたので時間の経つのが早かったことを覚えています。

避難者との関わりの手のすいた時を見つけ

て、全壊した本館に潜り込み教務関係の資料や時間割板等を引っ張りだしたりする時間を持ちました。

そうする内に救援物資に炊き出しのできる道具もあり、婦人たちによる暖かい炊き出しも共同で行われるようになり、生活もかなり改善がなされました。当該避難生活の改善と共に避難生活者の人間関係は複雑になっていきました。

最初、避難者の方は何も持たずに避難され互いの立場が同等であったため、避難者という心の共有ができていたことが、次第に家から持ってこられたり購入された食料や物品による差が出始めたことにより、心の葛藤が始まったのでした。避難者同志の些細なことによるいがみ合いや喧嘩、一方的な暴力といったことまでもが発生しました。

もはや共通の避難者意識ではなく、各避難者のエゴが出始めたのでした。

避難物資の食料でも避難家族だけでは到底食べきれない分量を持っていかれ、数日して固くなったり、腐ったものが自衛隊の掘った焼却炉に捨てられたりしていたものでした。

避難所としての規則的な基本的生活が確保されるに至って、避難者の方が将来について考える時間が確保できるようになると、積極的に外部に出て自活の道を探る避難者も現れるに至りました。

しかし、被災した程度の差があり、家屋の一部損壊で生活のライフライン復旧待ちの方、半壊・全壊の方、職場を失った方、家族を失った方等で精神的な差があり、仕事の確保や一部損壊で家屋の確保ができていない人からは理解の困難な被災状況の方が多数おられたことが避難所期間が長引いた原因でもありました。

時として、避難所で何もせずにはぶらぶらしている避難者に対して、世間からは遊んでいるという声も届きましたが、もし仕事を失い家屋を失い、家族を失って生きる張り合いをなくしているのが自分だったら、避難所から

積極的に出て、自立できるような活動ができたのだろうか？

時間が経つとともに、夢と思っていた現実をじわじわと事実として認識せざるを得ない状況のもとで生きる気力を見いだすことは精神的にも肉体的にも大きな壁となって立ちほだかっていたに違いありません。

そのような状況でボランティアの在り方が問われていました。ボランティアの役割は最初は避難所としての規則的な基本的生活の確保でしたが、基本的生活の確保ができたならば、次の役割というものは避難者の中に入り人間関係を作りながら個々の人との対話の中で精神的な負担を少しでも和らげることではなかったのだろうか。

対話の中で知り得た避難者の負担を取り除く術がボランティアで実施できるものであるならば、避難場所での活動のみならず避難者個人に対する援助活動によって、自立の道を探りやすい状況に少しでも近づけると考えられます。私は避難者の方と積極的な関係を持ったのは2月下旬までの約1ヵ月間でした。多くは若いボランティアが活躍し、重要な役割を果たしたことは素晴らしいことでした。

しかし、ボランティアの中にはグラウンドを猛スピードで走行したり、無免許による運転をする人が存在しました。又、何をしてもいいのか指示がなければ分からない人まで存在したことには現在の若者の気風の一部を垣間みたような気がしました。

しかし、長期間に及ぶ人から1日の人までボランティアは様々ではありましたが、人のために自分が役だっているということが気概となって多くの人が本校を訪れたことが重要でした。

この経験から彼らの将来にきっと役立つことを願ってやみません。

震災後の三カ月を振り返って

此松 信孝

(現 佐伯市立鶴谷中学校教諭)

(1) 罹災から出勤まで

1月17日の未明、大きな地鳴りと激しい揺れに布団から飛び起きた私は、次の瞬間、下からの衝撃に突き上げられた。薄明かりの中、タンスと本棚が飛ぶような形で覆い被さって来るのが見えた瞬間停電。数秒後には倒壊する天井と床に挟まれたまま、階下のガレージまで転落してしまっていた。

幸い、腕を家具に挟まれたものの怪我もなく、自力で脱出することが出来た。しかし、周囲の状況はそれどころではなかった。並んで建っていた数棟の住宅が同じように倒壊。生き埋めになっている人も多数いた。

すぐに無事だった者による救出作業が始まり、私も数人の方を助け出した。しかし、4歳の男の児が病院で死亡。お年寄り2人は中に居るのが分かりながら助け出すことが出来なかった。

この後5日間、私は兵庫区の家を周囲を離れず過ごした。自分の荷物の取り出しのほか近所の手助けをしたり消息未確認の人を捜すことに明け暮れたのである。

(2) 転機となったドッジボール大会

私が震災後に初めて出勤したのは、大きな混乱の静まりかけて1月22日の日曜日。最初の仕事は「ドッジボール大会」の企画に加わることだった。このとき学校全体は生徒・教職員の実態把握、学校の被害状況の確認、避難所の管理を中心に動いていた。

それまでも自分なりに忙しく走り回っていたつもりだったが、校内の様子からはもっとエネルギーなものが伝わってきた。

私は知らないうちに被害者の心境に陥っていて、本来やるべき仕事を見失っていたこと

こうべ地震災害対策広報

1995年 平成7年 1月25日
第1号
発行 神戸市災害対策本部
☎ 322-5117 ~ 5122 随時発行



一時使用住宅の入居募集

1月27日(金)受け付け開始

神戸市では、兵庫県南部地震で、住宅が被害を受け、住宅の確保がなくなった被害者に、一時使用住宅を貸与することになりました。本募集する住宅は、必要最低限度の広さで、あわせて200戸です。

【入居対象者】～下記の条件すべてを満たし、被災者に限らずに本人で入居します。

1. 被災の被害を受けた住宅が被災または倒壊して居住できなくなった被害者
2. 被災・被災者の住宅など、他に身を寄せる住宅のない被害者
3. 空室を借り上げ、借入ができない被害者

被災後に入居希望の被害者を行い、被災内容の調査を実施します。

【住宅の仕様】

▶木造タイプ(20坪前後)～2K、内廊・トイレ・風呂付

▶木造タイプ(10坪前後)～1K～3LDK、内廊・トイレ・風呂付(一部風呂なし)。

標準の耐震設計については、申し込める被害者の状況に応じて、適当です。

【募集できる期間】～入居後6か月(ただし1か月を最後に更新可能)

【料 金】～燃料(電気、ガス、水道の使用料)および修繕費は入居者負担

【入居申込方法】～抽選。抽籤場では必ず申込書。

市内必須状況
(1月24日現在)

- ▷死者 = 1,507人
- ▷負傷者 = 4,150人
- ▷行方不明者 = 1人
- (以上兵庫県管内)
- ▷火災件数 = 217件
- ▷避難者数 = 101,250人
- ▷避難人数 = 279,712人

神戸市災害対策本部(322-5122)にてお問い合わせは、神戸市災害対策本部 一時使用住宅係
(☎ 322-5110)へ。

入居申込書の配布・受け付けは、下記へ

受付期間：1月27日(金)～2月7日(木)

受付時間：午前9時～午後5時

(東灘区) 東灘区役所センター東館 リーア館事務所	(中央区) 東灘区役所(唯木本館) (兵庫区) 東灘区役所 (北 区) 北沢役所、香取事務所 (東灘区) 唯木館事務所	(須磨区) 須磨区役所西・北館事務所 (灘区) 灘区役所 (西 区) 西沢事務所、香取事務所
------------------------------	----------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------

を思い知った。私利私欲にとらわれていたようで恥ずかしくもあった。

そんな中で始まったドッジボール大会の企画は、横断幕を書いたりコートを作ったり、工夫のしどころがいくらかでもあった。俄然、やる気も起こって、取り組むうちに罹災の惨めさはもう感じられなくなっていた。

ドッジボール大会はテレビ中継もされ、久々の明るい話題として皆を元気づけてくれた。そして、何より積極的にはたらきかける姿勢を私に教えてくれたのである。

また、潰れかけた本館も倒壊した家具も見えないグラウンドで、子どもたちが走りまわっている様子があまりに自然な感じで不思議だった。神戸の街の崩壊が夢であるような気持ちになったことを覚えている。

(3) 教職員の取り組み

避難所における教職員のかかわりは少しずつ変化していて、終始一貫して続いたものは少ない。その中で、一定のリズムが出来上がっ

ていた2月半ばの宿直者の一日の仕事内容をあげると次のようになる。

7:00	灯油ヒーター点火・水銀灯一部点灯
8:00	水銀灯点灯・ラジオ体操・連絡
10:00	灯油ヒーター消火・給付・水銀灯減灯・ 会議議案受付・避難所だより作成印刷
17:00	水銀灯、外壁灯点灯・灯油ヒーター点 火・会議議案書作成印刷
19:00	連絡・避難所だより配布
19:30	避難所会議
22:00	灯油ヒーター消火・水銀灯消灯

この他に電話連絡や面会の取次ぎ、郵便物の配布などが入り、数は少なかったが子どもたちの勉強会やレクリエーションの企画もおこなっていた。

こうやって並べてみると非常に仕事が多岐にわたっているのがわかるが、これは、

- ①避難者全体をまとめるだけの経験のある人が避難所内に少なかったこと、
- ②トラブルなど多発する中で中立の立場にある教職員の協力が強く求められたこと、などが理由としてあげられる。

前記の日課の中で避難者に好評だったものを上げるとすれば、まずラジオ体操。

体育科の宮崎先生の発案。閉じこもりがちな方々に少しでも体を動かして貰おうというのがそのねらいである。強制参加ではないが快く協力してくれる人が多かった。

また、こういう取り組みをすると必ず拍手が起こり、いい雰囲気を作り出していた。

次に朝・夕の連絡。そして、避難所だより。宮崎先生、磯野先生、笠井先生などが交代で執筆した避難所だよりは楽しみにしている人がたくさんいた。

お年寄りの中には細かい文字が読みづらい人もいて、そういう方には全体の連絡の後で個別に読んであげていた。コミュニケーションを図る上でも本当にいい企画だった。

それらに対し、避難所会議の議案書作り等は性格が少し違っている。

避難者全員、あるいは世帯代表の会議は多い頃は毎晩開かれていた。ところが連絡や協議のための会議が、お互いのやり切れない思いのぶつけ合いの場になることもしばしばだった。

会議の出席を敬遠する雰囲気も出て、その解決の策として議案書作成の司会を教師が務めたという次第である。

ヒーターや照明の管理を教師がおこなった一番の理由もトラブル防止。避難者同士で扱うと、ついお互いの主張がぶつかり合う。中立の立場の教師にやってもらえば文句がないというわけである。

こんな具合だから、仲裁にもよく入った。ある時、「2階の人が暴言を吐いて怖い。何とかならないか。」と持ちかけられた。

すぐに上がっていったが、後で聞いたところでは「此松は殴られるんじゃないか。」と心配した人もいたらしい。

こういう時は注意などするより話を聞くに限る。興奮して迫ってくることはあったが、殴るような乱暴をはたらく人はもちろん一人もいなかった。

(4) ボランティアのこと

全国各地から駆けつけてくれたボランティアの方々には本当にお世話になった。その活動の詳細な記録は別のところにゆずり、ここではボランティアのあり方について話し合ったことを書いておきたい。

毎日、大変な状況の中で活動を続ける彼らの中ではトラブルは何度も起こっていた。きっかけは些細なことである。

曰く、(ボランティアが)「避難所の電話を独占している」「避難所の食料や物品を取り込んでいる」「辛い仕事を全然やろうとしない」「避難所の様子を興味本位で知り合いなどに伝えている」等々。

こんなことで収拾がつかなくなったとき、よく私が呼ばれて話を聞くことになった。

結論こそ出なかったが、いろいろと思いを聞いたあとで次の点を確認しあった。

ボランティア文化の育っていない日本では正しいボランティア活動など行う側も受ける側も理解していない。だから、細かい点でいい悪いを言い合ってもきりがない。でも、自分の力を神戸で役立てたいと思って全国から集まってきた気持ちは共通だ。その点はお互いに尊重し、これからも頑張ろう。

(5) 最後 に

大災害の事実を伝える貴重な記録文集用としてはあまりにも簡略で拙い文章ですがお許しください。

一日も早い神戸市と神戸商業高校の完全復興を願いつつ筆をおくことにします。

避難者名簿の作成

山品 利男

ベランダに出ると、灰が、空から1つ2つと降ってきた。近くが火事だと思いまわりを見渡したが、垂水の町は、いつもと変わらない景色だった。

ふと、空を見上げると黒く大きな茸雲のようなものが、東から南西に向かって不気味なほどゆっくりと流れている。

長田の方で火事？その灰がここまで？まさか？頭が混乱していた。湊川の川崎病院に入院している母から電話がかかってきた。

電話の向こうから聞こえる病院の慌ただしさ、母の叫び、異常事態であることは容易に理解できた。

すぐに家を飛び出

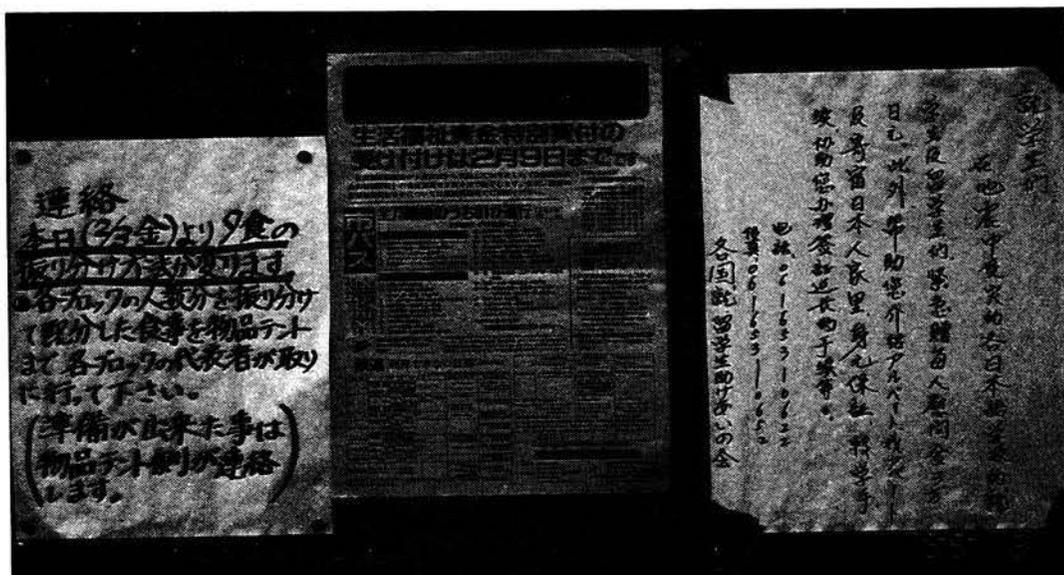
し、車で新開地の実家に向かった。ところどころ崩れた道路で大渋滞に出くわした。どこからともなく、ガス漏れの臭い匂いがする。まったく、車は動かず、ガソリンも残り少なくなり、1回目は断念した。

実家の者は、近くの小学校に避難していることがわかった。夜、6時頃、今度は、ガソリンが切れても車を捨てる覚悟で家を出た。テレビの上空撮影でどのあたりが通行できそうかしっかり頭にたたきこんだ。

長田の南北の道路を境目に、まるで映画のセットがそこから始まるような光景に出くわし、愕然とした。その中に入っていくと、車は100m進むのに1時間ぐらにかかる大渋滞。薄暗い闇の中であつたが、空は赤く染まっている。焼け焦げた匂い、徒歩や自転車で出来るだけ家財道具を持って避難する人々、路地を覗くと、ごうごうと音を立てて燃え上がる火柱。倒れかけた電柱、横倒しになったビル……

避難先の小学校に着いた。薄暗い校舎の中には廊下にまで溢れる避難者の人々。トイレの異様な悪臭の中、1時間ほど探し回ったが、暗がりと予想を超えた避難者の多さで会うことが出来なかった。夜が明けるのを待ち、ようやく実家の者を救出。

震災から3日後、家族の者を姫路へ避難させた。



次の日、6時間かけて夕方、神戸商業に着いた。その日は、何をしたいのかもわからず、何も出来ず、学校の様子を見ただけであった。

神戸商業の避難所では、体育教官室が本部になっていた。尋ね人、電話の大半が、身内の安否を尋ねるものであった。

グラウンド、食堂2階、格技室、体育館の2階、更衣室、1階をA B C Dと4つのブロックに分け、場所別に7冊のノートに名簿が作成されていた。体育館の前にテントが張られ、そこで尋ね人の受け付けをする。大きなリュックサックを抱えたまま、ノートを懸命にめくる人々。ノートが教官室とテントの間をとびかかった。2、3日前に作られたノートは、すぐに痛んでいった。避難者の方も出たり入ったりで、移動も激しく、名簿上に名前が存在するだけのこともあった。

また、安否を尋ねられても、あいうえお順でなかったのも、すべてのノートを調べなければならなかった。待たすだけ待たして、神戸商業にいないとわかったとき、意気消沈しているのがわかった。また、昼夜関係なく、ひっきりなしにかかってくる電話にしても、同じことがいえた。遠方からの電話も多く、待たせるのが申し訳なかった。電話にしる尋ね人にしろ、それまでいくつかの避難所を尋ねてきたはずである。1分でも待たせるのは、酷なような気がした。また、あまりにも多い電話に、時々対応が事務的になり、申し訳ない気持ちになった。

ただ、そうしたなかでも「そちらの学校の先生ですか。ごくろうさまです。」「ありがとうございました。」の声には救われた気がした。

コンピュータでの名簿作成の依頼があった。自分の少しの技術が、間接的ではあるが、避難者の方のお役に立つことができる。

さっそく、北館4階のコンピュータ室へあがった。被害も大きく、そのうち稼働しそ

なもの8台を理科準備室へ、2台を体育教官室まで運んだ。電源を入れた。動いた。あの揺れに耐えたようだ。

岡田靖夫先生、的場先生の協力をえながら、さっそくデータ入力に取りかかった。

予想以上に難航した。字が読みにくかったり、あいうえお順に並び替えるため、氏名の読み仮名も入力せねばならず、データ量が倍になった。入力作業すると同時に、電話や訪問者の対応もしなければならぬときがあり、なかなか先に進めなかった。

また、当初は、尋ね人の方が多く、テントに名簿を常においておかなければ対応できないので、ノート型パソコンを外に持っていき、入力していた。寒くて手が思うように動かなかった。

避難者の一人の女性が手伝いましょうかと声をかけていただいた。ただ、入力方法もいろいろ違い、それを説明する時間も惜しかったのでお断わりした。こちらに余裕がなかったせいもあるが、その人のためにも、むげに断わらず、引き受けてもらうべきであったと後で少し悔やんだ。

本部を訪れた人で最も印象に残っている人達がいる。

東京からミニバンでかけつけた2人の電気工事の染之助・染太郎のようなおじさん。2人がベランメェ調で喧嘩しながら本部にある体育館の放送設備を点検・修理している。

聞くところによると三宮が目的地なのだが、神戸に入ってから行く先々で修理を頼まれ、前に進めず、一つ一つそれに答えてきたそうだ。神戸商業に来たのは偶然であると言っていた。結局、その日は、修理をできず、東京に帰って行った。

2、3日すると、またやってきた。どうやら、修理できなかったことが気になり、神戸商業のために、東京から10時間かけて、わざわざミニバンでやって来てくれたようだ。もう一人、あるテレビ局のディレクター。27歳

ぐらいで、口がうまく、あまり信用できない顔をしていたし、避難所は、テレビ局の見世物ではないという気もあった。

後でそのディレクターが話してくれたことだが、カメラを体育館に入れるとき、緊張したそうだ。時には、殴りかかれることもあったようだ。入ってみると笑顔で答えてくれたのでほっとしたそうだ。

しかし、神戸商業の先生および避難者の方が、このテレビ局を快く招き入れたことで結果的にはうまくいったような気がする。

また、このディレクターは避難者の中にいる5歳ぐらいの少年をかわいがり、仕事の合間よく遊んであげていた。

いったん、名古屋に引き上げたが、非番の時もこの少年と家族のために幾度となく、神戸商業を訪れたのには驚いた。

最後に神戸商業からその家族が出られるときまで訪れ、引っ越し手伝いをしていた。私たち、教師にもいろいろと細かい心づかいをしてくれた。

本部にいれば、このようにいろいろな形のボランティアで積極的に避難者の方の手助けをしていただく多くの人々に接することができた。

他の地域の人々がテレビなどで「できれば何かしてあげたいが義援金ぐらいしか、何もできないので」といっているのをよく聞く。自分は、仕事そのものがボランティアのようなものになることに感謝した。

ノートパソコンでは、効率がよくないので本部に置いたコンピュータに切り替えた。

本部の窓から外を見ると寒い中、生徒の安否を確認に行かれた先生方が一人、二人と帰ってくる。自分は、ずっと暖かい本部にこもりつきりである。申し訳ない気分になる。早く仕上げて、外の手伝いをしたい。気持ちは焦るばかりである。

コンピュータに入力すべき項目は、通し番号、避難場所、氏名、ふりがな、性別、電話

番号、退館欄、移動先、TEL、備考欄からなる。

体育館から他へ移動された方は、退館欄に○を入れる。数日間だけ、田舎に避難されてまたこの体育館に戻られる人も少なからずおられた。

ご家族を遠くへ避難させ、父親だけが残られることも名簿から容易に想像できた。

名簿を作成において、年齢を入れるときが一番つらい気持ちになる。

寒い体育館の中で、風邪をひかれたかたも多く、体力的に弱い年齢の人のことが気になる。名簿には、91歳の高齢者の方から0歳児まで載っていた。

そんなことを考えながら、ただ黙々と入力していた。何日かかったかは覚えていない。とにかく、完成したので外に張り出し、本部用と市役所、赤十字に渡した。

入力している間も移動が激しく、完璧ではなかった。2、3回更新したが、後になっていろいろと不備が出てきた。

そんな、中途半端な名簿でも張り出された名前を見て、喜んでくれている来訪者の顔を見るとこちらも嬉しくなる。

ボランティアとは、自分のためにするものである事が少しわかったような気がした。

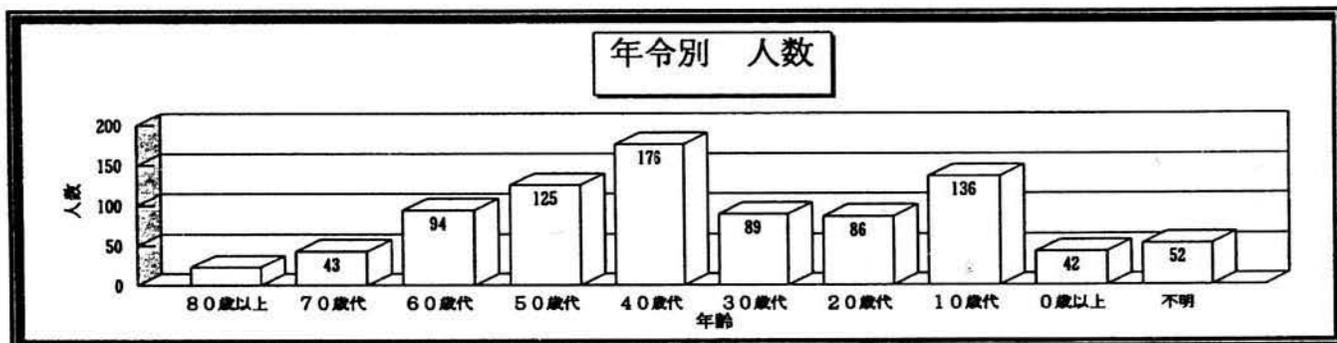
また、名簿一つをとってみても、情報の大切さ、ちょっとした工夫でよりよい生きた情報に変わることを痛感した日々であったように思う。

夜、誰もいない体育館に明かりがこうこうとついているとき、少し寂しい気分になる。鳩に餌をやるおばあちゃん、外で部活をしていたとき、夏、グラウンドで部活をしていると酔っぱらいながら“がんばれよ”と大きな声で声援を送ってくれたおじさん、体育館入口左側にお腹の大きいお母さんと何枚も重ね着をした2歳の幼児、避難者の方のことが、いろいろ思い出される。

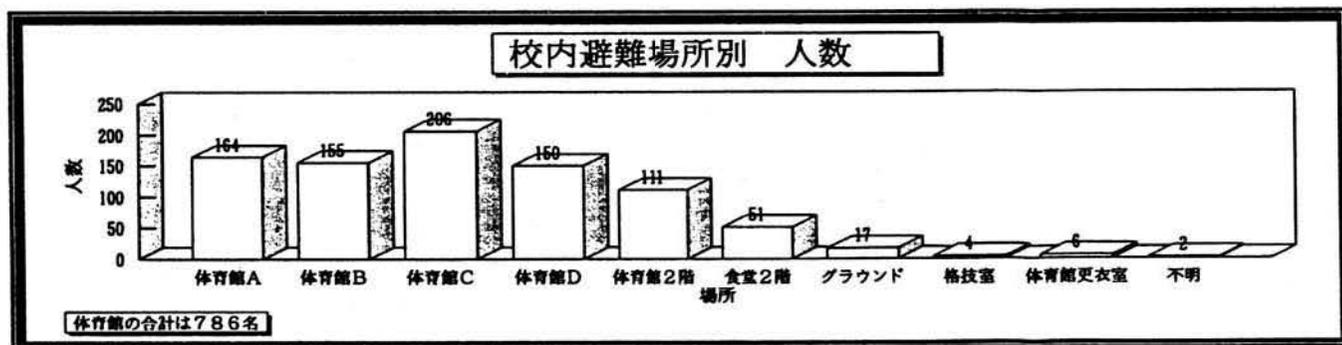
避難者名簿からの統計グラフ



男子	408
女子	458



年齢別 人数	80歳以上	70歳代	60歳代	50歳代	40歳代	30歳代	20歳代	10歳代	0歳以上	不明
	23	43	94	125	176	89	86	136	42	52



校内避難場所別	体育館A	体育館B	体育館C	体育館D	体育館2階	食堂2階	グラウンド	格技室	体育館更衣室	不明
	164	155	206	150	111	51	17	4	6	2

避難者だよりの発行に携わって

磯野 修亮

倒壊した家の前に茫然と座り込む人が多かった地震当日。避難命令も発令され、荷物を抱え、毛布にくるまり彷徨するように移動する人々が道にあふれた二日目。この二日を経て、神戸商業高校にもようやく職員が集まり、千人を軽く超える避難の人々への対応が考えられるようになってきた。自治活動を促す説明が体育館で行われ、野放しになっていた手洗いの清掃なども行われた時、掲示、ハンドマイクによる連絡だけでは分かりにくいいため、避難者あてに新聞を発行することにした。

しかし、本校の校舎も倒壊しており、紙も印刷機もない状態では何をすればよいのかも分からず、まず考えたのは、限られた救援物資の説明と生活上の最低限の注意であった。印刷はすべて近くの住吉中学校で行い、体育館を中心に一家庭に1部配って歩いた。その後、半壊の校舎から旧式の印刷機、紙などが運び出された本校での印刷が可能になると、本校生徒の安否確認の仕事の合間に「被災者の皆様へ」として毎日200部ほど発行できるようになった。

そこで掲載するにあたって考えたのは、暗く、不安な毎日を送る中で心の温まるような記事であった。最初は「最低の生活の中でこそ最高のマナーを」という見出しであり、喫煙場所のお願い、炊き出しのお知らせ等であったが、その後は次第に近づくはずである春のこと、全国からの励ましの手紙の紹介にかわっていった。役所からの連絡等は掲示板にまかせ「ちょっといい話を」として身近なほっとするような話を多く載せた。「清掃、運転、喫煙で人の性格がわかる。」といわれる中、喫煙のほうは残念ながらひどかったが、毎日徒歩で通う中で車、単車のマナーには驚かされるが多かった。その他、本質が現れる極限の中、記事にする良い話題には欠くこと

がなかった。地震後2日目には大分県から救援物資として牛を何頭ものせたトラックが通ったこと、節分の日の元気な子供たちの姿、月曜日になると大挙して理髪、美容関係の方が来られたことなども印象に深い。また、職員の協力もあり、小さい字の読みづらいお年寄り相手には毎日横で読んで聞かせている者もいた。

避難所から出られる方も増えてきて、その方々からの手紙も掲載しているうちに、ようやく3月の声を聞くようになった。学校の再開が近づくと、さすがに忙しくなり、避難所での広報の役割は終わったと考えて発行は終了させた。今、古い記事を読み返すと、当時の車のマナーはどこへいったのだろうか、駐車の様子や山手幹線の交通状況を見て悲しくなることもあるが、援助活動の多彩なところなど大勢のすばらしい人達の人間的な温かさ思い出され嬉しく感じられる。

被災者の皆様方へ
平成7年1月28日

厳しい生活の中でこそ 最高のマナーを

天気予報によると来週は寒さが一層厳しくなるということです。以下のことに気を付けて是非風邪をひかないようにしてください。
○うがいと手洗い、これが最高の予防法です。
○風邪はひきはじめるが肝心、早目に風邪薬を服用し、医療室を利用してください。
○ビタミンCをとるように、果物は豊富にあるはずですが、
○寒いでしょうが換気をしましょう。

ちょっといい話を

厳しい生活の中、精神的にもつらい時期です。生鮮野菜も手に入りやすく、イライラすることも多いと思いますが、批判、非難、はひとまず置いて、心暖まる話を聞かせてください。特に本校以外での心あたたまる話を募集しています。メモで結構ですので、広報班あてをお願いします。

京都からこられた ボランティアの人

夜道を西宮まで徒歩で帰る途中数人の人から、バイクの後ろに乗るよう勧められ、結局、自動車に拾ってもらった。次の日も朝から頑張ってくる気になった

本校職員

本校にも靴も履けずに家から逃げ出した職員がいますが、ここにもそういう方がおられたのでしよう。教室に入ると「—さん、すみませんが靴を借りていきます。」と黒板に大きく書いてあった。その心づかいがうれしかった。

避難者の方

大きな荷物を持って避難しているとき後ろから来るバイクや、自転車のマナーのよさに驚いた。

(3) 避難者の声

ご援助・ご激励下さった皆様に、心からお礼申し上げます

平成7年3月27日

「お知らせ致します。圓福寺さんの炊き出しは、次回の24日をもって終わりになります。」

ラジオ体操後の朝礼で連絡があった時、ガクゼンとしたのは私だけではなかったと思う。早く自立し、平常の生活に落ちつこう……。この気持ちは全ての被災者が一刻も忘れず、五感を集中して、真剣に生きようとしているのである。

だが、あまりにも大きな悲しみ、大きな苦痛、第3者には「寝ては食べ、ぶらぶらと毎日何をしているのか……？」と映っていたと思う。

一瞬にして肉親を失い、住む家を失い、土地を失い、唯、肉体だけが存在する現実では考える気力を失うものである。

悲しい出来事だけが頭に浮かんで、消えるものではない。

このような時「元気を出して下さい。頑張ってください」と温かい手を差し伸べてくれた皆さん。本当に有り難かった。どれだけ勇気づけられたか。当事者のみが判る人間愛・筆舌には表せない喜びを感じたのであった。

被災後65日の間、20数回に及ぶ愛の手は、その都度、私達避難者に生きる望みと力をつけてくれたのであります。

子供達に笑顔をとという気配りで、ボン菓子、雛人形、紙芝居、歌と音楽……。

又、はり、灸、理容、毛布の乾燥、蟹味噌汁、おでん、豚汁、うどん、焼ちくわ等々の食事関係は勿論、少しでも普通の生活に近づいて下さいとのハートのあるご援助を頂いたのであった。

春本番の今日この頃、立ち直りには絶好の季節である。負けてなるものか、頑張ります。

皆様方から頂いた温かい心の通った救援の手を心の糧にし、必ずや立ち直って見せます。どうか見守っていて下さい。

被災以前の神戸、いいえ、それ以上に活気があって、美しい街、神戸にして見せましょう。このことが援助下さった皆様へのご恩返しであると考えています。

言葉では「ありがとう……」の一言ですが、全ての避難者は心の中で感謝の合掌をしているのです。

本当に有り難うございました。

神戸市立神戸商業高等学校避難者一同

若いボランティアに感謝

河村 博行

地震後、無我夢中で家族と共に、寒さの中避難の為、外に出ましたが、明るくなるにつれて興奮が、驚きに、さらに落胆に変わりました。

私の家の周辺は、ほとんどの家が、全壊状態でペチャンコに壊れていました。その建物の下敷きになっている人たちを、助け出していたのが、近隣の若者でした。普段、道で会っても、挨拶もしない若者が、カベ土にまみれて、救助活動をしている姿が目映った時は、本当に頼もしく感じました。

10ヵ月も過ぎると、色々と思い出せない事が多いのですが、今も私の胸の中に残っている事を少し書きます。

本校へは避難の為、夕方からお世話になりました。体育館には入りきれない程の人が詰め掛けていました。電気は早めに着きましたが、問題は食料でした。

当初、渡されたのは、パンはゴミ袋に3袋、水がペットボトルに10数本だけでした。体育館と、運動場の避難者に配って下さい、との事でした。私にどうする事も出来ず、頭を抱え込んでしまいました。その時、朝の救助活動をしている若者たちを思い出し、私は体育館で大声で呼び掛けました。「高校生以上のボランティアを募ります。」すぐに30数名の人達が集まってくれました。その中でも、若者達が大半でした。私は食料と、水の量、次にいつ食料が来るかどうか分からない事を説明すると、「食べ物は、子供、老人優先」「水は、赤ちゃんを優先しましょう」と。そして「私は体育館」「おれは運動場」と、あっと言う間に決まり、配り始めました。幸いな事に、争い事も無く、秩序通り運びました。すばらしい行動力です。そしてこの時から、なれないボランティア活動の始まりです。

震災後3日目の昼すぎ、老婦人が、助けを

求めてきました。「食べ物を下さい。地震後ほとんど食べていません。」食べ物を渡し、2、3人の若者が、老婦人の話を聞いていました。後に聞いたのですが、家の屋根瓦は落ち、食料、水をもらいに並ぶのですが、すぐになくなり、もらえないの繰り返しだったとか、瓦の落ちた家には、寝たきりのご主人もいるとの事、女の子2人、男の子1人が早急に、その家の様子を見に行きました。家の中は、足のふみ場も無い位に壊れた中で、寝たきりの御主人がいたとの事。明朝再度訪問を約束して来たようです。老婦人は、涙を流しながら、お礼を述べてくれたと、テレながら報告を聞きました。

後日、その老婦人の親族が来るまで、医者の手配、雨がふりそうなので、自衛隊にお願いして、屋根にブルーシートを掛けてもらったそうです。感心しました。

又、ある日は、夜中「本山南中学校は、食料が不足しているらしいで」と、その一言で10数名の男女が、重い食料を持てるだけ持って運んだ事もありました。

ある日、神商の先生方から、区別の為、ボランティアの名前を書いた、ゼッケンを付けてほしいとのお願いがあり、皆んなにその旨を知らせると「イヤヤ」「カッコ悪い」「ゼッケン付ける位やったら、やめるで」私は、若者によくある、テレだと思っていました。後に深夜、鳥取から両手とリュック一杯の救援物資を持って、来てくれた若者に住所と名前を聞いたのですが、「そんなんいいです。したいから、しただけ」と言われました。それ以来、私は、ボランティアの名前は聞きませんでした。ゼッケンも強制しませんでした。今も、行動を共にしたボランティアの名前は数名しか知りません。

そして、名前も知らない、若いボランティアとの活動中は、感動の連続でした。私は仕事のため、1ヵ月余りしか活動出来ず、心残りでしたが、私よりはるかに思考力があり、

行動力もある、若いボランティアの団結している様子を見て、安心して任せられると、確信し、職場に復帰しました。

ここの避難所は、大きな争い事もなく、時には笑い声もよくありました。それは先生方、ボランティアの人達、そして、若いボランティアのおかげだと、今でも感謝しています。

1000年に1度あるかの、あまりにも大きな震災でした。もう再度来てほしくありませんが、でも、その中でお世話になった方々、そして特に若者達とは、何度でも逢いたい気持ちです。

段々と普通の生活に戻りつつある今、あの大変だった経験をバネにして、頑張っしてほしいと思います。

本当にご苦労さん ありがとう！

市立神戸商業高校での思い出

山名ハナ子

平成7年1月17日、午前5時46分、私は一瞬のうちに、真暗闇のなか、ガレキとタンスと、色々なもの下敷きになりました。

今思えば、おそろしくて思い出すのもゾッとすることばかりです。その朝から、避難所めぐりが始まりました。最初は友生養護学校、次にガス爆発の恐れがあると言われ、本山小学校へ行きました。運動場で野宿を覚悟で配給の毛布を握りしめ、鳥籠を下げて、吹きさらしの中、5時間程、たき火にあたる事が出来ず、ただ立っているだけでした。ここでは寝られないと思い、避難場所を求めて、甲南幼稚園へ行きました。そこには、近所の人の顔も見えました。1ヵ月程して、甲南小学校体育館に移りました。この頃から私は風邪をこじらせ、ひどい咳と悪寒に悩まされ始めました。トイレに行くにしても道路を渡り、運動場を横ぎらなければなりません。仮設トイレは暗く寒く、ひっくり返りそうになりながら用を足しておりました。夜、私の咳は体育館じゅうに響きわたるようで、他の人に迷惑がかかると思い、咳を止めようとしても、思うようにならず、毎日苦しく長い夜でした。救護班の先生、看護婦さんは、毎日のように私を医務室に連れに来てくれました。入院をすすめられましたが、神戸を離れたくないという私の気持ちをわかって下さり、毎日点滴をして下さいました。冷たい弁当など全く食べられなかった私に、おかゆを温めて下さいました。しかし、当時の私は本当に弱ってしまっており、このおかゆも少ししか食べられませんでした。看護婦さんの親切だったことは、今でも忘れられません。震災の時、ガレキの下からはい出てきたままの私の汚い足を、お湯で洗い温めてくれたのです。どんなに嬉しかった事でしょう。しかし、それでも私の風邪は一向に良くなり、肺炎の一步手

神戸市立神戸商業高等学校生徒会御中

災害地の映像を見て七十年前の関東大震災焼け跡をまざまざと思い出します。

また昭和十年代のはじめの大水害で鉄道が土砂で埋まった神戸を思い出します。また原爆の被害を受けた広島を思い出します。そんな回想ばかり続くときに貴校の運動場で開かれた小さな運動会を拝見し救われて、楽しくもありました。そして僻地の分校の運動会を思い出しました。

若い元気な高校生のひるまざる意気を期待します。おいたる人を助け、幼きものに手をさしのべて郷土の再建に力を尽くしてください。ただ百万ドルの夜景だけが復活したという愚は望みではありません。

ふるいものもありますが、年長の方々の気持ちを鎮めるために、小さな人たちが走り回れるように、皆さんと一緒に楽しめたと、僅かですがお送りしました。避難されている方々とお使いを頂けたら幸いです。

平成7年1月27日 名倉 英三郎

生徒会諸君に

なお先日の飯倉すいさんは上記の本校生徒会の主催でカレーを100食用意いたしました。好評のうちあっというまになくなりました。また、次回の計画が決まり次第連絡いたします。

書 連 絡

- お風呂、医療、法律、等掲示板は必ずご覧ください。特に重要なものはお知らせにも掲載いたします。
- 甲南小学校から100人程の人達が移動してきました。グラウンドのテントで今生活していますが、責任者の方は安田さんと藤井さんだそうです。お問い合わせ等はこの二人の方までどうぞ。

行動力もある、若いボランティアの団結している様子を見て、安心して任せられると、確信し、職場に復帰しました。

ここの避難所は、大きな争い事もなく、時には笑い声もよくありました。それは先生方、ボランティアの人達、そして、若いボランティアのおかげだと、今でも感謝しています。

1000年に1度あるかの、あまりにも大きな震災でした。もう再度来てほしくありませんが、でも、その中でお世話になった方々、そして特に若者達とは、何度でも逢いたい気持ちです。

段々と普通の生活に戻りつつある今、あの大変だった経験をバネにして、頑張っしてほしいと思います。

本当にご苦労さん ありがとう！

市立神戸商業高校での思い出

山名ハナ子

平成7年1月17日、午前5時46分、私は一瞬のうちに、真暗闇のなか、ガレキとタンスと、色々なもの下敷きになりました。

今思えば、おそろしくて思い出すのもゾッとすることばかりです。その朝から、避難所めぐりが始まりました。最初は友生養護学校、次にガス爆発の恐れがあると言われ、本山小学校へ行きました。運動場で野宿を覚悟で配給の毛布を握りしめ、鳥籠を下げて、吹きさらしの中、5時間程、たき火にあたる事が出来ず、ただ立っているだけでした。ここでは寝られないと思い、避難場所を求めて、甲南幼稚園へ行きました。そこには、近所の人の顔も見えました。1ヵ月程して、甲南小学校体育館に移りました。この頃から私は風邪をこじらせ、ひどい咳と悪寒に悩まされ始めました。トイレに行くにしても道路を渡り、運動場を横ぎらなければなりません。仮設トイレは暗く寒く、ひっくり返りそうになりながら用を足しておりました。夜、私の咳は体育館じゅうに響きわたるようで、他の人に迷惑がかかると思い、咳を止めようとしても、思うようにならず、毎日苦しく長い夜でした。救護班の先生、看護婦さんは、毎日のように私を医務室に連れに来てくれました。入院をすすめられましたが、神戸を離れたくないという私の気持ちをわかって下さり、毎日点滴をして下さいました。冷たい弁当など全く食べられなかった私に、おかゆを温めて下さいました。しかし、当時の私は本当に弱ってしまっており、このおかゆも少ししか食べられませんでした。看護婦さんの親切だったことは、今でも忘れられません。震災の時、ガレキの下からはい出てきたままの私の汚い足を、お湯で洗い温めてくれたのです。どんなに嬉しかった事でしょう。しかし、それでも私の風邪は一向に良くなり、肺炎の一步手

神戸市立神戸商業高等学校生徒会御中

災害地の映像を見て七十年前の関東大震災焼け跡をまざまざと思い出します。

また昭和十年代のはじめの大水害で鉄道が土砂で埋まった神戸を思い出します。また原爆の被害を受けた広島を思い出します。そんな回想ばかり続くときに貴校の運動場で開かれた小さな運動会を拝見し救われて、楽しくもありました。そして僻地の分校の運動会を思い出しました。

若い元気な高校生のひるまざる意気を期待します。おいたる人を助け、幼きものに手をさしのべて郷土の再建に力を尽くしてください。ただ百万ドルの夜景だけが復活したという愚は望みではありません。

ふるいものもありますが、年長の方々の気持ちを鎮めるために、小さな人たちが走り回れるように、皆さんと一緒に楽しめたと、僅かですがお送りしました。避難されている方々とお使いを頂けたら幸いです。

平成7年1月27日 名倉 英三郎

生徒会諸君に

なお先日の飯倉すいさんは上記の本校生徒会の主催でカレーを100食用意いたしました。好評のうちあっというまになくなりました。また、次回の計画が決まり次第連絡いたします。

書 連 絡

- お風呂、医療、法律、等掲示板は必ずご覧ください。特に重要なものはお知らせにも掲載いたします。
- 甲南小学校から100人程の人達が移動してきました。グラウンドのテントで今生活していますが、責任者の方は安田さんと藤井さんだそうです。お問い合わせ等はこの二人の方までどうぞ。

前と言われていました。

そんな中で、甲南小学校体育館は2月19日で、避難所としては閉鎖になり、神戸商業高校のテントへ移らなければならないと言われました。この身体でテント生活が出来るかどうか、考えたあげく、体育館に行く事を決めました。

神戸商業高校では、たくさんのボランティアの方がおられました。畳が敷かれてあり、体育館の中に大きなストーブが置かれ、暖かくしてありました。体育館に着くなり、私の身体が弱っていることを知っておられたのでしょうか、ボランティアの方が真っ先に私を「この場所が良い。」と案内してくれました。弁当の他に、毎日のように炊き出しがあり、温かいみそ汁や豚汁等、身体にあたたまる食事がいただけました。毎朝、校庭でたき火をたき、皆でたき火を囲んで、他の避難中の人達と話をするようになりました。たき火でお湯をわかし、牛乳を温めながら、色々な世間話をし、心まで温かくなる事が出来ました。食欲も少しずつ出てきて、少しずつ良くなりつつありました。

元来、私は動物が大好きです。震災前はオウム、山鳥等たくさん飼って「小鳥のおばさん」とか「鳥博士」と言われる程、世話をしていました。震災で救出できたのは、小鳥2羽だけで、他の死なせた鳥は、私の犠牲になってくれたのではと思っている程です。こんな私は、神戸商業高校の自然に、とても心をな



仮設校舎付近を歩くイノシシ

ごませてもらいました。大きなねむの木に、花がたくさん咲き、その美しさに喜びました。ここが神戸かと思う程、小山があり、色々な木々があり、花が咲き、実が成りました。野鳥も多くやってきました。ゴイサギという美しい鳥もやってきました。池には鯉がおりましたが、トイレ用や生活用に水をくみあげるなかで、池の水がどんどん減り、酸欠状態で死んだものもあり、つらいものがありました。6月頃、突然校庭にわき水が出始め、池に水が戻りました。この水のおかげで、鯉は生命をふきかえし、私達はスイカを冷やしたりする事が出来ました。

めずらしいお客さんも少なからずありました。満月の夜、あまりに月がきれかったので、皆で椅子を外に並べ、歌をうたう事にしました。懐メロや童謡等のメドレーを、私の世話をしている猫がちょこんと座り、一生懸命聞いているしぐさに、皆で笑い合いました。その時、狸が一匹突然現れ、「正成寺の狸」の歌そのままの光景になり、皆で大喜びしたのは忘れられない思い出です。また、別の夜、皆で世間話をしていた時、ホタルが一匹ふわりと飛んできました。「お父ちゃんが帰ってきた！」と、そのホタルを両手で包むようにしていたAさんの事も忘れられません。また、私が買い物に出て、暗い校庭に入ったとたん、大きな猪とハチ合わせになりました。この猪にやられるのでは…と思いましたが、猪は私が提げていたビニール袋（新聞しか入っていませんでした）をひったくり、逃げる私を階段のところまで追いかけてきました。恐ろしかったけれど、猪もお腹をすかしていると思い、夜、パン等エサになりそうなものを、そこらへ置いておきました。案の定、猪はやってきて、食べておりました。避難所の人達に言うと、皆カメラを持って先生まで飛んで走ってきました。狸・猫・猪、それぞれ思い出の写真を、今も私は大切にしております。

2月にこちらへ来た頃の私は、トイレに行

く以外はほとんど布団に寝たまま、本当に弱っていました。薬もなかなかきかず、この先どうなるのかと不安で一杯でした。神戸商業に来て、おかげ様で身体もずいぶん良くなりました。先生方も気さくに声をかけて下さり、動物の話をきっかけに、私の色々な話を聞いて下さいました。思う事は何でも言える雰囲気、精神的にも、地震の傷から立ち直る事が出来たのではないかと思います。長い間本当に有難うございました。これからも頑張ります。神戸商業高校は私の一生の思い出の場所になると思います。



庭園に現れたタヌキ

神商グランドでのテント生活

安田 筆一

早くも震災から10ヶ月が過ぎ、未だ住居も定まらず仮住居しながら、当時テント村の生活を思い出し、悲しく苦しい。又異なった視点から、人間関係の善し悪し、人間の生き様も見たかに思います。その中で人の力の弱さ、自然の力の偉大な事を、痛切に感じたことです。その中でも、人の情は深く感じました。それは、校長先生をはじめ各先生方の昼夜にわたり私達避難者一人一人への温かい御世話。また、行政の方、自衛隊の方々、ボーイスカウトの方々、宗教団体や各地方からのボランティアの若い方達の心こもる活動。私達家族は、末代まで云い伝えていくことと思います。本当に御恩を忘れては人としての価値がないと思います。又、知らない人とのふれあいの

有難さも、心にしみこむことでした。これからの神戸、私達の東灘も、どのように復興するのか不安であり、楽しみでもあります。これから先、何年、何十年したら明るい町が出来るか、それまで私達夫婦が、生きて見られるのかと思ひながら考えさせられます。そんなことを考えながら今学業にはげんでいます。

若い学生諸君が頑張っていて、良き日本、良き神戸にしてくれることを念じ、苦あれば楽ありと昔の人達の云っていた言葉を信じ、一日、一日を大切に生きていく決心です。仏法の教えでもありますが、形ある物はいつか崩れるんだ。大切なのは、早く仏心にめざめよと云う教えが、私の頭の中に浮かびます。

最後に、神商が一日も早く復興して、学生諸君が、元の学び舎にかえることが出来ますように心より祈ります。又、同じ避難生活を過ごした方々が良き生活に戻れますように、心より祈念してつたない文を終わらせていただきます。合掌



神商での186日、
ありがとうも言えないままに

中野 茂美

平成7年1月17日、午前5時46分、突如、地表を揺るがし、なにが…、どうして、おきたのか…、このすばらしい神戸の市街が、一瞬に、無残なすがたとなってしまった。思えば家族全員…、11人、タンスの下じき、孫娘

く以外はほとんど布団に寝たまま、本当に弱っていました。薬もなかなかきかず、この先どうなるのかと不安で一杯でした。神戸商業に来て、おかげ様で身体もずいぶん良くなりました。先生方も気さくに声をかけて下さり、動物の話をきっかけに、私の色々な話を聞いて下さいました。思う事は何でも言える雰囲気、精神的にも、地震の傷から立ち直る事が出来たのではないかと思います。長い間本当に有難うございました。これからも頑張ります。神戸商業高校は私の一生の思い出の場所になると思います。



庭園に現れたタヌキ

神商グランドでのテント生活

安田 筆一

早くも震災から10ヶ月が過ぎ、未だ住居も定まらず仮住居しながら、当時テント村の生活を思い出し、悲しく苦しい。又異なった視点から、人間関係の善し悪し、人間の生き様も見たかに思います。その中で人の力の弱さ、自然の力の偉大な事を、痛切に感じたことです。その中でも、人の情は深く感じました。それは、校長先生をはじめ各先生方の昼夜にわたり私達避難者一人一人への温かい御世話。また、行政の方、自衛隊の方々、ボーイスカウトの方々、宗教団体や各地方からのボランティアの若い方達の心こもる活動。私達家族は、末代まで云い伝えていくことと思います。本当に御恩を忘れては人としての価値がないと思います。又、知らない人とのふれあいの

有難さも、心にしみこむことでした。これからの神戸、私達の東灘も、どのように復興するのか不安であり、楽しみでもあります。これから先、何年、何十年したら明るい町が出来るか、それまで私達夫婦が、生きて見られるのかと思ひながら考えさせられます。そんなことを考えながら今学業にはげんでいます。

若い学生諸君が頑張っていて、良き日本、良き神戸にしてくれることを念じ、苦あれば楽ありと昔の人達の云っていた言葉を信じ、一日、一日を大切に生きていく決心です。仏法の教えでもあります、形ある物はいつか崩れるんだ。大切なのは、早く仏心にめざめよと云う教えが、私の頭の中に浮かびます。

最後に、神商が一日も早く復興して、学生諸君が、元の学び舎にかえることが出来ますように心より祈ります。又、同じ避難生活を過ごした方々が良き生活に戻れますように、心より祈念してつたない文を終わらせていただきます。合掌



神商での186日、
ありがとうも言えないままに

中野 茂美

平成7年1月17日、午前5時46分、突如、地表を揺るがし、なにが…、どうして、おきたのか…、このすばらしい神戸の市街が、一瞬に、無残なすがたとなってしまった。思えば家族全員…、11人、タンスの下じき、孫娘

く以外はほとんど布団に寝たまま、本当に弱っていました。薬もなかなかきかず、この先どうなるのかと不安で一杯でした。神戸商業に来て、おかげ様で身体もずいぶん良くなりました。先生方も気さくに声をかけて下さり、動物の話をきっかけに、私の色々な話を聞いて下さいました。思う事は何でも言える雰囲気、精神的にも、地震の傷から立ち直る事が出来たのではないかと思います。長い間本当に有難うございました。これからも頑張ります。神戸商業高校は私の一生の思い出の場所になると思います。



庭園に現れたタヌキ

神商グランドでのテント生活

安田 筆一

早くも震災から10ヶ月が過ぎ、未だ住居も定まらず仮住居しながら、当時テント村の生活を思い出し、悲しく苦しい。又異なった視点から、人間関係の善し悪し、人間の生き様も見たかに思います。その中で人の力の弱さ、自然の力の偉大な事を、痛切に感じたことです。その中でも、人の情は深く感じました。それは、校長先生をはじめ各先生方の昼夜にわたり私達避難者一人一人への温かい御世話。また、行政の方、自衛隊の方々、ボーイスカウトの方々、宗教団体や各地方からのボランティアの若い方達の心こもる活動。私達家族は、末代まで云い伝えていくことと思います。本当に御恩を忘れては人としての価値がないと思います。又、知らない人とのふれあいの

有難さも、心にしみこむことでした。これからの神戸、私達の東灘も、どのように復興するのか不安であり、楽しみでもあります。これから先、何年、何十年したら明るい町が出来るか、それまで私達夫婦が、生きて見られるのかと思ひながら考えさせられます。そんなことを考えながら今学業にはげんでいます。

若い学生諸君が頑張っていて、良き日本、良き神戸にしてくれることを念じ、苦あれば楽ありと昔の人達の云っていた言葉を信じ、一日、一日を大切に生きていく決心です。仏法の教えでもあります、形ある物はいつか崩れるんだ。大切なのは、早く仏心にめざめよと云う教えが、私の頭の中に浮かびます。

最後に、神商が一日も早く復興して、学生諸君が、元の学び舎にかえることが出来ますように心より祈ります。又、同じ避難生活を過ごした方々が良き生活に戻れますように、心より祈念してつたない文を終わらせていただきます。 合掌



神商での186日、
ありがとうも言えないままに

中野 茂美

平成7年1月17日、午前5時46分、突如、地表を揺るがし、なにが…、どうして、おきたのか…、このすばらしい神戸の市街が、一瞬に、無残なすがたとなってしまった。思えば家族全員…、11人、タンスの下じき、孫娘

は倒壊した家のハリの下に生き埋めにされた。よく助かったものだ。17日の夜は住吉小学校、そして、ガス爆発の情報で毛布2枚をもってあちらこちらへ移動した。

やっと18日の夜は神戸商業高校に泊まることができた。多数の人々はただなんとなく、これからどうしたらよいのかわからないといったところだった。19日に体育館へ移動した。岡本の友達が先に避難していて、場所を2カ所とってくれて助かった。視力障害の次男を連れての移動は大変だったが、嫁がしっかりガードして小2の長女も父親の手足となってくれた。

20日は体育館で雨漏りがあり、ボランティアの青年が2～3人傘を利用してなんとか防ごうとしたが、雨漏りはひどくなるばかりだった。雨漏りの下にいた人々は移動で大変だった。しかし、雨漏りを防ごうとはしない。

震災前は高血圧で家の内でじっとしていた私だったが、地震から病気のことを忘れ、夢中で動き回った。体育館の2階に上がり、青年らとシートはないかと探し、なんとか確保できた。大勢の人が手伝ってくれてネットと毛布を利用して、水を一カ所に集めることができ、ほっとした。

いろいろなことがあった。とりわけ便所は大変だった。学校の先生方の尽力により、また、全国よりのボランティアの人々や避難者同士の話し合いなど、時間がたつにつれて助けあいがあった。

それにしても、世の中にはいろいろな人、いろいろな考えをもっている人がいることを知らされた。私は、4日目まではパジャマのうえに防寒具を着ていたが、救援物資でなんとかまともな服装になった。その後も次々と救援物資が届いたが、感謝を忘れて不満を言う人も出てきた。何もしないでほんとうによく言うよと思ったが、自分にもそんな所はないかと考えさせられてしまった。

避難して4日目に娘夫婦は大阪の社宅が、

また、次男夫婦は第1次仮設募集で西区の市営住宅があたった。彼は現在視力センターに通っています。長男は2月20日の結婚式が中止になり、後日、簡単な式をして、とにかく落ち着いてくれた。私たちは、第2次、第3次、第4次、最終の第5次の仮設募集にもはずれた。運がないのかと言っているとき、仮設店舗ができ上がり、住居も元も家の近くで借りることができた。

私は7月7日、高血圧、糖尿病、血小板減少という自分でもわからない病気で甲南病院に入院した。運動場で風呂用のマキ割りををお手伝いしてから、指先のシビレ、肩コリなどで通院していたが、このままでは、このことで入院した。でも、おかげで7月30日に退院できた。(現在でも通院しています。)

体育館を退出し、家に入ることができたのは7月23日でした。私が長い間、釣りクラブの会長をしていた時の仲間が手伝ってくれました。学校の先生、また、生徒さんなど、そして避難所の人々と会うこともなく去ったことが悔やまれます。また、全国よりのボランティアの人々、校庭でのタヌキ、イノシシ、ハト、カメ、そして、池のコイ、また、サギたち、186日間、心をなごませてくれてありがとう。

先日、孫娘が音楽会で歌った歌を聞かせてくれました。山下清の歌とか……。

♪野にさく花のように風にふかれて
野にさく花のように人をさわやかにして
そんなふうにはぼくたちも生きていけたら
すばらしい
ときにはくらい人生も トンネルぬければ 夏の海
そんな時こそ 野の花のけなげな心をするのです
野にさく花のように 雨にうたれて
野にさく花のように 人をなごやかにして

そんなふうに ぼくたちも生きていけたらすばらしい
ときには つらい人生も 雨のちくもり
でまた晴れる
そんな時こそ 野の花のけなげな心をし
るのです
野にさく花のように…♪

思いのままに、ほんとうにありがとうございました。

ることにし、日が暮れる前に、向かいの人と神商の体育館へむかう。

私たちが行ったときはまだまだスペースがあったが、そのうちにだんだん人が多くなり、広い体育館もいっぱいになる。

この避難所も停電していて、暗くなるとトイレに行くのもたいへん。通路がないので、「すみません、すみません」といいながら、懐中電灯をたよりに、人のふとんの端を踏んで行かないといけない。

行方のわからない親戚知人を探して、何人も人が避難所を訪ねてくる。すすり泣きながら名前を呼んでいる人、懐中電灯で寝ている人の顔を見てまわる人など……。

11時ころ電気が来る。「火災予防のため、各自家へ帰ってブレーカーを切って下さい。」とのアナウンスがあり、私も家へ帰って見たが、わが家はまだ停電したままだ。

あたりが静かになると余震がよくわかる。ドーンという地鳴りに続いてグラグラッと来る。とたんに悲鳴をあげる人があり、そのあとザワザワして、なかなか寝つけない。

明るる朝、パンの支給があったが、数が少ないので、子供と老人にだけ配られ、ほかの人にはぜんぜん当たらない。係の人は、パニックにならないように、たいへんな気の使いよう。さいわい、みな平静を保っている。

テレビがないので、配られた新聞の写真を食い入るように見る。

昼間は、家でぼつぼつあと始末をする。残飯少しとバナナ1本しか食べ物がなかったので、体に力がなく、すぐ息切れする。

2日目の夕方、やっと救援物資が届き、パン・おにぎり・カップラーメン・ちくわ・バナナなど、次から次へと配られる。ただ、お湯がないので、カップラーメンなどはどうしようもない。(翌日からは、グラウンドでお湯がもらえるようになったが……)

よその避難所では、避難者が管理者に詰めよるなど、きびしい雰囲気のところもあるら

被災者の皆様方へ
平成7年1月31日

冬来りなば
春遠からじ

一段と寒さが増し、白いものさえちらほらと見えています。体調の方はいかがでしょうか。昨日そして本日と「炊き出し」がきていますが、これから後も、続々と「炊き出し」のボランティアが地方から来校する予定です。まずは、あたたかいものを口に入れて体力をつけてください。また、掲示板に予定が張り出されると思いますので、気を付けて見てください。

ちょっといい話を

テレビの影響でしょうか、本校を名指して救援物資を送ってくださる方が後を絶ちません。そこで本日は、その救援物資に添えられた手紙をいくつか紹介します。

(前略)

その後皆様明るくお元気でいらっしゃいますでしょうか。毎日、テレビを見て涙しながらも逆にはげまされております。私も男の子がふたりおりますが今回のこのおもちゃは7才になる次男に意見等を聞いてとりあえず揃えさせていただきました。「僕だったらこれで遊んだら楽しいよ。」といわれてそろえた物ですが皆様どうぞお使いくださいませ。

また同封の2個は次男が貯金の中から自分で選んで買ったものです。大人の人も結構たのしめると思いますので、たまには気分をかえてくださいね。なわとび等でどうぞ身体を整えてください。次男がいつも主人に言われる言葉ですが、「男は気合だ!」と皆様に伝えてくれとのことです。どうぞ負けないで頑張ってくださいね。

大阪も時々余震がありますが、皆様方の事を思うとまだまだ気があまくて弱いと思っております。

皆様のお力でどうぞ元の神戸にしてください。私も何度か神戸を訪れましたが、またぜひあの美しい夜景を見せたいかと思っております。ぜひ、ぜひ頑張って、くれくれもお身体を大切になさってくださいませ。こんな物ばかりしかお送り出来なくてお許しください。

子供の少しの気持ちですがどうぞ受け取ってくださいませ。神戸の皆様、頑張って下さい。

神商避難所暮らし—思いつくまま—

永岡 幸生

1月17日の兵庫県南部地震では、西岡本1丁目も壊滅的な被害を受けた。さいわい、わが家は倒壊をまぬがれたが、家の中は足の踏み場もないほど散乱している。それに、停電しているので夜になると明かりがないし、たびたびある余震も怖い。で、とにかく避難す

そんなふうに ぼくたちも生きていけたらすばらしい
ときには つらい人生も 雨のちくもり
でまた晴れる
そんな時こそ 野の花のけなげな心をし
るのです
野にさく花のように…♪

思いのままに、ほんとうにありがとうございました。

ることにし、日が暮れる前に、向かいの人と神商の体育館へむかう。

私たちが行ったときはまだまだスペースがあったが、そのうちにだんだん人が多くなり、広い体育館もいっぱいになる。

この避難所も停電していて、暗くなるとトイレに行くのもたいへん。通路がないので、「すみません、すみません」といいながら、懐中電灯をたよりに、人のふとんの端を踏んで行かないといけない。

行方のわからない親戚知人を探して、何人も人が避難所を訪ねてくる。すすり泣きながら名前を呼んでいる人、懐中電灯で寝ている人の顔を見てまわる人など……。

11時ころ電気が来る。「火災予防のため、各自家へ帰ってブレーカーを切って下さい。」とのアナウンスがあり、私も家へ帰って見たが、わが家はまだ停電したままだ。

あたりが静かになると余震がよくわかる。ドーンという地鳴りに続いてグラグラッと来る。とたんに悲鳴をあげる人があり、そのあとザワザワして、なかなか寝つけない。

明るる朝、パンの支給があったが、数が少ないので、子供と老人にだけ配られ、ほかの人にはぜんぜん当たらない。係の人は、パニックにならないように、たいへんな気の使いよう。さいわい、みな平静を保っている。

テレビがないので、配られた新聞の写真を食い入るように見る。

昼間は、家でぼつぼつあと始末をする。残飯少しとバナナ1本しか食べ物がなかったので、体に力がなく、すぐ息切れする。

2日目の夕方、やっと救援物資が届き、パン・おにぎり・カップラーメン・ちくわ・バナナなど、次から次へと配られる。ただ、お湯がないので、カップラーメンなどはどうしようもない。(翌日からは、グラウンドでお湯がもらえるようになったが……)

よその避難所では、避難者が管理者に詰めよるなど、きびしい雰囲気のところもあるら

被災者の皆様方へ
平成7年1月31日

冬来りなば
春遠からじ

一段と寒さが増し、白いものさえちらほらと見えています。体調の方はいかがでしょうか。昨日そして本日と「炊き出し」がきていますが、これから後も、続々と「炊き出し」のボランティアが地方から来校する予定です。まずは、あたたかいものを口に入れて体力をつけてください。また、掲示板に予定が張り出されるとと思いますので、気を付けて見てください。

ちょっといい話を

テレビの影響でしょうか、本校を名指して救援物資を送ってくださる方が後を絶ちません。そこで本日は、その救援物資に添えられた手紙をいくつか紹介します。

(前略)

その後皆様明るくお元気でいらっしゃいますでしょうか。毎日、テレビを見て涙しながらも逆にはげまされております。私も男の子がふたりおりますが今回のこのおもちゃは7才になる次男に意見等を聞いてとりあえず揃えさせていただきました。「僕だったらこれで遊んだら楽しいよ。」といわれてそろえた物ですが皆様どうぞお使いくださいませ。

また同封の2個は次男が貯金の中から自分で選んで買ったものです。大人の人も結構たのしめると思いますので、たまには気分をかえてくださいね。なわとび等でどうぞ身体を整えてください。次男がいつも主人に言われる言葉ですが、「男は気合だ!」と皆様に伝えてくれとのこと。どうぞ負けないで頑張ってくださいね。

大阪も時々余震がありますが、皆様方の事を思うとまだまだ気があまくて弱いと思っております。

皆様のお力でどうぞ元の神戸にしてください。私も何度か神戸を訪れましたが、またぜひあの美しい夜景を見せたいかと思っております。ぜひ、ぜひ頑張って、くれくれもお身体を大切になさってくださいませ。こんな物ばかりしかお送り出来なくてお許しください。

子供の少しの気持ちですがどうぞ受け取ってくださいませ。神戸の皆様、頑張って下さい。

神商避難所暮らし—思いつくまま—

永岡 幸生

1月17日の兵庫県南部地震では、西岡本1丁目も壊滅的な被害を受けた。さいわい、わが家は倒壊をまぬがれたが、家の中は足の踏み場もないほど散乱している。それに、停電しているので夜になると明かりがないし、たびたびある余震も怖い。で、とにかく避難す

しいが、ここ神商では、係りの人に対して感謝の拍手があるくらいだ。

地震の翌日にはもうボランティアが来ていたが、3日目くらいから、避難者の中の中学生・高校生たちもボランティアに参加しはじめる。これはいいことだ。

係の人の依頼で、妻が避難者の名簿作りを手伝うことになる。体育館の4分の1を引き受け、各自記入してもらおうようノートを回しても、昼間は出かけている人が多く、なかなか思うようにいかないという。

神商は、震災で亡くなった人の遺体安置所にもなっていて、昼夜を問わず、救急車のサイレンが聞こえる。

昼間は、取材のヘリコプターが何機も頭上を飛びまわり、うるさくてしょうがない。

これまで、情報源はラジオと新聞だけだったが、体育館のロビーにテレビが置かれ、いつでも見れるようになる。体育館の前には、何台かの仮設電話もつく。

ここ数日風邪ぎみで、なかなか直らない。避難所はほこりっぽく、喉によくない。

22日早朝、あたりがさわがしいので目を覚ますと、天井から雨漏りがしている。水滴が落ちてきたところに寝ていた人は場所を移動し、ボランティアの人たちが、ビニールシートを垂らして雨水をバケツに受けている。

22日、家に電気が来たので、避難所から引き上げることにする。ありがたいことに、県住の人たちが家までふとんを運んでくれる。

つらい避難所暮らしでしたが、今まで知らなかった近隣の人たちと仲よくなれたのは何よりだった。

本当にありがとうございました。

被災者の皆様方へ

平成7年2月2日

明日は立春、 春近づく

明日は立春、暦の上では寒いながらも春です。そして暖かい春も、もうすぐそこまで来ているはずですよ。

そして、もう、すぐそこまで来ているもうひとつのものがありません。それが「水」です。

本山のほうでは出ているらしい、等の噂を耳にしましたが、何と本校の食卓まで「水」が来ているようです。

「水」が来れば、待望の風呂も設置されるはずですよ。風呂ももうすぐそこまで来ています。また風呂に風呂が設置され明日から利用が可能と聞いています。

明日は節分

本日は昼過ぎから風作りを行い、夕方には子供達が歌声をあげて校庭を走り回っていました。残念ながら風がなかったため（寒さと考えるとよいほうなのですが）あまりあがらず、本格的な風あげは後日になりました。そして明日は節分、豆まきを予定しています。何とか子供たちの力で鬼をはらってほしいものです。

避難所から出られた方からのお便り

お世話になりました

受験生をかかえているため、五人家族が3ヶ所にとバラバラになってしまいましたが、がんばります。

集団で規律の正しい生活を送れたことは、みなさんの協力があったからこそだとおもいます。

いろいろと、本当にありがとうございました。
みなさんもお身体に気を付けて頑強ってください。

2月2日 M生

最新炊き出し予定

最新の炊き出しの予定です。

2月10日(金)

16:00~ 牛羹 1 1 食肉協同組合提供

2月11日(土)

この日から奈良県のボーイスカウトが1ヶ月常駐する予定です。

献立は未定で他の団体と重なる場合はその日のお休みです。

2月12日(日)

朝、昼、晩 豚汁 1 1 富山県から

2月15日(水)

昼 ビーフシチュー 1 1

11日のボーイスカウト到着以降は温かい食事が連日期待できそうです。お楽しみに。

また、先の2月6日に朝は理容師の方、昼から美容師の方がたくさん来られて、さっぱりされたかたも多かったと思いますが、良く考えてみれば6日は月曜日、休みを利用して多くの方が来られたのが判りました。次の月曜日の13日にもドライシャンプーで洗髪をしてもらえる予定がもうはいっていますしまた理、美容の方が来られることと思います。

お知らせ

たいへん残念なことです。都合によりこの「被災者の皆様方へ」は、本号をもって休止させていただきますことになりました。

これから後こそ、連絡が増えていくと思いますが、朝と夕方の連絡、そして各種の掲示板に今まで以上に注意して下さい。また、不明なことは朝、夕の連絡のときに係に気軽に尋ねてください。

それでは皆さんの健康と一日も早い神戸の復旧を心からお祈りします。

(4) ボランティアの声

神戸市立神戸商業高校での ボランティア体験記

名古屋市立名東高等学校

岡田 晴彦

2月24日（金）～27日（月）の間、神戸商高でボランティア活動に参加しました。阪神大震災後の神戸の惨状に心を痛み、避難所で生活されている人達に何かしてあげられないものかという思いから、名高教本部にボランティア参加の申し出をしました。学校や組合でのお付き合いのある神戸市立高校を希望したところ、神戸市立高教組が全教に加盟している関係で、尼崎市の全教の対策本部から神戸商高を紹介してもらいました。

避難所で生活されている方が減少していること、大学生が春休み中で相当数がボランティアに参加しているということもあって、現在のところボランティアは充足されているようで、突然行ったりした場合には、断われたり、たらい回しにされたりするケースも少なくないようです。私の場合は、幸いなことに組合ルートで学校へ行ったので、何とか参加できたのが現状です。

2月24日（金）の10時過ぎに神戸商高へ到着しました。神戸市立高教組の書記次長でもある谷川先生に迎えていただき、現状をいろいろ教えていただきながら、ボランティア本部へ案内してもらいました。

神戸商高の建物の多くが傾いたり、1階部分がくずれたりしているために、建て直さなければならなくなっています。校舎をこわす工事はすでに始まっていました。また、体育館には約200名、グラウンドのテント村には約100名の方が避難生活を送っておられます。はじめの頃は1500名近い人が避難されていて、校舎や体育館はあふれかえるような状態だったそうです。今でも先生方は3名ずつ交代で

体育館教官室で宿日直を続けられています。

神戸市立高校では、神戸商高の他数校が大きな被害を受けていること、多くの生徒が家を失ったり、家族を失ったりしているとのことでした。全国から神戸市立高教組に寄せられた義援金は約1000万円あるそうですが、これらの生徒に少しまとまった金額を配布しようと試算したところ、全然足りないことが実状だそうです。正直な気持ちは「何よりお金がほしい」ということのようにです。

神戸商高のボランティアは20名くらいいます。大学生がかなりを占めていますが、ボランティア休暇を取ってきた社会人や中学生・高校生までいました。

名古屋市立高校出身で建築会社に勤務している人がいたり、愛知県立高校出身で地元の会社に就職している人は私の家の近所の独身寮に住んでいることが分かったりしてびっくりしていました。ボランティアには食料や身の回りのものを配ったりする「物資係」とお風呂を沸かす「風呂係」とがあって、私は風呂係でした。神戸商高には1週間ぐらい前に仮設の風呂が体育館と格技場の間のところに取り付けられました。私のボランティアとしての生活は、朝は6時半頃起きて、昨日残った物や自分でもってきた物などの有り合わせの朝食をとることから始まります。その後はボランティアが宿泊している社会科講義室の清掃などをしました。風呂を沸かすこと以外に、布団乾燥機を積んだ車へ毛布を運んだり、京都の農業高校から届いた花を運んで並べたり、様々なことをしました。風呂係は朝10時頃から、風呂と掃除と水をくみ始め、11時頃から沸かし始めます。自衛隊などが廃材を運んできてくれるので、これを割って薪にしています。日によっては少し異なりますが、女性は2時から4時頃まで、男性は4時頃から7時までが入浴時間です。その案内の紙を掲

示板に貼ったり、テント村や体育館の中を伝え歩くことも仕事です。終了後にも希望者がありますし、ボランティアも入りますから、終了は7時半過ぎです。その間、昼食・夕食の弁当や炊き出しの野菜スープを食べながら仕事をしました。3つの浴槽で沸かした湯を仮設テントの中にある2つの浴槽にポンプで送る仕組みですから、常に湯を沸かし続けなければなりません。毎日50名くらいの方が入浴されます。私は2日間入浴せず、3日目に入浴したときは、サッパリして本当にイイ気持ちでした。入浴された方はどの方も「ありがとうございました」とお礼を言われながら、帰って行かれるので、少しはボランティアに行った意味があったかなと思います。

つらいこともあります。1歳くらいから小学生くらいまでのお子さんを連れていられる方たちは正視できませんでした。あいさつをしても私は下を向いたままで、それ以上何もできませんでした。自分だったらと思って、胸が苦しくなっていました。無表情の方も少しおられ、あいさつをしても反応がないので、私も下を向いてしまいました。風呂を待っている二人の方とたき火にあたりながら話をしていました。(話を聞くことも大切な仕事なのですが)。家が半壊している方は比較的明るいのですが、もう一人の方が「家が焼けてしもうたけん。類焼やったけどね」と言われたときは、先の方と私は言葉に詰まって話すことができなくなってしまいました。

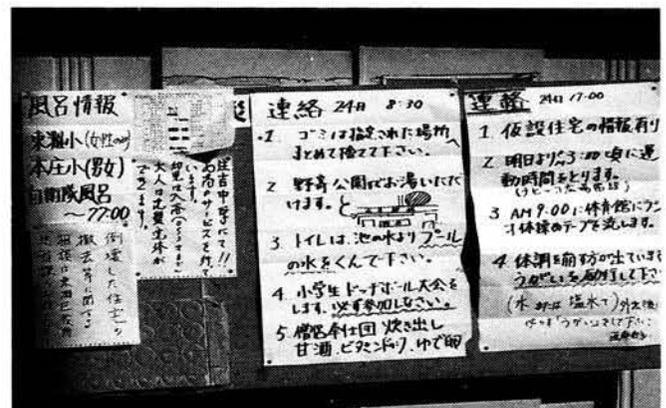
3月下旬くらいから2度目の仮設住宅への入居が始まるそうです。家族連れの方の多くはこの時に移って行かれるだろうという予測がされています。4月以降も各地の避難所に残られるのは老人世帯が多くなり、その後は避難所をどう運営していくかが深刻な問題のようです。大学生のボランティアも期待できにくくなります。

今後の教員組合のボランティアについてですが、日帰りや一泊二日程度では、その学校

の組合の代表の方、区役所から派遣されている職員の方、ボランティアの責任者の方、それぞれ多忙であるのに、(中には自分の家が半壊しているというような方も少なくありません)、余分な仕事を作るだけで、善意で行くことは確かなのですが、はっきり言って迷惑なだけだと思います。それだけの意欲があれば、その交通費を計算してその分だけ、義援金として送った方が余程役立つと思います。私がこれを書いているのも(行くまでは書く予定がなかったのですが)、ボランティアとして役に立ってなかったのではないかと思っているからです。そうであれば他にできることといえば、組合員の皆さんに義援金をもう一度呼びかけて集めることしかありません。

神戸商高のボランティアの予定についてですが、3月中旬以降の予定はたっていません。大学生は中旬以降かなり減少するという予測です。

最後に、この4日間に感動的なことも経験しました。ボランティアと言ってもいろんな人がいます。岐阜県からは、AETの方がきていました。アングスさんといってイギリス人ですが、上宝村の小学校と中学校で英語を教えているそうです。岐阜県教組のニュースを見て年休を取って3月4日まで1週間滞在することになっています。神戸商高のAETの人ともさっそく話し合っていました。勉強熱心な人で(大学は情報工学を専攻していたそうです)、日本語も流暢でしたが、風呂を



たきながらノートを読んで日本語の勉強をしていたので、二宮金次郎の話をしてあげました。大学生や社会人の人も良く働いていました。朝6時半くらいからは夜8時過ぎまでほとんど休むことなく黙々と働いていました。社会人の人は1週間程度ですが、大学生は20日間とか1ヵ月とか2ヵ月近くの予定の人もいました。風呂に入れるのは1週間に1～2

回です。夜遅くまで打合せをしていたのに、朝6時半にはもう働いているのには驚きました。東京と関西の人が多いのですが、札幌と熊本の人もしました。3月下旬にまた会うことができる人もいましたが、帰るときに一人ひとりに挨拶をしてきました。どの人も笑顔がとても素敵でした。

(「名高教情報」より)

(5) 報道関係者の声

地図の向こう側

名古屋CBCビジョン

友松 裕喜

やぶれかけた地図

1枚の地図が私の手元に残っている。

雨に濡れ、風に吹かれ、しわくちゃになり端々は破れかけた18000分の1の『神戸』の地図。

大阪の放送局の応援で、名古屋を出る際、先輩記者からアドバイスをいただいた。

「見知らぬ土地で、しかも、状況が状況だから地図を持ってゆくといいよ。必ず役に立つから」

まっさらな地図は、阪神大震災・取材期間中、常に私のポケットにあり、幾度となく開いては閉じていた。

今、目の前にその地図を広げ、東灘区に目を移す。『神戸商業高校』に大きく赤のボールペンで丸が描かれている。

その赤くマークされた部分を見ていると、震災後の神戸商業高校、そして職員の方々の様子が鮮やかに蘇ってくるのだ。

1月24日午前3時

名古屋に暮らす私にとって、神戸商業高校の存在は、震災前まで知るよしもなかった。

私が、神戸商業高校に向かったのは、震災からちょうど1週間目にあたる1月24日の午

前3時過ぎ。車で初めて神戸商業高校に足を踏み入れた。

深夜にも関わらず、体育館からは、オレンジ色のライトがこぼれ、教室からは、蛍光灯の白い明かりが輝いていた。

車が立ち去り、ひとりきりになった私は、吸い寄せられるかのように、蛍光灯の明かりが漏れる教室へと向かった。

前日の取材先で、学校の教室が避難所の本部になっており、深夜にも関わらず、どなたか、起きていらっしゃるのではないかと思ったからだ。

グラウンドからひょいと窓越しに教室のなかを覗いた。その瞬間、見てはいけないものを見てしまった気にかられた。

教室には、机が取り払われ、花の添えられた柩が、いくつも並べられていた。

これが、緊急時の学校の姿だった。

私は、先に乗り込んでいた中継クルーのマイクロバスをグラウンドに見つけ、静かに座席に座り込んだ。

バスの窓からは、先程覗いた、教室の白っぽい蛍光灯が妙に光っていた。

ドッチボール大会

私が、神戸商業高校に来た目的は、震災からちょうど1週間目にあたるこの日、学校の先生方が中心となり、ドッチボール大会が開かれると聞いたからだ。

たきながらノートを読んで日本語の勉強をしていたので、二宮金次郎の話をしてあげました。大学生や社会人の人も良く働いていました。朝6時半くらいからは夜8時過ぎまでほとんど休むことなく黙々と働いていました。社会人の人は1週間程度ですが、大学生は20日間とか1ヵ月とか2ヵ月近くの予定の人もいました。風呂に入れるのは1週間に1～2

回です。夜遅くまで打合せをしていたのに、朝6時半にはもう働いているのには驚きました。東京と関西の人が多いのですが、札幌と熊本の人もしました。3月下旬にまた会うことができる人もいましたが、帰るときに一人ひとりに挨拶をしてきました。どの人も笑顔がとても素敵でした。

(「名高教情報」より)

(5) 報道関係者の声

地図の向こう側

名古屋CBCビジョン

友松 裕喜

やぶれかけた地図

1枚の地図が私の手元に残っている。

雨に濡れ、風に吹かれ、しわくちゃになり端々は破れかけた18000分の1の『神戸』の地図。

大阪の放送局の応援で、名古屋を出る際、先輩記者からアドバイスをいただいた。

「見知らぬ土地で、しかも、状況が状況だから地図を持ってゆくといいよ。必ず役に立つから」

まっさらな地図は、阪神大震災・取材期間中、常に私のポケットにあり、幾度となく開いては閉じていた。

今、目の前にその地図を広げ、東灘区に目を移す。『神戸商業高校』に大きく赤のボールペンで丸が描かれている。

その赤くマークされた部分を見ていると、震災後の神戸商業高校、そして職員の方々の様子が鮮やかに蘇ってくるのだ。

1月24日午前3時

名古屋に暮らす私にとって、神戸商業高校の存在は、震災前まで知るよしもなかった。

私が、神戸商業高校に向かったのは、震災からちょうど1週間目にあたる1月24日の午

前3時過ぎ。車で初めて神戸商業高校に足を踏み入れた。

深夜にも関わらず、体育館からは、オレンジ色のライトがこぼれ、教室からは、蛍光灯の白い明かりが輝いていた。

車が立ち去り、ひとりきりになった私は、吸い寄せられるかのように、蛍光灯の明かりが漏れる教室へと向かった。

前日の取材先で、学校の教室が避難所の本部になっており、深夜にも関わらず、どなたか、起きていらっしゃるのではないかと思ったからだ。

グラウンドからひょいと窓越しに教室のなかを覗いた。その瞬間、見てはいけないものを見てしまった気にかられた。

教室には、机が取り払われ、花の添えられた柩が、いくつも並べられていた。

これが、緊急時の学校の姿だった。

私は、先に乗り込んでいた中継クルーのマイクロバスをグラウンドに見つけ、静かに座席に座り込んだ。

バスの窓からは、先程覗いた、教室の白っぽい蛍光灯が妙に光っていた。

ドッチボール大会

私が、神戸商業高校に来た目的は、震災からちょうど1週間目にあたるこの日、学校の先生方が中心となり、ドッチボール大会が開かれると聞いたからだ。

取材を進めるため、避難所の本部となった体育教官室に向かう。

教頭先生を始め数人の先生方が詰めていらっしやる。

震災から1週間目にしてドッチボール。

果たして大丈夫だろうか、と心配をしてしまう。仮設のお風呂があるわけでもなく、見えない不安が漂うなか、しかも、教室には、柵が並べられている状況。

そんなことを考えているうちにも、先生方は、黙々とドッチボールに向けての準備を進めていらっしやる。

それは、見事といってよかった。

美術教師は、『頑張ろう神戸』の横断幕を作るため、ポスターカラーの筆を走らせ、体育教師は、ドッチボールの大会の説明およびコートライン書きに走り、社会科教師は子供達に呼び掛けを始める。

自己の普段の才をいかんなく発揮されているのだった。

ある先生が、散乱する体育倉庫へと向かわれた。そこで、その先生が拾い集めていらっしやるものがあった。

それは、以前、体育大会か何かの学校行事で、あまったメダルの数々だった。

「せっかく、大会開くんですから、なにか子供たちに賞品を考えていたら、この倉庫に残っていたメダルが思い浮かんだんです。子供達が喜ぶと思って。」

私が当初抱いていた不安が少しずつ期待へと変わっていく。

教師を職業にされた方々が、職業としての教師たる以前の姿で、そこに黙々と動き始めていたからだ。

だれかを勇気づけようとする姿。

自分自身を勇気づけようとする姿。

午後1時。ドッチボール大会開始の笛が鳴る。

グラウンドには4歳になる子供から高校生——もちろんボランティアで駆けつけた神

戸商業高校の生徒も含まれている——およそ50人の元気な声が響き渡った。

それは、本来どこでもある学校の姿だった。時折、聞こえるヘリコプターの爆音や、けたたましく鳴る救急車やパトロールカーのサイレンさえなければ——。

試合が終わると、勝ったチームにも負けたチームにも、倉庫に残された例のメダルが小さな胸にプレゼントされた。

子供達には笑顔が戻り、我が子を見守る母親には、安心が生まれた。

このドッチボール大会の様子は、その日の午後のワイドショーを始め、夕方のニュースなどにトップニュースとして、全国に放送された。

その日の夜、私は、今日の取材のお礼に伺うため、避難所の本部となっている体育教官室を訪ねた。

午後9時近くにも関わらず、数人の職員の方が残っていらっしやる。

教頭先生が、私の顔を見るとニコリと笑い1本の栄養ドリンク剤を手渡してくださった。

車中泊の続く我が身に活力が戻ってくる気がした。

栄養ドリンク剤の後は、カセットコンロで沸かしたインスタントコーヒーだった。

栄養ドリンク剤やインスタントコーヒーを口にしながら、震災直後の学校の様子を聞かせていただく。

『サランラップに包まれた遺体が、次から次へと学校に運ばれたこと』

『震災直後の体育館は、1000人以上もの人で溢れ、だれもがいらだちを隠せなかったこと』

そして、この震災で自宅マンションが崩壊してしまった先生もいらっしやることも、この時初めて耳にしたのだった。

卒業式前日 2月25日

神戸での私の取材は、10日ほど続いた。

名古屋に帰ったあとも、神戸は私の頭から離れることはなかった。

2度ほど自家用車で神戸へと向かった。

取材を通して、避難所で暮らす方や神戸商業高校の先生方と親しくさせていただいていた。

そんな方達のお手伝いにと、自分にできる範囲で、仮設住宅への引っ越しのお手伝いなどをさせていただいた。

卒業式前日、再び私は神戸商業高校を訪れた。ドッチボール大会以来、ひときわ親しくさせていただいた宮崎仁史先生が「卒業式は絶対来てくださいよ」と声をかけてくださっていた。

その言葉に素直に甘えることにした。

JR住吉駅から、なだらかな坂を登り、神戸商業高校の正門から臨時の職員室へと向かう。その途中、卒業アルバムを手にした何人もの生徒の姿が見える。どうやら先生を取り囲んで、雑談で盛り上がっているらしい。

この時、不思議な気持ちに私はかられた。神戸商業高校へは何度も足を運んでいながらこんなにも、多くの生徒を見たのはこの時が初めてだったからだ。

卒業式前日とはいえ、こんなにも、活気があり、笑いがあり、すすり泣きのある神戸商業高校の光景は、見ていて微笑ましさを感じさせられた。

卒業式 2月26日

震災で校舎などが傷つき、自分達が学んできた校舎で卒業できない悔しさを抱えた神戸商業高校の卒業生。

その卒業式は、近くの御影工業高校の体育館で開かれた。

卒業式は、感動に包まれた。

その感動は、お金をかけたものではなく、ちょっとした工夫とさりげないやさしさによるものだ。

松任谷由実・『春よ来い』の教師の歌声の

プレゼント。

突然の教師のプレゼントに、すすり泣きが母校の体育館ではない、間借りの体育館に響き渡った。

ドッチボール大会と同じで、なにもないところから、少しずつ生み出してゆく神戸商業高校の先生方の姿が、ここにもあった。

その姿は、教師以前の人間としての優しさではなからうか。

神戸の未来地図

神戸の地図は、日に日に変わっているに違いない。その地図の上を、神戸商業高校の卒業生を始め、在校生、そして職員の方が、歩き始めていらっしやる。

きっと、その地図を変え始めるのは『春よ来い』の歌に励まされ、卒業していった若い世代であろう。

また、あの震災直後ドッチボールをした子供たちはどうしているだろうか。元気に神戸の街を走り廻っているだろうか。

神戸の地図は変わってゆく。

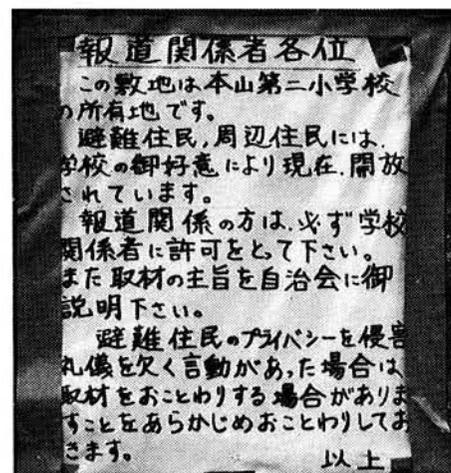
私の脳裏の地図には、教師の姿と教師以前の人としての姿が深く刻まれている。

教師以前の人としての行動と思考——。

生徒に接する教師、被災者に接する教師。

私は手元に残された神戸の地図を見ながらぼんやりと、そんなことを考えている。

ゆっくりと神戸の街を歩く日を夢みて——。



本山第二小学校の掲示

(1) 震災直後の教育活動

生徒の安否確認と授業再開

田中 孝明

I はじめに

平成7年1月14日(土)第2土曜日、15日(成人の日)、16日(振替休日)の3日間各クラブ活動が活発に行われていました。1週間後の全商簿記検定に向けての補習も行われていました。火曜日からの5日間で最終確認ができる予定でした。17日いつもと同じ朝を迎えて、同じ学校生活が始まるはずでした。

突然の大震災発生に家族の安全確認ができ、交通手段の確保ができた十数名の職員が8時頃全壊した本館前に集合していました。

全壊した職員室の電話が何本も鳴り響いており、そのコールは休むことをしりませんでした。生徒や保護者からの連絡や職員からの連絡であったのでしょうか。いつもなら「お早うございます、神戸商業です。」と受話器を取っていたであろうに。すぐそこに鳴っている受話器さえ取ることができませんでした。

近くの生徒が登校してきて、安否の報告や避難場所、今後の連絡場所等を報告する者もいました。

また、約500名の避難者が体育館・格技室・北館に入り、入りきれない避難者が教室の椅子等を持ち出して、グラウンドで焚火をつくり暖を取っているというありさまでした。

18日にはLPGガス漏れによる避難勧告により避難者は約2000名にもものぼり、夕刻に解除がなされてもなお約1000名が立ち入り禁止の南館、食堂にも避難されている状況下で、食料等の要請等避難者に対処することで精一杯の状況でした。

19日(木)に電話1台が仮設復旧し、生徒の安否が電話を通じてもたらされるようになるまでほとんど生徒の安否確認がとれない状況にありました。

職員も被災しており、家族の安全確認、家屋の損壊状況、交通手段の有無等によって出勤できた職員の数に制限がありました。

そのような状況下で生徒の安否確認作業に入ったのは1月の下旬に入ってからになりました。

II 生徒安否確認

NHK・サンTVに放送依頼及び電話が一部通じる状況下で各HR担任が生徒宅への連絡をとる努力をするが、多くの生徒宅へのコールは通じず、ごくわずかな生徒の確認のみでした。

1月21日職員が手分けして2日間で避難先と思われる小学校・中学校・高校・大学へ赴き、生徒に対して「学校へ安否の連絡を入れるよう」呼びかける掲示物を貼ったり、各教室を回って避難者に本校生徒の確認作業を行いました。学校によっては放送機器を使用して呼びかけてくれる場合もあり、断られて各教室を回った場合もありましたが、この確認作業で495人の生徒の安否が確認できることとなりました。震災より1週間生徒も自転車で遠くから登校し、本人や友達の安否報告をしてくれる者もありました。

本来ならば電話連絡のとれない生徒宅には複数教員が地区ごとに出向いて、生徒指導表によって住所を確認し、安否を確かめるのが本筋だったのですが、余震の激しい段階で全壊した本館に立ち入ることに身の危険があったため、上記のような避難場所となる可能性の高い学校等を中心に掲示物を貼る等の作業に終始せざるをえなかったのです。

安否確認はおおよそのことが判明しましたが、次に授業再開に向けての準備作業に入ることになりました。教科書・制服・学用品の有無が不明であったことと、生徒の被災状況について十分な把握ができていなかったため、

大震災による精神的なダメージの大きさを測り知ることができなかったこと、当時の正確な生活住所・避難場所、今後の居住場所について不明瞭な点があったこと等が問題となりました。

そこでまず生徒を登校させアンケートをとることとなりました。教科書・制服等の有無及び当時の正確な避難場所等の調査を実施するため2月9日午前11時～午後3時までの時間内に登校してもらうべく、再度各生徒宅へHR担任よりの電話連絡及び避難場所等へ2月9日に登校を促す掲示物を貼る等の作業を手分けして実施しました。

2月9日(木)使用できる校舎は北館のみであったため、1F1年、2F2年、3F3年と定め各階2教室を使いアンケートの回答を得ました。被災の大きさに反して生徒の笑顔が多いことに、安心させられましたが、生徒の服装はまちまちで授業再開に向けての困難が予想されました。

2月9日で約8割以上の生徒が登校できることが判明し、登校日と知らずにいる生徒にもマスク等呼びかけることによってかなりの生徒について登校可能な状況下にあると考えられました。

但し、本館は全壊、1年生・2年生の入っていた南館は立ち入り禁止状態、新館はボランティアの就寝場所、避難物資の仮置き場、職員・避難者・ボランティアの会議場所等として使用されており学校機能を置くには適切な場所ではありませんでした。食堂は避難物資で満載された状態であり当分の間使用不能の状態でした。残されたのは北館普通教室8、情報処理室2、ワープロ室2、美術室・書道室・音楽室各1、会議室1でした。

当時会議室は職員室として使用されており、特別教室の機器はパソコン1台、ワードプロセッサ3台、プリンター2台使用不可であり、ワードプロセッサは各接続部分が不良となっており十分使用できる状況ではなかったため、

普通教室を使っただけの授業再開を目指しました。

Ⅲ 授業再開

2月9日の登校によって次回以降の学年別登校の記載された用紙を配布済みであったため以後の登校連絡について特別の配慮をする必要はありませんでした。

2月13日(月) 13:00～15:00

1年生 学年集会・HR

2月14日(火) 13:00～15:00

2年生 学年集会・HR

2月16日(木) 13:00～15:00

3年生 学年集会・HR

各学年HRにおいて、大震災時における作文を書いてもらい、被災状況の確認及び震災による精神的なダメージの憶測資料として活用しました。

2月20日(火)からの教科授業再開に向けての検討に入りましたが、3年生の卒業までの日数、使用可能教室数等を考え合わせると3年生の教科授業については断念せざるを得ませんでした。

1年生及び2年生に対しては教科授業としましたが、使用可能教室の関係で午前2時間・午後2時間の2部制としました。

全壊により立ち入り禁止となっていた本館に入って関係資料を取り出した職員もいましたが、ガラスが散乱した職員室は水冷循環式の冷却水で濡れていたり、書類が散乱していたりと、どこに何があるのかよくわからなかったこともあり、教科授業に必要な教科書・参考資料・問題集が手に入らなかった教員もいました。

そこで各教科主任を通じて、教科授業開講可能性の有無を調査したところ下記のような返事が返ってきました。

国語科……………国語表現のみ開講可能

数学科……………開講可能(教科書等の不安有)

保健体育科…開講不能(場所の関係)

家庭科……………開講不能(特別教室の関係)

芸術科……開講不能(教材の関係)

その他の教科…地歴科・公民科、外国語科、理科、商業からは返事がなく開講可能と判断しました。

この時点で平成7年1月の全商簿記検定・情報処理検定が大震災によって実施できなかったことを考慮し、別日において実施するとの回答が入っていたので、1年生は簿記と計算事務の授業時間割を学年団として要望がありこれに決定しました。

2年生からの要望はなかったため、職員朝礼において①教務一任で願います。②学年及び教科担任を越えて編成する。この2点の承認を得て教務で時間割編成を行いました。

2年生については商業科中心の授業という要望があり、職員朝礼でも承認を受けていたので、時間的に限りがあったが、来年度も開講される継続性のある科目で時間割編成を行いました。

時間割を職員朝礼に提示すると下記のような意見及び追加要望がなされました。

- ①同じ商業科目であっても教科担任以外の商業科教員が担当するのは困難と思われる。
- ②カリキュラムにある単位数により開講科目時間を考えるべきである。
- ③教務に一任ということは原案を提示することであって、各教科の意見を聞くべきである。
- ④第1学年は前回同様簿記と計算事務の授業で望む。教科担任以外も了承済みである。

上記意見等により時間割の承認がなされなかったため、再度教務により時間割編成を行い翌日改訂時間割を提示しました。基本的な編成方法は下記の通りでした。

- ①商業科科目だけでは編成できないため、カリキュラムと同様の時間割編成となり、2年生は商業科中心の時間割編成は不可能。
 - ②講師に対する要望は困難と考え除外する。
 - ③その他、被災状況等を考慮する。
 - ④宿直及び日直を考慮することは困難。
- 朝礼にて時間割(案)を提示し多数の意見

を頂戴したところで、商業科主任一任ということで時間割を再度編成しなおすことに落ちつき、当該時間割によって授業再開にこぎ着けた次第であった。

商業の専門科目においては最も重要な一つである全商検定が目前に迫っていたこともあって、当該学年の教科書範囲がおおよそ終了していたこともあり、生徒の被災状況を考慮し学校として授業再開を急ぐことはしないとの基本方針が得られていました。

また、保護者から授業再開の要望がなされなかった点からも保護者から学校に対して、おおよその承認を得られたと考えていました。

職員からは生徒は避難場所でボランティア等を通して生きた勉強をしている。何も交通手段が少なく、道路状態が著しく悪い状況下で無理に登校させて、生徒の身を危険にさらし、わずか45分授業を2時間する価値があるのかといった疑問が投げかけられ、震災後の混乱期の中での授業再開について疑問視する意見もあり、大災害時における学校教育の在り方について考えさせられるものでした。

授 業	2月20日・21日・22日・23日 24日・27日・28日 3月1日・2日・3日
第1部	10:00~10:05 SHR 10:05~10:50 第1限 11:00~11:45 第2限 11:45~11:50 SHR
第2部	13:00~13:05 SHR 13:05~13:50 第1限 14:00~14:45 第2限 14:45~14:50 SHR

IV 阪神大震災以後の出席簿の取扱い

- ① 1月13日(金)までは平常通り
- ② 1月17日(火)~2月18日(土)まで 臨

時休校

- ③授業開始の2月20日(月)以降は平常通り(但し、どうしても登校できない生徒は「出席停止・忌引き等」の取扱い



図書室(本館2階)

V 平成6年度第3学期卒業試験・学年末試験について

本校は3年生全員が卒業試験を受験できる状況でなかったこと及び1年生・2年生が全員学年末試験を受験できる状況でなかったことを以て、全生徒に対して公平をきすために卒業試験・学年末試験を実施せず、平成7年1月13日(金)までの成績等によって評価することとしました。卒業試験・学年末試験の受験機会を学校が生徒から奪ったことにより、今まで欠点であった科目についても、当該試験によって挽回した可能性を認め全て修得したと認定しました。但し、平成7年1月13日までに内規に照らして出席すべき日数を満たさず、科目の履修が多数不可能である生徒に対しては卒業を認定しませんでした。

3年生で卒業が危ぶまれた生徒もいましたが、登校してきた顔には遅い表情が表れており上記の決定は間違っていないかと思われるかと思われました。震災時に日頃あれほど勉強について親を悩ませていた子供が非常に遅く思えたと言っている保護者が多い。職業高校の生徒らしく生きる術を自然と身につけていのでしょうか?ともかく心配した生徒が2月25日(土)の登校を最後に本校を去っ

ていきました。卒業式は近くの御影工業高校を拝借して実施されました。本校は避難者が体育館を埋めつくし、一時移動して頂く場所すらなかったためでした。

1年生・2年生については全員の進級が認定されました。この時点で1年生の来年度からの勉学に対して心配する声も聞かれました。高校の進級について安易に考える生徒の出現の可能性があったためでした。

VI 平成7年度入学者選抜の特別措置

- ①出願期間の変更
- ②選抜料の猶予
- ③他会場での受検
- ④被災に関する副申書の添付
- ⑤特別の受検の機会

その他、平成7年度兵庫県公立高校入学者選抜要綱第206項に係わる面接が校舎半壊のため面接会場の確保ができないという状況から実施できない結果となってしまいました。

VII 平成6年度末の在籍異動について

震災により犠牲となった生徒が1年生・2年生に女子1名づつ、転出した生徒1年生3名、2年生6名でした。その他、正式な転出手続きをしないで一時的に避難先近くの高校へ通学していた生徒若干名がいました。

正式に転出した生徒の中には平成7年度になって、神戸に仮設住居が当たり帰神した生徒も含まれており、一端転出し暫く住んだ住居で人間関係も親しみができたであろう時期に苦勞をしてまで神戸に、本校に愛着を持って帰ってきてくれることに、神戸という土地に対する愛着がよく表れていました。

また、非常にかわいそうな転出生徒もいた。三重県より平成6年末に転入が許可され、平成7年1月わずか5日間の登校で震災に遭遇し、家屋は全壊し足の踏み場もないほどの状況で、小学校で暫く避難生活をした後、元の三重県母校へ転出した生徒である。

生徒の転出先は様々であり、関東から九州に至るまでの広範囲にひろがっていました。

Ⅷ 平成7年度授業開始について

新館の1F理科実験室・理科講義室、2F社会科教室・社会科講義室、3F視聴覚講義室をそれぞれ転用し、職員室等とした。新館についてはボランティアの宿泊所として使用されていたのを入試を機会に明け渡して頂けたことが幸いしていました。

南館1年生・2年生のHR教室の確保として仮設教室が建設され、HR教室での授業の確保ができ、平成7年度授業の開始を見ることが出来ることとなりました。但し、立ち入り禁止の南館にある調理室の関係でカリキュラム上の食物が開講できずに選択者の編成を急遽しなおして頂くこととなりました。

調理室以外にも多数の特別教室が全壊したり、立ち入り禁止となり授業形態・内容について著しい影響がありました。

平成7年度においてなくなった又使用できなかった特別教室は下記の通りでした。

・全壊した特別教室等

本館に設置されていた講堂、被服室、図書室

・立ち入り禁止により使用できなくなった特別教室

調理室、総合実践室、簿記室

・新館の転用によりなくなった特別教室

理科実験室、理科講義室、社会科教室、社会科講義室、視聴覚講義室

◇始業時間の検討

平成7年度の始業時間・授業時間について全教員にアンケートを取り、回答された時間が平常時間と異なる時間の場合はその理由を記載して頂いた結果、次のような回答を得ました。

始業時間

8：30…平常授業の確保

9：00…遅刻指導を完全なものとする。

9：30 ポートアイランド・豊中・泉佐野・加古川へ避難している生徒の存在

授業時間

50分…正常授業の確保

45分…本山第二小学校との同居

第3・第4時限間の休憩時間

10分…食堂の使用不可による。

本校の校区は芦屋市から中央区と東西に幅が広がっています。校区内ポートアイランドに港島中学校があります。ポートアイランドと三ノ宮との間をつなぐポートライナーの復旧予定が平成7年4月を大幅に越えることが判っており、ポートライナー暫定代替公共輸送バスの運行のみが頼りでしたが、当該バスの運行状況も判らない状況で、始業時間等を職員会議において審議することは無理があると判断したため実際に教務部が平常時間帯に合わせて登校することが必要と思われ、調査を行った結果平常時間での登校に差し支えがないことが判明しました。

次に遠方へ避難している生徒の登校を検討しました。本校の校区は第1学区であり、遠方に避難している生徒は本来避難場所における学校への転出を検討すべきであるが、震災という不可避的な自然災害であり、転出の意志があつて遠方に避難していることではないこと、本校に対して愛着を持っており、登校及び通学費を要しても転出を考えず、本校への登校を希望している者であるから、例外的に遠方に避難している生徒に対しても通学が認可されているものでした。

但し、本校の学区内の生徒同様の基準による始業時間・授業時間での登校等が可能でなければ、生徒の本校に対する愛着が生徒本人に対する未履修・未修得といった状況を生む

可能性があったため、公共交通機関へ電話をして運行時間について調査した結果、平常始業時間による登校が可能であることが判明しました。

◇始業時間について次の検討がなされました。

①平常時間 8 時30分とした場合。

平常な授業時間の確保が出来ることであるが、遠方に避難している生徒が平常通りの時間に出発することによって、避難先でのバスの公共交通機関を利用した場合の交通渋滞を回避する効果が有り、短時間による登校が可能である。…港島中学校の生徒が 9 時30分登校の場合、1 時間30分～2 時間を要するとの証言からも当該件について理解がなされました。

② 8 時30分以外とした場合

遠方に避難している生徒が少しゆっくりと家を出発する事が可能となるが、避難先のバスの交通渋滞に巻き込まれることによって、渋滞による登校時間が増加し、肉体的・精神的な負担を増加させる可能性があります。

☆上記の検討の結果、平常通りの始業時間に決定されました。

◇授業時間についての検討

①平常時間50分とする場合

正常な授業時間の確保及び平成 6 年度臨時休業等による大幅な授業時間不足に更に追い打ちをかけない状況が得られる。

②50分未満とする場合

本館全壊・南館立ち入り禁止によるトイレ使用不可の数が仮設トイレ数を大幅に上回っており、トイレのタンク容量にも本校生徒数から判断すると、満杯によって使用不可となることも考え合わせると、平常授業時間を実施することは困難でした。

☆上記検討の結果50分での授業時間が決定されました。

◇休憩時間の検討

始業時間及び授業時間が決定された後、

実際に時間割を作成してみると、教室移動が困難であることが判明しました。4月の別紙本校図の通り1年生はグラウンドの仮設教室であるが、芸術の特別教室は北館に存在しました。当時、本館の解体が遅延しており、一旦東通用門から外へ出たのち正門から北館へ入る道しかなかったが、トイレのことを考慮に入れると10分の時間では困難と判断しました。2年生も情報処理類型の「プログラミング」「経営情報」ビジネス実務類型の「文書処理」が仮設教室から北館への移動を要しました。逆に3年生は「体育」が北館よりグラウンド等への移動があり同様に困難と判断しました。

教務部において休憩時間を10分から15分へ変更する提案を行い、授業時間について再度検討して頂いた結果、50分のままでは本校の学校案内に特色の一つとして掲げている「部活動がさかんです」という入学生と本校との約束が守られないこととなることは契約違反であるとの認識から、授業時間は45分とされました。但し、45分という時間は本館解体工事に伴う中庭横断不能によるものであることから、解体終了によって中庭の横断可能となった時点で正常時間50分へ戻すとの確認がなされました。その他の時限表は別紙の通りです。

IX 本山第二小学校との同居

当初小学校との同居に際して問題点として上げられたのは以下の点でした。

①校内防災体制の組織化

②登下校の指導法（児童が徒歩で登校するが、児童の行動は本校生徒に理解されていない場合が多い。自転車で登校する生徒の注意不足による児童との接触を原因とする怪我等への注意・指導）

③体育・音楽について共同で使用できる施設があれば、両校の教務が協力して時間割を編成する必要がある。

④校内における学校行事

⑤休憩時間・昼休み時間での校内パトロールの実施（タバコ等）

⑥本校との時限の異なりによるチャイム

◇また、本山第二小学校の児童に使用して頂く本校施設は下記の通りとされました。

①保健室

②本山第二小学校仮設教室北側のグラウンドを小学校専用とする。

③音楽室（火曜日午前中・水曜日1・2限以外）

④本校体育使用時以外の体育施設・設備

X 避難者・ボランティアとの問題

避難者・ボランティアとの関係について正常授業再開における問題点を検討した結果下記のようなことが考えられました。

①3月末において体育館、テント、格技室、食堂に避難者がおられたが、4月からは協力して頂いて体育館、テント、食堂となりました。

②当時、お風呂の薪割り用に斧2丁、鋸、チェーンソー2台が使用されており、児童・生徒の身体に重大な影響を及ぼす可能性がある物品についての安全管理を要望すると共に、保管場所についても児童・生徒の手が届かない場所における保管を要望する必要がありました。

③避難者のバイク及び自転車が仮設校舎付近に置かれており、仮設教室を飛び出る児童・生徒に対して安全を確保する面から置き場についての要望を行いました。

④ボランティアによる自動車・バイクの無免許による運転が度々見受けられており、厳に注意を促すことを確認しました。

⑤薪が仮設教室の西側に一部置かれていたため、児童・生徒による悪ふざけを原因とする怪我防止のため、薪の保管場所を体育館南側へ要望をしました。

⑥避難者と学校側との交流（避難者対応教員

の確保）

⑦避難者の洗濯物等私物への配慮として、当時の菜園場を提供しました。

⑧避難者による焚火の場所が体育館東側2ヶ所で味噌汁等を作っておられるのを体育館南側への移動を要望しました。

⑨救援物資テントが仮設教室側へ向いていたことによって生徒がご迷惑をかける懸念がありました。

⑩喫煙場所についての要望。

⑪自衛隊の掘った焼却炉における焼却中止の要望をすると共に管理課に対して埋め戻しを要望しました。（灰に足を捕られて捻挫の懸念があったため。）

上記の要望を避難者との話し合いで協力が得られ、特に自衛隊の掘った焼却炉の回りの清掃など避難者の積極的な協力が得られました。



保健室前廊下（本館1階）

XI 平成6年度第3学期の臨時休業による授業回復について

本校は震災の被害が最も甚大であったことから、市立高校及び第1学区県立高校の中で、平成6年度授業再開時が最も遅く、且つ臨時休業による欠課時数が172時間と最大でした。

平成6年度の当該臨時休業の授業回復及び平成7年度当初の短縮授業による短縮分の授業回復について検討がなされたが、下記のような点によって対応することとしました。

①オリエンテーション合宿・兵商対校戦・創

立記念行事の中止、球技大会を従来1・2学期午前2日ずつ実施していたものを1学期は1日全日とし、2学期は中止、体育大会は学年別事前練習を午後各1日ずつ実施していたものが陸上競技大会としたことにより不要となりました。

- ②定期考査を遅らせ授業日数を確保する
- ③三季休業中における教科指導の強化

XII チャイムについて

全壊した本館職員室にチャイムを鳴らす時計が設置されていた関係で、平成6年度授業再開時のチャイムについては、赤塚山高校から拝借した鐘を鳴らし時を告げることとしました。これは北館のみの授業であったため、階段で鳴らすことによって4階までよく響いたものでした。しかし、平成7年度授業開始によるチャイムについては北館のみに留まらず仮設教室と広範囲に及ぶため、放送室にあったチャイムの音をテープレコーダーで放送施設から流すこととしました。教務部及び学年教務によって担当することとしましたが、1ヶ月以上に及ぶ長期間に渡ったため、時折チャイムの鳴らないことがありました。何故鳴らなかったかはご想像にお任せ致します。

5月上旬チャイムが取付られたことによる喜びはチャイム担当者でなければあじわえなかったことでしょう。

◇非常変災等による臨時休業

- 5月12日（金）兵庫県南部大雨洪水警報
- 5月15日（月）兵庫県南東部大雨洪水警報
- 7月3日（月）3時限以降
兵庫県南部大雨洪水警報
- 7月4日（火）兵庫県南部大雨洪水警報

本年度に限って災害による臨時休業による欠課時数の授業回復を実施することとなりました。震災による欠課時数172時間の回復措置の一貫としてでした。

4月19日に実際の通学状況等を調査するため、生徒被災状況調査を実施しました。

4月19日段階の住所

	1年生	2年生
①自 宅	210	207
②避難所	19	26
③親類・知人	17	29
④その他	13	16

同居家族の身体的・社会的被災状況（1年生）

	死亡	重傷	解雇	収入激減	店全壊
①父		1	2	41	14
②母			11	28	10
③兄弟 姉妹	1		3	5	
④祖父母	1	2		6	6

同居家族の身体的・社会的被災状況（2年生）

	死亡	重傷	解雇	収入激減	店全壊
①父	1		10	45	17
②母	1	2	9	19	7
③兄弟 姉妹	1		4	6	
④祖父母	1	4		1	3

家屋の被害状況

	1年生	2年生
①全 壊	81	100
②半 壊	80	74
③一部損壊	74	55

授業料免除について

	1年生	2年生
①申請済み	156	175
②申請予定	16	18

神戸市奨学金について

	1年生	2年生
①申請済み	57	119
②申請予定	29	27

通学方法	1年生	2年生
①徒 歩	65	67
②自転車	18	86
③公共交通機関	180	173

4月19日段階における住所が公園であったり、避難所であったりというありさまであるのに、平常通りの授業開始を行っていることに対して疑問を持ったこともありました。

また、遠方に避難している生徒が当初の調査数を大幅に上回っていることも判明しました。

更に、被災家族の状況について詳しいことが判るにつれて、生徒の精神的なダメージの大きさを考えると、生徒個々に対する調査・観察による心のケア等が重要でした。

震災による家族の入院・行方不明等による憂慮すべき家族環境や登下校中の粉塵による健康悪化等々正常な学校教育を受講できる生徒の状況ではないことが十分認識できる調査結果でした。

◇最後に資料を添付して報告と致します。

①通学の安全確保のため教職員を要所に配置し、朝会・HRで指導し生徒の自主性を尊重した。

②授業再開に当たって次のことが大きな制約となりました。

- ・教室数の不足
- ・教科書の不足
- ・教材教具の不足
- ・学校施設設備の安全確保が困難であった
- ・登下校路の安全確保が困難であった
- ・教職員の疲労
- ・教職員の通勤が困難であった
- ・遠隔地に避難している生徒の存在
- ・水や食料の確保が困難であった
- ・電気・ガスの停止
- ・避難所の運営やその業務の負担

・会議や校務を処理するための部屋の不足

③天井が落下、床の陥没した教室数

- ・普通教室 15
- ・特別教室 22

④プールの被害

水槽亀裂、給排水管破裂、全体傾斜

⑤グラウンドの地割れ、部分陥没

⑥鉄筋ブロック積み塀の倒壊

⑦震災後防火扉は全て閉まっていなかった。

⑧震災による施設の使用不能箇所

- ・校舎渡り廊下2ヶ所
- ・校舎出入口の扉3ヶ所

⑨校舎出入口付近の地盤陥没及び隆起

⑩震災による窓ガラス破損100枚以上

- ・校舎渡り廊下2ヶ所
- ・校舎出入口の扉3ヶ所

⑪管理用備品等の廃棄数

- | | |
|-----------|-----|
| ・職員用机 | 76 |
| ・書 棚 | 130 |
| ・コピー機 | 2 |
| ・印刷機 | 3 |
| ・学校図書館書架 | 24 |
| ・理科準備室薬品棚 | 6 |
| ・教職員用書棚 | 115 |
| ・冷蔵庫 | 8 |
| ・掃除用ロッカー | 3 |

⑫教具の修理不能数

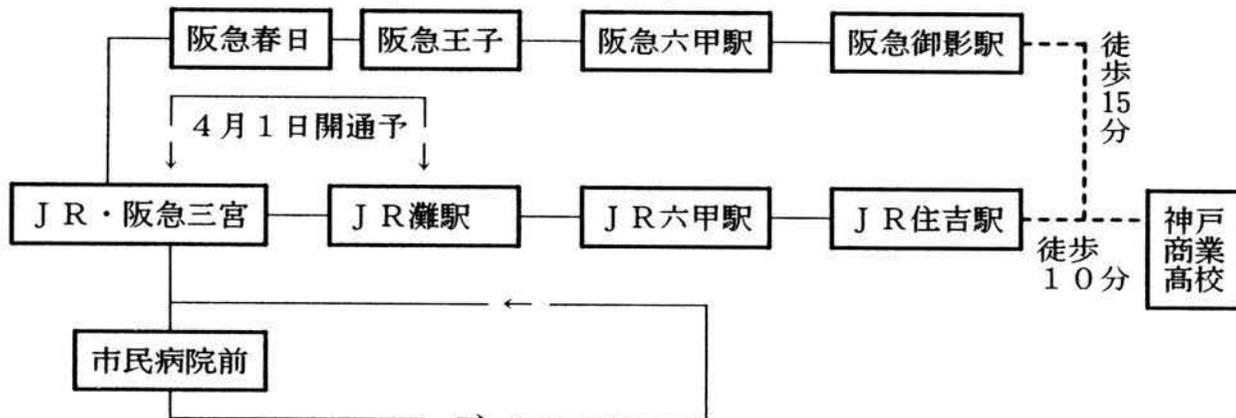
- | | |
|-----------|----|
| ・テレビ | 16 |
| ・ピアノ | 1 |
| ・OHP | 2 |
| ・ミシン | 20 |
| ・コンピュータ | 1 |
| ・ワードプロセッサ | 3 |
| ・プリンター | 2 |

⑬理科準備室の劇薬の一部が破損し、流れ出ていたこと

生徒の実態調査について（2月1日現在の調査によるものであり、全体を把握していない。）

		神戸市立神戸商業高校				
		1年	2年	3年	合計	
震災前の生徒数 1月9日現在		282	306	295	883	
2月1日現在	①通学可能者数	279	304	295	878	
	②転出者数を含む (仮転出を含む)	2	1	0	3	
	市内	0	0	0	0	
		市外(内県外)	2(2)	1(1)	0(0)	3(3)
	③死亡者数	1	1	0	2	
	④不明者数	0	0	0	0	
	小計①-④	282	306	295	883	
	⑤転入者(仮転入を含む)	0	0	0	0	
	市内	0	0	0	0	
市外		0	0	0	0	
2月1日現在の生徒数 ① + ⑤		279	304	295	878	
在籍者の状況	負傷者数	2	5	1	8	
	男子	0	4	0	4	
		女子	2	1	1	4
	家屋消失等による 家人居不能者数		83	127	122	332
	男子	17	34	31	82	
		女子	52	93	91	236
	避難所入所者数		62	67	61	190
	男子	15	14	16	45	
		女子	47	53	45	145
	校区外一時避難者		54	55	48	157
	男子	13	16	12	41	
		女子	41	39	36	116

港島中学の生徒について



時程表

- (1) ①本館解体工事遅延に伴い、中庭横断不可による生徒移動時間確保を理由とする
 ②仮設水洗トイレ未完成に伴い、仮設トイレの回収未確認による仮設トイレ使用不可となる恐れを理由とする臨時時程表。

	S	T	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	S	T
開始時刻	8:30		8:45	9:45	10:45	11:45	13:15	14:15	15:00	
終了時刻	8:45		9:30	10:30	11:30	12:30	14:00	15:00	15:10	

- (2) 本館解体工事終了後、上記①の原因解決によって休憩15分を10分へ戻し、授業時間を45分から50分へ戻す。

	S	T	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	S	T
開始時刻	8:30		8:40	9:40	10:40	11:40	13:15	14:15	15:05	
終了時刻	8:40		9:30	10:30	11:30	12:30	14:05	15:05	15:15	

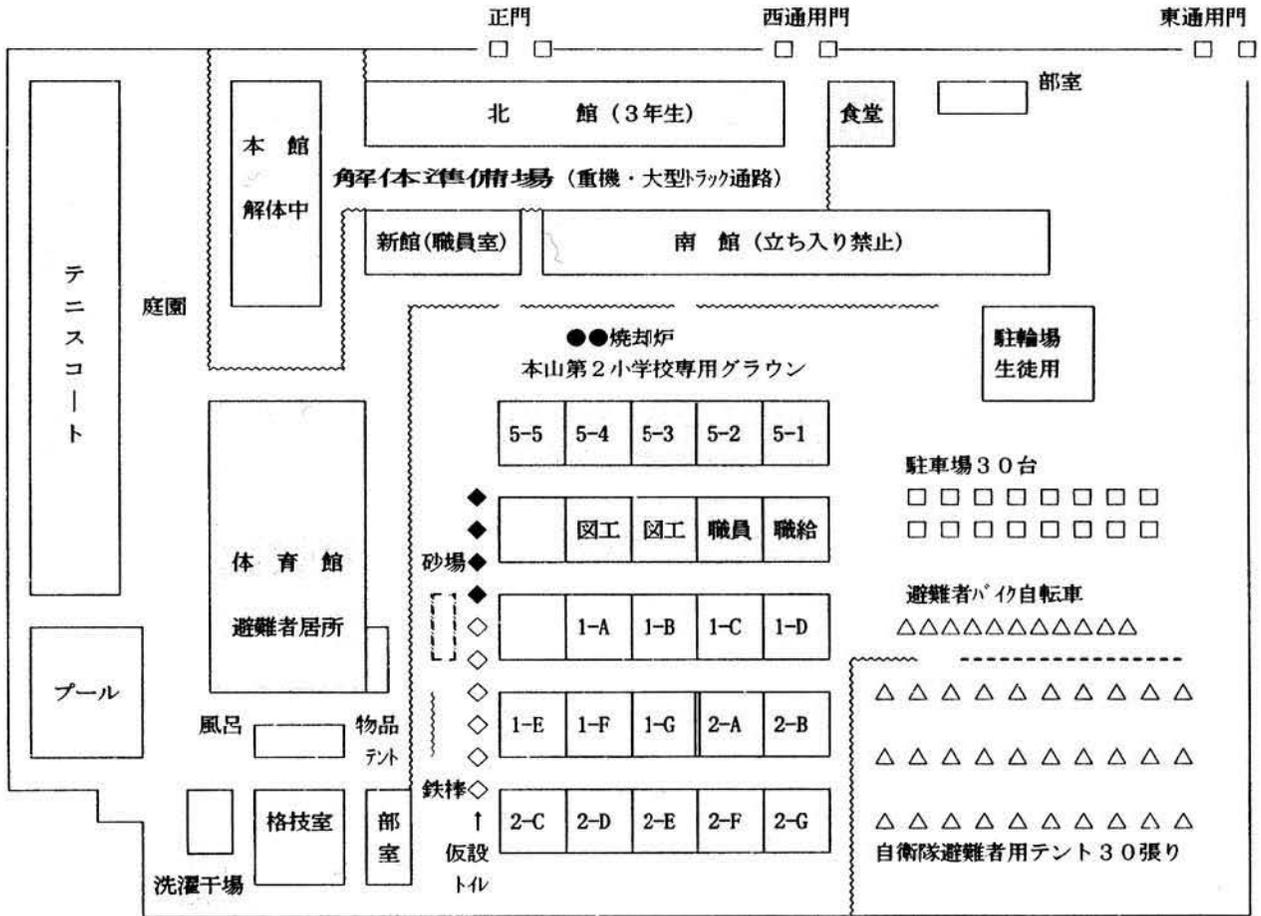
- (3) 仮設水洗トイレ完成に伴い、上記②の原因解決による昼休み45分を40分へ戻す。

	S	T	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	S	T
開始時刻	8:30		8:40	9:40	10:40	11:40	13:10	14:10	15:00	
終了時刻	8:40		9:30	10:30	11:30	12:30	14:00	15:00	15:10	

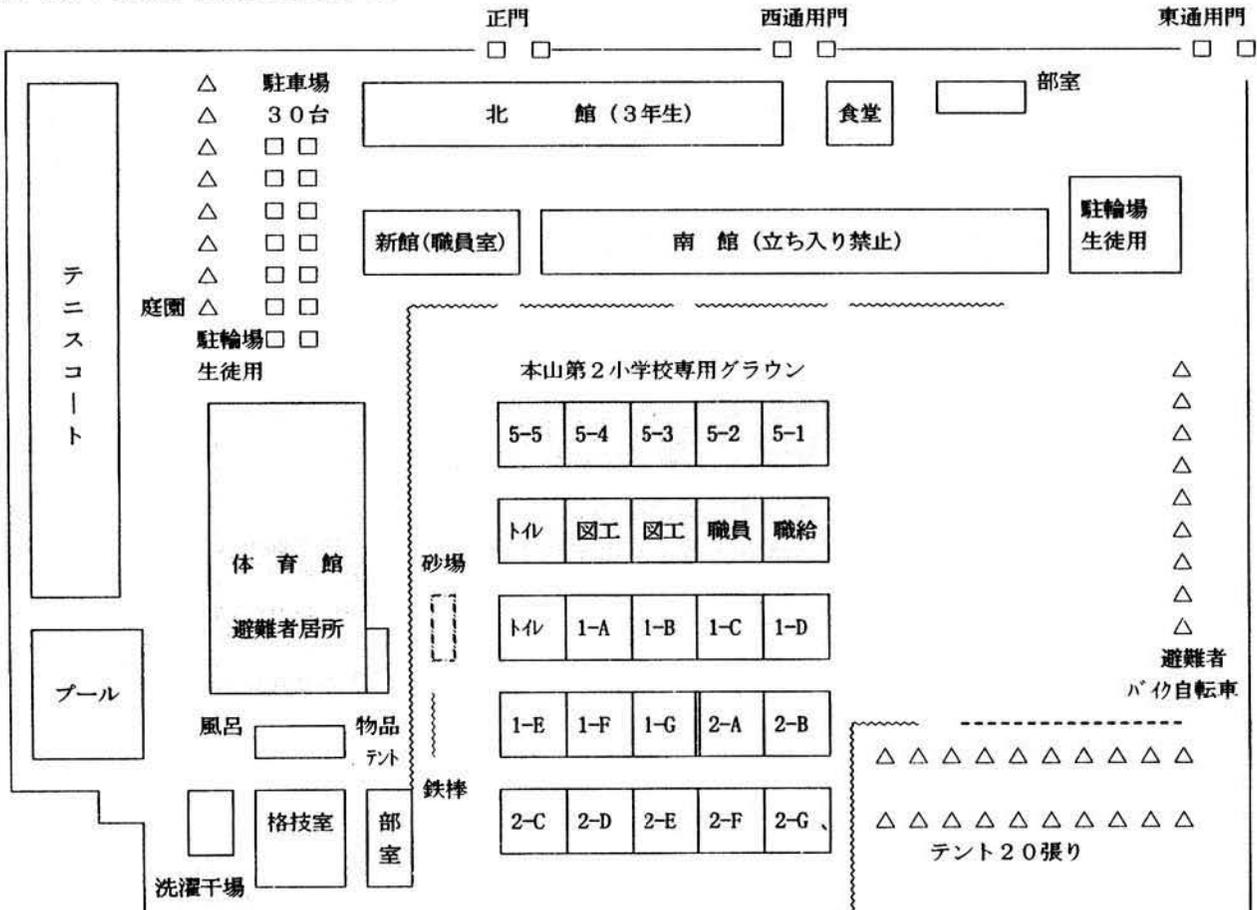
- (4) 食堂再開による第3校時と第4校時の休憩時間を15分とし、昼休みを5分短くする。(食堂が再開されるも上記(3)の臨時時限表のままである。)

	S	T	1校時	2校時	3校時	4校時	5校時	6校時	S	T
開始時刻	8:30		8:40	9:40	10:40	11:45	13:10	14:10	15:00	
終了時刻	8:40		9:30	10:30	11:30	12:35	14:00	15:00	15:10	

1、4月の神戸商業高等学校校内図



1、5月下旬の神戸商業高等学校校内図



おもな避難所と生徒の安否確認

笠井大三郎

地震により大きな被害を受けていた本校であったが、電話線もその例外でなく、不通の状態が数日続いた。御影工業高校の川端先生の御尽力で、ようやく1回線を確保したものの、実際、生徒からの電話はそれほど多くはなかった。地震直後の混乱の中、学校に連絡をする余裕がなかったためと、また電話番号が、普段使い慣れている学年直通のものと違っていたためにつながらなかったことも、大きな要因と思われる。

各家庭においては、電気が復旧していなかったため、昼間は自宅にいたが、夜は避難所で過ごしていたという生徒が多く、全半壊を含めるとその数はかなりあり、学校や職員宅から生徒に連絡を取る作業は非常に困難であった。

テレビやラジオの情報をもとに、教師が分担して、各避難所を回り始めたのが4日後の21日、それまでに安否が確認できていたのは半数にも満たなかったと記憶している。

校区が広く、生徒数も多い本校では、避難所を訪ねることも大変で、その数は灘・中央・東灘区だけで80カ所もあった。道路が寸断されていたため、バイク等を利用し、3～7の避難所を各グループが搜索に当たった。

各避難所の対応も様々で放送を使って呼びかけてもらえた所、名簿を作成して

おられた所があった反面、懐中電灯で乱雑に書かれたノートをチェックしなければならない所もあった。とりあえず、掲示板には「学校に連絡せよ」という旨の紙をはったが、それは有効な手段となったのか、それから1週間程で、ほぼ全員の安否が確認できた。

ただ本校では（神戸全体においても）未だ生徒を受け入れる体制がほとんど整っていなかったため、我々が生徒達の顔を見るまでには、2月9日の登校日まで待たなければならなかった。

資料 1

生徒の安否確認について

掲載分の主な避難所へいく 2人1組

掲載されていない避難所も確認する

生徒の安否に確認

本部へ行って放送で呼び出してもらう
神戸商業の職員であることを告げ

「市立神戸商業高校の生徒または、保護者の方がおられましたら
——までお集りください」等

呼び出しが困難な場合は避難所の名簿、掲示物で確認し、張り紙をする。

呼び出した生徒への対応

生徒及び家族の安否の確認

学校の状況説明「半壊であること等」

家庭待機の指示

生徒の連絡先の確認「家に帰れるか、また今後の予定」

連絡先が未定のものには落ち着き次第、連絡場所を学校に報告するよう指示

4 3 1 - 0 0 5 5

友人で安否が確認できているものの名前を聞き、同様の連絡を指示する。

放送できた避難場所にも張り紙をする。

生徒登校の連絡方法

2月9日（木）の生徒登校の指示の内容と連絡方法の計画

指 示 内 容

- 2月9日（木）の11：00～15：00の間に可能な限り登校する。
- 持ち物は筆記用具のみ、登校して今後の指示と家庭の調査をする。
- 制服着用のこと。（ない場合は私服で可）
- ☆避難所にいる友人に同様に連絡を依頼する。

日 程

- 2月1日（水）、2日（木） 担任、学年による電話連絡
 自宅および親戚等の避難先のみで
 避難所にはポスター掲示（一部を除く）
- ～2月3日（金） 全体による避難所訪問、ポスター掲示

訪問予定避難所（現在把握分）

- | | | | | | | |
|------|--------------------|-----------------|--------|---------|-------|-----|
| ◎兵庫区 | 荒田小 | 兵庫区役所 | | | | |
| ◎中央区 | 北野小 | 上筒井小 | 小野柄小 | 春日野小山手小 | 諏訪山小 | |
| | 湊小 | 湊川多聞小 | 雲中小 | 下山手小 | 生田中 | |
| | 葺合中 | 筒井台中 | 県庁 | 葺合公民館 | | |
| | 葺合文化センター（242-0414） | | | 青陽東養護 | 中華同文 | |
| ◎灘 区 | 六甲小 | 摩耶小 | 稗田小 | 西灘小 | 鶴甲小 | 福住小 |
| | 高羽小 | 灘小 | 成徳小 | 上野中 | 烏帽子中 | 神戸高 |
| | 篠原会館 | 灘文化会館（861-8651） | | 灘区民ホール | | |
| | 王子文化センター | | | | | |
| ◎東灘区 | 魚崎小 | 本山南小 | 渦が森小 | 御影小 | 本山第一小 | |
| | 本山第二小 | 本山第三小 | 東灘小 | 福池小 | 住吉中 | |
| | 本庄中 | 本山南中 | 赤塚山高 | 御影高 | | |
| | 住吉川住宅避難所 | | 友生養護学校 | 御影公会堂 | 甲南大 | |
| | 住吉台幼稚園 | | | | | |

◎芦屋市 精道小 芦屋山手中 県芦屋高

以上の避難所に本校生徒が避難しているようですが、ほかの避難所に所在していることがわかりましたら本部まで連絡してください。

避難所訪問

前回と同様、可能な限り放送で市立神戸商業の生徒または保護者を呼び出してください。その後、ポスターを貼って下さい。

本日2月1日でも家の近所等で帰り道に訪問できる避難所があれば本部に連絡して寄って下さい。

その他の避難所について

下記の避難所については、一度本人の自宅へ電話連絡、友人または避難所に直接連絡を試みて下さい。連絡不可能の場合は訪問しますので、本部に連絡してください。その場合、住所がわかりましたら知らせてください。

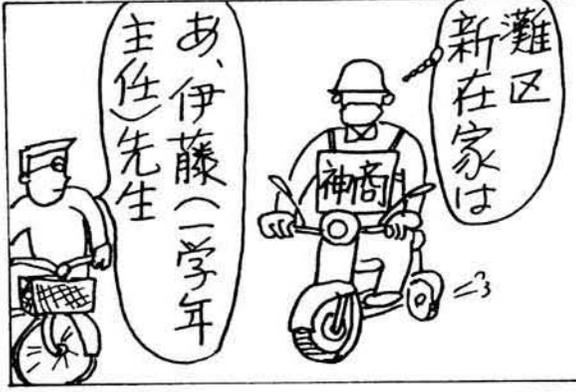
灘前の養護学校	3-A	小石原	西灘保育園	3-D	夏目
赤十字病院	3-C	大磯	灘児童館(881-5030)	3-D	金沢
神戸生活学習センター	3-C	池田	弁護士会館	3-D	千葉
神戸大学国際文化学部	3-C	平野	若草小(0795-76-0912)	3-E	白川
創価学会会館	3-D	池田			



家族で倒壊した
自宅を片付けてい
るところでした。
しばらく言葉も
出ませんでした。
西灘小学校へ避
難して片付
けにきていると
の話でした。



二階建は倒壊、
一階の叔父はす
ぐ助け出され、祖
父は二日後に助
け出された。



叔母は三日後、遺体
となって発見され
た。
生徒と両親は二
階について無事で
あった。家族は鳥
帽子中学校へ避
難、その後、大阪へ
転居、現在は尼
崎市に住んで
いる。

一月下旬で
自宅に住んでい
る生徒はクラス
四十一名中、十一名、
九州、名古屋、大
阪など他都市
の親戚・知人宅
に避難している
生徒十名、小学
校・中学校等に
避難している生
徒七名、他は市
内の親戚・知人
宅等に避難し
ていた。
全員無事であ
ったのがなにより
も幸いである。

生徒の安否確認

元/年A組担任
木村廣太郎

当初は電話だけ
が頼り



筒井(一任担任)です、いかがでしたか、ポートアイランドの生徒は皆無事です

1/20(金), 21(土), 22(日)

電話がかなり通じる
ようになってきた

生徒(灘区上野通)

無事です、電気は
復旧、クラスの〇〇

さんは鈴蘭台へ
避難しています

父(東灘区御影石町)
マンションが傾いて危
険なので親戚に避
難中です

母(灘区岩屋北町)
子供達は大阪へ
避難させています
学校再開はいつ
ですか

1/23(月), 24(火)
学校



何丁目
を?
どなた
を?



この筋
をまっ
すく...



灘区
灘南通

大丈夫のようだが
隣のマンションが倒れ
てきそうだと
彼女の家は



神戸市立神戸商業高校の生徒へ
まだ学校に連絡をしていないもの
および、先生の指示をまだ受けてい
ないものは
431-0055
に連絡をすること

ポストに
入れておこう



震災前後の進路指導

岡田 靖夫

1994年は、バブル経済崩壊による長期的な経済不況で「氷河期」といわれるほど求人不足で就職試験は難しいものとなっていた。神戸市立高校全体でも12月末の段階で100名程度の生徒が、就職未決定となっていた。年が明け、求人が徐々にではじめていた。本校生徒も20名程度の未決定者がいましたので、卒業式までには何とか、就職先が決定するものと思っていた。そして、あの日がやって来た。早朝5時46分「ドン」という音で大地は大きく揺れ、この世の地獄のように一瞬にしてなくなってしまった。何も情報がない。何が起きたのか？ 私は伊丹に住んでいるので、まさか神戸でこれほどひどい状態になっているとは考えもしなかった。なぜなら伊丹は、10年程前にも山崎断層・箕面断層によって、震度3～4ぐらいの地震を体験していたので、きっとまたそうだと思っていた。しかし、真実を知り私は青ざめた。

1月17日に就職試験を受ける生徒がいた。私は心配で、学校に電話を入れたが誰がでるわけでもなく、呼び出しが無情にも鳴るだけであった。生徒の家に電話しても繋がることなく、「ただいま混雑しています。後ほどおかけ下さい」とコールするだけであった。私は何とか連絡をとるため大阪へ移動し、とりあえず、受験するはずであった会社と連絡をとり、状況の説明をし、就職試験を延ばして欲しいと交渉した。先方の企業は、心良く納得していただき、試験を延期してもらうこととなった。私は、地震の前日より腰痛がはげしく、学校に行くこともできなかったので、進路指導部の職員に連絡をとり、行動してもらうこととなった。

大学進学のための調査書作成発表の時期となっていたが、校舎はペしゃんこ、書類などどうして発行することのできるような状態ではなかつ

た。しかし、入試はまってくるわけでもないので、事情説明の文面をつくり、何とか受験ができるようかけ合うこととなったが、県の進指研の働きかけにより、どの学校も快く引き受けてくれた。

校舎の崩壊にともない、進路指導室も1階にあり、ペしゃんこの状態で、必要関係書類・資料を出すことができず、わずかな隙間からひっぱり出そうとしても余震がこわく、取り出すこともままならなかった。しかし日が達つにつれ、生徒の進路先の状況など確認するすべがなく、必死の思いで、潰れた進路指導室に入り、必要な書類を取り出した。その資料を元に、企業への確認の電話を入れたのが、1月30日であった。また、この日は、就職内定取消しの一報が入った日でもあった。3年生の生徒の安否は確認され、生徒の状況もある程度つかめていた。余震はまだまだつづいていた。避難者の方々のお世話をしながら、進路指導部の職員は企業との対応におわれていた。1月30日以来就職内定取消しの話しが、震災の街神戸を襲って来た。市内の各高校の進路指導担当者より就職内定取消しの話しが、連絡されて来た。例年であれば、そろそろ入社日の具体的な話がでてくるころであるが、連絡は、企業の方々の取消しの話である。この調子では多くの就職内定取消しがでるおそれがあったので急遽2月2日に神戸市立摩耶兵庫高校にて、市立高校の進路指導研究会を開き対応について協議した。その結果まず、各校の状況を把握するために2月4日に第1回の集計をすることになった。そのころよりマスコミの報道も就職内定取消しに対する取材がはじまりました。各校の集計を2月7日に灘公共職業安定所、神戸公共職業安定所にそれぞれ出向いて何とか、就職内定者の取消しを回避する主旨の要請をし、企業への指導をお願いした。そして、2月13日に第2回、2月17日に第3回、2月28日に第4回、3月15日最終の集計をした。その数は、就職内定

取消し52名、待機・延期が37名・辞退者が5名となった。この集計は職業安定所はもとより、県の進路指導研究会、その神戸支部・市の教育委員会等にFAXで送り情報交換をした。企業の対応はなかなかはっきりせず、2月21日の内閣会議にて、震災地の救援立法が、決定することを見て判断する企業が多かった。本校でも多数の就職先未決定の者がおり、また、内定取消しの者がでてくる状態であった。生徒の大半は被災し、体育館あるいは、公園などに避難しており、連絡のとりにくい状態であった。

学校の取り組みとしては、震災によって就職内定取消しをされた者を最優先に斡旋することにした。しかし、当初はなんとか、取消しを解消してもらいたい、あるいは、採用延期でもよいと交渉を重ねる毎日であったが、なかなか、色よい返事をもらえるところはなかった。そうしている間に、大阪や京都などから震災特例の求人票をいただき、数人の生徒を斡旋することができ、就職先が決定する生徒がでてきた。しかし、中にはどうしても神戸を放れることができない生徒もおり、神戸で就職を探すのが大変であった。昔なじみ

の企業の方々から求人をいただきなんとか、就職することができた。その中の一つが新聞にも取りあげられたが、それは大変なものであった。避難所生活をしている生徒は体育館の片隅で、あるいは教室で、探し出すのに時間もかかり、又、出合うことができなかつたりした時もあった。しかし、企業の方は、早く採用試験をしたく、なかなかむずかしい状態がつづいた。毎日のように避難所通いであった。当然本校の避難者の方々のお世話をしながらのことであった。その甲斐あって、内定通知をいただくたびに緊張が和らぎ安堵していった。なんとか、4月末には、学校から斡旋希望の生徒の就職は決定した。

70周年を迎えた本校の先輩方の活躍により多大な信用を得、こういう時期に助けていただいたことに深く感謝するとともに、今後もご支援をお願いしたい。しかし、これほどの惨事、もうこりごりである。

One happy ending in Kobe

Yomiuri Shimbun

KOBE—While Kobe struggles to return to normal, a growing number of high school and college students scheduled to graduate in March have had job offers withdrawn by local businesses.

On Feb. 16, Rieko Maruo, an 18-year-old student at Kobe Municipal Commercial High School reported to school with other students so that teachers could confirm their safety. After her homeroom period, she was summoned to the teachers' room.

Maruo's homeroom teacher handed her an envelope containing a letter that read: "Your employment has been canceled because of damage to our facilities."

Last spring, she had been unsure

about what to do after graduating from high school. One day, she recalled a tour bus guide who had accompanied her and other sixth-grade primary school students on a trip to the Ise region.

Maruo sent a resume through a job placement office to the Kobe branch of a tour bus company. During a job interview in September, she sang a song for company officials in an attempt to impress them with her cheerfulness.

A week later, she received an unofficial offer of employment from the company. In December, she visited the branch office with six other would-be employees to try on their uniforms—dark blue blazers, skirts and red ribbons.

On Jan. 17, the day of the earthquake, Maruo was awakened by a violent jolt. No one in her family was hurt, but their apartment building collapsed. She watched a television news program showing damage to the area where the bus company was located, but never expected that it would be left in ruins or that her job offer would be withdrawn.

The company offered Maruo a job at a branch in Tokyo. She decided to decline the offer, as she did not want to be separated from her mother and sister.

Later, Maruo applied for a clerical job at a warehousing company. At her interview, she was warned the job would be not be very demanding. "I'll take any job," she said.

On Friday, her school received a

notice of employment from the firm. Yasuo Okada, a 36-year-old guidance counselor at Maruo's school, went to the evacuation center where she was staying. He handed her the notice, patted her on the shoulder and said, "You've done all you can."

Five buildings at the bus company's branch collapsed in the quake, and a total of 31 buses and taxis were destroyed. Five of the seven high school students who had been promised employment there have agreed to work for the company in Tokyo.

"We really wanted to hire all these superior students," a bus company official said, "but we had no choice and had to cancel their employment."

(2) 卒業式

震災の中の卒業式

太田 嗣夫

2学期の半ばから、卒業式の準備は始まっていた。儀式検討委員会がもたれ、式は「卒業証書授与式」の名に相応しいようにとの学年の意向が生かされ、表彰関係はすべて離別式の場合で行う、式次第は必要不可欠のものを重点にする等のことが決まった。日の丸・君が代については、職員の足並みが揃わないとの理由で見送った。

2学期末の成績会議で、卒業認定規定に抵触する恐れがあるとしてまな板にのせられた生徒にとっては、3学期が勝負所になった。

バブルがはじけた後遺症が尾を引く就職戦線は苦戦を強いられていた。就職希望者には皆職場を得させて卒業式を迎えたい、との切なる願いを込めて、平成6年を越した。

そして…… 1月17日 5時46分……

マグニチュード7.2の激震が兵庫県南部地方を襲った。瞬時にして全てが壊滅状態になった。全てが、何もかもが……

1階部分がへしゃげ、北館との渡り廊下を引きちぎるようにして傾いた管理棟の姿は、あたかも大自然の力に屈してひざまずいているように見えた。

使用禁止の紙が張られた校舎。避難者に開放した体育館とグラウンド。生徒の、その家族の安否が気づかわれる。全教師が手分けして連絡を取り、避難所をまわって確認を急いだ。卒業式はもう無理か。いや青空卒業式でもよい。

1月21日(土)。災害復旧職員会として第1回目の職員会議が開かれ、校務委員会も毎週月・木に開くこととなった。学校機能復旧に向けて、早々に態勢作りが始まった。

北館が使えるので、学年別の登校日を設定した。3年生の第1回目の登校日は2月9日

(木) 11時。

2月1日現在の生徒の実態調査で、通学可能な生徒数は、在籍数と同じ295名。しかしその3分の1は家屋損壊、避難所にいる者が5分の1、校区外に避難している者が6分の1。震災による生徒の死亡は、3年生にはいなかったが、家族の一員を失った生徒の数は6人。

一方、卒業式は何らかの形ででも執り行うとの職員の熱い思いから、実施に向けて模索が続いていた。日程については、2月19日案、21日から25日の間の案などが出てきたが、肝心の場所が決定できないでいた。

2月1日(水)の第2回職員会議の場で校長より、卒業式の場所については、赤塚山高校と御影工業高校に当たっているとの報告があった。翌2日の校務委員会で、御影工業高校を拝借することを決定した。26日(日)同校全定の卒業式が行われる式場(体育館)を、同日午後使わせていただくというものであった。卒業式が行える。瓦礫と粉塵の中に光明を見る思いであった。それからは御影工業高校へ、挨拶やら会場作りのための打合せ等に頻繁に行き来したが、この間の状況については、庶務部長の記録に委ねる。

2月9日(木)1回目の登校日。出席生徒数267人、出席率91.13%。私服姿も混じる。これも震災の傷痕。再度の生徒被災調査をとるが、日一日と変わる生徒の動向を把握するのに追いつかない。この日、卒業式の案内文書を配布。

1・2年については、20日から北館を使って、半日交替での授業再開が決まった。しかし3年生については、もはや時期的にも授業も卒業考査も不可能と判断し、学年の成績は1・2学期の成績を参考にして算出することとした。

2月15日(水)卒業認定会議。欠席日数が

出席すべき日数の5分の1を越えていた2人を除く293名の卒業が認定された。

2月16日(木)第2回目登校日。午後1時登校。黙祷・校長の話・学年からの話・卒業式の件連絡・HR。保護者宛に、成績処理の件・卒業式及び制服着用の件・制服類寄付依頼の件・事務処理混乱への理解を求める件を載せたプリントを配布した。またHRでは同窓会幹事の選出も行った。

卒業式に関する学年事務作業を次のように組み、進めていった。

①卒業証書浄書 前仲

※証書は横長・縦書きの新しい様式を作っていたが、印刷を出す前に震災に会って瓦礫の中に埋没。前年と同じ様式の証書にした。

②卒業生台帳作成 17日までに

※積年の歴史を刻む卒業生台帳が同じく瓦礫の中に埋没。続き番号が分からず、68回生の68を頭に『68001』から始めることにした。また従来卒業全生徒名を「あいうえお」順に並べ変えていたものを「ABC……」のクラス順に書いていくことに変更した。

③卒業証明書作成 24日までに

④卒業アルバム 24日までに入荷予定

⑤卒業記念品 2月中旬に入荷

⑥呼名簿の作成 24日までに各担任で

⑦式次第と進行の検討

入退場の流れ

卒業証書の受け取り方

⑧答辞指導 笠井

卒業証書は、従来のようにクラス代表が受け取るか、最後に代表が受け取るか議論が分かれたが、時間の制約を考慮して、田中陽二郎君が代表で受け取ることに決定した。答辞は加藤ゆかりさんに決まった。

卒業式の進行表は、15日庶務部から提示された。学年の意向を十二分に踏まえてくれたものであった。

2月25日(土)第3回目登校日(10時)

ST後グラウンドへ椅子を持って集合。

同窓会入会式 田中(義)・同窓会長

各種表彰伝達

産業教育振興中央会賞をはじめ、湧水賞までの7種目。被表彰者は延べ55名。

湧水賞のメダルは、渡辺先生が危険を省みず、何度か校長室にもぐり込んで、取り出してくれたものであった。

式典と表彰とを切離し、表彰関係はすべてこの日この場で行った。

卒業式予行 田中(義)(司会)

福島(歌唱指導)

使えるグラウンドは西半分。放送設備は当然なく、伝達・司会進行はハンドマイクで。歌唱指導にはキーボードを使った。生徒の協力的な姿勢に、プログラムは順調に進んだ。見守る避難者たちの姿も数多く見られた。

HRでは、卒業アルバム、卒業生名簿、卒業記念品、通知簿等、明日は卒業証書だけを持って帰れるように、手渡すものは全て配布した。

午後は学年打合せを行い、御影工業高校に運んでおくものとそれらを運ぶ手順、翌日の卒業式進行に関する留意点、雨天のときの対応処置等について最終的な確認をし、行動に移った。

2月26日(日)卒業証書授与式挙行。職員は昼ごろ集合して、御影工業高校の卒業式が終わると、本校の卒業式のための会場設営に取り掛かった。

1時30分開会。静粛な雰囲気の中を式は進行していった。外では静かに雨が降っていた。

図り知れぬ力で大地を揺るがし、一瞬のうちに一切を奈落の底へ突き落としたあの大地震からはや1年がたとうとしている。しかし、まだまだ片づいていない。町も、産業も、住まいも、学校も、身も心も。心の疲弊は大きな社会問題を生み出している。しかし浮かんでくるのはあの時の卒業生たちの屈託のない

明るい表情。いつまでも失わないでほしいと、震災卒業式の報告を終わりたい。
心から願い、併せて彼らの前途に夢あれと祈っ

平成7年2月9日

3年生保護者様

神戸市立神戸商業高等学校
校長 川崎 凱史
3学年主任 太田 嗣夫

第68回卒業証書授与式のご案内

拝啓 太平の夢から一瞬にして阿鼻叫喚の地獄と化した1月17日の早暁。恐怖に包まれたあの時の苦悶は忘れられぬものとなりましょう。失命された在校生・ご家族・卒業生の方々には、心より哀悼の意を表しご冥福をお祈り申し上げます。被災された方々におかれましては、一日一日のご苦難はいかばかりかと拝察申し上げます。

学校では、本館が押しつぶされ、南館が傾き、体育館と運動場を被災者の生活の場に提供しているという状況の中を、学校再開に向けて職員一同日々努力を重ねております。

さて見出しの件につきまして、御影工業高校のご好意で、下記のように執り行われる運びとなりました。大変な状況の最中ではありますが、なにとぞ万障お繰り合わせのうえご出席賜り、果立ち行くお子様の前途を祝福し励ましていただきますよう、ご案内申し上げます。なお会場の都合上、ご出席の可否をお伺い致したく、16日(木)の登校日までにご返事をお届け下さいますようお願い申し上げます。

記

1. 日時 平成7年2月26日(日) 午後1時30分 開式
2. 会場 神戸市立御影工業高等学校 体育館
(お願い)当日は、御影工業高等学校(全・定)の卒業証書授与式が行われそのあとをお借りしますので、多少不自由があるかもしれませんが、1時15分までに式場保護者席にご着席下さい。

出欠票

第68回卒業証書授与式に

() 出席します () 出席できません

保護者氏名 _____

組 _____ 番 _____ 生徒氏名 _____

平成7年2月は、次のような行事予定が組まれていた。

3日(金) 卒業考査最終日

10日(金) 成績伝票提出(正午)

14日(火) 学年会議、成績会議

15日(水) 卒業認定会議 * 3年登校日

21日(火) 追認考査

22日(水) 追認認定会議 * 3年登校日

24日(金) 離別式、卒業式予行、
同窓会入会式

25日(月) 卒業式

平成6年度 卒業式

田中 義人

平成6年度（第68回生）卒業式は、1月17日に起こった阪神淡路大震災で、講堂のある管理棟が全壊で使用できなくなり、場所が変わって、神戸市立御影工業高等学校体育館を使用させていただき、無事に式を終了することができました。

まず、その時点に到る経過を報告したいと思います。大震災で管理棟（職員室、校長室、事務室、進路指導室、管理員室、研修室、図書室、家庭科室、作法室、講堂がはいっている）が全壊し、しかも南館も被害を受け、全面立入禁止となり、食堂は救援物資の倉庫となり、2階は避難者用の住居となった。体育館も避難者用に供され、グラウンドも自衛隊によって避難者用のテントが設置されている状況で校内には、何とか使用できる建物は、北館と新館だけであった。

職員室として、当初は新館の社会科教室が使用され、その後5月頃まで継続して北館の会議室が使用され、不自由な生活が始まった。新館の社会科教室は、ボランティアの控室に、理科準備室は、教務の入試準備室と事務室として使用され、理科講義室は保健室として、理科実験室は印刷室及び、ワープロ等の作業や備品倉庫として、社会科講義室は小会議用として、視聴覚教室は、各学年、各部の書類や物品の保管室として使用した。

以上の混乱した状況下で、2月26日（日）



午後1時30分開式予定の卒業式を実施するにあたって、校務委員会を中心に、卒業式を行う場所等について検討をおこなった。

議論の中で、やはり卒業式は本校で実施すべきであるという意見も提案された。しかし、体育館には、まだ多くの市民が避難されていて無理である。現実にはむずかしいだろうと思われた。では、テニスコート等の野天ではどうだろうか、ということも検討した。放送設備の不備、パイプいす等の不足、大型テントを借りる場合100万円以上の費用がかかるということ、なによりも天気によって左右されるので大変であるので断念、という結論になった。



川崎校長は、多方面に、会場について問い合わせをしていただいたが、大人数の収容できる施設はすべて救援者の宿舎として使用されたりして不可能であった。

川崎校長は、さらに同じ市立高校である御影工業高の田中勇校長との話合いで、御影工業の卒業式は2月26日（日）の午前中なので、午後は使用できるとの感触を得た。

御影工高としても体育館にいる避難者を教室に移動していただいたの実施であった。また移動後ただちに体育館の修理をし、26日に間にあわせようとの困難さを持っていた。避難者の教室への移動に関して御影工高の教職員の労力が大であったことを聞いています。

このように、御影工高としても大変な状況の中で本校の卒業式を依頼するわけですが、御影工高の職員会で審議していただき、同じ市立高校の神戸商業高校に協力しようという

ことで無事本校の卒業式が御影工高の体育館で行うことが正式に決定しました。

年間行事予定では、卒業式は2月27日(月)に予定していましたが、26日に変更を決定しました。

正式決定を受けて、川崎校長、3年学年主任の太田先生と私と3人で御影工高を訪ね、御影工高の教職員に感謝の意とご協力を願いました。御影工高の3学年主任は大畑先生で、すべてにわたって協力してくれることを約束してもらいました。又、放送関係では電子科の川端先生に協力してもらい、庶務部長には式の流れ等について、実際の会場準備については体育科の井上先生はじめ大変協力していただきました。又、式当日は、本校教職員の控室として体育館の前の電気実習室も提供していただきました。又、卒業式のあとかたづけ等で、本来なら本校でしなければならないところ御影工高の方でやっていただきました。御影工高の教職員は、自分の学校だけなら午前中で終了し帰宅できるのに私達神戸商業高のためにがんばってもらいました。本校の卒業式が無事終えることができたのは、ひとえに御影工高教職員の温かいご支援・ご協力があったからです。本当に感謝いたします。

さて卒業式ですが、時々大雨が式の最中に降ったりして、心配な空模様でしたが、3学年の宮崎先生等の指導があり、本当にすばらしい思い出に残る卒業式でした。例年とちがい、式辞



は校長のみだけで、約1時間で終わる簡素な卒業式でした。なんとか卒業式ができたことは、神戸商業高校の教職員も生徒も保護者も一つにまとまってがんばった結果であると思います。



神戸市立神戸商業高等学校

平成6年度(第68回生)卒業証書授与式

於 神戸市立御影工業高等学校体育館
(平成7年2月26日(日)午後1時30分)

■ 式次第

開式のことば

校歌斉唱

卒業証書授与

学校長式辞

送 辞

答 辞

「仰げば尊し」・「蛍の光」斉唱

閉式のことば

送 辞

在校生代表 北尾 陽子

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

見渡せば、六甲の山々は春の装いを見せ始めました。しかし、振り返ってこの神戸の町並みを見ますと、あまりの変わり果てた姿に目頭を押さえずにはならないほどです。

1月におこった阪神大震災の爪跡を町中に残り、本校の神戸商業高校の講堂で卒業式をおこなえないことは残念ではありますが、ここにこうして先輩方の卒業式を迎えることができたことを大変喜ばしく思います。

1月17日におきた大地震は沢山の家を壊し、大勢の尊い人々の命を奪いました。住みよい神戸と言われるこの土地に、まさかこんなことがおこるとは誰もが予想しなかったことです。自分の町が地震に遭い、被害を受けたことにより、はじめて今まで、よその土地が災害にあった時に自分たちが余りにも無関心であったことに気が付きました。そして多くの救援物資にわたしたちはどれだけ助けられたでしょう。道を歩いているだけで本当に多くのボランティアの人、救援物資を見かけました。そして目に付くのは救援物資を運ぶ車のナンバープレートでした。そこには近畿地方だけではなく名古屋、岡山から九州、北陸まで日本のあらゆる地域からの車を目にしました。また自転車で救援物資を家々に配りにきて下さった人もいました。ボランティアで会社や学校を休んで来てくださった人もたくさんいました。もしこのような災害が神戸や芦屋以外で起こっていたら、私達は同じように手助けができたでしょうか。

今回の大震災では、かけがえのないものを、あまりにも多くのものを失うことになってしまいました。けれども、私は得たものもあると思います。私は今回の大震災で、一番、人の温かさを知りました。これは私だけでなく災害を受けた多くの人を感じたことではないでしょうか。

ここにおられる先輩方も人の温かさを大いに感じたことだと思います。そしてこの3年間、先輩方は友達、先生、そしてご両親の人の温かさを何度も感じた3年間だったと思います。

学校生活だけでなく部活動、そして私生活でと、落ち込んでいたときに励ましてくれた友達、

一緒に泣いてくれ、一緒に喜んでくれた多くの友達、今どれだけ沢山の友達の顔が先輩方の頭に浮かんでいることでしょうか。

また、就職、入試の時、友達以上に心配して、考えてくださったのは先生方だと思います。

そうです、先輩方はこの3年間で言葉に表せないほど、人の温かさに支えられ、多くのことを学んできたことだと思います。そして私達も先輩方の温かさに支えられ、多くのことを学びました。

それは2年前から始まりました。入学早々、何も分からない私達に、先輩方は一つひとつ優しく、丁寧に教えてくださいました。ほんのひとつつしか歳が変わらない先輩方がすごく大人に見えました。落ち込んだり、悩んだり、泣いたりしていた時も先輩はあるときは叱り、あるときは相談に乗って、励ましてくれたりと、いつも私達の支えになってくれました。また先輩方はずっと私達のあこがれの存在でした。そんな先輩方にめぐりあえてほんとうによかったと思っています。

そして今、先輩方はこの未だかつて例を見ることがないような状況のもと、社会に羽ばたいていきます。進学される先輩、そして就職される先輩、一人ひとりそれぞれ進む道は違いますが、多くの先輩はこの神戸の復興のためにこれから力を尽くされることだと思います。私達もまずは学校の復興、再建に力を入れていきたいと思っています。校舎は元どおりにならなくても、先輩方にとって誇りに思える学校にしていきたいと思っています。

形が変わっても母校であることは変わりません。これから、壁にあたり、試練の時を迎えたら母校のことを考えてください。神戸商業高校の3年間、すばらしい友人、先生方のことを考えて頑張ってください。どんなことがあっても一人ひとりの夢に向かって飛び続けてください。先輩方の社会での活躍と、神戸の復興を心から楽しみにしています。

そして母校の再建の様子もぜひ見にきてください。私達も先輩方に負けないよう頑張ります。それではぜひ頑張ってください。

短いですがこれで送辞とさせていただきます。本日は本当にご卒業おめでとうございます。

答 辞

一月十七日午前五時四十分、この街に激しい衝激が襲いきました。安んじていたこの神アに深い亀裂が入り、沢山の建物がお倒壊、焼失してしまつたのです。夜明け前、グラグラという二度にわたる大きなゆれがありました。恐ろしさのあまり蒲田の中にもぐり込み、ようやくおさまつた頃、迎りを見渡せば一面の暗闇が広がっていました。何と見つけ出した灯りや軒瓦を見れば、これが自分の軒瓦だと疑いたくならないような光景がありました。この地震は、物だけがなく多くの人命をも奪つていきまゝです。幸いにも私たちは卒業生は全員無事でした。イも家族を失つた人や、家に住めなくなつた人が沢山います。先輩や後輩の皆さんの中にも犠牲になつた方がおられるというものが、おありです。

今までの何の不慣れもない生活を送つておりましたが、この地震で避難生活となり、つたり、つたりと家が震動したやうに水やガスが止まつてしまつたりと、これまでの生活の有り難さを思い知らされる結果となりまゝです。毎日不自由で困難な日々、このような修業の中で、私たちは三年生は今日の日を迎えたいのです。

思えば長いようや短い三年間、色々な事を学び、沢山の思い出をつくることができました。真新しい制服に包まれ、我が母校の一頁となつた入学式、期待と不安の中で行われた対面式、そして、新たな生活に対する不安を吹き飛ばしてくれたのが、新入生歓迎エールでした。先輩方の学ラン姿に、憧れと憧れを抱き、私たちの高校生活が始まりました。

必死の思いで自然の家まで登つたオリエンテーション合宿、知らず知らずのうちに仲間が増えていきました。また学校のしくみや規律を学び、神南生としての自覚を養うこともできました。沢山の思い出が、日と日との人が初めて体験するスキー元氣よくグレンデに飛び出したのはいいものの、なんとその日はマイナス十七度という、神アでは想像もつかない程の寒さでした。しかしながら二日目は雲一つない絶好のスキー日和となり、空は爽やかに抜けるように青く、澄みきつた空気を満喫することができました。スキーにも慣れ始め、その日のスキー場は私たちの笑い声が溢れ、いよいよなりました。

秋も深まる頃、本校の大イベント「神南祭」が行われます。今年就職試験や受験を控え、準備がはかどりに進んでいきました。木暮が近づくと、毎日に放課後に見る顔が増え、いつもの道長作りの音で、台詞合わせの音、そして、歌声が校舎をにぎわしていきまゝです。特に三年

生は、それまでの経験を生かして、「絶対優勝」という熱気とパワーが満ちあふれていました。一般公開日には地球との対話、未来は僕らの手の中にある」というテーマに基き、二年生共同のオーガニズ、十万羽の折り鶴で空画を作り出した。作業の進行状態が悪く、完結が懸念されました。毎晩夜遅くまで残つて、せり、せり、と進んでいきました。当日は雨やうまく披露することができませんでした。私たちが一人一人の思いが託された鶴は、その冷たい雨にも負けることなく校舎を飾っていました。

その他にも、美しい若菜と沸き立つ歌声の中で繰り広げられた共演対面戦、クラスの親睦を深めた球技大会、グラウンド使いと走りまわつた体育大会、男子の綱引きや女子の棒うはいでの団結力は、三年生なら、ではの迫力があつた。忘れてならないのが学習のことです。二年生からは類型に分かれて、各種検定に合格するように頑張っていました。専門的な知識や技能を身につけるために、放課後遅くまで残つて勉強したこともありました。勉強好きではなかつた私たちが、先生方のご指導によって、就職先や進学先がどんどん決定していきまゝです。今、この時の努力が、きつと私たちの将来に役立つことと思ひます。

在校生のみならず、家族や友の死はつらく悲しいことですが、この悲しみに負けることなく勉強に励み、この神南を、そしてこの神アの街を復旧する力となるよう頑張つて下さい。

私たちは、今この時よりそれだけの道を歩んで行きますが、神ア商業での三年間を、そしてまた、このような時だからこそ、痛切に感じる人の温もりを忘れずに、精一杯頑張つて行こうと思ひます。最後にになりましたが、私たちの成長を陰ながら支えてくれたお父さん、お母さん、私たちが今日この神ア商業を巣立つて行きます。時には反発し、困らせました。今更に支えて頂いたことは決して忘れません。これからは家族の一員として、あなたのお見守りをして下さい。

また、新築工業高校の関係の皆様方、この度はこのような素晴らしい体育館をお貸し頂き、本当にありがとうございました。

私たちが、誠実と創造」という技剣に背むかぬよう精一杯の人生を歩み続けることをお誓いし、また母校の一層の発展をお祈りして、答辞とさせていただきます。

平成七年 二月 二十六日

卒業生代表 加藤 中 のり

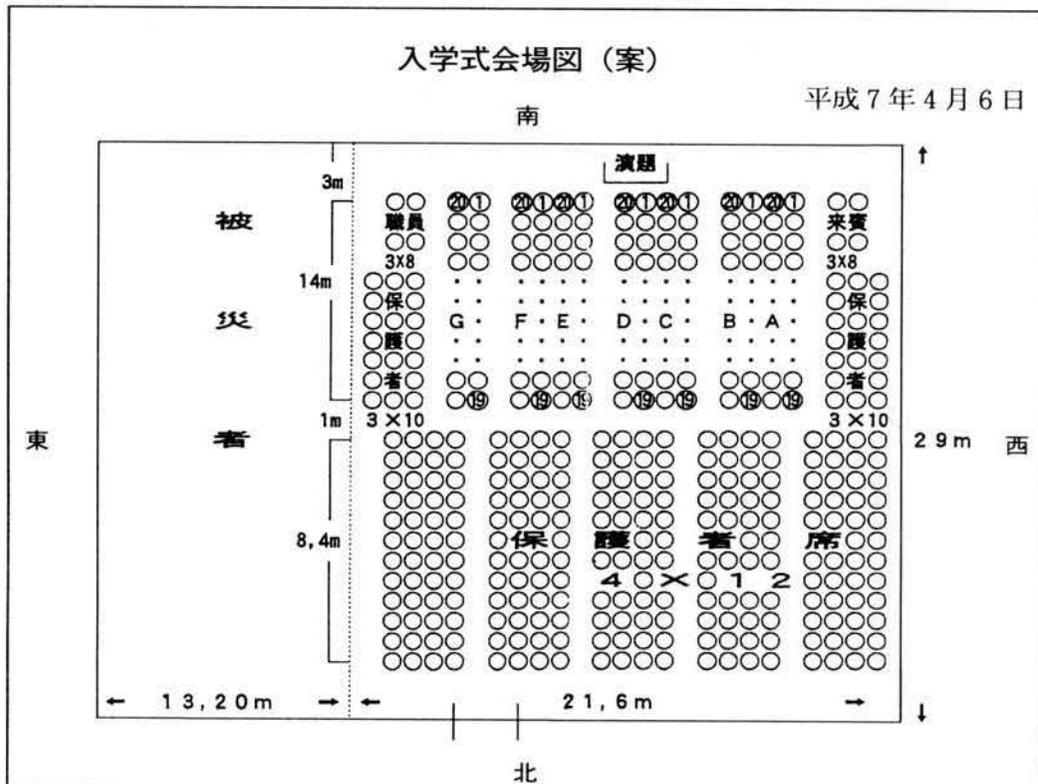
(3) 入学式

入学式の思い出

教頭 岡田 孝久

私は前任校も自宅も北区にあり、今回の大震災による被害はあまり大きくありませんでした。3月末に本校に来て校内を案内してもらい、被害の大きさに驚きました。本館は解体中で校内をダンプが走り回っているし、電気・水道などのいわゆるライフラインもまだ十分には復旧していませんでした。会議室が仮の職員室となり、事務室へはグラウンドを回って行かねばならず、とても同じ学校とは思いませんでした。そんな中で私が本校に赴任して最初に手掛けた仕事は入学式の場所決定でした。本館が解体されたために、講堂はなくなり、体育館とグラウンドは避難所となっていたため、2月の卒業式は御影工業高校の体育館を借りて行われました。そこで、希望を持って本校に入ってくる新入生を迎える入学式だけはぜひ本校で実施したい、というのが先生方の強い願いでした。この意見をふまえて場

所探しに着手しました。最初は唯一使用できる場所であるテニスコートを使用する案が出されましたが、雨天の場合を考えると、大きなテントを用意しなければならず、かなりの費用（100万円程度）がかかることが分かりました。神戸市教育委員会とも相談しましたが、とても全額は負担出来ない、半額ぐらいならという返事であった。天気さえよければテントは不要なわけで、厳しい学校財政から多額の支出は無理だということになりました。このような状態でぜひ本校で入学式を、ということになれば残る場所は体育館しかありません。当時、体育館には約100名の避難者の方がおられましたが、とにかく避難者の方に学校の事情を説明して、協力をお願いすることになりました。3月30日夜の体育館での避難者の方との話し合いには川崎校長・和泉元前教頭と私の3人が出席しました。話し合いは良い雰囲気で行われ、本当に快く協力してもらえることになり、このときは正直に言ってほっとすると同時に本当に嬉しく思いまし



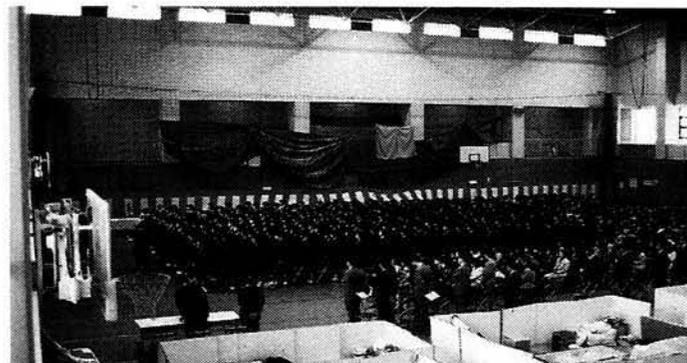
た。これも、大震災当初から多くの先生方が誠心誠意避難者の方に接して下さったおかげだと感謝しています。(その後も、8月20日に最後の避難者の方が出られるまで学校とのトラブルは全くなかったことを付記しておきます。)

さて、体育館で入学式をやることになっても、演台や放送設備はもちろん紅白の幕やビニールシートもない状態から準備を始めなければなりません。演台は小さなものを一つ購入、体育館の回りには紅白の幕を張り、放送はハンドマイクですませました。ビニールシートは小玉先生のお世話で甲南大学から借用しました。4月7日の職員会議後には全職員で体育館の避難者の方のたたみを格技室に移動し、その後、避難者の方の荷物を体育館東側によせてもらい、図のような入学式会場が出来上がりました。

4月10日は避難者の方と一緒に入学式(写真参照)になりましたが、実に感動的な式でした。参加した保護者からも感謝の言葉をたくさん聞くことが出来ました。新入生もきっと心に残る入学式になったことだろうと思います。

この原稿を書いている今も復旧工事が続いており、1・2年生はまだ仮設教室にいます。グラウンドは現在でも半分しか使用できず、生徒達には本当に申し訳ないと思っています。

しかし、生徒達は元気に頑張っています。先生方も頑張っています。これからも大好きな神戸商業を1日も早く復旧させるために協力して頑張っていく所存です。



避難者とともに行った入学式

1年 濱口 直子

何もかもがはじめてで、希望と不安をいっぱい抱えていた4月。それは新入生である私たちだけでなく2・3年生も同じ気持ちだったでしょう。

仮設の校舎、避難者との共同生活、水の出ない水道、ヒビ割れた地面……。入学式の日、訪れた学校には地震の傷痕がまだ至る所に残っていました。しかし、それらは私たちに幾つかの素晴らしい事を教えてくれたと思います。

“当たり前のように開催されている学校行事のひとつひとつには、多くの人々の協力が必要だ”というのが、その日、特に強く感じた事でした。

当日、入学式の会場となる予定だった体育館やグラウンドには、まだ多くの避難者の方が生活されていました。その為、本当なら体育館は使用できないはずでしたが、そこにいた人々の心づかいで会場として使うことができ、たくさんの方が見守る中で式は無事に行われました。そして、全校生が、なんとなくまとまっている……というのも入学当時感じたことのひとつでした。それは、これからの学校生活が、私たち新入生だけでなく、2・3年生にとっても、色々な意味で“何もかもがはじめてのこと”という同じような立場だったから感じられたのでしょう。

今では校内・生徒の様子ともに入学したばかりの頃とは大きく変わりました。工事が終われば、校内は確実に震災前よりも良いものになるでしょう。それと同時に、私達も様々な面で向上していけたら、と思います。

(4) 野球部、岩手遠征

岩手遠征を終えて

2年 松田幸太郎

8月8日、新神戸駅から岩手の新花巻駅に向かった。合宿の目的は、寝食を共にすることによりチームワークの強化をはかり、県外チームと交流することにより、技術面、精神面を強化向上させる、という事で始まった。

岩手についたら遠野情報の部長と監督が待っていて下さった。それからバスに乗り遠野情報高校へ行った。相手の選手はキビキビして周りから見ていい感じだったし、きちんとしていた。

9日、朝の練習にほとんど神商の生徒が遅れた。終わった後、朝食をとり遠野情報のグラウンドで練習をさせてもらった。黒土でいいグラウンドだった。練習後、宮古高校と試合で、2・3年前に甲子園に出ているという事で気合いが入った。結果は勝ってうれしかった。

10日、朝の練習は前の日のことがあり、きっちりできた。朝食後、バスに乗り釜石市営球場へ行った。長い道のりだった。釜石南の選手はでかかったけど、そんな事は関係なかった。試合の結果、負けた。自分達の力が出せないまま終わった。

11日、いつも通りの朝をむかえた。今日の相手は、遠野高校と遠野緑峰だった。そして両方のチームに勝つぞという事で試合にのぞんだ。1試合目は、エラー、ヒットがらみで点を取られ負けた。2試合目は、自分がピッチャーで楽しくできた。試合の結果、勝った。この日は1勝1敗と自分では納得できなかった。

12日、今日の試合は1番のメインだった。1試合目は一関商工、このチームは神港学園と試合する気持ちでのぞんだ。いいゲームで試合の結果、勝った。

終わった後、よく考えてみると、すごいなあ

と思った。2試合目は遠野情報高校で感謝の気持ちで試合にのぞんだ。いいゲームができて楽しかった。

13日、いよいよお別れの時だった。遠野情報高校のいい所を数多く学ぶ事ができた。神戸に帰っても岩手で学んだ事をしっかり生かしていくように、がんばっていきたい。いい体験ができた。

岩手合同合宿

2年 由井 秀弥

今回の合宿で僕たち野球部は、こちらではできない貴重な体験をしてきました。

この合宿は、岩手の遠野情報高校ビジネス校ならびに宮守村の人々など他にもたくさんの人々の支援によりすることができました。

僕たちは、初日、長時間新幹線に乗り岩手の新花巻駅へいきました。新花巻の駅では遠野の部長、マネージャーたちが僕たちをむかえてくれました。この時岩手についたという実感もわきました。

岩手にむかう日の朝、岩手では警報がでてくるくらい天気が悪かったらしく、天気予報では雨が続くと言っていたので少し不安を抱いていましたが、その不安を無くすかのように遠野は太陽がでていました。

二日目から、練習試合があり、僕たちは宮古高校など全てで6試合をさせていただいた。岩手は神戸とちがいで、涼しくてとても試合がしやすくよかった。また岩手の方たちがとてもよい球場、練習場所を用意してくれました。

この合宿ではとても印象に残ることが多かった。でも僕は一関商工に勝ったことがとても印象に残った。一関はうちにくらべ部員も多く強い学校です。でもこの試合はうちが一関を食うつもりで、チームがまとまって試

合ができたから勝てたと僕は思っています。この試合はこれからの僕らにとっても自信をつけたといえます。

僕たちは岩手でビジネス校のみんなとの合同合宿でとても色々なことを学びました。ビジネス校のみんなは本当に野球が好きで僕たちとはちがった感じのチームでした。みんなとは6日間で仲よくなることができ、とてもいい経験ができたと思います。

今回の合宿のためにたくさんの人たちが手伝ってくれた。僕たちだけでは決して出来ないことをやらせてもらった。親、先生、岩手の人たちにとっても感謝しています。

僕たちはこの体験を生かして、がんばりた

いです。これからも。

岩手に行って

2年 福井 基之

岩手の5日間は、毎日5時20分起きるとねむいうちに、ランニングとか体操とかしてから朝食をとる毎日だった。やっぱり家にいるときは5時20分に起きることはなかったから、しんどかったです。練習試合は、4勝2敗と勝ち越した。勝ち越すことが目標だったからよかったと思います。

一関商工戦のときが自分は一番うれしかったです。私立の学校に勝ててうれしかったで

平成7年8月7日(月曜日) 「岩手日報」より

「ヨイト」と掛け声を上げながら地引き綱を巻いた西灘小児童ら



西灘小児童ら12人



神戸商高との合宿を控え、意欲を燃やす遠野高情報ビジネス校の野球部員

神戸商高野球部員

被災地2校と心の交流

球選手は七日間帯市子園球場に近い同校が、みろくに遠征しての「友情の甲子園」が開かれる。陸前高田市では、陸前高田青年会議所(大坂淳理事長)の招きで神戸市・西灘小学校(遠坂光信校長)児童が三陸の夏を満喫し「楽しい思い出づくり」に笑顔を輝かせる。

三日は空路花巻入りし、四日に陸前高田市へ六日は同市伝統の「くまのこま」に参加し、地元の子供と色鮮やかな夕山を引いた。

一行は前日の五日、高田松原で高田小児童約一

訪れる神戸商高のメンバ―は、二年生部員ら二十人。遠野高情報校の二、三年生十八人と、交流合宿の話を聞いた遠に、村の「今をこま」交流体験学習施設に宿泊。野高、遠野緑線高、釜石、高、宮古高、一関商工高が参加を申し入れ、豊野球部保護委員会、OB会、富な対戦カードが実現し後援会、村長協議会がた。

遠野高情報校は三年前と四年前、甲子園の近くの学校と強化合宿している」と探したところ、神戸商高が快諾して願いがかなえられた。滞在費は神戸商高側が負担してくれたい。

今年一月の大震災発生時は神戸商高に、遠野高情報校の野球部員たちが寄せ書きや義援金を贈って励ました。お礼の手紙で、学校が倒壊し校庭は仮設校舎や避難者のキャンプ地になり、練習スペースがほとんどないことを知り、夏休みの合宿を持ちをリフレッシュしてほしい」と温かく見守っている。

西灘小は児童約二百人。また百人以上が疎開生活を送っている。今回は六年生六十七人が全国八カ所を分散訪問しており、陸前高田市には十一人と引率教師一人の計十二人が訪れた。

三日に空路花巻入りし、四日に陸前高田市へ六日は同市伝統の「くまのこま」に参加し、地元の子供と色鮮やかな夕山を引いた。

一行は前日の五日、高田松原で高田小児童約一

地引き綱など満喫 陸前高田青年会議所が招待

初めの三陸路を存分に満喫。大森隆史君は「神戸と違って自然がたくさんあり、いろいろな体験が楽しめる」と白い歯をのぞかせた。一行は七日は思ったより明るく安心な旅を楽しみ、八日に

合ができたから勝てたと僕は思っています。この試合はこれからの僕らにとっても自信をつけたといえます。

僕たちは岩手でビジネス校のみんなとの合同合宿でとても色々なことを学びました。ビジネス校のみんなは本当に野球が好きで僕たちとはちがった感じのチームでした。みんなとは6日間で仲よくなることができ、とてもいい経験ができたと思います。

今回の合宿のためにたくさんの人たちが手伝ってくれた。僕たちだけでは決して出来ないことをやらせてもらった。親、先生、岩手の人たちにとっても感謝しています。

僕たちはこの体験を生かして、がんばりた

いです。これからも。

岩手に行つて

2年 福井 基之

岩手の5日間は、毎日5時20分起きるとねむいうちに、ランニングとか体操とかしてから朝食をとる毎日だった。やっぱり家にいるときは5時20分に起きることはなかったから、しんどかったです。練習試合は、4勝2敗と勝ち越した。勝ち越すことが目標だったからよかったと思います。

一関商工戦のときが自分は一番うれしかったです。私立の学校に勝ててうれしかったで

平成7年8月7日(月曜日) 「岩手日報」より



「ヨイト」と掛け声を上げながら地引き網を引っ張った西灘小児童ら



神戸商高との合宿を控え、意欲を燃やす遠野高情報ビジネス校の野球部員

神戸商高野球部員

被災地2校と心の交流

あすから合同合宿

訪れる神戸商高のメンバ―は、二年生部員ら二十人。遠野高情報校の二、三年生十八人、交流合宿の話を聞いた遠に、村の「今をこ交流体験学習施設」に宿泊。野高、遠野緑線高、釜石高、宮古高、一関商工高が参加を申し入れ、野球部保護者会、OB会、富な対戦カードが実現し後援会、村長協議会がた。

遠野高ビジネス校が恩返し

遠野高情報校は三年前と四年前、甲子園の近くの学校と強化合宿したと探したところ、神戸商高が快諾して願いがかなえられた。滞在費は神戸商高側が負担してくれたという。今年一月の大震災発生時、神戸商高に、遠野高情報校の野球部員たちが寄せ書きや義援金を贈って励ました。お礼の手紙で、学校が倒壊し校庭は仮設校舎や避難者のキャンプ地になり、練習スペースがほとんどないことを知り、夏休みの合宿を持ちをリフレッシュしてほしいと温かく見守っている。

本報と阪神大震災の被災地神戸市との「心の交流」が相次いでいる。宮守村の遠野高情報ビジネス校(遠山晋一郎校長)は、被害に今なお苦しむ神戸市の市立神戸商高(川崎剛史校長)野球部を招き八日からの合同合宿を行う。以前に強化合宿を引き受けてもらった遠野高は、折しも全国高校野球選手権は七日間甲子園球場に近い同校が、みろくに遠征しての「友情の甲子園」が開かれる。陸前高田市では、陸前高田青年会議所(大坂淳理事長)の招きで神戸市・西灘小学校(逢坂光信校長)児童が三陸の夏を満喫し「楽しい思い出づくり」に笑顔を輝かせる。

神戸商高は、遠野高情報校の野球部員たちが寄せ書きや義援金を贈って励ました。お礼の手紙で、学校が倒壊し校庭は仮設校舎や避難者のキャンプ地になり、練習スペースがほとんどないことを知り、夏休みの合宿を持ちをリフレッシュしてほしいと温かく見守っている。

球選手権は七日間甲子園球場に近い同校が、みろくに遠征しての「友情の甲子園」が開かれる。陸前高田市では、陸前高田青年会議所(大坂淳理事長)の招きで神戸市・西灘小学校(逢坂光信校長)児童が三陸の夏を満喫し「楽しい思い出づくり」に笑顔を輝かせる。

西灘小は児童約二百人、また百人以上が破開生活を送っている。今回は六年生六十七人が全国八カ所を分散訪問しており、陸前高田市には十一人と引率教師一人の計十二人が訪れた。

地引き網など満喫

陸前高田青年会議所が招待

児童の表情は明るく、神戸に戻る。初めての三陸路を存分に満喫。大森隆史君は「神戸と違って自然がたくさんあり、いろいろな体験が楽しめる」と白い歯をのぞかせた。一行は七日に「けんか七ツ」の勇壮な旅を満喫し、八日に

三日に空路花巻入りし、四日に陸前高田市へ六日は同市伝統の「くまの七ツ」に参加し、地元の子供と色鮮やかな夕山を引いた。一行は前日の五日、高田松原で高田小児童約一

す。岩手県にきた価値があったと思います。その試合はみんな集中していて、いい試合だったと思います。ベンチにいる人もいい声を出していて、いつでも出れる状態でいました。

宮古高校戦は、2回表に7番のタイムリーで先制点を取られ、次の回にファーストのエラーで1点とられて、3番のタイムリーでもう1点取られて、3対0で負けていて、4回5回に1点ずつとって6回に向井のタイムリーとかで4点を取って結局6対4で勝てました。釜石南高校戦は、1、2回で6点取られたから、みんなの集中力がなくなったと思います。しかし、もうすこしいい試合ができるのにと思いました。

遠野高校戦は、4回まではよくピッチャーががんばっていたけど、5回からどんどんは

なされてしまった。この試合も接戦、もしくは勝てた試合だったと思いました。

遠野緑峰高校戦は、4対3で勝ったけど、なんでこんなチームに1点差でしか勝つことができなかつたんだと言いたくなつたくらいです。8安打で4点というのはさびしかったです。

一関商工戦は、3対2で勝ててよかったです。

情報ビジネス戦は、ミスが多い試合だったけど、ピッチャーががんばったから、5対3で勝てました。

岩手に行ってからわかつたことは、みんなが集中してプレーすることの大切さを知つたことです。これからも岩手で学んだことを忘れずにがんばって勝っていきたいと思います。

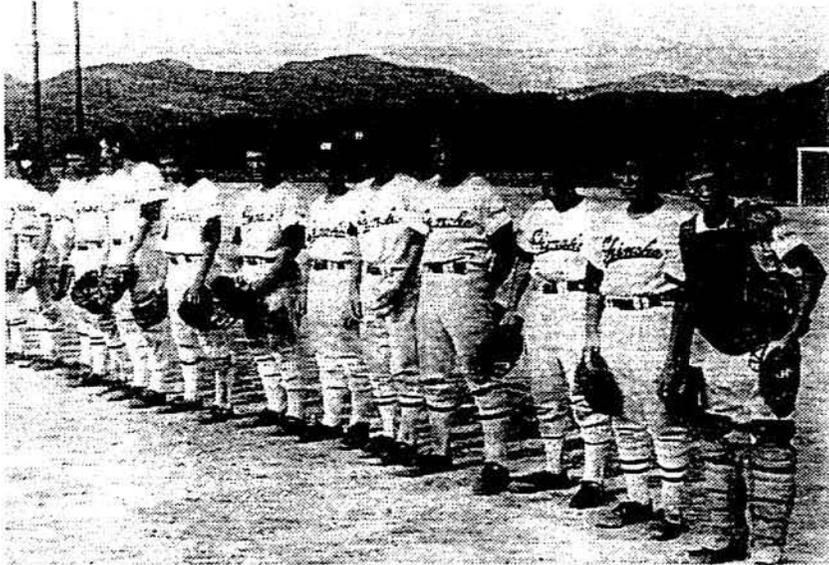


岩手県立遠野高等学校 情報ビジネス校 1995年8月13日

震災乗り越えはつらつ

神戸商高 宮守で合宿、交流

阪神大震災の被災地・神戸市の神戸商高野球部が宮守村で合宿、県内の高校と交流を深めている。同村の



練習試合で勝利し、満足げな神戸商高ナイン

遠野高情報ビジネス校（遠山晋一 校長）の招きで訪れ、九日からの練習試合では、震災のハンディを感じさせないはつらつとしたプレーを披露。甲子園とは一味違った「夏」を体験している。

遠野・情報校は、平成三、四年と二年続けて神戸商高で強化合宿した際の恩返しにと、今回、宮守村での合宿に招いた。

神戸商高一行二十二人は、八日に宮守村に到着。遠野・情報校の二十人とともに五泊六日の日程で村の「ふるさと」交流体験学習施設に宿泊、交歓している。九日から練習試合が行われ、村内の「銀河の森総合

運動公園」に宮守市の宮守高を迎えて対戦した。序盤はミスもあったが次第に試合を取り戻し、見事逆転勝ちを収めた。

神戸商高の南野靖監督（三）は「現在校庭は仮設校舎やテントが立ち、ダイヤモンド分の広さしか取れない。立派なグラウンドでプレーできてうれしい。招待を受け感謝している」と感激の面持ち。

主将の松田幸太郎君（二年）は「思い切って野球ができる広いグラウンドは久しぶり。しかも勝利を味わえ満足。合宿では岩手の高校生と仲良くなって帰りたい」と、張り切っていた。被災を乗り越えたくまし

(5) 本山第二小学校との交流

うれしかったよ、対面式

5年生 池内 愛佳

「5年生だけだし、小学校から遠いからいやだな。」

最初は、そんな気持ちや不安ばかりでした。私だって、本二の仲間なのに本二を離れたくない。やっぱり私たちの本二で勉強をしたい…でも、いつの間にか1学期も始まり対面式の日がやってきました。対面式は、普通ではなくすごく盛大でした。特に、たれまくが印象に残っています。私たちは、これからお世話になり、そして仮設校舎まで借りるのに、神商のみなさんからお花をもらったことが、すごくうれしかったです。そのほかにも、うれしかったことはたくさんありました。

私たちの学校も神商と同じような被害を受けて、仮設校舎がたくさん建ち並んでいます。その中で4学年が共同で運動場を使い、あと1学年は、となりの本山中で運動場を使っています。ですから私たち5年生は、一番得をしているのじゃないのかな、と思います。とても広い運動場。やさしいお兄さん、お姉さんにつつまれて、がんばりたいと思います。



対面式(1995年4月13日)



ありがとう神商のみなさん

5年生 斎藤 宏樹

「ドッカーン。」

ぼくは花火が打ち上がった時とてもうれしかった。震災で、仮設校舎を使っていっしょに同じ場所で勉強したという事が「いっしょにがんばってきたんだな」と思いました。神商のお兄さんやお姉さんや先生方は、とても親切にしてくれました。ある時は、いっしょにバスケットボールをして遊んでもらったり、ある時は、こけたときに保健室に連れてってもらったりたくさんお世話になりました。それに、ぼくたちが、あの広い運動場の場所をいつも使わせてもらってははっきり言えないですが、心の中ではすごく感謝しています。たぶん心の中ではうずうずしていたでしょうが、本当にめいわくかけてすみませんでした。それに、音楽室も使わせてもらって、その上その音楽室へ行く時に高校生のみなさんが勉強なさっているのに、足音をたてて歩いたりして、非常にめいわくをかけたと思います。まだまだ、たくさんあやまりたいことはあります。本当に、6ヵ月間めいわくをかけてすみませんでした。本当に、よくしてくださって、お別れ会の時には、笛などの楽器でえん

(5) 本山第二小学校との交流

うれしかったよ、対面式

5年生 池内 愛佳

「5年生だけだし、小学校から遠いからいやだな。」

最初は、そんな気持ちや不安ばかりでした。私だって、本二の仲間なのに本二を離れたくない。やっぱり私たちの本二で勉強をしたい…でも、いつの間にか1学期も始まり対面式の日がやってきました。対面式は、普通ではなくすごく盛大でした。特に、たれまくが印象に残っています。私たちは、これからお世話になり、そして仮設校舎まで借りるのに、神商のみなさんからお花をもらったことが、すごくうれしかったです。そのほかにも、うれしかったことはたくさんありました。

私たちの学校も神商と同じような被害を受けて、仮設校舎がたくさん建ち並んでいます。その中で4学年が共同で運動場を使い、あと1学年は、となりの本山中で運動場を使っています。ですから私たち5年生は、一番得をしているのじゃないのかな、と思います。とても広い運動場。やさしいお兄さん、お姉さんにつつまれて、がんばりたいと思います。



対面式(1995年4月13日)



ありがとう神商のみなさん

5年生 斎藤 宏樹

「ドッカーン。」

ぼくは花火が打ち上がった時とてもうれしかった。震災で、仮設校舎を使っていっしょに同じ場所で勉強したという事が「いっしょにがんばってきたんだな」と思いました。神商のお兄さんやお姉さんや先生方は、とても親切にしてくれました。ある時は、いっしょにバスケットボールをして遊んでもらったり、ある時は、こけたときに保健室に連れてってもらったりたくさんお世話になりました。それに、ぼくたちが、あの広い運動場の場所をいつも使わせてもらってはっきり言えないですが、心の中ではすごく感謝しています。たぶん心の中ではうずうずしていたでしょうが、本当にめいわくかけてすみませんでした。それに、音楽室も使わせてもらって、その上その音楽室へ行く時に高校生のみなさんが勉強なさっているのに、足音をたてて歩いたりして、非常にめいわくをかけたと思います。まだまだ、たくさんあやまりたいことはあります。本当に、6ヵ月間めいわくをかけてすみませんでした。本当に、よくしてくださって、お別れ会の時には、笛などの楽器でえん

そうもしてくれて、それに、すごい長い紙で上から下ろしてたれまくを作ってくれたり、授業の時間をつぶしてまでもしてくれて、本当に本当に心から感謝しています。これからもまた何か機会があったらみなさんとあいたいです。

それから数日たって、大がかりなひっこしがありました。6年生が応えんにかけてくれました。ぼくは、高校生のお兄さんお姉さんも優しいし、運動場は広いし、5年生だけだから、ずっと神商ですごしたかったです。でも、とうとうその日がやってきたのです。すこし泣きそうでした。「最後の神商生活なんだから、きれいに片付けていこう。」と最後には気持ちよくおわろうと思っていました。もう、気合い満々でした。秋田君、春山君とやっていました。「リヤカーをおして。」と福谷先生に言われたので、きちんと合れいをかけて「ウースユ。」とばかり言っていました。2回も往復して大変でした。自分でもよくがんばれたと思います。でもなんといっても、最後に、校舎の方を向いて、あいさつするのは、感動しました。

本山第二小フアイト

震災に負けずに頑張ろう

本山第二小学校のみなさんへ

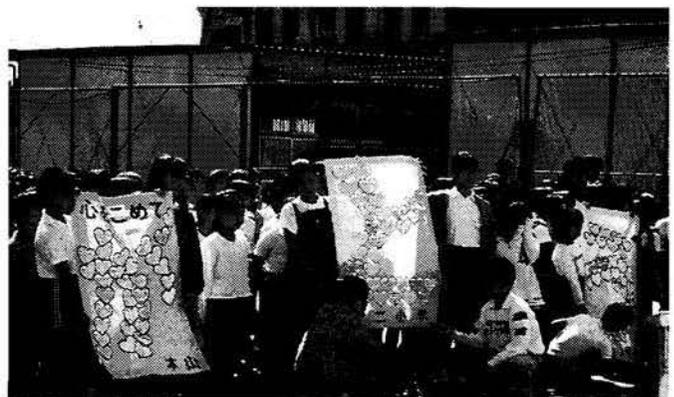
1年 中野 聡美

あの阪神大震災からもう1年がたとうとしています。大震災の影響で、私達神商生は本山第二小学校5年生の人達と一緒に神戸商業で生活することになりました。初めて高校で生活することになった本山第二小学校の人達、対面式のときには少しぎこちなさを感じられました。

不便な生活、そして慣れない環境の中で、神商のグラウンドを元気いっぱい走り回って遊ぶ本山第二小学校の人達の姿を見て、私達神商生もすごく励まされたことと思います。

教室の窓から見えた小学校の体育、なにげなく、きこえてくる音楽室からの元気な声、昼休みに見えた給食服の小学生に、私達は自分が小学生だった頃のことを思い出し、すこくなつかしい気分になりました。

本山第二小学校5年生の人達と生活をしてはや半年、年が大きく離れてはいましたが、会話をしたり一緒に遊んだりでき、弟や妹ができたような気がしてうれしかったです。短い間でしたが、良い思い出ができました。これから復興にはまだまだ時間がかかりますが、一日も早くこの神戸が復興するようになんがなりたいです。



お別れ会 (1995年10月25日)

そうもしてくれて、それに、すごい長い紙で上から下ろしてたれまくを作ってくれたり、授業の時間をつぶしてまでもしてくれて、本当に本当に心から感謝しています。これからもまた何か機会があったらみなさんとあいたいです。

それから数日たって、大がかりなひっこしがありました。6年生が応えんにかけてくれました。ぼくは、高校生のお兄さんお姉さんも優しいし、運動場は広いし、5年生だけだから、ずっと神商ですごしたかったです。でも、とうとうその日がやってきたのです。すこし泣きそうでした。「最後の神商生活なんだから、きれいに片付けていこう。」と最後には気持ちよくおわろうと思っていました。もう、気合い満々でした。秋田君、春山君とやっていました。「リヤカーをおして。」と福谷先生に言われたので、きちんと合れいをかけて「ウースユ。」とばかり言っていました。2回も往復して大変でした。自分でもよくがんばれたと思います。でもなんといっても、最後に、校舎の方を向いて、あいさつするのは、感動しました。

本山第二小フアイト

震災に負けずに頑張ろう

本山第二小学校のみなさんへ

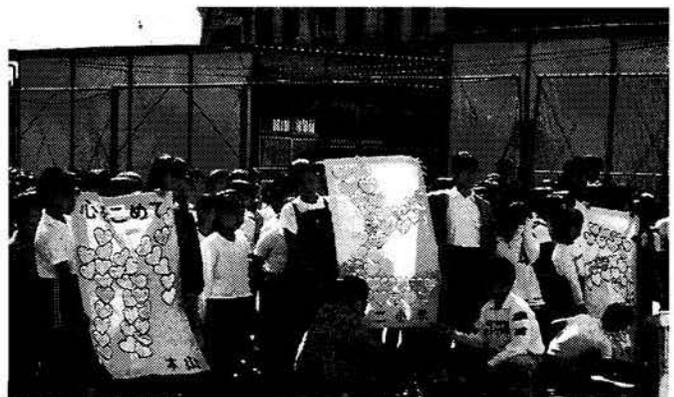
1年 中野 聡美

あの阪神大震災からもう1年がたとうとしています。大震災の影響で、私達神商生は本山第二小学校5年生の人達と一緒に神戸商業で生活することになりました。初めて高校で生活することになった本山第二小学校の人達、対面式のときには少しぎこちなさを感じられました。

不便な生活、そして慣れない環境の中で、神商のグラウンドを元気いっぱい走り回って遊ぶ本山第二小学校の人達の姿を見て、私達神商生もすごく励まされたことと思います。

教室の窓から見えた小学校の体育、なにげなく、きこえてくる音楽室からの元気な声、昼休みに見えた給食服の小学生に、私達は自分が小学生だった頃の事を思い出し、すこくなつかしい気分になりました。

本山第二小学校5年生の人達と生活をしてはや半年、年が大きく離れてはいましたが、会話をしたり一緒に遊んだりでき、弟や妹ができたような気がしてうれしかったです。短い間でしたが、良い思い出ができました。これから復興にはまだまだ時間がかかりますが、一日も早くこの神戸が復興するようにがんばっていきたいです。



お別れ会 (1995年10月25日)

ネバーギブアップー負けないぞー

5年 数越 慶子

神戸商業高校のみなさん、私たち、本二の5年生を文化祭に招いて下さってありがとうございます。私は、震災直後、しばらくはおばあちゃんの家で生活していました。あの時、平成7年1月17日、午前5時46分、あのしゅん間から、私は、本当の勉強が始まったんだと思います。とても寒い季節だったので、火ばちを持ちだしたり、ホッカイロをたくさん使って温まりました。私は、火をいじるのが好きだったので、たいてい、るす番をしながら火ばちをつついてる役でした。今、考えると、原始人みたいな生活だったと思います。それからしばらくして、私は、お母さんの奈良に住んでいる知人の家へ、5週間、そかいしました。弟もいっしょでしたが、弟は1週間で帰りました。つまり、私は1ヵ月家族とはなれてくらしていました。私は、人に泣き顔を見られるのがきらいなので、夜、どうしようもない時は、まくらに顔をおしつけていました。

次の詩は、奈良の学校で作ったものです。

地震なんかに負けないよ
ふとんをかぶって
ぬいぐるみをだきしめながら
泣きたくなった
そしたら
だきしめているぬいぐるみから
負けるなよ、負けるなよ
と言っているようだったから
地震なんかに負けないよ
と言ったら
心がすうっと
軽くなった

この詩が、あの時の私を、表しているような気がします。では、今日の文化祭を、1日だけだけれど、みなさんといっしょに、楽しみたいと思います。

神戸商業から帰って

5年 清水 径

神戸商業から本二へ帰って1週間がたちました。昨日、2時間目に国語の勉強をしました。そのとき、「ががが〜」っと、いきなりゆれました。1回目は、みんなびっくり。私は、まど側だったので、も〜うるさい、と思いました。つくえはゆれるはで、すっごく勉強しにくかったです。工事の音だったのです。とってもうるさいので、友だちの大事な発表も、聞きのがしそうになりました。だんだんいらいらしてきました。工事のおじさんに文句を言いたいくらいでした。だけど、これでいいのかなぁと、ふと考えました。おじさんは、だれのために工事をしてくれているのでしょうか。本二のためなのです。本二のためがんばってくれているのです。そう思うと、今の私が、がんばらなければならないことは、そう音に、まけず気持ちを集中して、勉強にはげむことだと思いました。

うるさいから勉強できない、ではなくて、どんなかんきょうの中でも、やれることをせいいっぱいがんばる。それが大切だと思いました。そうです。ネバーギブアップです。

自分のできる身近な事から、このせいしんをつらぬき、いつも前進していきたいと思えます。これから、もっと大変なことがあると思いますが、それにまけず、がんばっていきたいです。

ネバーギブアップー負けないぞー

5年 数越 慶子

神戸商業高校のみなさん、私たち、本二の5年生を文化祭に招いて下さってありがとうございます。私は、震災直後、しばらくはおばあちゃんの家で生活していました。あの時、平成7年1月17日、午前5時46分、あのしゅん間から、私は、本当の勉強が始まったんだと思います。とても寒い季節だったので、火ばちを持ちだしたり、ホッカイロをたくさん使って温まりました。私は、火をいじるのが好きだったので、たいてい、るす番をしながら火ばちをつついてる役でした。今、考えると、原始人みたいな生活だったと思います。それからしばらくして、私は、お母さんの奈良に住んでいる知人の家へ、5週間、そかいしました。弟もいっしょでしたが、弟は1週間で帰りました。つまり、私は1ヵ月家族とはなれてくらしていました。私は、人に泣き顔を見られるのがきらいなので、夜、どうしようもない時は、まくらに顔をおしつけていました。

次の詩は、奈良の学校で作ったものです。

地震なんかに負けないよ
ふとんをかぶって
ぬいぐるみをだきしめながら
泣きたくなった
そしたら
だきしめているぬいぐるみから
負けるなよ、負けるなよ
と言っているようだったから
地震なんかに負けないよ
と言ったら
心がすうっと
軽くなった

この詩が、あの時の私を、表しているような気がします。では、今日の文化祭を、1日だけだけれど、みなさんといっしょに、楽しみたいと思います。

神戸商業から帰って

5年 清水 径

神戸商業から本二へ帰って1週間がたちました。昨日、2時間目に国語の勉強をしました。そのとき、「ががが〜」っと、いきなりゆれました。1回目は、みんなびっくり。私は、まど側だったので、も〜うるさい、と思いました。つくえはゆれるはで、すっごく勉強しにくかったです。工事の音だったのです。とってもうるさいので、友だちの大事な発表も、聞きのがしそうになりました。だんだんいらいらしてきました。工事のおじさんに文句を言いたいくらいでした。だけど、これでいいのかなぁと、ふと考えました。おじさんは、だれのために工事をしてくれているのでしょうか。本二のためなのです。本二のためがんばってくれているのです。そう思うと、今の私が、がんばらなければならないことは、そう音に、まけず気持ちを集中して、勉強にはげむことだと思いました。

うるさいから勉強できない、ではなくて、どんなかんきょうの中でも、やれることをせいいっぱいがんばる。それが大切だと思いました。そうです。ネバーギブアップです。

自分のできる身近な事から、このせいしんをつらぬき、いつも前進していきたいと思えます。これから、もっと大変なことがあると思いますが、それにまけず、がんばっていきたいです。

本館被災の東灘・本山第2小5年生

間借り先 **神戸市商業高校** から母校へ帰る

仲良くしてくれた高校生に

送別会で感謝の言葉

震災で近くの市立神戸商業高校に間借りしていた神戸市東灘区の市立本山第二小学校の五年生百六十二人が母校に戻ることになり、二十五日、同高で送別会が行われた。約七カ月間ともに学校生活を送ってきた生徒に「お兄さん、お姉さんありがとう」とお礼を述べて、仮教室を後にした。

同小は震災で教室や職員く、建て直しのため、四月、五年生は神戸商業高校の仮教室に通っていた。

同高でも校舎に被害があり、五年生は、校庭につくられた一、二年生用のプレハブ教室の一部を借りて、高校生と仲良く学校生活を送ってきた。本山第二小は、避難していた住民の荷物の整理が終わったため、三十日から五年生を受け入れることになった。

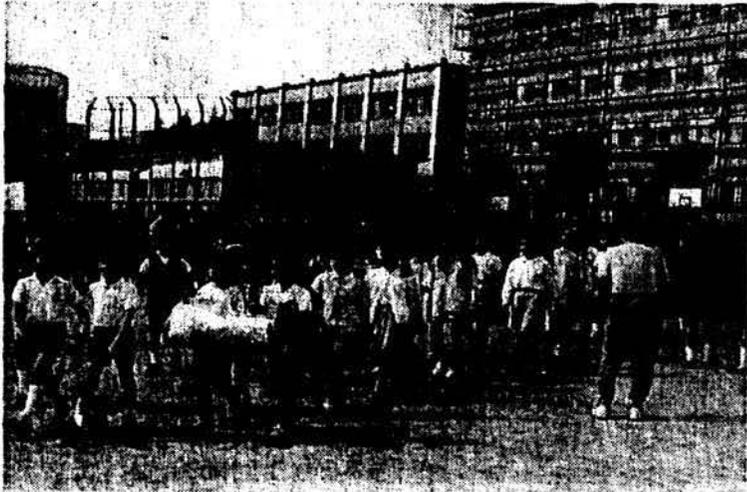
送別会は同高が開いたもので、高校生代表が「これから明るくはきはきと頑張ってください」と励まし、小学校の児童代表三人は壇上に向かって「お兄さん、お姉さんありがとう」とあいさつした。

また高校側から、十一月に開く文化祭の招待状が児童に手渡され、五年生一同からは「やっほーっほーっ

てありがとう」「またいつか遊んでください」といった手作りのメッセージが贈られた。

このあと、同高吹奏楽部が送別の曲を演奏、校舎の上から「震災に負けずがんばろう」「本山第二小ファイト」のたれ幕で母校復帰を祝った。児童らは高校生の拍手に包まれて退場した。

本山第二小の須坂久校長は「三年生も早く戻って通常の授業ができるようにしたい」と話していた。



神戸商業高校への送別会に参列した本山第二小五年生ら（神戸市東灘区、同高）

(6) 不況に震災追い打ち

1995年12月21日 (木曜日)「神戸新聞」より

不況に震災 追い打ち

内定、今年の3ポイント減

採用試験未受験者も

高校生の就職 冷え込み厳し

冬休みを間近に、兵庫県内の高校生の就職戦線に厳しい冷え込みが続いている。とりわけ阪神大震災の被災地では、不況と地震のダブルパンチで求人倍率、内定率は「買い手市場」だった昨年より

兵庫県内

さらにダウン。十二月になっても採用試験を一度も受けられない生徒がいるという「非常事態」も起きている。新たな受け入れ企業の開拓など、先生たちの年越しの就職活動が続きそうだ。

復興求人 焼け石に水



進路担当教員に相談する高校生。厳しい就職戦線は年明けも続きそう「神戸市東灘区、市立神戸商業高校」

「最後の頼みの綱だった地元中小企業が、震災で採用どころではない」と話すのは神戸市兵庫区、市立神港高校の内藤雅史教諭。同校では求人数が昨年より二五％減った。長田区のケミカル関係など、例年、一定数の生徒を採用していたのに、今年は求人がほとんどない企業もある。いまの内定状況は八四・三％。昨年同時期より約三割低い。内藤教諭は「ポーンと後に退職した社員を埋めるための求人に希望をついでいます」。

校でも、海運業など地元求人の減少が響いて約二十人が未定のまま。そのうち女子生徒数は、いまだに一度も採用試験を受けていない。希望の事務職が見つからないためだ。

「この時期に未受験者がいるのは、いわば非常事態。短大生や専門学校生が高校生の就職先に侵食しており、特に女子の事務職は厳しい」と進路指導担当教諭。県労働部などの十月末時点の集計によると、県内の高校生に対する求人倍率は一・六七倍（昨年同時期一・七七倍）。就職希望者一万九百六十八人の内定率は八一・二％（同八二・六％）。未定は二千六十五人で、うち九百三人は神戸市内の高校生が占めた。

また、神戸市の中央区西部、兵庫、長田など六区を管轄する神戸公共職業安定所では、高校生の求人倍率は〇・九八倍。厳しい状況は、いまま変わっていない。

そのなかで、震災からの復旧・復興事業を担う建設や土木業の求人は好調だ。同職業安定所では、高校生に対する全体の求人数が昨

年より二四％減ったのに、建設業はわずかに増加した。建築料を持つ尼崎工業高校には、震災後、神戸市に進出した大手建設会社から新規の求人が舞い込んだ。しかし、井田敏行校長は「確かに復興関連の求人はあるが、不況による落ち込みをカバーするには程遠い」という。

高校進路指導研究会神戸支部の幹事を務める東灘区の市立神戸商業高校、岡田靖夫教諭は「来年以降も厳しい状況は続く。今後も震災による就職差別がないよう、企業などに働きかけることが必要」と気を引き締める。

(1) 弔 辞

平 野 聡

あの阪神大震災からもう4週間あまりがたちました。

今も尚、家が全壊、また半壊したため、避難所で生活を送っている人も沢山います。また、けがをされた方も多くいて、その中には数時間もがれきや家具の下に埋まっていてその後に助け出された人もいます。幸い、自分の家は崩れずに済みましたが、やはり壁が崩れたりして、全く無事というわけには行きませんでした。

地震がおこったときはさすがにテレビや家具が倒れましたが、まさか駅や高速道路が落ちて、5000人以上の死亡者が出るほどの災害になるとは思いませんでした。

また、その死亡者の中に同じ学年の、しかもクラスメイトが加わることになるとは思ってもありませんでした。

震災後、日に日に増えていく死亡者の中にクラスメイトの高野恵美子さんの名前があったときはさすがに信じることができず、見間違いではないか、または別人ではないかと思いましたが、友達から本当に自分のクラスの高野さんだったことを聞き、本当にショックを受けました。

高野さんと僕とは中学校も同じ学校でしたが、あまり話をしたことはありませんでした。しかし彼女の周りの人に聞くと、とてもしっかりしている人で、この神戸商業高校を受験するときも一生懸命勉強していて、「入る部活はもう決まっている。」と目を輝かせていて、入る前から高校の生活を楽しみにしていたようです。また、よく笑う姿、日頃の本当に真面目な態度は忘れることができません。

その高野さんが、楽しみにしていた修学旅行を前にしてこのようなことになってしまうとは本当に残念でなりません。

彼女のお通夜が1月25日にいとなまれ、クラスメイトと高野さんが楽しんで活動していた漫画研究部の人達が最後のお別れをしました。高野さんに言いたいこと、そして思い出、いっぱいありましたが誰も言葉に表すことができませんでした。皆が悲しみだけを味わいました。

しかし、日が経つと、この震災で人と人とのつながり、出会いが身にしみて感じてきました。いろいろな人達からの暖かい援助がとてもありがたく感じられました。そうです。人間は一人では生きてはいけません。このことと高野さんの笑顔はきっと忘れません。高野さんの分もこれから頑張らなければとみんなが思いました。これからもみんなで、高野さんの笑顔のような、本当に明るい学級、学校にしていきたいと思っています。

生徒のイラスト 埋もれさせない

神戸商業 先生、がれきの中から発見



阪神大震災で崩れ落ちた神戸市立神戸商業高校(神戸市東灘区)の職員室から11日、雪ダルマをあしらった一枚のイラストが見つかった。震災でつぶれた家の下敷きになってしまった同校二年生高野恵美子さん(中央)の作品だ。一月二十八日から長野県のスキー場へ修学旅行に行く二年生三百六人のために製作が予定されていた「しおり」の表紙だった。旅行は中止になり、イラストは漫画研究会部長だった恵美子さんの遺作となった。



見つかった高野恵美子さんのイラスト。修学旅行の「しおり」の表紙に使われるはずだった。神戸市東灘区西岡本二丁目の市立神戸商業高校で

神戸市立神戸商業高校(神戸市東灘区)の職員室から十一日、雪ダルマをあしらった一枚のイラストが見つかった。震災でつぶれた家の下敷きになってしまった同校二年生高野恵美子さん(中央)の作品だ。一月二十八日から長野県のスキー場へ修学旅行に行く二年生三百六人のために製作が予定されていた「しおり」の表紙だった。旅行は中止になり、イラストは漫画研究会部長だった恵美子さんの遺作となった。

恵美子さんの死を知った漫画研究会顧問の此松信孝教諭(左)と担任の磯野修亮教諭(右)の二人が、職員室のがれきの山をかき分けて見つけ出した。恵美子さんは、男一人、女三人きょうだいの次女。「毎晩遅くまで起きては、こつこつとイラストを描いていた」と、父の勝雄さん(右)は話す。「しおり」の表紙やカットを、漫画研究会の部員六人が描き始めたのは昨年十二月。恵美子さんは表紙を担当した。当日、昨秋に引っ越したばかりの木造二階建ての家が激しく揺れた。犬の「エリ」と二階で寝ていた恵美子さんと、隣室で寝ていた大学生の兄哲郎さん(左)が崩れ落ちた家の下敷きになり、恵美子さんと哲郎さんはじくなった。二人の先生は、震災一週間後の一月二十四日から恵美子さんの遺作を探し始めた。鉄筋四階建ての本館

は、イラストを保管していた職員室のある一階が押しつぶされて立ち入り禁止になっていた。「早く見つけなければ、校舎が取り壊されてしまう」。いつ崩れるか分からない危険の下、二人は探し続けた。五回目の挑戦だったこの日。床に散らばった書類の中から、イラストの入った封筒が見つかった。此松教諭は「責任感の強い明るい子でした。見つかってよかった。製本して早く両親に渡してあげたい」。

磯野教諭も「彼女の作品ががれきの下に埋もれさせたくはなかった」と話した。

(2) 震災体験

震災を乗り越えて

1年 堀家名穂子

今回の大震災では、多くの人々の命がなくなり、私たち家族も被害を受けました。17日の朝、ベランダから見た光景は、赤く燃え上がる炎と灰色の煙がいくつも立っているのを見て驚きました。煙で覆われた空の薄暗さと、ガスと電気と水をすべてなくし、何もできず、ただラジオの音が響いていた時の空しさが今でも頭の中に残っています。

あの時は、揺れのショックと、生活の変化に、勉強も手につかず、毎日受験の事や、周りの事で不安になり、夜も眠れなかった。ちょっとした物音にも、とても敏感になり、そのたびに、心臓が鳴った。そんな時に、親戚の人が遠い所から物資を持ってきてくれたり、近所の人が声をかけにきてくれた時は、不思議と心がおちつき、支えにもなったと思います。

残念なことに、中学校は半壊し、避難されている方も多いので、自分たちの教室で授業する事ができず、また授業時間も短いので、たっぷりと試験勉強をすることができませんでした。しかし、短い時間でも友達と会って話ができただけはとても嬉しい事でした。

今年の私立高校の受験は、書類選考だったので、私の受験校は、試験がありませんでした。私の友達は、私立専願者が多かったので、みんな合格が決定し、緊張感から開放されている中、私はますます不安になっていきました。そんな時は、よく母が励ましてくれました。今回、私が受験できたのも、家族や先生方のおかげだと、心から思いました。

いつの日か、震災の報道もなくなり、神戸が新しく生まれ変わったとしても、私は、地震の事を忘れません。そして現在、自分という一人の人間が生きている事で、生命の尊さと、地震の恐さを、あらためて思い知らされ

ています。

合格発表の日、自分の番号を見た時は、心からホッとしました。あまり自信がなかった分、合格した喜びは言い表すことができませんでした。制服を着た時、「神商生になれるんだ。」と心が弾みました。しかし、これからの高校生活は勉強の事、友達の事など、色々不安に感じる事もありますが、常に前向きに、目標に向かって努力したいと思います。



大地震に遭って

1年 細島 智琴

1月17日のことです。その日はなぜか私は午前5時30分ぐらいに目が覚めました。そしてもう一回眠ろうとふとんに入った時に床が少しゆれるような感じがしました。私はただの震度1か2のゆるい地震だと思っていましたが突然電気が切れ、強いゆれの地震がきたのです。私は何がなんだかわかりませんでした。まわりはまっくらでどうしたらいいのかわかりませんでした。ただ必死にその場からにげるだけでした。こんなことになるとは誰もが想像していなかったでしょう。入試勉強が大詰めになって、最後の力を入れようとしたときのことでした。家は全壊し、部屋や机、本棚とめちゃくちゃになり、勉強する道具さえどこに行ったかわからなくなりました。こ

(2) 震災体験

震災を乗り越えて

1年 堀家名穂子

今回の大震災では、多くの人々の命がなくなり、私たち家族も被害を受けました。17日の朝、ベランダから見た光景は、赤く燃え上がる炎と灰色の煙がいくつも立っているのを見て驚きました。煙で覆われた空の薄暗さと、ガスと電気と水をすべてなくし、何もできず、ただラジオの音が響いていた時の空しさが今でも頭の中に残っています。

あの時は、揺れのショックと、生活の変化に、勉強も手につかず、毎日受験の事や、周りの事で不安になり、夜も眠れなかった。ちょっとした物音にも、とても敏感になり、そのたびに、心臓が鳴った。そんな時に、親戚の人が遠い所から物資を持ってきてくれたり、近所の人が声をかけにきてくれた時は、不思議と心がおちつき、支えにもなったと思います。

残念なことに、中学校は半壊し、避難されている方も多いので、自分たちの教室で授業する事ができず、また授業時間も短いので、たっぷりと試験勉強をすることができませんでした。しかし、短い時間でも友達と会って話ができただけはとても嬉しい事でした。

今年の私立高校の受験は、書類選考だったので、私の受験校は、試験がありませんでした。私の友達は、私立専願者が多かったので、みんな合格が決定し、緊張感から開放されている中、私はますます不安になっていきました。そんな時は、よく母が励ましてくれました。今回、私が受験できたのも、家族や先生方のおかげだと、心から思いました。

いつの日か、震災の報道もなくなり、神戸が新しく生まれ変わったとしても、私は、地震の事を忘れません。そして現在、自分という一人の人間が生きている事で、生命の尊さと、地震の恐さを、あらためて思い知らされ

ています。

合格発表の日、自分の番号を見た時は、心からホッとしました。あまり自信がなかった分、合格した喜びは言い表すことができませんでした。制服を着た時、「神商生になれるんだ。」と心が弾みました。しかし、これからの高校生活は勉強の事、友達の事など、色々不安に感じる事もありますが、常に前向きに、目標に向かって努力したいと思います。



大地震に遭って

1年 細島 智琴

1月17日のことです。その日はなぜか私は午前5時30分ぐらいに目が覚めました。そしてもう一回眠ろうとふとんに入った時に床が少しゆれるような感じがしました。私はただの震度1か2のゆるい地震だと思っていましたが突然電気が切れ、強いゆれの地震がきたのです。私は何がなんだかわかりませんでした。まわりはまっくらでどうしたらいいのかわかりませんでした。ただ必死にその場からにげるだけでした。こんなことになるとは誰もが想像していなかったでしょう。入試勉強が大詰めになって、最後の力を入れようとしたときのことでした。家は全壊し、部屋や机、本棚とめちゃくちゃになり、勉強する道具さえどこに行ったかわからなくなりました。こ

れからどうなるのかと、不安な日々が続きました。

家がなくなってしまってわたしたちは、どうしたらいいのかわかりませんでした。家の車がワゴン車だったので車で生活することになりましたが、車の中では家族6人も生活できません。だから父は会社で、あと私と母は車で、他の子は親戚の家へと家族バラバラで生活することになりました。

もうすぐ入試だなんて考えることを忘れるほど毎日が生きることでせいいっぱいでした。水、電気、ガスとなんにもない生活がこんなに苦しくてつらいということを本当に実感しました。なにもかもが私にとって初めての経験でした。

毎日の不自由な生活にもしだいになれてきて、なんとか勉強をしなくてはいけないと少しあせる日々が続きました。遅れていた三者面談が2月のはじめにあり、志望高校がはっきりときまったので、少しほっとしたような気になりました。それから何日も車での生活が続きましたが、いつまでも車での生活が続くはずがないので半壊した祖父の家の2階を借りて寝起きをするようになりました。入試勉強は学校が午前の授業を始めて少ししてから近くの大学生のお姉さんが勉強できる部屋を提供して下さり、とてもうれしかった。私はそのとき、人と人は助け合って生きていけるのだと強く感じました。

私はこの大震災にあって人々の助け合い等、色々なことを経験できたと思います。

テレビが伝えた神戸商業

1年 永澤久美子

私は2週間程、祖父と祖母の住んでいる広島へと避難していました。私はその時、普通高校へ行くか商業へ行くかとても迷っていました。普通高校を卒業して大学に行きたかったし、商業に行ってがんばってたくさんの資

格も取りたいと思っていました。ゆっくり考えて結果を出そうと思っていました。だけど私の気持ちはだんだん、普通高校を進学する方に傾いていました。そんな時テレビで神戸各地の避難場所がうつっているのを見ていたら、神戸商業で「ドッチボール大会」や「朝のラジオ体操」をしているのを見ました。そして、神戸商業の生徒たちがみんなを楽しませる企画を考えたり、避難したりしている人達のボランティアをしていると、テレビをとおして私の耳に入りました。私は、そのテレビを見てとても強く心をうたれ感動しました。

困っている人に手をさしのべるのは、とてもいい事だと思う。神戸の人ほとんどが被害を受けていて、自分も苦しい中、困っている人に手をさしのべる事はそう簡単にできることではないと思いました。神戸商業の先生方がそういうすばらしい考え方で生徒に接しているからすばらしい生徒が育っていくんだろうなと思いました。あの神戸商業のテレビを見た人達は、とても感動し、被災者の人達はものすごい励みになったと思います。

私もあのテレビを見て励まされたうちの一人です。神戸商業の生徒たちもきっと地震の被害を受けたのにボランティアをしたり、みんなに、息ぬきさせてあげようとしたその優しい心が、被害にあった人だけでなく日本中の人々に伝わったと思います。

誰もが地震の被害にあった人達に何かしてあげようと思ったはずだと思うけど、なかなか行動に出すことができなく心の中で思うだけで終わってしまうけど、実際にする人はとてもすごいと思います。私もそのうちの一人です。いつも心の中で思うだけでその次の一歩が踏み出せません。だから私はその時、神戸商業はすばらしい学校だなと思いました。

私もこの学校で3年間学んだらそんな心のやさしい人間に少しでも近づけるのかなと思いました。それからいろいろ考えた結果、私は神戸商業を受験することに決めました。

れからどうなるのかと、不安な日々が続きました。

家がなくなってしまってわたしたちは、どうしたらいいのかわかりませんでした。家の車がワゴン車だったので車で生活することになりましたが、車の中では家族6人も生活できません。だから父は会社で、あと私と母は車で、他の子は親戚の家へと家族バラバラで生活することになりました。

もうすぐ入試だなんて考えることを忘れるほど毎日が生きることでせいいっぱいでした。水、電気、ガスとなんにもない生活がこんなに苦しくてつらいということを本当に実感しました。なにもかもが私にとって初めての経験でした。

毎日の不自由な生活にもしだいになれてきて、なんとか勉強をしなくてはいけないと少しあせる日々が続きました。遅れていた三者面談が2月のはじめにあり、志望高校がはっきりときまったので、少しほっとしたような気になりました。それから何日も車での生活が続きましたが、いつまでも車での生活が続くはずがないので半壊した祖父の家の2階を借りて寝起きをするようになりました。入試勉強は学校が午前の授業を始めて少ししてから近くの大学生のお姉さんが勉強できる部屋を提供して下さり、とてもうれしかった。私はそのとき、人と人は助け合って生きていけるのだと強く感じました。

私はこの大震災にあって人々の助け合い等、色々なことを経験できたと思います。

テレビが伝えた神戸商業

1年 永澤久美子

私は2週間程、祖父と祖母の住んでいる広島へと避難していました。私はその時、普通高校へ行くか商業へ行くかとても迷っていました。普通高校を卒業して大学に行きたかったし、商業に行ってもがんばってたくさんの資

格も取りたいと思っていました。ゆっくり考えて結果を出そうと思っていました。だけど私の気持ちはだんだん、普通高校を進学する方に傾いていました。そんな時テレビで神戸各地の避難場所がうつっているのを見ていたら、神戸商業で「ドッチボール大会」や「朝のラジオ体操」をしているのを見ました。そして、神戸商業の生徒たちがみんなを楽しませる企画を考えたり、避難したりしている人達のボランティアをしていると、テレビをとおして私の耳に入りました。私は、そのテレビを見てとても強く心をうたれ感動しました。

困っている人に手をさしのべるのは、とてもいい事だと思う。神戸の人ほとんどが被害を受けていて、自分も苦しい中、困っている人に手をさしのべる事はそう簡単にできることではないと思いました。神戸商業の先生方がそういうすばらしい考え方で生徒に接しているからすばらしい生徒が育っていくんだろうなと思いました。あの神戸商業のテレビを見た人達は、とても感動し、被災者の人達はものすごい励みになったと思います。

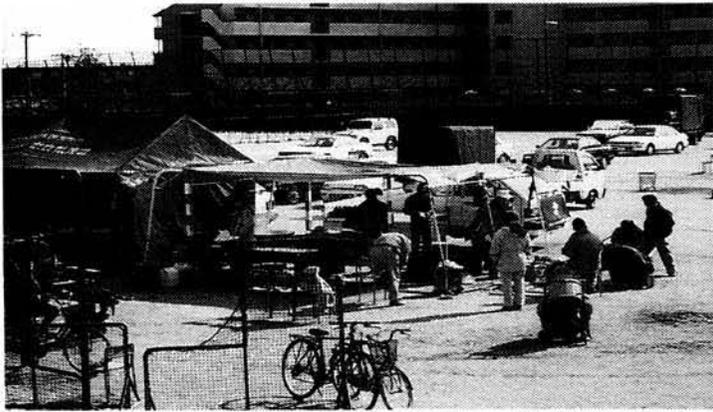
私もあのテレビを見て励まされたうちの一人です。神戸商業の生徒たちもきっと地震の被害を受けたのにボランティアをしたり、みんなに、息ぬきさせてあげようとしたその優しい心が、被害にあった人だけでなく日本中の人々に伝わったと思います。

誰もが地震の被害にあった人達に何かしてあげようと思ったはずだと思うけど、なかなか行動に出すことができなく心の中で思うだけで終わってしまうけど、実際にする人はとてもすごいと思います。私もそのうちの一人です。いつも心の中で思うだけでその次の一歩が踏み出せません。だから私はその時、神戸商業はすばらしい学校だなと思いました。

私もこの学校で3年間学んだらそんな心のやさしい人間に少しでも近づけるのかなと思いました。それからいろいろ考えた結果、私は神戸商業を受験することに決めました。

神戸商業は私の想像していた以上のすばらしい学校です。だから私は、今、神戸商業の生徒になれてとてもうれしいし、誇りに思っています。

そして、私も阪神大震災で神戸商業の先輩方がしたようなすばらしい事ができればいいなと思っています。



神商グランド

人間の助け合い

1年 宮本 文美

1月17日に地震が起きました。初めは何が起きたのか分からなくて、揺れがおさまってから外に出た時に、すごい地震が起きたんだという事がわかりました。今まで見なれていた建物などはすべて壊れていて、私の家の近くでも火事が起こっていました。この地震が起きてから約1ヵ月近くは学校にも行けませんでした。私の行っていた本庄中学では、この地震で10人の友達が亡くなりました。私と同じ学年だった人は4人です。今でもぜんぜん信じられません。私と同じクラスだった子も一人います。まだこんなに若いのに、これからもいろいろな事があるのに、なんで死んでしまったんだろうかと考えました。もしかして、自分が死んでいたのかもしれないと思うと、今一番やりたい事や、やっていかないとダメな事を、いつも考えていかないと、いけないんだなと思いました。

この震災では、たくさんの事を勉強しまし

た。これは、これから私が生きていく中でも大切な事だと思います。地震が起きてから一番うれしかった事は、私が水くみに行った時、ぜんぜん知らない人が水をはこぶのを手伝ってくれた事です。それも1回だけじゃなく何回もちがう人が手伝ってくれました。なんでこんなに親切なんだろうと思いました。家の近くの人でぜんぜん知り合いでもないおばさんとかでも助けてくれて、こんなにこの人は、いい人だったかなと思ったりしました。助け合いってこんなに大切な事なんて、はじめて気付いたと思います。それと、ボランティアの人がいろいろな事を手伝ってくれたり、子供たちと遊んでくれたり、すごい人たちだなと思いました。なぜなら、いつまた地震が起きるかもしれない神戸に来て、ガスも水も出なくてテントで暮らして、お金ももらわずみんなのために働いてくれたからです。私だったらそんな行動はできないだろうなと思います。本当に人間の助け合いってすごい力があるんだなと思いました。地震が起きて、だいぶ時間がたった今は、地震のこわさがなくなってきました。でもこの地震で感じた事や、学んだ事は、ぜったい忘れたくないと思います。これからは、なくなった人たちのぶんまで、私たちが一生懸命に生きていきたいです。

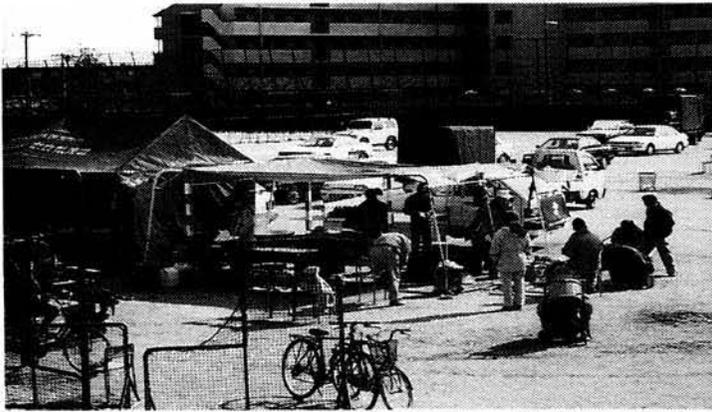
加古川での受験

1年 塩谷 理紗

私は地震後、神戸にいてもなかなか中学校が始まらないので、2ヵ月ほど加古川のいとこの家に行っていました。私はその2ヵ月の間、加古川中学校という学校で勉強しました。そこでは神戸の中学校と違って勉強の内容がとても進んでいたのも、追いつくのが大変でした。先生方がとてもやさしくて休みの日も勉強を教えてくださいました。友達もたくさんできて毎日畑や加古川へ寄り道をしていました。はっきりいって私は受験勉強をあまりし

神戸商業は私の想像していた以上のすばらしい学校です。だから私は、今、神戸商業の生徒になれてとてもうれしいし、誇りに思っています。

そして、私も阪神大震災で神戸商業の先輩方がしたようなすばらしい事ができればいいなと思っています。



神商グランド

人間の助け合い

1年 宮本 文美

1月17日に地震が起きました。初めは何が起きたのか分からなくて、揺れがおさまってから外に出た時に、すごい地震が起きたんだという事がわかりました。今まで見なれていた建物などはすべて壊れていて、私の家の近くでも火事が起こっていました。この地震が起きてから約1ヵ月近くは学校にも行けませんでした。私の行っていた本庄中学では、この地震で10人の友達が亡くなりました。私と同じ学年だった人は4人です。今でもぜんぜん信じられません。私と同じクラスだった子も一人います。まだこんなに若いのに、これからもいろいろな事があるのに、なんで死んでしまったんだろうかと考えました。もしかして、自分が死んでいたのかもしれないと思うと、今一番やりたい事や、やっていかないとダメな事を、いつも考えていかないと、いけないんだなと思いました。

この震災では、たくさんの事を勉強しまし

た。これは、これから私が生きていく中でも大切な事だと思います。地震が起きてから一番うれしかった事は、私が水くみに行った時、ぜんぜん知らない人が水をはこぶのを手伝ってくれた事です。それも1回だけじゃなく何回もちがう人が手伝ってくれました。なんでこんなに親切なんだろうと思いました。家の近くの人でぜんぜん知り合いでもないおばさんとかでも助けてくれて、こんなにこの人は、いい人だったかなと思ったりしました。助け合いってこんなに大切な事なんて、はじめて気付いたと思います。それと、ボランティアの人がいろいろな事を手伝ってくれたり、子供たちと遊んでくれたり、すごい人たちだなと思いました。なぜなら、いつまた地震が起きるかもしれない神戸に来て、ガスも水も出なくてテントで暮らして、お金ももらわずみんなのために働いてくれたからです。私だったらそんな行動はできないだろうなと思います。本当に人間の助け合いってすごい力があるんだなと思いました。地震が起きて、だいぶ時間がたった今は、地震のこわさがなくなってきました。でもこの地震で感じた事や、学んだ事は、ぜったい忘れたくないと思います。これからは、なくなった人たちのぶんまで、私たちが一生懸命に生きていきたいです。

加古川での受験

1年 塩谷 理紗

私は地震後、神戸にいてもなかなか中学校が始まらないので、2ヵ月ほど加古川のいとこの家に行っていました。私はその2ヵ月の間、加古川中学校という学校で勉強しました。そこでは神戸の中学校と違って勉強の内容がとても進んでいたのので、追いつくのが大変でした。先生方がとてもやさしくて休みの日でも勉強を教えてくださいました。友達もたくさんできて毎日畑や加古川へ寄り道をしていました。はっきりいって私は受験勉強をあまりし

ませんでした。いとこの家に帰るといつも神戸の友達と電話のやりとりです。私の希望していた私立の高校は、書類選考になったので余計に勉強しなくなってしまいました。でも公立の入試が近づくとつれてだんだん心配になってきて少しずつ勉強を始めました。そのおかげで中学校の期末テストでは数学と英語が80点以上とれました。

私の受験会場は加古川東高校という加古川で一番レベルの高い高校でとても不安でした。でも幼なじみでとても仲の良かった子と一緒に教室だったので、落ち着いて試験を受けることができました。

合格発表の前夜、私は緊張してなかなか眠れませんでした。そして合格発表の日は、もう不合格でも仕方がないという気持ちと、やっぱり合格していたいという気持ちで頭がいっぱいでした。その日私は初めて神商の中に入りました。入るとすぐに合格者の番号が掲示されていました。私は自分の番号の方を目をそらして全然関係のない所から見ていきました。そして自分の番号を見つけたとき、とてもうれしくて隣にいた友達と思わず抱き合ってしまった。今までで二番目に嬉しかったことでした。

今年は震災の中での受験でとても大変だったけど、すごく貴重な体験をすることができました。この貴重な体験を忘れないようにしたいと思います。

不安だった受験

1年 大西 美里

1月17日、わすれもしない大地震が起きた。あの「ドーン」という音とともに家がたてに大きくふられ、そして「ガタガタ」とずっとゆれていた。タンスや本、額、ステレオ、家の中にあったものすべてが落ちていた。私の寝ていたうえには本などたくさんあった。はじめ、もう何がなんだかさっぱりわからず

とにかく家がものすごい音とともにゆれているのがとてもこわかった。そして、その日から私達家族は小学校へと避難した。家の瓦はほとんど落ち、壁も崩れて、前の家じゃないくらいひどくなっていた。私達、家族はみんな無事でほんとはよかった。

それからは、小さな揺れにも、敏感になり避難所での生活は忘れられないものであった。

それから学校もずっと休みで、受験のことなど私の頭から完璧にうすれていっていた。

2月のはじめやっと学校がはじまりだした。学校の先生やお母さんに今まで忘れてしまっていた「受験」のことをいわれ、すごく受験するのがこわかった。教科書などは、あの家からとることができたのが救いだった。それから少しずつ、私は避難所や、私の友達の大丈夫だった家をかりて勉強するようになった。しかし、勉強してても、揺れを感じると不安を感じなかなか落ち着くことができなかった。だが、2月の中ごろ、近くに大丈夫だったマンションがあり、そこをかりて生活することができた。前の家から、必要なものをもって運んできて、やっと家が火も電気も使えもとどおりの生活にもどることができた。私達家族は本当によかったです。そして、少しずつ不安も消え、「受験」にむかって勉強することができた。しかし、日はたつばかりでだんだんと近づいてくるにつれて、「受かるかな」と心配が大きくなる一方だった。私学は、書類選考で、うかることができたのでよかった。私学をうかったので少しは安心できた。でもやっぱり公立この神戸商業にうかることが目的なので、もう時間はないが少しでも何か勉強をしておこうと思い、震災に負けず頑張りました。そして、受験当日、不安や緊張の中テストを受けた。そして合格できて本当にうれしかった。

震災の中、受験のことにも頭を悩ませられたが、それにも負けず、ちゃんとできてよかったです。でも、本当にこの震災のことは忘れ

ませんでした。いとこの家に帰るといつも神戸の友達と電話のやりとりです。私の希望していた私立の高校は、書類選考になったので余計に勉強しなくなってしまいました。でも公立の入試が近づくとつれてだんだん心配になってきて少しずつ勉強を始めました。そのおかげで中学校の期末テストでは数学と英語が80点以上とれました。

私の受験会場は加古川東高校という加古川で一番レベルの高い高校でとても不安でした。でも幼なじみでとても仲の良かった子と一緒に教室だったので、落ち着いて試験を受けることができました。

合格発表の前夜、私は緊張してなかなか眠れませんでした。そして合格発表の日は、もう不合格でも仕方がないという気持ちと、やっぱり合格したいという気持ちで頭がいっぱいでした。その日私は初めて神商の中に入りました。入るとすぐに合格者の番号が掲示されていました。私は自分の番号の方を目をそらして全然関係のない所から見ていきました。そして自分の番号を見つけたとき、とてもうれしくて隣にいた友達と思わず抱き合ってしまった。今までで二番目に嬉しかったことでした。

今年は震災の中での受験でとても大変だったけど、すごく貴重な体験をすることができました。この貴重な体験を忘れないようにしたいと思います。

不安だった受験

1年 大西 美里

1月17日、わすれもしない大地震が起きた。あの「ドーン」という音とともに家がたてに大きくふられ、そして「ガタガタ」とずっとゆれていた。タンスや本、額、ステレオ、家の中にあったものすべてが落ちていた。私の寝ていたうえには本などたくさんあった。はじめ、もう何がなんだかさっぱりわからず

とにかく家がものすごい音とともにゆれているのがとてもこわかった。そして、その日から私達家族は小学校へと避難した。家の瓦はほとんど落ち、壁も崩れて、前の家じゃないくらいひどくなっていた。私達、家族はみんな無事でほんとはよかった。

それからは、小さな揺れにも、敏感になり避難所での生活は忘れられないものであった。

それから学校もずっと休みで、受験のことなど私の頭から完璧にうすれていっていた。

2月のはじめやっと学校がはじまりだした。学校の先生やお母さんに今まで忘れてしまっていた「受験」のことをいわれ、すごく受験するのがこわかった。教科書などは、あの家からとることができたのが救いだった。それから少しずつ、私は避難所や、私の友達の大丈夫だった家をかりて勉強するようになった。しかし、勉強してても、揺れを感じると不安を感じなかなか落ち着くことができなかった。だが、2月の中ごろ、近くに大丈夫だったマンションがあり、そこをかりて生活することができた。前の家から、必要なものをもって運んできて、やっと家が火も電気も使えもどおりの生活にもどることができた。私達家族は本当によかったです。そして、少しずつ不安も消え、「受験」にむかって勉強することができた。しかし、日はたつばかりでだんだんと近づいてくるにつれて、「受かるかな」と心配が大きくなる一方だった。私学は、書類選考で、うかることができたのでよかった。私学をうかったので少しは安心できた。でもやっぱり公立この神戸商業にうかることが目的なので、もう時間はないが少しでも何か勉強をしておこうと思い、震災に負けず頑張りました。そして、受験当日、不安や緊張の中テストを受けた。そして合格できて本当にうれしかった。

震災の中、受験のことにも頭を悩ませられたが、それにも負けず、ちゃんとできてよかったです。でも、本当にこの震災のことは忘れ

ることなんてできないだろうナ。

亡くなった友達

1年 渡海 博司

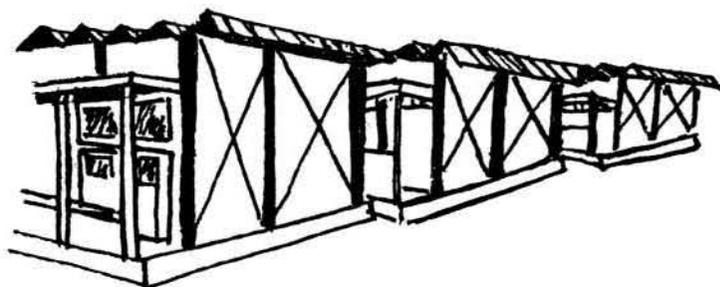
1月17日、その日は、部活も引退して、受験までの間の大事な時期だった。ぼくの自宅は震災によって全壊してしまった。震災のあと一ヵ月ほど大阪のいとこの家で生活させてもらった。震災で学校の図書室、職員室、体育館などが燃えてしまった。同じ学年だった友達を震災で亡くし、お葬式も行って、とても悲しかった。その友達の分まで生きようと思った。そして卒業式の日が来た。まさかまさかこんな形で卒業式を迎えるなんて思わなかった。卒業式も学校は使えないので学校の近くの場所を借りて式を行った。TVや新聞記者の人たちも来ていた。小学校からの友達を亡くして卒業式をむかえたことがとても残念だった。卒業式が終わっても、まだ高校受験が残っていた。もうみんなは、それぞれ違う道へと進んでいく。受験当日は、あまり緊張とかはしなかったけど、受験が終わって家に帰った時は、とてもしんどかった。

合格発表の日、自分の番号があってうれしかった。

学校は震災によってつぶれていた。だから自分達は仮設教室で授業をすることになった。商業科目は最初は、よく分からなかったけど、今は少しずつ分かってきている。情報処理や、簿記など今まで学んだ事のない教科は、しっかり覚えることが出来るか心配だった。仮設校舎があるから運動場が、広く使えなかったり、体育館は避難者がたくさんいたり、何ヵ月の間は、そういう状態だったけど、今は避難者が体育館にいなくなって、体育館で部活もできるようになった。

中学とはちがって、電車を使って学校へ来ている。朝早く起きることが最初は、さすがにきつかったけど、そろそろ習慣づいてきた。

震災がなかったら、もっといい高校生活がおくれたかもしれないけど、震災で亡くした友達のためにも、がんばっていかなければならないと思っている。部活も、あまり満足いく成績は残せていないが、これからは、努力をして満足いく成績が残せるようにしてゆきたい。いつまで仮設校舎で高校生活をするかは、分からないけど、ここでもがんばってゆきたいと思う。



みんなのぬくもり

1年 片山 志乃

この高校に入学してもう半年が過ぎました。神戸の町にもようやく落ちつきが見られ、私の避難所での生活もあの震災から9ヵ月たった今終わろうとしています。

9ヵ月前の私は、まだ続く余震におびえながら、受験との戦いの毎日でした。精神的にダウンしてしまうこともありました。そんな中でいつも支えてくれたのは避難所での生活を共にした人たちや友達でした。いつも優しく笑いかけてくれるおばあさんや、少し気を使って明るくしてくれる友達がいたから私は今こうしていられるんだと思います。

受験の当日、避難所の人達にあたたかく見守られながら学校を出た私は抑えきれない緊張感とみんなのぬくもりに涙が出そうになった事が今も忘れられません。そして合格した時のうれしさも。その時のうれしさに涙を流してくれた人もいました。

この9ヵ月間は私にとって一生忘れられる

ることなんてできないだろうナ。

亡くなった友達

1年 渡海 博司

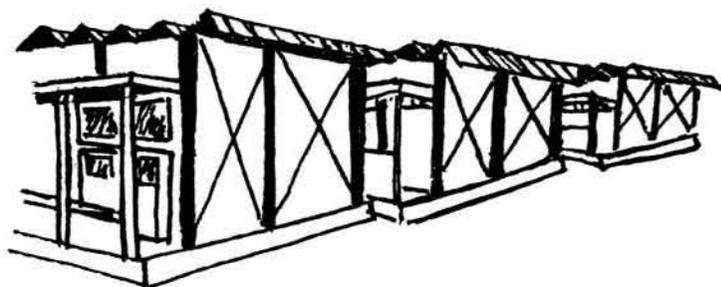
1月17日、その日は、部活も引退して、受験までの間の大事な時期だった。ぼくの自宅は震災によって全壊してしまった。震災のあと一ヵ月ほど大阪のいとこの家で生活させてもらった。震災で学校の図書室、職員室、体育館などが燃えてしまった。同じ学年だった友達を震災で亡くし、お葬式も行って、とても悲しかった。その友達の分まで生きようと思った。そして卒業式の日が来た。まさかまさかこんな形で卒業式を迎えるなんて思わなかった。卒業式も学校は使えないので学校の近くの場所を借りて式を行った。TVや新聞記者の人たちも来ていた。小学校からの友達を亡くして卒業式をむかえたことがとても残念だった。卒業式が終わっても、まだ高校受験が残っていた。もうみんなは、それぞれ違う道へと進んでいく。受験当日は、あまり緊張とかはしなかったけど、受験が終わって家に帰った時は、とてもしんどかった。

合格発表の日、自分の番号があってうれしかった。

学校は震災によってつぶれていた。だから自分達は仮設教室で授業をすることになった。商業科目は最初は、よく分からなかったけど、今は少しずつ分かってきている。情報処理や、簿記など今まで学んだ事のない教科は、しっかり覚えることが出来るか心配だった。仮設校舎があるから運動場が、広く使えなかったり、体育館は避難者がたくさんいたり、何ヵ月の間は、そういう状態だったけど、今は避難者が体育館にいなくなって、体育館で部活もできるようになった。

中学とはちがって、電車を使って学校へ来ている。朝早く起きることが最初は、さすがにきつかったけど、そろそろ習慣づいてきた。

震災がなかったら、もっといい高校生活がおくれたかもしれないけど、震災で亡くした友達のためにも、がんばっていかなければならないと思っている。部活も、あまり満足いく成績は残せていないが、これからは、努力をして満足いく成績が残せるようにしてゆきたい。いつまで仮設校舎で高校生活をするかは、分からないけど、ここでもがんばってゆきたいと思う。



みんなのぬくもり

1年 片山 志乃

この高校に入学してもう半年が過ぎました。神戸の町にもようやく落ちつきが見られ、私の避難所での生活もあの震災から9ヵ月たった今終わろうとしています。

9ヵ月前の私は、まだ続く余震におびえながら、受験との戦いの毎日でした。精神的にダウンしてしまうこともありました。そんな中でいつも支えてくれたのは避難所での生活を共にした人たちや友達でした。いつも優しく笑いかけてくれるおばあさんや、少し気を使って明るくしてくれる友達がいたから私は今こうしていられるんだと思います。

受験の当日、避難所の人達にあたたかく見守られながら学校を出た私は抑えきれない緊張感とみんなのぬくもりに涙が出そうになった事が今も忘れられません。そして合格した時のうれしさも。その時のうれしさに涙を流してくれた人もいました。

この9ヵ月間は私にとって一生忘れられる

ることなんてできないだろうナ。

亡くなった友達

1年 渡海 博司

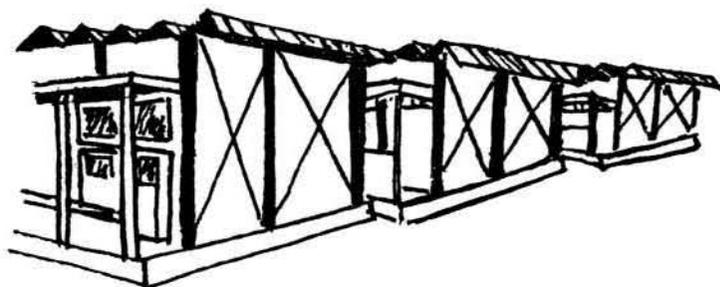
1月17日、その日は、部活も引退して、受験までの間の大事な時期だった。ぼくの自宅は震災によって全壊してしまった。震災のあと一ヵ月ほど大阪のいとこの家で生活させてもらった。震災で学校の図書室、職員室、体育館などが燃えてしまった。同じ学年だった友達を震災で亡くし、お葬式も行って、とても悲しかった。その友達の分まで生きようと思った。そして卒業式の日が来た。まさかまさかこんな形で卒業式を迎えるなんて思わなかった。卒業式も学校は使えないので学校の近くの場所を借りて式を行った。TVや新聞記者の人たちも来ていた。小学校からの友達を亡くして卒業式をむかえたことがとても残念だった。卒業式が終わっても、まだ高校受験が残っていた。もうみんなは、それぞれ違う道へと進んでいく。受験当日は、あまり緊張とかはしなかったけど、受験が終わって家に帰った時は、とてもしんどかった。

合格発表の日、自分の番号があってうれしかった。

学校は震災によってつぶれていた。だから自分達は仮設教室で授業をすることになった。商業科目は最初は、よく分からなかったけど、今は少しずつ分かってきている。情報処理や、簿記など今まで学んだ事のない教科は、しっかり覚えることが出来るか心配だった。仮設校舎があるから運動場が、広く使えなかったり、体育館は避難者がたくさんいたり、何ヵ月の間は、そういう状態だったけど、今は避難者が体育館にいなくなって、体育館で部活もできるようになった。

中学とはちがって、電車を使って学校へ来ている。朝早く起きることが最初は、さすがにきつかったけど、そろそろ習慣づいてきた。

震災がなかったら、もっといい高校生活がおくれたかもしれないけど、震災で亡くした友達のためにも、がんばっていかなければならないと思っている。部活も、あまり満足いく成績は残せていないが、これからは、努力をして満足いく成績が残せるようにしてゆきたい。いつまで仮設校舎で高校生活をするかは、分からないけど、ここでもがんばってゆきたいと思う。



みんなのぬくもり

1年 片山 志乃

この高校に入学してもう半年が過ぎました。神戸の町にもようやく落ちつきが見られ、私の避難所での生活もあの震災から9ヵ月たった今終わろうとしています。

9ヵ月前の私は、まだ続く余震におびえながら、受験との戦いの毎日でした。精神的にダウンしてしまうこともありました。そんな中でいつも支えてくれたのは避難所での生活を共にした人たちや友達でした。いつも優しく笑いかけてくれるおばあさんや、少し気を使って明るくしてくれる友達がいたから私は今こうしていられるんだと思います。

受験の当日、避難所の人達にあたたかく見守られながら学校を出た私は抑えきれない緊張感とみんなのぬくもりに涙が出そうになった事が今も忘れられません。そして合格した時のうれしさも。その時のうれしさに涙を流してくれた人もいました。

この9ヵ月間は私にとって一生忘れられる

事のない日々になったと思います。たしかに失うものの方が多かったかもしれませんが、でもこれをきっかけに教えられた事もたくさんあると思います。私は今までに感じた事のない人のぬくもりを感じました。そして、人の命の大切さを改めて実感させられました。また他にも数えきれないほどの体験をしました。きっとこれらの体験はこれからの私の大きな支えになってくれると思います。

私たちと共に復興していく神戸の町を私はずっと愛していたいです。そして何年後かに復興した神戸が、いろんな事を学んだ分すばらしい町になっていると思います。その時こそ、この震災をさけていくのではなく、みんながぶつかっていけたらいいと思います。そして、犠牲になってしまった人達の分もみんな一人ひとりが精一杯生きてほしいです。そのためにも、この事はずっと胸に刻み込まなければいけません。自分たちが幸せに生きていくためにも、犠牲になってしまった人たちにいつもあたたかく見守ってもらうためにも。私は永遠に神戸の町を愛し続けます。

地震で失ったもの、得たもの

1年 山本 佳奈

1月17日私の家は全壊した。私達家族は家の下敷きになった祖母を助け出し、家の前の大通りへ出た。阪神の高架は落ちその先で電車が止まったままの状態、そして異様なほどのガスのにおいと少し離れたところでは煙があがっていた。私は立っていることができなかった。真暗な中で火災が発生しているところだけが、明るく光っていた。だんだん日が上り明るくなったころ、一人の友達が私のところに来てくれた。私はその子と抱き合い「大丈夫やった？」と、何回もくり返し聞いた。すごく涙が出た。それから何時間後かに私達家族は近くの避難所になっている小学校へと向かった。でも、

そこには人があふれるくらいいて、とても入れる状態ではなかった。ところが、小学校の隣にある幼稚園は避難所ではなかったのに、開けてくれていてそこに避難することになった。電気が回復するまでの間一日がとても長く夜は6時をすぎると真暗になり何もできなかった。私達の中学校は本館が燃えた上に、避難者がいっぱい授業などと言っている場合ではなかった。そして、ある日私にとって重くのしかかってきた真実があった。毎日毎日死者が多くなっていったとき、友達は大丈夫だろうと思っていたのに、友達から「ケイコとリュウタが亡くなった。それとヨーチャンが意識不明の重体やねんて！」と聞いた。私は予想もしていなかったことを言われて、戸惑った。そして泣きくずれた。みんな泣いていた。さらに亡くなる子なんていないと信じたのに、もう一人もつれていかれてしまった。私達はヨウチャンが回復してくれることだけを願った。授業も近くのホールを借りてできるようになった。卒業式もさせていただいた。だけどヨーチャンはこなかった。

私達は高校に合格し春休みを迎えた。私は友達と三宮に出かけたとき、本屋で雑誌をみていた。そしたら「15才の少女（ピアノの下敷きになっていた）奇跡的に助かる！」という題名をみて本を手にとり、ページをめくった。そこにはヨーチャンの笑った写真が載っていた。それを読むとまだ少ししか話せないが、もう大丈夫だと書いてあった。私と友達はとてもうれしくて涙が出そうだった。この震災で家や友達を失ってしまったけど、避難所で生活してボランティアさんの手伝いもできたし、団体生活というものができたからよかったと思います。失ったものも多かったけど、それ以上に得たものが大きくてよかったです。あの経験をいつかまた何かの形で、役に立たせたらいいなと思います。

事のない日々になったと思います。たしかに失うものの方が多かったかもしれませんが、でもこれをきっかけに教えられた事もたくさんあると思います。私は今までに感じた事のない人のぬくもりを感じました。そして、人の命の大切さを改めて実感させられました。また他にも数えきれないほどの体験をしました。きっとこれらの体験はこれからの私の大きな支えになってくれると思います。

私たちと共に復興していく神戸の町を私はずっと愛していたいです。そして何年後かに復興した神戸が、いろんな事を学んだ分すばらしい町になっていると思います。その時こそ、この震災をさけていくのではなく、みんながぶつかっていけたらいいと思います。そして、犠牲になってしまった人達の分もみんな一人ひとりが精一杯生きてほしいです。そのためにも、この事はずっと胸に刻み込まなければいけません。自分たちが幸せに生きていくためにも、犠牲になってしまった人たちにいつもあたたかく見守ってもらうためにも。私は永遠に神戸の町を愛し続けます。

地震で失ったもの、得たもの

1年 山本 佳奈

1月17日私の家は全壊した。私達家族は家の下敷きになった祖母を助け出し、家の前の大通りへ出た。阪神の高架は落ちその先で電車が止まったままの状態、そして異様なほどのガスのにおいと少し離れたところでは煙があがっていた。私は立っていることができなかった。真暗な中で火災が発生しているところだけが、明るく光っていた。だんだん日が上り明るくなったころ、一人の友達が私のところに来てくれた。私はその子と抱き合い「大丈夫やった？」と、何回もくり返し聞いた。すごく涙が出た。それから何時間後かに私達家族は近くの避難所になっている小学校へと向かった。でも、

そこには人があふれるくらいいて、とても入れる状態ではなかった。ところが、小学校の隣にある幼稚園は避難所ではなかったのに、開けてくれていてそこに避難することになった。電気が回復するまでの間一日がとても長く夜は6時をすぎると真暗になり何もできなかった。私達の中学校は本館が燃えた上に、避難者がいっぱいいて授業などと言っている場合ではなかった。そして、ある日私にとって重くのしかかってきた真実があった。毎日毎日死者が多くなっていったとき、友達は大丈夫だろうと思っていたのに、友達から「ケイコとリュウタが亡くなった。それとヨーチャンが意識不明の重体やねんて！」と聞いた。私は予想もしていなかったことを言われて、戸惑った。そして泣きくずれた。みんな泣いていた。さらに亡くなる子なんていないと信じたのに、もう一人もつれていかれてしまった。私達はヨウチャンが回復してくれることだけを願った。授業も近くのホールを借りてできるようになった。卒業式もさせていただいた。だけどヨーチャンはこなかった。

私達は高校に合格し春休みを迎えた。私は友達と三宮に出かけたとき、本屋で雑誌をみていた。そしたら「15才の少女（ピアノの下敷きになっていた）奇跡的に助かる！」という題名をみて本を手にとり、ページをめくった。そこにはヨーチャンの笑った写真が載っていた。それを読むとまだ少ししか話せないが、もう大丈夫だと書いてあった。私と友達はとてもうれしくて涙が出そうだった。この震災で家や友達を失ってしまったけど、避難所で生活してボランティアさんの手伝いもできたし、団体生活というものができたからよかったと思います。失ったものも多かったけど、それ以上に得たものが大きくてよかったです。あの経験をいつかまた何かの形で、役に立たせたらいいなと思います。

呼びかけに応える神戸

1年 井上 幸

静かに目を閉じてみた。あれは忘れもしない1月17日、午前5時46分、淡路島を中心とした震度7の地震が神戸を襲った。

その頃、強い地震が起きている事すら知らずに寝ていた私は、必死に名前を呼ぶ声で目が覚めた。気がつくやうに、倒れかけているダンスを背にしたお母さんが私の体におおいかぶさっていた。強い揺れは、数秒ではあったがすごく時間が過ぎたかのように感じた。

揺れが収まり、私とお母さんは、外に出ようとふすまを開けるが、開かない。ふと窓を見ると幸いなことに窓が窓ごとはずれていた。そこから出て、みんなが集まっている所に行った。辺りを見回すと何本もの火が燃え広がっていた。又、あの阪神高速道路が無残に横倒しになっていた。サイレンが鳴り響いている中、私は、茫然としてしまい、ひたすら「夢であれば…」と思うばかりだった。

少し時間がたってから、おじさんが迎えに来てくれて、私とお母さんは、おじさんの家へと行った。夜は、地震の恐怖を覚えたせいか余震がすごく怖かった。

テレビで被災地の状況を見た時は、本当に驚いた。神戸が一瞬のうちにガレキの街に変わっていく……。崩れていく神戸がすごく切なく思えた。

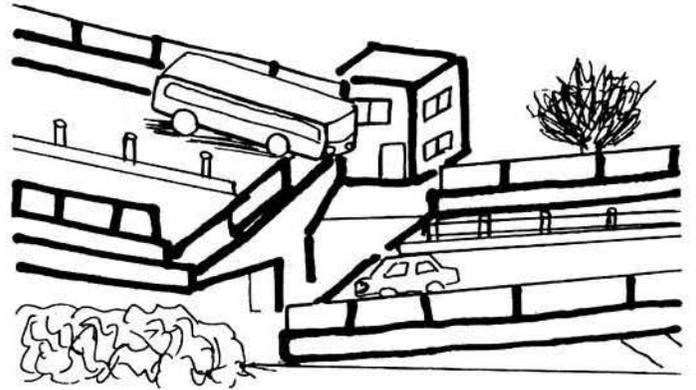
阪神大震災が起こる前に北海道の方であった地震の時、今から思うと「自分には関係ない」と人事のように思っていた自分がとても情けなく思えた。

私達が経験した阪神大震災は、失ったものが、あまりにも大きかったせいか得たものも少なくはない。人の温かさ、水の大切さ、周りからの援助など。

滅びかけた街、神戸は生き返れという呼びかけに、新しい神戸として懸命に応えようとしている。

あの地震で人々の心にも大きなダメージとなり、計り知れない傷を残した。

この心の傷は私自身一生消えないだろう…。



震災の後で

1年 中西 祥子

今日は、もしかして学校休みかな？と心の中で思いながら、パジャマ姿にコートをはおって外に出た。見た感じでは、あんなにゆれてた割に、そんなに被害はないなと初めは思った。家の中はまだあぶないから、車の中で寝ようとしたら、ラジオから「震度6以上の……、震源地は、淡路島の……、」。

お昼前になって、家の中に入ってみると、部屋の中は、教科書や、鍋やラジカセや、とりあえずいろんな物が散らばっていて、前に進むためには、必ず何かを踏んで歩いていた。この時までは、そう怖いとは思っていなかった。本当に怖かったのは、その日の夜の事。

電気は、お昼過ぎくらいから通っていて、テレビはずっとつけっぱなしだった。

夜、食事は適当にすませて、我が家の一番せまい部屋に2組ふとんを敷き、4人で苦しいくらいにひっつき合って寝ようとしたその時に、火災がどんどん広がって行って、兵庫区にまでやってきた。中央区にまで広がるんだらうか、いろんな事を考えた。火が家にまできたら何を持って逃げたらいいんだらう。死んでしまうのんだらうか、家の中に消防車の

呼びかけに応える神戸

1年 井上 幸

静かに目を閉じてみた。あれは忘れもしない1月17日、午前5時46分、淡路島を中心とした震度7の地震が神戸を襲った。

その頃、強い地震が起きている事すら知らずに寝ていた私は、必死に名前を呼ぶ声で目が覚めた。気がつくやうに、倒れかけているダンスを背にしたお母さんが私の体におおいかぶさっていた。強い揺れは、数秒ではあったがすごく時間が過ぎたかのように感じた。

揺れが収まり、私とお母さんは、外に出ようとふすまを開けるが、開かない。ふと窓を見ると幸いなことに窓が窓ごとはずれていた。そこから出て、みんなが集まっている所に行った。辺りを見回すと何本もの火が燃え広がっていた。又、あの阪神高速道路が無残に横倒しになっていた。サイレンが鳴り響いている中、私は、茫然としてしまい、ひたすら「夢であれば…」と思うばかりだった。

少し時間がたってから、おじさんが迎えに来てくれて、私とお母さんは、おじさんの家へと行った。夜は、地震の恐怖を覚えたせいか余震がすごく怖かった。

テレビで被災地の状況を見た時は、本当に驚いた。神戸が一瞬のうちにガレキの街に変わっていく……。崩れていく神戸がすごく切なく思えた。

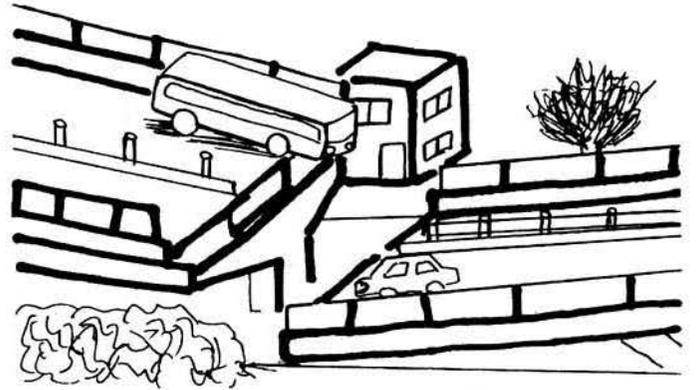
阪神大震災が起こる前に北海道の方であった地震の時、今から思うと「自分には関係ない」と人事のように思っていた自分がとても情けなく思えた。

私達が経験した阪神大震災は、失ったものが、あまりにも大きかったせいか得たものも少なくはない。人の温かさ、水の大切さ、周りからの援助など。

滅びかけた街、神戸は生き返れという呼びかけに、新しい神戸として懸命に応えようとしている。

あの地震で人々の心にも大きなダメージとなり、計り知れない傷を残した。

この心の傷は私自身一生消えないだろう…。



震災の後で

1年 中西 祥子

今日は、もしかして学校休みかな？と心の中で思いながら、パジャマ姿にコートをはおって外に出た。見た感じでは、あんなにゆれてた割に、そんなに被害はないなと初めは思った。家の中はまだあぶないから、車の中で寝ようとしたら、ラジオから「震度6以上の……、震源地は、淡路島の……、」。

お昼前になって、家の中に入ってみると、部屋の中は、教科書や、鍋やラジカセや、とりあえずいろんな物が散らばっていて、前に進むためには、必ず何かを踏んで歩いていた。この時までは、そう怖いとは思っていなかった。本当に怖かったのは、その日の夜の事。

電気は、お昼過ぎくらいから通っていて、テレビはずっとつけっぱなしだった。

夜、食事は適当にすませて、我が家の一番せまい部屋に2組ふとんを敷き、4人で苦しいくらいにひっつき合って寝ようとしたその時に、火災がどんどん広がって行って、兵庫区にまでやってきた。中央区にまで広がるんだらうか、いろんな事を考えた。火が家にまできたら何を持って逃げたらいいんだらう。死んでしまうのんだらうか、家の中に消防車の

サイレンが聞こえてくる。ベランダからのぞいてみると右手には、煙しか見えなかった。余震も続いて、この日の夜は全然眠れなかった。

人間、何もしなくても、お腹だけはすぐもんで、地震のあとは、電子レンジがよく働いた。でも水が出ないのは、本当に苦しかった。食器も洗えずに同じ物を使うし、何といってもお風呂に入れなかった。洗濯物も少なからず、だんだん増えていき、みんなの気もいらだっていった。家の近くで水が出ると聞いて、両手いっぱいに入れ物をもって走って行ってみると、たくさんの人人…。夜は特別寒くてちぢみ上がりそうな程の中、何時間も何時間もまってやっと水をくめる。でもそんな程度のものじゃ満足に使えなくて、気がいら立っただけだった。そんな日が約1ヵ月続いた。2月14日、やっと、本当にやっと水が出て、その日は本当にうれしかった。

普段なにげなく使っている物（水・電気・ガス）が少しの間、使えなくなるだけで、気が立ったり、物事をしたくなくなったりした。そんな時心配して電話をかけてきてくれ、優しい言葉をかけてくれた人達がいた。そんな人達に感謝しています。

受験と阪神大震災

1年 有野 真矢

私は受験生だった。受験生—つまり一年後にひかえる入学試験の為に勉学に励まねばならない学生—だった最初の頃の私は、勉強にうちこめる環境が与えられているのにもかかわらず、「こんな所入試にでないからちょっと休憩。」と言ってマンガを読んだり、「こんなん覚えて何の役に立つの?」といった「勉強から離れる為の口実」を作って集中して勉強していなかったと思う。そしてダラダラと勉強している為、時間だけがかかって、寝るのはいつも遅く、その日もいつものよう

に家族がとっくに寝静まった頃にふとんに入った。

（何、何だろう？夢かな、揺れている、地震だ、これはいつもの地震なんかじゃない、）

浅い眠りの中で異変を感じた私は、飛び起きた。家具が倒れて家中ぐちゃぐちゃだった。ほこりっぽく何だか口の中が酸っぱい。母の呼ぶ声がする。妹も弟もみんな無事だ。そして、あわてて外へ出ようとしたがドアが開かない。私の家のドアは外の人が押し入る引きドアの為、建物が少しゆがんでしまったのだろうか、引いても引いても開かない。「こんな所に閉じ込められたらどうなるのだろう。もしかして建物は崩れるかもしれない、」私の心にそんな恐怖が走った。

「助けて、ドアを開けて下さい、助けて、」

私は叫んだ。皆も叫んだ。すると、同じマンションに住む男性がドアを蹴破ってくれた。ありがとう、ありがとうと礼を言って私達は建物から出た。マンションの前にあった1戸建の家が、傾いていた。外へ出た私達のまわりには、夢の続きであることを祈りたくなるような光景が続いていた。

避難所生活が始まった。こんなに多くの人と同じ空間で日々を過ごすなんて初めてではないだろうか。満足にも食べられないし、少し寒い。「片田さん大丈夫かなあ。」と、友達の事も心配になる。そして私は受験生。もしもこの生活が、受験日まで続いたらどうしよう。あせってくる。「勉強したい、」と私は感じた。勉強嫌いの私がこんな事を考えるなんて初めてのことだ。しかし、私はその時本当に、今までの落ち着いて勉強にうち込めるといふ、これまでは当たり前だと感じていた、そして今は素晴らしく恵まれていると感じるその環境にしながら、勉強をダラダラとしかしなかった私を悔やんだ。「あの時もっとちゃんと勉強しておけば良かった、」とくやしく思った。

避難所での生活は時間がただ過ぎゆくだけ

サイレンが聞こえてくる。ベランダからのぞいてみると右手には、煙しか見えなかった。余震も続いて、この日の夜は全然眠れなかった。

人間、何もしていなくても、お腹だけはすぐもんで、地震のあとは、電子レンジがよく働いた。でも水が出ないのは、本当に苦しかった。食器も洗えずに同じ物を使うし、何といってもお風呂に入れなかった。洗濯物も少なからず、だんだん増えていき、みんなの気もいらだっていった。家の近くで水が出ると聞いて、両手いっぱいに入れ物をもって走って行ってみると、たくさんの人人…。夜は特別寒くてちぢみ上がりそうな程の中、何時間も何時間もまってやっと水をくめる。でもそんな程度のものじゃ満足に使えなくて、気がいら立っただけだった。そんな日が約1ヵ月続いた。2月14日、やっと、本当にやっと水が出て、その日は本当にうれしかった。

普段なにげなく使っている物（水・電気・ガス）が少しの間、使えなくなるだけで、気が立ったり、物事をしたくなくなったりした。そんな時心配して電話をかけてきてくれ、優しい言葉をかけてくれた人達がいた。そんな人達に感謝しています。

受験と阪神大震災

1年 有野 真矢

私は受験生だった。受験生—つまり一年後にひかえる入学試験の為に勉学に励まねばならない学生—だった最初の頃の私は、勉強にうちこめる環境が与えられているのにもかかわらず、「こんな所入試にでないからちょっと休憩。」と言ってマンガを読んだり、「こんなん覚えて何の役に立つの?」といった「勉強から離れる為の口実」を作って集中して勉強していなかったと思う。そしてダラダラと勉強している為、時間だけがかかって、寝るのはいつも遅く、その日もいつものよう

に家族がとっくに寝静まった頃にふとんに入った。

（何、何だろう？夢かな、揺れている、地震だ、これはいつもの地震なんかじゃない、）

浅い眠りの中で異変を感じた私は、飛び起きた。家具が倒れて家中ぐちゃぐちゃだった。ほこりっぽく何だか口の中が酸っぱい。母の呼ぶ声がする。妹も弟もみんな無事だ。そして、あわてて外へ出ようとしたがドアが開かない。私の家のドアは外の人が押し入る引きドアの為、建物が少しゆがんでしまったのだろうか、引いても引いても開かない。「こんな所に閉じ込められたらどうなるのだろう。もしかして建物は崩れるかもしれない、」私の心にそんな恐怖が走った。

「助けて、ドアを開けて下さい、助けて、」

私は叫んだ。皆も叫んだ。すると、同じマンションに住む男性がドアを蹴破ってくれた。ありがとう、ありがとうと礼を言って私達は建物から出た。マンションの前にあった1戸建の家が、傾いていた。外へ出た私達のまわりには、夢の続きであることを祈りたくなるような光景が続いていた。

避難所生活が始まった。こんなに多くの人と同じ空間で日々を過ごすなんて初めてではないだろうか。満足にも食べられないし、少し寒い。「片田さん大丈夫かなあ。」と、友達の事も心配になる。そして私は受験生。もしもこの生活が、受験日まで続いたらどうしよう。あせってくる。「勉強したい、」と私は感じた。勉強嫌いの私がこんな事を考えるなんて初めてのことだ。しかし、私はその時本当に、今までの落ち着いて勉強にうち込めるといふ、これまでは当たり前だと感じていた、そして今は素晴らしく恵まれていると感じるその環境にしながら、勉強をダラダラとしかしなかった私を悔やんだ。「あの時もっとちゃんと勉強しておけば良かった、」とくやしく思った。

避難所での生活は時間がただ過ぎゆくだけ

のダラダラとした生活だった。1分1秒をもムダにできないはずの受験生の私がこんな生活をしていていいのだろうか、はやく元の生活に戻りたい。しかし、テレビでこの地震の規模の大きさを知ったり、自分の家が焼けるのを泣きながら見ている人の姿を見るにつれて、命が助かって、みんな無事だという事は幸せなんだ、と思った。

大阪にいる親戚の家へ行った私達はまず食事をとって、そして私は久しぶりに、ぐっすりと眠った。そして翌日。私は勉強した。命が助かって、お腹いっぱい食べられて、そしてこうして落ち着いて勉強できるという事に感動した。勉強は集中できた。今まで集中して勉強できなかった分を取り戻そうという気持ちと、できるときにちゃんと勉強しておきたいという気持ちでいっぱいだったからだ。

受験勉強というもので得るものは、知識はもちろんの事、時間を上手く使う力や、忍耐力や自分をコントロールする力も培われることだと思う。そして私は「勉強に落ち着いて励むことのできる環境が与えられている事への感謝」と「当たり前だと思っていた私達は本当にとっても恵まれているということ」と「命の大切さ、人間の温かさ」もまた、この大地震、阪神大震災で学んだ。

この受験生の中に学びとった多くの事を、また阪神大震災で学んだ尊い事をふまえていきたいと思う。そして、みんなで協力し合って素晴らしい学校づくりをしていきたいと思う。

人間って意外に強い

2年 松下 亮子

1月17日、5時46分頃阪神大震災が起こった。

目が覚めたら、床がゆれていて、私の隣の本棚が倒れていた。頭の中がパニックになってゆれのおさまる時を待った。

外が明るくなると、母親と姉が祖母を心配して長田区まで行った。長田区の方は火が立ち上り、人が「助けて、！」と叫んでいて悲惨だったと話していた。その間私と父と弟は少しでも座る場所を作ろうと倒れてきた物を整理していた。祖母が無事私の家にやって来た。

父と共に食べ物を捜しに六甲まで行った。その時初めて目の前で火事を見た。ほとんどの店が倒れたり、火事だったり閉まっていた。開いている店も品物が売れてしまったのかほとんどなくて、食べ物はまったく買えなかった。

家の台所は食器が壊れてたり、冷蔵庫やレンジが倒れていた。冷蔵庫の中の物が飛び出して台所中悪臭が漂っていた。だから入れる状態ではなかった。その日の8時ごろ避難命令が出て暗い中稗田小学校に避難した。学校も暗かった。その日配給されたのは二人に一つのおむすび。でも次の日には学校に電気がついた。でも家にも商店街にも電気はつかなかった。

それから配給が学校に届くようになって、2、3日中には配給の食べ物があふれ、お腹いっぱい食べられるようになった。学校にいて7日目、伯父に頼んで芦屋の銭湯につれて行ってもらい久しぶりにお風呂にありつけた。まだ電気も水もガスもない真っ暗な家にその日は帰った。風邪をひいて熱もでたが翌日にはなおった。8日ぶりによろやく電気がついてホッとした。たしか家の辺りが一番電気を通るのが遅かった。「灘区の一部」と言われていた。私の家は壁が少しけずれているだけで、ちゃんと建っているし住んでもいた。しかし家具はこわされたりつぶれたりしていた。でも部屋も9日目ぐらいにはきれいに掃除がされていた。

マンションの方は門がボロボロで壁がやぶれて中の鉄みたいなものが出てるし地面もがたがただった。一部損壊だった。それでもう一度見てもらったら今度は半壊になった。

のダラダラとした生活だった。1分1秒をもムダにできないはずの受験生の私がこんな生活をしていていいのだろうか、はやく元の生活に戻りたい。しかし、テレビでこの地震の規模の大きさを知ったり、自分の家が焼けるのを泣きながら見ている人の姿を見るにつれて、命が助かって、みんな無事だという事は幸せなんだ、と思った。

大阪にいる親戚の家へ行った私達はまず食事をとって、そして私は久しぶりに、ぐっすりと眠った。そして翌日。私は勉強した。命が助かって、お腹いっぱい食べられて、そしてこうして落ち着いて勉強できるという事に感動した。勉強は集中できた。今まで集中して勉強できなかった分を取り戻そうという気持ちと、できるときにちゃんと勉強しておきたいという気持ちでいっぱいだったからだ。

受験勉強というもので得るものは、知識はもちろんの事、時間を上手く使う力や、忍耐力や自分をコントロールする力も培われることだと思う。そして私は「勉強に落ち着いて励むことのできる環境が与えられている事への感謝」と「当たり前だと思っていた私達は本当にとっても恵まれているということ」と「命の大切さ、人間の温かさ」もまた、この大地震、阪神大震災で学んだ。

この受験生の中に学びとった多くの事を、また阪神大震災で学んだ尊い事をふまえていきたいと思う。そして、みんなで協力し合って素晴らしい学校づくりをしていきたいと思う。

人間って意外に強い

2年 松下 亮子

1月17日、5時46分頃阪神大震災が起こった。

目が覚めたら、床がゆれていて、私の隣の本棚が倒れていた。頭の中がパニックになってゆれのおさまる時を待った。

外が明るくなると、母親と姉が祖母を心配して長田区まで行った。長田区の方は火が立ち上り、人が「助けて、！」と叫んでいて悲惨だったと話していた。その間私と父と弟は少しでも座る場所を作ろうと倒れてきた物を整理していた。祖母が無事私の家にやって来た。

父と共に食べ物を捜しに六甲まで行った。その時初めて目の前で火事を見た。ほとんどの店が倒れたり、火事だったり閉まっていた。開いている店も品物が売ってしまったのかほとんどなくて、食べ物はまったく買えなかった。

家の台所は食器が壊れてたり、冷蔵庫やレンジが倒れていた。冷蔵庫の中の物が飛び出して台所中悪臭が漂っていた。だから入れる状態ではなかった。その日の8時ごろ避難命令が出て暗い中稗田小学校に避難した。学校も暗かった。その日配給されたのは二人に一つのおむすび。でも次の日には学校に電気がついた。でも家にも商店街にも電気はつかなかった。

それから配給が学校に届くようになって、2、3日中には配給の食べ物があふれ、お腹いっぱい食べられるようになった。学校にいて7日目、伯父に頼んで芦屋の銭湯につれて行ってもらい久しぶりにお風呂にありつけた。まだ電気も水もガスもない真っ暗な家にその日は帰った。風邪をひいて熱もでたが翌日にはなおった。8日ぶりによろやく電気がついてホッとした。たしか家の辺りが一番電気を通るのが遅かった。「灘区の一部」と言われていた。私の家は壁が少しけずれているだけで、ちゃんと建っているし住んでもいた。しかし家具はこわされたりつぶれたりしていた。でも部屋も9日目ぐらいにはきれいに掃除がされていた。

マンションの方は門がボロボロで壁がやぶれて中の鉄みたいなものが出てるし地面もがたがただった。一部損壊だった。それでもう一度見てもらったら今度は半壊になった。

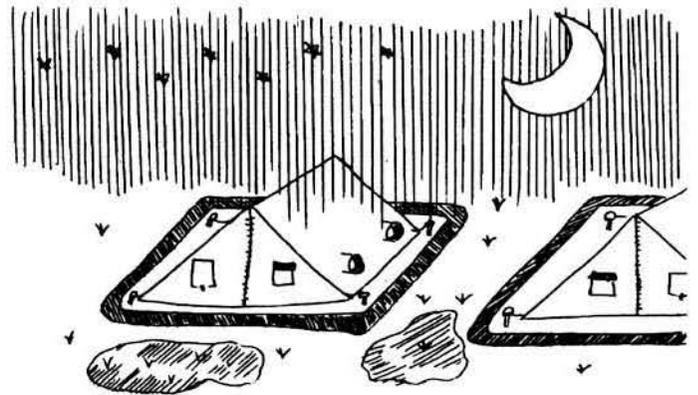
少しゆとりが出て来ると、今度は学校や友人のことが気になりだした。そんな時に学校から電話があった。学校に行くことになった。2月9日まで電車は動いておらずバスで1時間もかかって学校へ行った。次に学校へ行った2月13日には王子公園から御影の間だけ阪急電車が走っていた。

私の家に水が復旧したのは2月27日、それまでは一度だけ17日マンションのタンクに水を入れて水が出た。水が出ない間ずっと近くの水が出ている所まで水汲みに行っていた。多い日では1日に7回もバケツを両手に持って水汲みをしていた。はじめのうち、ほとんどの人が水汲みをしていたが、日がたつにつれほとんどの家で水が復旧し、水汲みをする人が減り出すと、何ともいえない寂しさがあった。ずっと早く出てほしいと思っていたので、水が出たときはとてもうれしかった。しかし水が出たからといって家のお風呂に入ることにはまだ出来なかった。ガスが復旧しなくて小学校に建てられた仮設か公衆の風呂へ行っていた。銭湯と言え、震災後少したって行ったところ3時間半待たされて湯につかれたのは20分程度の時もあった。ガスがない間はガスボンベが必要だった。電気が復旧するまでは水もガスボンベで熱していた。結局ガスが復旧したのは、2ヵ月以上たった3月22日だった。これで生活に必要なものが揃い喜んでいった。たしか水が復旧した時、配給をもらいに行くのをやめた。配給には大変助けられてとても感謝している。

私はまさか自分の身にこんなことが起こるなんて予想もしてなくて、ほかの所で起こっても自分には何の関係もないと思い興味も示さなかった。でもいざ困った時には配給をもらったり助けてもらったりして、なんか自分は情けないなあと思った。

この震災で沢山の人が亡くなり、多くの家や鉄道、道路が壊れた。「自然の力」がどれほど強いか思い知らされたと言ひみんなは言っ

ている。でも私はどちらかと言うと「人間って意外に強いなあ。」と思っていた。震度7の災害をあたえられてもすぐに活動をしはじめた。鉄道もすぐに修復していった。人間ってすごいなあと思った。私が今ここにいられるのはとても不思議なことかもしれません。そう考えると自分が生きていることが一番うれしいことです。



避難所は一つの家族

2年 高木 恭子

地震発生の日の夕方、私は約14時間後のものです。家の近くの公園にいました。この日は夜何時になっても消防車のサイレンが鳴りやまず、異様な光景が広がっていました。地面が小刻みに揺れ、普段通りに眠れませんでした。17・18日は公園で過ごしましたが、食べ物、飲物共にまったくありませんでした。地震以来何日かは建物の中に入るのが恐く、知人の家に行くのもイヤでした。それでも5日後ぐらいに北区の従兄弟の家に行くことになりました。そこは同じ神戸市とは思えない程、今までどおりでした。水もガスも電気もありました。従兄弟の家では家具等まったく倒れず、ガラスのコップが3つ程落ちただけだと言うことでした。そこのテレビから見る東灘区の様子は現実の東灘区と比べると、本当の被害を伝えていないように思えました。従兄弟はテレビを見て「すごいなあ。」とか

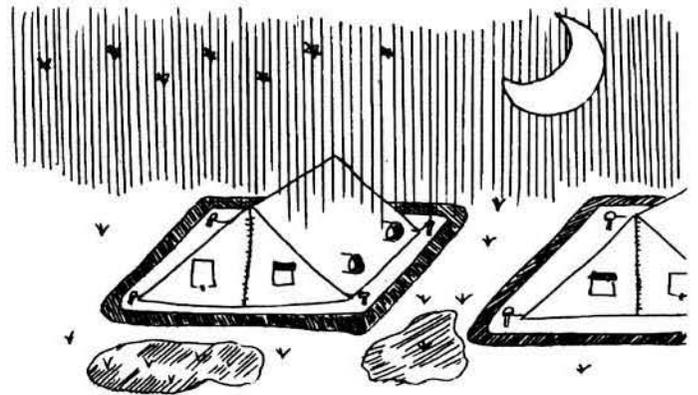
少しゆとりが出て来ると、今度は学校や友人のことが気になりだした。そんな時に学校から電話があった。学校に行くことになった。2月9日まで電車は動いておらずバスで1時間もかかって学校へ行った。次に学校へ行った2月13日には王子公園から御影の間だけ阪急電車が走っていた。

私の家に水が復旧したのは2月27日、それまでは一度だけ17日マンションのタンクに水を入れて水が出た。水が出ない間ずっと近くの水が出ている所まで水汲みに行っていた。多い日では1日に7回もバケツを両手に持って水汲みをしていた。はじめのうち、ほとんどの人が水汲みをしていたが、日がたつにつれほとんどの家で水が復旧し、水汲みをする人が減り出すと、何ともいえない寂しさがあった。ずっと早く出てほしいと思っていたので、水が出たときはとてもうれしかった。しかし水が出たからといって家のお風呂に入ることにはまだ出来なかった。ガスが復旧しなくて小学校に建てられた仮設か公衆の風呂へ行っていた。銭湯と言え、震災後少したって行ったところ3時間半待たされて湯につかれたのは20分程度の時もあった。ガスがない間はガスボンベが必要だった。電気が復旧するまでは水もガスボンベで熱していた。結局ガスが復旧したのは、2ヵ月以上たった3月22日だった。これで生活に必要なものが揃い喜んでいった。たしか水が復旧した時、配給をもらいに行くのをやめた。配給には大変助けられてとても感謝している。

私はまさか自分の身にこんなことが起こるなんて予想もしてなくて、ほかの所で起こっても自分には何の関係もないと思い興味も示さなかった。でもいざ困った時には配給をもらったり助けてもらったりして、なんか自分は情けないなあと思った。

この震災で沢山の人が亡くなり、多くの家や鉄道、道路が壊れた。「自然の力」がどれほど強いか思い知らされたと言ひみんなは言っ

ている。でも私はどちらかと言うと「人間って意外に強いなあ。」と思っていた。震度7の災害をあたえられてもすぐに活動をしはじめた。鉄道もすぐに修復していった。人間ってすごいなあと思った。私が今ここにいられるのはとても不思議なことかもしれません。そう考えると自分が生きていることが一番うれしいことです。



避難所は一つの家族

2年 高木 恭子

地震発生の日の夕方、私は約14時間後のものです。家の近くの公園にいました。この日は夜何時になっても消防車のサイレンが鳴りやまず、異様な光景が広がっていました。地面が小刻みに揺れ、普段通りに眠れませんでした。17・18日は公園で過ごしましたが、食べ物、飲物共にまったくありませんでした。地震以来何日かは建物の中に入るのが恐く、知人の家に行くのもイヤでした。それでも5日後ぐらいに北区の従兄弟の家に行くことになりました。そこは同じ神戸市とは思えない程、今までどおりでした。水もガスも電気もありました。従兄弟の家では家具等まったく倒れず、ガラスのコップが3つ程落ちただけだと言うことでした。そこのテレビから見る東灘区の様子は現実の東灘区と比べると、本当の被害を伝えていないように思えました。従兄弟はテレビを見て「すごいなあ。」とか

言うだけで本当に家が崩れてきたりした私達とはまったく別の角度で地震をとらえていたようです。

それから3日間ぐらいお世話になりましたが、いつまでもというわけにはいかないので、東灘区に戻り家の近くの小学校に行きました。そこには私達より前に来た人が500人ほどいました。ボランティアの人も地震から1週間から2週間後には来てくれました。初めのうちは水も出ていなかったのでトイレで使う水などを校舎の3階や4階までバケツで運びました。食事の方はボランティアの人達が大きな鍋や包丁などを持って来てくれたのでそれを使って物資で届いた野菜などを調理しました。朝食は物資で来るパン、昼食はボランティアの人達が作ってくれたものやお弁当、夜は初めのうちは自分達で作った物で、3ヵ月後くらいからはお弁当だけになりました。日曜日のお昼などは遠くからボランティアの人が来てくれて、みたらしだんごやぜんざい、手打ちうどんなどを作ってくれました。小学生の子供達も自分達から色々なことを手伝っていました。

地震1ヵ月後ぐらいには、千葉から風呂バスが来てくれたので、それまで続いていた三田の方への入浴はなくなりました。このバスは大型バスを改造した物ですが、ものすごくよかったです。お風呂のボランティアで来ていた人達はそれだけでなく食事の手伝いなどもしてくれました。年齢的に20才前後の人が多かったということもあり、ボランティアの人達が私の話し相手になってくれました。

避難所では毎晩食後に話し合いがありました。私は体育館にいましたが、その中で班をつくり代表を決めて話し合いにでました。内容的には「これからの避難所の運営の仕方」がほとんどでしたが、色々な情報のお知らせもありました。私がいた御影小学校は、学校が避難所を運営するのではなく、すべて避難者とボランティアの人で運営してきました。

最初の頃はいろいろなもめ事もありましたが、なんとか自分達で解決しました。そんな事もあって、一度新聞で「全体がひとつの家族」という記事になったりもしました。

そんな中、仮設住宅の申し込みが何回かありました。もちろんすぐに申し込みました。でも、初めの方はお年寄りや体の不自由な方を優先していたのでまったく駄目でした。仮設住宅の募集と共に避難所の方も人が減っていきました。親が人と話をしているのを聞いても家の話が多くなってきました。そして4回目の発表でようやく入居できる事になりました。しかし私自身は6ヵ月近く生活してきた避難所を離れるのがイヤでした。でも結局7月2日に避難所を出て六甲アイランドの仮設住宅に入りました。初めの間は交通手段の六甲ライナーが通っていなかったため代替バスで学校まで通いました。六甲ライナーが完全に住吉まで通ったのは8月23日でした。この日から朝のラッシュも少しましになりました。

避難所での生活は長かったですがいい体験ばかりできたので良かったです。でも、もう二度とこういうことはあってほしくないです。

ありがとう

2年 藤村 昌司

悪夢の1月17日(火)、あれは3連休明けだった。まさか、あんなことが起こるなんて誰も予想もしていなかったと思う。たいしたことないと思っていたのが、まさかあんな大惨事になってびっくりした。

まず最初の日から2、3日はガスが止まっても、水が止まってもそんなにびっくりしなかった。昔、もし電気、水道、ガスがなくなったらと考えたこともあったが、本当に体験してみてもものすごく大変だと思いしらされました。

震災から1ヵ月ぐらい祖母の家に逃げてい

言うだけで本当に家が崩れてきたりした私達とはまったく別の角度で地震をとらえていたようです。

それから3日間ぐらいお世話になりましたが、いつまでもというわけにはいかないので、東灘区に戻り家の近くの小学校に行きました。そこには私達より前に来た人が500人ほどいました。ボランティアの人も地震から1週間から2週間後には来てくれました。初めのうちは水も出ていなかったのでトイレで使う水などを校舎の3階や4階までバケツで運びました。食事の方はボランティアの人達が大きな鍋や包丁などを持って来てくれたのでそれを使って物資で届いた野菜などを調理しました。朝食は物資で来るパン、昼食はボランティアの人達が作ってくれたものやお弁当、夜は初めのうちは自分達で作った物で、3ヵ月後くらいからはお弁当だけになりました。日曜日のお昼などは遠くからボランティアの人が来てくれて、みたらしだんごやぜんざい、手打ちうどんなどを作ってくれました。小学生の子供達も自分達から色々なことを手伝っていました。

地震1ヵ月後ぐらいには、千葉から風呂バスが来てくれたので、それまで続いていた三田の方への入浴はなくなりました。このバスは大型バスを改造した物ですが、ものすごくよかったです。お風呂のボランティアで来ていた人達はそれだけでなく食事の手伝いなどもしてくれました。年齢的に20才前後の人が多かったということもあり、ボランティアの人達が私の話し相手になってくれました。

避難所では毎晩食後に話し合いがありました。私は体育館にいましたが、その中で班をつくり代表を決めて話し合いにでました。内容的には「これからの避難所の運営の仕方」がほとんどでしたが、色々な情報のお知らせもありました。私がいた御影小学校は、学校が避難所を運営するのではなく、すべて避難者とボランティアの人で運営してきました。

最初の頃はいろいろなもめ事もありましたが、なんとか自分達で解決しました。そんな事もあって、一度新聞で「全体がひとつの家族」という記事になったりもしました。

そんな中、仮設住宅の申し込みが何回かありました。もちろんすぐに申し込みました。でも、初めの方はお年寄りや体の不自由な方を優先していたのでまったく駄目でした。仮設住宅の募集と共に避難所の方も人が減っていきました。親が人と話をしているのを聞いても家の話が多くなってきました。そして4回目の発表でようやく入居できる事になりました。しかし私自身は6ヵ月近く生活してきた避難所を離れるのがイヤでした。でも結局7月2日に避難所を出て六甲アイランドの仮設住宅に入りました。初めの間は交通手段の六甲ライナーが通っていなかったため代替バスで学校まで通いました。六甲ライナーが完全に住吉まで通ったのは8月23日でした。この日から朝のラッシュも少しましになりました。

避難所での生活は長かったですがいい体験ばかりできたので良かったです。でも、もう二度とこういうことはあってほしくないです。

ありがとう

2年 藤村 昌司

悪夢の1月17日(火)、あれは3連休明けだった。まさか、あんなことが起こるなんて誰も予想もしていなかったと思う。たいしたことないと思っていたのが、まさかあんな大惨事になってびっくりした。

まず最初の日から2、3日はガスが止まっても、水が止まってもそんなにびっくりしなかった。昔、もし電気、水道、ガスがなくなったらと考えたこともあったが、本当に体験してみてもものすごく大変だと思いしらされました。

震災から1ヵ月ぐらい祖母の家に逃げてい

た。神戸ではお風呂に入れない状態が続いている中で自分だけお風呂に入ったりして卑怯だなと思った。

2月中頃、神戸に帰ってきた。再び、ガス、水道のない生活が待っていた。給水車も来てくれ、みんなもこうして生活していると考えたとそんなにも不便とは思わなかった。水を運ぶのが僕に与えられた仕事だった。ガス、水道が止まっただけでも、くらしは以前とあまり変わったとは思わなかった。それは、1月17日に電気がついていなかったから。電気がなかったら生活なんて出来ないだろう。電気なしでは今の人間は生きられないと思う。それは、人間があまりに電気に頼りすぎているからだと思う。そして「バチ」があたったんだと思います。あまりにも、水道や電気、ガスをむやみに使いすぎたと思います。こういうライフラインを絶たれてはじめて、水道、電気、ガスのありがたみがわかったんじゃないかなと思います。

20リットルと、10リットルのポリタンクを毎日4階までもっていく、これを毎日続けました。ものすごく、しんどかったが、これもトイレに水を流すためだと思って頑張れた。そして、そんな生活が1ヵ月。あっという間に3月になりました。最初は、3月上旬に水が出るようになる予定だったが、水はなかなか出なかった。他の所で、どんどん水が出て、だんだん不安になってきた。なんでうちは……、ひょっとして忘れられたんじゃないかと思ったりもした。3月の後半やっと水が出た。その水が出た時は感動しました。やっと、やっと水が出たんだという感じでした。水が出たらなんか、ガスなんてどうでもよくなりました。その頃になると必要じゃなかった。ガスが出たのはもっと遅く、自宅で風呂に入れたのは4月になってからでした。

交通状況はというと、とてもひどかった。阪神はボロボロ、阪急も駄目、JRも六甲道あたりは跡形もなかった。そんな中大阪の祖

母の家から神戸に帰った。阪急が一番近く西宮北口から、4時間かけてずっと歩いた。今思うと、あんな大変なことをよくやったなと自分自身でも感心してしまうほどだ。その後、JRが芦屋まで、阪神が神戸市内一番乗りの青木までと次々と便利になっていった。青木からなら1時間歩くだけでなんとか家までたどり着くことが出来た。しばらくするとJRが住吉まで通じて、大阪から毎日行ったり来たりが出来るようになった。2月中旬に神戸に帰ってきた。不便な生活が待ち受けていたが、僕にはそんなことはどうでもよかった。地震が多く眠れなかった時もあったが、この神戸が好きだからです。

地震からもう7ヵ月が過ぎました。あの時は寒かったけれど、気が付いたらもう夏です。今でも地震の影響は残っています。後10年もすると、このことが社会や理科の教科書に載ると思います。でもこの地震の事を忘れてら駄目だと思う。5000を超える人達が犠牲となったのだから、生き残った僕らが死んだ人達の分まで頑張らなければならぬと思う。今、いじめなどで自殺する、死のほうに逃げた人もいるが、それは絶対に間違いだと思う。生きたくって仕方がないのに犠牲になった人がいるのだから。

あの時ボランティアをしてくれた人達は総理大臣よりも役に立ちました。本当に有難かったです。「ありがとう」。



野寄公園のテント村

忘れられない大震災

2年 福井 義人

阪神大震災の事は一生記憶から消すことはできない。もちろん体験した人はみんなそうだろうけど。僕は今でも思い出すと胸がしめつけられる思いがする。17日、僕は5時30分に目が覚めた。何故か気持ち悪い気配がして、まくらの下に木刀を置いていた。しかしまだ起きるには早いからもう一度ふとんに入り、あと1時間くらい寝ようとしていた。うとうとしかけたなと思っていたら、ぐらぐらっと軽い地震が来た。立って歩いたら絶対気づかないと思われるものだった。ベッドの中で横になっていたのが結構揺れが伝わってきた。なぜか眠気はなくなっていた。それでベッドから出た瞬間ゴゴゴゴと聞こえたかと思うとドンドンドンドンすごい揺れが来た。僕はびっくりしてベッドに飛び込んだ。そしてふとんをかぶり「うわー」と声を出した。まるでジェットコースターに乗っている気分だった。僕は原爆を体験したことはないけれど、この時、原爆が落とされたのかと思った。この地震の時、心の中では「いつ止まるねん、！」とふとんを力いっぱいにぎりしめていた。

さいわいベッドのまわりにはベッドの方へ飛んでくるような物はなく無事だった。まずこの時点で電気なんてつくはずがないと思っていた。本当につかなかったらしいけど、マンションの廊下の電気はついていたので、部屋の中はとりあえず見えていた。そして、母親の寝ている部屋からドアが開かないという声が聞こえてきたので、力いっぱいドアを押すと、人一人分くらいのすき間が開いたので、そこから母親は出てきた。あとでその部屋を見たら、どうやっただけがもしないで出て来れるねん、というくらいに足の踏み場がまったくなかった。タンスにしきつめられた部屋になっていた。母親は最初の余震の時にドアの所まで来ていたという。もし来ていなかったら大けがをしていただろう。父親と弟は大丈夫で、ただ押し入れのふすまが倒れてきただけだった。そして、懐中電灯を探したが、とにかく僕の部屋だけがうっすらと明るいだけで、家の中はまっくらだった。手の感覚でだいたいわかるから、懐中電灯のあるところへ行って見ると、棚がおちていて懐中電灯なんてみつかるわけがなかった。

とりあえず、余震も来ているので外へ避難した。そして、同じ町内の祖父の所とおじさんの所へ行った。2軒ともいろいろくずれたりしていたけれど、とりあえずおじいちゃんとおじさんはけがをしていなかったけれど大丈夫だった。それから僕はファミリーマートにカップラーメンを買いに行った。店内はぐちゃぐちゃだった。棚がたおれていて、その上を踏んで歩いている状態だった。人もたくさんいたが10分ぐらいで買えた。僕はここで、もし日本全体がこんな風になっていたらもっと取り合いになってけんかになっているだろうと思った。

情報はラジオだけで、テレビはアンテナの向きが悪くうつらなかったからだ。それによると震度6だったらしいということを知ることになるほどと思った。

情報にショックを受けた。テレビはアンテナの向きが悪くうつらなかったからだ。それによると震度6だったらしいということを知ることになるほどと思った。

けっこう震度何とかがいっているけどどういうものかわかっていない人が多かった。本当に地震後、トイレの水は風呂の残っていた水を使っていただけ、飲み水や頭を洗うのとかが出来なくて、水のいらぬシャンプーとかを使っていた。

なくなってわかるもの

2年 牧野美沙子

私は地震が起こった時、起きていました。それはどうしてかということ、私と一緒に寝ていたネコがあばれだしたからです。地震の起こるほんの数秒前、ネコが私の部屋から逃げ出そうとして、ベッドからとびおりました。

忘れられない大震災

2年 福井 義人

阪神大震災の事は一生記憶から消すことはできない。もちろん体験した人はみんなそうだろうけど。僕は今でも思い出すと胸がしめつけられる思いがする。17日、僕は5時30分に目が覚めた。何故か気持ち悪い気配がして、まくらの下に木刀を置いていた。しかしまだ起きるには早いからもう一度ふとんに入り、あと1時間くらい寝ようとしていた。うとうとしかけたなと思っていたら、ぐらぐらっと軽い地震が来た。立って歩いたら絶対気づかないと思われるものだった。ベッドの中で横になっていたのが結構揺れが伝わってきた。なぜか眠気はなくなっていた。それでベッドから出た瞬間ゴゴゴゴと聞こえたかと思うとドンドンドンドンすごい揺れが来た。僕はびっくりしてベッドに飛び込んだ。そしてふとんをかぶり「うわー」と声を出した。まるでジェットコースターに乗っている気分だった。僕は原爆を体験したことはないけれど、この時、原爆が落とされたのかと思った。この地震の時、心の中では「いつ止まるねん、！」とふとんを力いっぱいにぎりしめていた。

さいわいベッドのまわりにはベッドの方へ飛んでくるような物はなく無事だった。まずこの時点で電気なんてつくはずがないと思っていた。本当につかなかったらしいけど、マンションの廊下の電気はついていたので、部屋の中はとりあえず見えていた。そして、母親の寝ている部屋からドアが開かないという声が聞こえてきたので、力いっぱいドアを押すと、人一人分くらいのすき間が開いたので、そこから母親は出てきた。あとでその部屋を見たら、どうやっただけがもしないで出て来れるねん、というくらいに足の踏み場がまったくなかった。タンスにしきつめられた部屋になっていた。母親は最初の余震の時にドアの所まで来ていたという。もし来ていなかったら

たら大けがをしていただろう。父親と弟は大丈夫で、ただ押し入れのふすまが倒れてきただけだった。そして、懐中電灯を探したが、とにかく僕の部屋だけがうっすらと明るいだけで、家の中はまっくらだった。手の感覚でだいたいわかるから、懐中電灯のあるところへ行って見ると、棚がおちていて懐中電灯なんてみつかるわけがなかった。

とりあえず、余震も来ているので外へ避難した。そして、同じ町内の祖父の所とおじさんの所へ行った。2軒ともいろいろくずれたりしていたけれど、とりあえずおじいちゃんとおじさんはけがをしていなかったけれど大丈夫だった。それから僕はファミリーマートにカップラーメンを買いに行った。店内はぐちゃぐちゃだった。棚がたおれていて、その上を踏んで歩いている状態だった。人もたくさんいたが10分ぐらいで買えた。僕はここで、もし日本全体がこんな風になっていたらもっと取り合いになってけんかになっているだろうと思った。

情報はラジオだけで、テレビはアンテナの向きが悪くうつらなかったからだ。それによると震度6だったらしいということを知ることになるほどと思った。

けっこう震度何とかいっているけどどういうものかわかっていない人が多かった。本当に地震後、トイレの水は風呂の残っていた水を使っていたけど、飲み水や頭を洗うのとかが出来なくて、水のいらぬシャンプーとかを使っていた。

なくなってわかるもの

2年 牧野美沙子

私は地震が起こった時、起きていました。それはどうしてかということ、私と一緒に寝ていたネコがあばれだしたからです。地震の起こるほんの数秒前、ネコが私の部屋から逃げ出そうとして、ベッドからとびおりました。

ネコが出る少し前に、地震が起きました。本棚とかタンスとかがおちてきましたが、ネコは無事でした。下敷きになっているのではとも思いましたが大丈夫だったので良かったです。

私の家は、電気が一番早かったです。地震の次の日にきました。だからすぐにテレビをつけて、どんな状況か見ました。この世のものとは思えなかったです。電気がついておかげで、ホットカーペットとかこたつなどがつくので、寒さにふるえるということはありませんでした。

次に私の家にやってきたのは、水道です。地震の2週間ちょっとくらいにきました。けっこう早いほうだと思います。それまでは、近くの小学校に給水車がきていたので2リットルのペットボトルをもってくみにいきました。何回も何回も行きました。しんどかったけれど水は必要なもので、その時はしんどいなんて感じませんでした。ただ水、水としか思わなかったのです。

トイレの水は、風呂の水をぬいていなかったもので風呂の水をくみあげてながしていました。地震のあった日は、歯もみがかず、顔も洗えませんでした。それどころではなく、恐怖でいっぱいでした。この日、はじめて歯をみがかず食べ物を食べたような気がしました。気持ち悪かったけどしょうがないと思いました。飲み水はペットボトルにありました。私の父が、毎週日曜日になると、六甲の水かなんかをくみにいくのでその水があったので、飲み水には飢えませんでした。父にとっても感謝しています。でも2日ぐらいでなくなってしまうので、給水車にくみにいったり、小学校などにいって水のペットボトルをもらったりしていました。これほど水が大切だと思ったのは、この日かもしれません。

でも、水もガスもなかったら当然風呂には入れません。だから私の母が電話帳で風呂屋を調べて灘区の方へ行きました。歩いていっ

たので1~2時間くらいかかりました。行ったのはいいんだけど、そこには人がたくさんいて4~5時間も待ちました。昼前から行って7時前に帰ってきました。

けれど、1週間も風呂に入らなかったからそのくらい待っても平気でした。いつも入っている風呂なのに地震ひとつで入れなくなるなんて思ってもいませんでした。1週間ぶりのことだけあって、とてもきれいにみがきました。何回洗ってもやっぱり気持ち悪くて、でもたくさん人が待っているので2回ぐらいでやめとききました。けれどとてもさっぱりしました。風呂がこんなに重要だなんて思いもしませんでした。入ったときのうれしさは忘れることはできません。

最後にガスがやってきたのは3月初めでした。けっこう早い方だと思います。2か月以上もガスなしで暮らしてきているとなんともなくガスなしでも慣れてきていたところでした。けれどやっと自分の家の風呂に入れるんだと思うととてもうれしかったです。大阪ガスの人が家に来たときはとてもうれしかったです。こんなにもガスが必要とされたのは、こういう時だからだと思います。ガスがついてあたりまえの生活に慣れていたからです。

ガスがなかったら料理ができないので、いとこの兄がハーバーランドのダイエーまで自転車をこいでいってきてくれました。カセットコンロとかガスポンプを買ってきてくれました。買ってきてくれる前はホットプレートで焼いて食べるだけでした。カセットコンロだと煮物などが食べれるのでうれしかったです。

食料は小学校や公園にもらいに行きました。ほかには父と2人で市場に野菜を買いにいったりしました。食べ物はわりあいとありました。小学校にいつももらいにいっていると、いろんなものがもらえました。カンヅメのかわったものとか、インドの人が来ていて作ってくれたカレーなどです。色々もらえたけれ

ど、おにぎりとかになってくると毎日もらいにいくので、だんだんおにぎりがたまっていくのです。最後にはカビが生えてきて食べられなくなるのもったいないと思いました。他には同じものばかりくれると、あきてきたりもしました。だけどボランティアの人にはとても感謝しています。時には温かいスープを作ってくれて配ってくれたり、いろんな物をくれました。

他の衣服やフトンももらいに行きました。児童館などに、他の都道府県の方々からたくさん送ってきてくれていました。私は母ともらいに行きました。衣服はとりませんでした。送ってきてくれるのはありがたいけど、ところどころ汚れているのとかあったので、とてももらう気にはなりません。フトンの新しそうな物を必死で見つけました。石鹸、タオル、くつ下、いろいろありました。おくってきてくれた人にはとても感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、地震が来るなんて予想もしませんでした。テレビでよく「私は地震が来るのを予想していた。」なんて言う人がいるけど、だったらなぜ、地震がこないうちに発表しなかったんだと思います。来てからではおそいのです。私はそういう人たちを信じません。知っていて言わないのと、知らないで言わないのとでは天と地の差です。予想していたのだったら、ウソでもいいから言ってほしかったです。

私は地震が起こっているいろんなことに気づきました。電気、水道、ガス、いつもあってあたりまえのものがなくなったらどうなるのか。いつもいてあたりまえの家族がいなくなったらどうなるのか。いてあたりまえは、何気ない内に忘れてしまうけど、なくなって初めてわかるものもあると思います。どれだけ電気、水道、ガスが必要か。どれだけ家族が必要か。なくなってからでは遅いと思います。だからある時に大事にしていかななくてはなら

ないんだと思います。

私はこの地震を一生忘れることはないでしょう。何があっても、この地震をのりこえたのだから、立ち直ったのだから、何がこれから起こっても立ち向かっていくと思います。怖がっていたら何もできません。この地震で私はひとつ強くなったような気がしました。



勇気づけられたボランティア

2年 越川 佳代

1月17日、午前5時46分ごろ、神戸市などですごく激しい揺れを感じた。震度6～震度7。この日から数日前の生活とは180度変わってしまった。

10時前ごろラジオでは死者の数は20人ほどと発表した。次々に死者の数は増え続け、20人から50人、今では5,000人をこえている。

私の家では地震で電話線が切れていて、外から電話をキャッチすることができなかった。近所では9時ごろから次々電話の鳴る音が聞こえた。近所の公衆電話はどこもすごい列ができていた。

6時頃電池を買いにローソンへ行った。中は散乱状態で電池を売ってくれなかった。でも無理に頼んで買った。

当時はすごく寒くて長そでTシャツにスパッツ姿の私に近所の人「毛布かふとんを持ってきてあげよか？」などと声をかけてくれた人がいた。私の住んでいる中央区はそんなにひどい被害ではなかった。火事はそんなに大きい火災にはならなかった。長田は地震後に

ど、おにぎりとかになってくると毎日もらいにいくので、だんだんおにぎりがたまっていくのです。最後にはカビが生えてきて食べられなくなるのもったいないと思いました。他には同じものばかりくれると、あきてきたりもしました。だけどボランティアの人にはとても感謝しています。時には温かいスープを作ってくれて配ってくれたり、いろんな物をくれました。

他の衣服やフトンももらいに行きました。児童館などに、他の都道府県の方々からたくさん送ってきてくれていました。私は母ともらいに行きました。衣服はとりませんでした。送ってきてくれるのはありがたいけど、ところどころ汚れているのとかあったので、とてももらう気にはなりません。フトンの新しそうな物を必死で見つけました。石鹸、タオル、くつ下、いろいろありました。おくってきてくれた人にはとても感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、地震が来るなんて予想もしませんでした。テレビでよく「私は地震が来るのを予想していた。」なんて言う人がいるけど、だったらなぜ、地震がこないうちに発表しなかったんだと思います。来てからではおそいのです。私はそういう人たちを信じません。知っていて言わないのと、知らないで言わないのとでは天と地の差です。予想していたのだったら、ウソでもいいから言ってほしかったです。

私は地震が起こっているいろんなことに気づきました。電気、水道、ガス、いつもあってあたりまえのものがなくなったらどうなるのか。いつもいてあたりまえの家族がいなくなったらどうなるのか。いてあたりまえは、何気ない内に忘れてしまうけど、なくなって初めてわかるものもあると思います。どれだけ電気、水道、ガスが必要か。どれだけ家族が必要か。なくなってからでは遅いと思います。だからある時に大事にしていかななくてはなら

ないんだと思います。

私はこの地震を一生忘れることはないでしょう。何があっても、この地震をのりこえたのだから、立ち直ったのだから、何がこれから起こっても立ち向かっていくと思います。怖がっていたら何もできません。この地震で私はひとつ強くなったような気がしました。



勇気づけられたボランティア

2年 越川 佳代

1月17日、午前5時46分ごろ、神戸市などですごく激しい揺れを感じた。震度6～震度7。この日から数日前の生活とは180度変わってしまった。

10時前ごろラジオでは死者の数は20人ほどと発表した。次々に死者の数は増え続け、20人から50人、今では5,000人をこえている。

私の家では地震で電話線が切れていて、外から電話をキャッチすることができなかった。近所では9時ごろから次々電話の鳴る音が聞こえた。近所の公衆電話はどこもすごい列ができていた。

6時頃電池を買いにローソンへ行った。中は散乱状態で電池を売ってくれなかった。でも無理に頼んで買った。

当時はすごく寒くて長そでTシャツにスパッツ姿の私に近所の人「毛布かふとんを持ってきてあげよか？」などと声をかけてくれた人がいた。私の住んでいる中央区はそんなにひどい被害ではなかった。火事はそんなに大きい火災にはならなかった。長田は地震後に

行ったが、真っ暗で町の感じががらっと変わってしまっていた。建物のくずれかたもすごくひどく、あちらこちらの焼け跡に花が供えてあるのを見かけた。大きい建物しか残っていないような状況だった。すごくたくさんの方が亡くなったんだと感じた。

どうしてこんなすごい火事になる前に消せなかったんだろうと思った。すべて消せなかったとしても規模を小さくすることができたんじゃないかと思う。

消防車がきても水道管から水が出せなかったら意味がない。もう少しちゃんとした体制を整えてたら死者の数は減っていたはずです。これから救助作業のしっかりした対策を考えるべきだと思う。長田などは今でも大きな更地がたくさんある。住み慣れた町をはなれるのがつらく、プレハブを建てる人もいる。仮設は町から離れた不便なところばかり。そんなんでは誰も行く気になれない。

この震災でたくさん問題があると思う。まずは仮設住宅。半年以上たつ今も私たちのように避難所で暮らす人がたくさんいる。当初は「4月までにはみんな仮設住宅に入れる」というのがTVなどでも話されていた。その言葉はいったい何だったのだろうか？ 一番初めの仮設住宅の申込みで申し込もうと思った場所はやはり自分の家の近くを選んだ。それはどこの家庭も同じだと思う。六甲アラインドやポートアイランドの仮設も考えたけど、ライナーが通っていなかった。でも今考えると電車やライナーは復旧するんだから選んでおくべきだったかもしれない。でもやっぱり住み慣れた地を離れる。家族4人で住むには2Kは小さすぎる。しかも6畳と4畳半に小さな台所、風呂とトイレがくっついていて入りにくい。そんなとこに住むのはつらいと思う。私の家族は5回の抽選にすべて落ちました。住み慣れた地を離れるのは嫌だけど、それでも落ち着ける場所がほしいのだと思う。私は学校の友達の前と変わらず同じ場所に住

んでいる子をすごくうらやましく思った。きっと私はこれから今まで育ってきたところを離れて生活するんだろう。幼なじみや仲良しの友達と離れるのが嫌です。みんなが早く仮の家ではなく、ちゃんとした家に住めるようにすべきだと思う。

もう一つの問題は、私は震災が起きてすぐ困ったことです。それは避難所がどこかわからなかったのです。本来小学校や公民館だと思うのですが、私たちの場合、小学校の体育館の屋根がつぶれて、どうすればいいのか近所の人たちも困っていた。結局、近所の人たちは遠くの小学校に避難したりしている人もいたり、しかたなく壊れかかった家にいたりしていた。車の中で2か月ほどいた人もいた。こういうようなことから日頃このような事が起こったらどこに避難するかをみんなちゃんと知っておかないといけないと思いました。

この地震でつらいことばかりあったわけじゃない。楽しいこともあったし、勉強になった事もたくさんあった。中でもボランティアの人たちには色々考えたりすることがあった。特に私たちと同じ世代の子がいっぱいきてくれたこと。京都、東京、横浜など遠方から来てくれる中・高生がいた。その人たちに私はすごく感動した。中学生の男の子たちがいたのにはびっくりした。すごくえらいな一って思った。もしも、どこかでこんな事が起きたら自分は進んでボランティアに参加できるかなって思った。全然知らない場所で、知っている人のいないところに私はとけこんでいけるかなって思った。ボランティアの人たちのおかげで結構勇気づけられたり、支えられたり、友達になったり、いっぱい思い出を作ってくれたりした。ボランティアの人たちの名前は知っていても住所がわからないからお礼も言うことができなくて残念です。とてもボランティアの方にたくさんのことをしてもらいました。きっとすごく感謝している人たちはたくさんいると思います。

ボランティアに甘えすぎるのはいけないと思うけど、ボランティアって大切なものだと思います。

これからの神戸がすてきな町になってくれることをみんな願っていると思います。

We Love Kobe を合い言葉に!!



神商救援テント前

家族一緒に暮らしたい

2年 中井 敦子

1月17日の朝方、ちょうど4時30分ほどだったと思います。ふだん寝付きがよくて朝までぐっすりの小学1年生の弟が急に大声で泣きわめき、母親に「怖い怖い」としがみついてしばらく離れなかったことを覚えています。そしてその後、私が急に目を覚まし、その直後に家全体がまるでジェットコースターになったかのように下から激しく揺れ始めたのです。私はとにかく恐ろしくて3段ベッドの私の上の段に寝ていた弟にふとんをかぶるよう急いで叫びました。こんなにひどい地震がくるとは思わなかったので3段ベッドがこわれて落ちてこないかととても心配しました。それまでは聞き流していた北海道あたりでの地震の恐ろしさを身をもって思い知らされたような気がしました。そうです。その時まで私は北

海道の方がひどい地震だったと思っていました。たぶんそれは分厚いふとんに全身をくるんで振動を吸収したせいもあると思います。

そしてようやく空が明るみを帯びてきたころあらためて自分の部屋を見てがくぜんとなりました。本棚、洋服ダンス、CDプレーヤー、机、いすなどがごちゃごちゃに散乱している。上から、3段ベッドの一番上においてあった母のガラスケースに入った人形がちらばり、ガラスケースがこなごなになっていました。ダンスがベッドに倒れ込んでいて、私と弟は閉じこめられていましたが、父が人一人通れるくらいのすき間を開けてくれてようやく出ることができました。

その間、母は1階の台所までおりて（寝室はすべて2階）悪戦苦闘していました。私も下において手伝いたかったのですが、階段が壊れる寸前だったので、無駄に力を加えない方がいいと言われ、止められました。「どうなってる？」と母に聞くと「1階の方が2階よりめっちゃくちゃになっている」と泣きそうな声でいわれ、いっそうゆううつになりました。

そうこうしているうちに、玄関の扉があかないことがわかり、私たち家族は窓から出ました。外に出た瞬間、私は目が点になってしまいました。私の頭の中で、目から飛び込んでくる景色と、「廃墟」という言葉がぴったり重なるほど、1日前とはちがっていたのです。道一つ向こうの43号線がすぐそこに見えて、私は完全にパニック状態におちいってしまいました。しかし、そんな恐怖にひたっているひまもなく、困ったことは次々とふりかかってきます。第一に心配したのは3日ほど前から40度以上の熱の下がっていなかった弟のこと。近所づきあいはいはあまりなかった私たち家族ですが、みなさんととても優しくしてくださり、弟のために無事だった部屋を貸して下さった方もいてとても助かりました。

1日目の食事は、とっさの母の機転で、台

ボランティアに甘えすぎるのはいけないと思うけど、ボランティアって大切なものだと思います。

これからの神戸がすてきな町になってくれることをみんな願っていると思います。

We Love Kobe を合い言葉に!!



神商救援テント前

家族一緒に暮らしたい

2年 中井 敦子

1月17日の朝方、ちょうど4時30分ほどだったと思います。ふだん寝付きがよくて朝までぐっすりの小学1年生の弟が急に大声で泣きわめき、母親に「怖い怖い」としがみついてしばらく離れなかったことを覚えています。そしてその後、私が急に目を覚まし、その直後に家全体がまるでジェットコースターになったかのように下から激しく揺れ始めたのです。私はとにかく恐ろしくて3段ベッドの私の上の段に寝ていた弟にふとんをかぶるよう急いで叫びました。こんなにひどい地震がくるとは思わなかったので3段ベッドがこわれて落ちてこないかととても心配しました。それまでは聞き流していた北海道あたりでの地震の恐ろしさを身をもって思い知らされたような気がしました。そうです。その時まで私は北

海道の方がひどい地震だったと思っていました。たぶんそれは分厚いふとんに全身をくるんで振動を吸収したせいもあると思います。

そしてようやく空が明るみを帯びてきたころあらためて自分の部屋を見てがくぜんとなりました。本棚、洋服ダンス、CDプレーヤー、机、いすなどがごちゃごちゃに散乱している。上から、3段ベッドの一番上においてあった母のガラスケースに入った人形がちらばり、ガラスケースがこなごなになっていました。ダンスがベッドに倒れ込んでいて、私と弟は閉じこめられていましたが、父が人一人通れるくらいのすき間を開けてくれてようやく出ることができました。

その間、母は1階の台所までおりて（寝室はすべて2階）悪戦苦闘していました。私も下において手伝いたかったのですが、階段が壊れる寸前だったので、無駄に力を加えない方がいいと言われ、止められました。「どうなってる？」と母に聞くと「1階の方が2階よりめっちゃくちゃになっている」と泣きそうな声でいわれ、いっそうゆううつになりました。

そうこうしているうちに、玄関の扉があかないことがわかり、私たち家族は窓から出ました。外に出た瞬間、私は目が点になってしまいました。私の頭の中で、目から飛び込んでくる景色と、「廃墟」という言葉がぴったり重なるほど、1日前とはちがっていたのです。道一つ向こうの43号線がすぐそこに見えて、私は完全にパニック状態におちいってしまいました。しかし、そんな恐怖にひたっているひまもなく、困ったことは次々とふりかかってきます。第一に心配したのは3日ほど前から40度以上の熱の下がっていなかった弟のこと。近所づきあいはいはあまりなかった私たち家族ですが、みなさんととても優しくしてくださり、弟のために無事だった部屋を貸して下さった方もいてとても助かりました。

1日目の食事は、とっさの母の機転で、台

所に下りたとき、ありったけのご飯をおにぎりにしてくれましたので、ものすごく困るということはありませんでした。

それからは西宮の方から親戚が自転車で迎えに来てくれ、そのまま私と病気の弟で自転車をこいで西宮の親戚の家まで避難しに行きました。

その後はずっと親戚の家でお世話になっていたの、電気はすぐに使えました。その次にガスが出ましたが、水道だけは14階に家があるせいもあり、なかなか出ませんでした。団地なので人が多く、給水車から水をもらうのに毎回6時間ほど待たされました。

今でも私は親戚の家に居候中、あとの家族は仮設に入っています。早く家族一緒に暮らせることができるといいなと切に願っています。

同じ神戸なのに

2年 龍田 香織

私の家は兵庫区にあります、私の家の近所は全壊して、ぐちゃぐちゃになっているという家や店はほとんどありませんでした。私の家よりも少し北の方に行くと、かなり家が倒壊していたようです。私の家の近くにはダイエーがありますが、地震の時は2・3日ぐらい開かず、その後、1日だけ営業して当分の間休みでした。あと、近くのコンビニも人がたかって、商品がぜんぜんない状態でした。

私の家では、たまたま、お風呂に水をはっていたので、それをトイレの水に使ったりして、飲み水は近所の1人暮らしのおばさんが、ミネラルウォーターを2・3本くださったので、何日か、そのお水だけで暮らしました。そのうち、給水車が私の家の下の方に来てくれるようになって、それから毎日水をタンクにいっぱい入れて、何往復もしました。はじめは交通の便が悪く、1日2回ほどしかこな

かったんですが、最後の方には、1日5・6回ぐらい来てくれました。

お風呂は、はじめ1週間ほど入らないでいました。それから父が知人の家（鈴蘭台）まで家族を連れて行ってくれました。鈴蘭台では、地震からすぐに水も復旧し、ガスも電気もついていて、地震があったと思えないほど平和でした。その後、2回ほどまたお世話になって、家の近くのお風呂屋さんが開いたので、そこへかよいました。

私の家の辺りは、2月の下旬ごろに水が復旧しました。これで私の家は、水道・ガス・電気全部そろいました。地震で私の家は、家の中のほとんどの壁が浮いてしまって、玄関の前の壁は崩れてしまいました。

地震がおきてすぐは、真っ暗でとにかく家の中は物が倒れ、壁の粉みみたいな物が落ちて、ぐちゃぐちゃでした。明るくなって外から家を見ると、外の壁が割れてひびが入って、でも、そんなにひどい状態ではありませんでした。

地震がおきてから、あまり外へ出歩かなかったの、学校へ行く時の代替バスの中から灘や東灘区の状態を見て、びっくりしました。三宮へ行った時も大きいビルがつぶれて、結構ショックでしたが、学校への通学路が、すごい段差になって同じ神戸なのに兵庫区と東灘区とでは、こんなにもちがうのかと、すごくショックでした。

家の修理は、父がほとんどしてくれました。今でも玄関の壁はなおっていませんけど。私の家のまわりの人は、みんな親切で、私の家は5人家族で人数が多いからって、水とか食べ物とかよくいただいたりもしました。近くに井戸水もあって、すごく助かりました。できればもう震災のことは忘れたいです。でも、震災の時、いろいろ助けてくれた人やボランティアに来てくれた人たちのことは、大げさかもしれないけど、死ぬまで忘れてはいけないと思います。

所に下りたとき、ありったけのご飯をおにぎりにしてくれましたので、ものすごく困るということはありませんでした。

それからは西宮の方から親戚が自転車で迎えに来てくれ、そのまま私と病気の弟で自転車をこいで西宮の親戚の家まで避難しに行きました。

その後はずっと親戚の家でお世話になっていたのに、電気はすぐに使えました。その次にガスが出ましたが、水道だけは14階に家があるせいもあり、なかなか出ませんでした。団地なので人が多く、給水車から水をもらうのに毎回6時間ほど待たされました。

今でも私は親戚の家に居候中、あとの家族は仮設に入っています。早く家族一緒に暮らせることができるといいなと切に願っています。

同じ神戸なのに

2年 龍田 香織

私の家は兵庫区にあります。私の家の近所は全壊して、ぐちゃぐちゃになっているという家や店はほとんどありませんでした。私の家よりも少し北の方に行くと、かなり家が倒壊していたようです。私の家の近くにはダイエーがありますが、地震の時は2・3日ぐらい開かず、その後、1日だけ営業して当分の間休みでした。あと、近くのコンビニも人がたかって、商品がぜんぜんない状態でした。

私の家では、たまたま、お風呂に水をはっていたので、それをトイレの水に使ったりして、飲み水は近所の1人暮らしのおばさんが、ミネラルウォーターを2・3本くださったので、何日か、そのお水だけで暮らしました。そのうち、給水車が私の家の下の方に来てくれるようになって、それから毎日水をタンクにいっぱい入れて、何往復もしました。はじめは交通の便が悪く、1日2回ほどしかこな

かったんですが、最後の方には、1日5・6回ぐらい来てくれました。

お風呂は、はじめ1週間ほど入らないでいました。それから父が知人の家（鈴蘭台）まで家族を連れて行ってくれました。鈴蘭台では、地震からすぐに水も復旧し、ガスも電気もついていて、地震があったと思えないほど平和でした。その後、2回ほどまたお世話になって、家の近くのお風呂屋さんが開いたので、そこへかよいました。

私の家の辺りは、2月の下旬ごろに水が復旧しました。これで私の家は、水道・ガス・電気全部そろいました。地震で私の家は、家の中のほとんどの壁が浮いてしまって、玄関の前の壁は崩れてしまいました。

地震がおきてすぐは、真っ暗でとにかく家の中は物が倒れ、壁の粉みみたいな物が落ちて、ぐちゃぐちゃでした。明るくなって外から家を見ると、外の壁が割れてひびが入って、でも、そんなにひどい状態ではありませんでした。

地震がおきてから、あまり外へ出歩かなかった。学校へ行く時の代替バスの中から灘や東灘区の状態を見て、びっくりしました。三宮へ行った時も大きいビルがつぶれて、結構ショックでしたが、学校への通学路が、すごい段差になって同じ神戸なのに兵庫区と東灘区とでは、こんなにもちがうのかと、すごくショックでした。

家の修理は、父がほとんどしてくれました。今でも玄関の壁はなおっていませんけど。私の家のまわりの人は、みんな親切で、私の家は5人家族で人数が多いからって、水とか食べ物とかよくいただいたりもしました。近くに井戸水もあって、すごく助かりました。できればもう震災のことは忘れたいです。でも、震災の時、いろいろ助けてくれた人やボランティアに来てくれた人たちのことは、大げさかもしれないけど、死ぬまで忘れてはいけないと思います。

そこにいる筈のひと

3年 梨木 翠

地震から数日後、新聞の死亡者欄の名前がようやく静まりかけていた私の心を再び落ち着きのないものに変えた。こんな活字だけでは信じられない。これは絶対に何かの間違いだ。私は泣きながらそう思った。親友の死を現実と認めるには、その知らせはあまりにも突然で、残酷だった。

慌ただしい毎日の中、家には一本の電話が入った。彼女のお通夜が大阪で行われる、と云うのだ。もちろん、私は行くつもりだった。だが、行けなかった。色々事情があり、両親に「頼むから諦めて」と言われたのだ。また涙が止まらなかった。これが数か月前の出来事であれば許されただろうと分かっていただけに口惜しくて情けなかった。私は、大切な親友に別れを告げることすら出来なかったのだ。その為だろうか。学校に行けば、いつもの声で私を呼んでくれる気がしたのは。

3月中旬の学年集会で久しぶりに友人たちと顔を合わせた。その嬉しさを味わいながら、私はずっと彼女の声を待っていた。だが、待っていても私を呼ぶ声は聞こえない。そんな時、ぼやけた視界に一枚の写真がとび込んできた。息がつまりそうだった。私が探していたものは、彼女の遺影ではなく、今現在そこにいてくれる筈の彼女の姿だったのに。私は、心の底で否定し続けていた親友の死を実感した。そして、告別式という名の通り、彼女に別れを告げた。認めたくなくても、それが現実であり仕方がなかった。

私の手元に数枚の写真がある。一年半彼女と共に過ごした部活の人たちと撮ったものだ。彼女は必ず私の隣にいた。だが、これから私が何かの機会に写真をとることがあっても、その時隣に彼女はいない。

11人と1匹の共同生活

3年 大谷 昌世

震災前、私は3人家族だった。それが今は祖母の家で11人と1匹で生活している。幸い私の家は被害が少なく、すぐ近くが祖母の家なので、家を友人の一家に提供して、祖母の家に居候することになった。祖母の家は、伯母夫婦といとこ2人、祖母の5人家族。そして家のつぶれた伯父の母、伯母、友人のおじさん、私の家族3人が増えいつの間にか、11人の大家族になっていた。その上、犬も1匹。

11人での生活は大変なものだった。1人の事を説明するだけでこの紙5枚ほど書けそうな程強烈な人達ばかりだった。そんな11人が集まっているのだから文句も多い。なまけものの私がイヤミを言われるのもしかたがない。そんな事で腹を立てるだけ無駄なことだと気付いたのは胃が痛くなるくらい腹を立てた後だった。

しかし、早朝からうるさい祖母に起こされたり、わがままな伯母に振り回されたりと嫌なことばかりではないと思う。もともと3人の家族の私だから、いつも家に帰ると1人という事が多かった。今なら、帰って1人だと不安でしかたがない。しかし、11人家族の今は、家に帰ると必ず誰かが「おかえり」と言ってくれる。大勢での食事競争が激しいが、さみしくなく楽しいものだ。こんな風に11人の共同生活にもいい所を見つけてきた。

そして、余震も少なくなり生活も震災前と変わらなくなってきた。私の家に住んでいた友人も先日引っ越した。もう私は自分の家に帰ることができる。しかしまだ私は帰っていない。母が1週間に3日も夜勤があることも理由の一つだが、それだけではない。この共同生活の利点を発見している最中でもあるからだ。それなのに、またバラバラになるのはさみしい気がする。しかし、これで11人の共同生活の幕は閉じていくのかもしれない。

そこにいる筈のひと

3年 梨木 翠

地震から数日後、新聞の死亡者欄の名前がようやく静まりかけていた私の心を再び落ち着きのないものに変えた。こんな活字だけでは信じられない。これは絶対に何かの間違いだ。私は泣きながらそう思った。親友の死を現実と認めるには、その知らせはあまりにも突然で、残酷だった。

慌ただしい毎日の中、家には一本の電話が入った。彼女のお通夜が大阪で行われる、と云うのだ。もちろん、私は行くつもりだった。だが、行けなかった。色々事情があり、両親に「頼むから諦めて」と言われたのだ。また涙が止まらなかった。これが数か月前の出来事であれば許されただろうと分かっていただけに口惜しくて情けなかった。私は、大切な親友に別れを告げることすら出来なかったのだ。その為だろうか。学校に行けば、いつもの声で私を呼んでくれる気がしたのは。

3月中旬の学年集会で久しぶりに友人たちと顔を合わせた。その嬉しさを味わいながら、私はずっと彼女の声を待っていた。だが、待っていても私を呼ぶ声は聞こえない。そんな時、ぼやけた視界に一枚の写真がとび込んできた。息がつまりそうだった。私が探していたものは、彼女の遺影ではなく、今現在そこにいてくれる筈の彼女の姿だったのに。私は、心の底で否定し続けていた親友の死を実感した。そして、告別式という名の通り、彼女に別れを告げた。認めたくなくても、それが現実であり仕方がなかった。

私の手元に数枚の写真がある。一年半彼女と共に過ごした部活の人たちと撮ったものだ。彼女は必ず私の隣にいた。だが、これから私が何かの機会に写真をとることがあっても、その時隣に彼女はいない。

11人と1匹の共同生活

3年 大谷 昌世

震災前、私は3人家族だった。それが今は祖母の家で11人と1匹で生活している。幸い私の家は被害が少なく、すぐ近くが祖母の家なので、家を友人の一家に提供して、祖母の家に居候することになった。祖母の家は、伯母夫婦といとこ2人、祖母の5人家族。そして家のつぶれた伯父の母、伯母、友人のおじさん、私の家族3人が増えいつの間にか、11人の大家族になっていた。その上、犬も1匹。

11人での生活は大変なものだった。1人の事を説明するだけでこの紙5枚ほど書けそうな程強烈な人達ばかりだった。そんな11人が集まっているのだから文句も多い。なまけものの私がイヤミを言われるのもしかたがない。そんな事で腹を立てるだけ無駄なことだと気付いたのは胃が痛くなるくらい腹を立てた後だった。

しかし、早朝からうるさい祖母に起こされたり、わがままな伯母に振り回されたりと嫌なことばかりではないと思う。もともと3人の家族の私だから、いつも家に帰ると1人という事が多かった。今なら、帰って1人だと不安でしかたがない。しかし、11人家族の今は、家に帰ると必ず誰かが「おかえり」と言ってくれる。大勢での食事競争が激しいが、さみしくなく楽しいものだ。こんな風に11人の共同生活にもいい所を見つけてきた。

そして、余震も少なくなり生活も震災前と変わらなくなってきた。私の家に住んでいた友人も先日引っ越した。もう私は自分の家に帰ることができる。しかしまだ私は帰っていない。母が1週間に3日も夜勤があることも理由の一つだが、それだけではない。この共同生活の利点を発見している最中でもあるからだ。それなのに、またバラバラになるのはさみしい気がする。しかし、これで11人の共同生活の幕は閉じていくのかもしれない。



平成の戦場の中で

3年 川崎 恵子

神戸の町はすっかり姿を変えてしまった。だからこそ今、自分たちの街を生き返らそうと人々は懸命に動き出す。本当に信じられないような被害だ。家がつぶれたり、ビルが倒壊したり、どれだけの人が苦しんだのだろう。本当に天災は恐ろしい。

けれども、人々はとても温かかった。同じ被害を受けたもの同士、みんなで助け合おうという気持ちがひしひしと伝わってくる。人々の優しさにどれだけ助けられたことか。こんなに人って温かいなんて思ったことがなかった。普段なんて他人のことなんかしらんふりということが多いのに、いざとなると人間ってこんなに変わるものなのかと思い、まだまだ世の中捨てたもんじゃないと思った。本当に人々の誠意が心から有り難いと思った。

テレビでも震災で被害にあった人達のドキュメントを放送するようになった。店をもって被害はあったのだけど、ガスボンベなどを利用して神戸の人達の元気づけになるようにと働く人。そんな店の子供たちは学校にいきながらも一生懸命親を手伝う。家族や親戚を亡くしても、亡くなった人の分まで生き抜こうと奮起する人。本当にいろいろな人達がそれぞれの被害の中で立ち上がっていかうとする姿を見て元気づけられたし、人間って強いなあと思った。そして強く生きていかなけれ

ばいけないんだと思い、それが犠牲になった人達に対する唯一の供養になると思った。

今回の震災で失うものも多かったけれども、いろんなことを学んだと思う。生きていく人間の強さや力、思いやりや優しさの大きさが身にしみてよく分かった。でも二度とこんなことは経験したくはない。恐怖だけが今も残っている。

本当の優しさ

3年 吉岡沙緒里

17日の夕方に避難所へ入った。家を失い、恐怖で怯えた私みたいな人でいっぱいになった避難所を目前にしてたちすくんでしまった。戦場で傷ついた人の集まりのようだった。外傷を負った人、精神的に傷付いた人の多さに、今までの平和な神戸を思い出すことができないほどショックを受けた。

体験したこともない2600人余りの人達との共同生活が始まった。私はわがままで自分さえよければいいという気持ちが正直言ってあった。水が出ない。一番不便に思った。今までの生活が羨ましいとも思った。腹立たしくも思った。1日1日が長く、苦しく感じたのはうまれてはじめてだった。

何日かの地獄のような生活に光がさしてきたのはボランティアの援助や救援物資が来てからだった。水をトラックで運んでくれたときは実感は湧かなかったけれども、長い行列に並んで水を貰ったときは涙が出た。でも並んでいるときは正直言って情けなかった。運動場での炊き出しやシャワールーム、お風呂、洗濯機、私は今まで生きてきてこれほど感謝したことはないように思う。水が初めて出たときも言葉にならないような感動を覚えた。でもこの慣れない生活にはいつまでたってもなじめなかった。

この震災で私は少し早く大人の社会を知ったように思う。それがプラスになったのかマ



平成の戦場の中で

3年 川崎 恵子

神戸の町はすっかり姿を変えてしまった。だからこそ今、自分たちの街を生き返らそうと人々は懸命に動き出す。本当に信じられないような被害だ。家がつぶれたり、ビルが倒壊したり、どれだけの人が苦しんだのだろう。本当に天災は恐ろしい。

けれども、人々はとても温かかった。同じ被害を受けたもの同士、みんなで助け合おうという気持ちがひしひしと伝わってくる。人々の優しさにどれだけ助けられたことか。こんなに人って温かいなんて思ったことがなかった。普段なんて他人のことなんかしらんふりということが多いのに、いざとなると人間ってこんなに変わるものなのかと思い、まだまだ世の中捨てたもんじゃないと思った。本当に人々の誠意が心から有り難いと思った。

テレビでも震災で被害にあった人達のドキュメントを放送するようになった。店をもって被害はあったのだけど、ガスボンベなどを利用して神戸の人達の元気づけになるようにと働く人。そんな店の子供たちは学校にいきながらも一生懸命親を手伝う。家族や親戚を亡くしても、亡くなった人の分まで生き抜こうと奮起する人。本当にいろんな人達がそれぞれの被害の中で立ち上がっていかうとする姿を見て元気づけられたし、人間って強いなあと思った。そして強く生きていかなけれ

ばいけないんだと思い、それが犠牲になった人達に対する唯一の供養になると思った。

今回の震災で失うものも多かったけれども、いろんなことを学んだと思う。生きていく人間の強さや力、思いやりや優しさの大きさが身にしみてよく分かった。でも二度とこんなことは経験したくはない。恐怖だけが今も残っている。

本当の優しさ

3年 吉岡沙緒里

17日の夕方に避難所へ入った。家を失い、恐怖で怯えた私みたいな人でいっぱいになった避難所を目前にしてたちすくんでしまった。戦場で傷ついた人の集まりのようだった。外傷を負った人、精神的に傷付いた人の多さに、今までの平和な神戸を思い出すことができないほどショックを受けた。

体験したこともない2600人余りの人達との共同生活が始まった。私はわがままで自分さえよければいいという気持ちが正直言ってあった。水が出ない。一番不便に思った。今までの生活が羨ましいとも思った。腹立たしくも思った。1日1日が長く、苦しく感じたのはうまれてはじめてだった。

何日かの地獄のような生活に光がさしてきたのはボランティアの援助や救援物資が来てからだった。水をトラックで運んでくれたときは実感は湧かなかったけれども、長い行列に並んで水を貰ったときは涙が出た。でも並んでいるときは正直言って情けなかった。運動場での炊き出しやシャワールーム、お風呂、洗濯機、私は今まで生きてきてこれほど感謝したことはないように思う。水が初めて出たときも言葉にならないような感動を覚えた。でもこの慣れない生活にはいつまでたってもなじめなかった。

この震災で私は少し早く大人の社会を知ったように思う。それがプラスになったのかマ

イナスになったのかまだ分からない。この頃は真剣に、あのボランティアのように困っている地域や人を見たら私は助けてあげられるのかと考えるようになった。またやはりこの震災で知らされたことは、今までの生活がどれだけ幸せだったかということではなく、人間の本当の優しさだと思う。

おばちゃんなんで泣いたん

3年 藤岡 愛子

震災後は逃げることに、食べることに、ぐらいいしか考えることのできる行動はなく、何分かに一度ある揺れに寒くて暗い体育館で怯えるばかりでした。10日も過ぎると、全壊した家の片付けや種々の手続きも終えて、考えることは冷え切った体と、震災前に洗ったきりの髪のことでした。その髪は汗と脂で「つばき脂」の様でした。それを知って北区に住む叔母から電話がありました。

3時頃に出発した私達でしたが、渋滞で叔母の家に着いたのは6時頃でした。それも震災でガラスの二カ所割れた、助手席の開かないボロボロの車でした。叔母の家は北区の鈴蘭台で「山麓バイパス」のトンネルでは毛布をかぶりほこりと寒さを防ぎました。そしてトンネルをぬけるとまるで違う世界にきたようでした。今まで見る景色は倒壊した建物、そしてがれきばかりだったのに、ここでは電気があかあかとつき、店も家もなんともなく、普通に生活をしているのを見ると、何か不思議な感じがしました。

叔母の家に着くとやはり体育館と違って温かく、お風呂にはいると身体も心も安らぎました。念願の洗髪ではさすがになかなかすっきりとしなかったように覚えています。お風呂から出ると従姉妹の作った料理を食べました。避難所ではパンや堅くなったおにぎりなど冷たいものばかりだったので、お茶とともに

にたべる温かい御飯が、普段では感じない有り難さを感じることができました。

食後、従姉妹の2人の子供たちと遊んでいると、5才の女の子が「おばちゃん、何で泣いたん、家がつぶれたから悲しかったん？」と私の母に尋ねました。叔母の家に着いたときに母と叔母が抱き合っていて泣いたのを見て、小さいながらも意味も分からず大変な出来事が起こったということだけが分かったようでした。お風呂には入れたことや、おいしい御飯が食べられただけでなく、叔母の家族との団らんを持つことができました。それに従姉妹の子供の一言で何となく気分が和みました。私達も良い日がくるまで頑張ろうと思いました。

家族を好きだと思った

3年 平野 真由

まさか神戸で震災が起きるとは思わなかった。17日早朝、大きな音とともに激しく神戸が揺れた。余りに突然すぎてなんだか良く分からない。たんすが倒れ、食器が割れ、ようやく納まった頃には、家中の建っていた物が全て倒れていた。しかしこの時にはまだその事態の深刻さが分かっていなかった。電気も水道もすぐ元どおりなるだろうと思っていた。甘い考えだった。電気や水、食料もない中、避難所で暗い夜を過ごした。

翌日から戦争であった。食べ物や水に人々がたかり、奪い合い、言い争いの連続だった。救援物資も不足していて全員には行き届かない。それでもなお物資を一人占めするおばさんがいた。見ていた私からは何も言えなくて悔しい思いをした。近所のおばさんも食料集めに目を血走らせている。大人たちが食料や物資の奪いあいでは怒鳴りあっているのを見ると悲しくなった。避難所全体が精神的に不安定な状態だった。

父もその一人だった。この震災で祖父から

イナスになったのかまだ分からない。この頃は真剣に、あのボランティアのように困っている地域や人を見たら私は助けてあげられるのかと考えるようになった。またやはりこの震災で知らされたことは、今までの生活がどれだけ幸せだったかということではなく、人間の本当の優しさだと思う。

おばちゃんなんで泣いたん

3年 藤岡 愛子

震災後は逃げることに、食べることに、ぐらいいしか考えることのできる行動はなく、何分かに一度ある揺れに寒くて暗い体育館で怯えるばかりでした。10日も過ぎると、全壊した家の片付けや種々の手続きも終えて、考えることは冷え切った体と、震災前に洗ったきりの髪のことでした。その髪は汗と脂で「つばき脂」の様でした。それを知って北区に住む叔母から電話がありました。

3時頃に出発した私達でしたが、渋滞で叔母の家に着いたのは6時頃でした。それも震災でガラスの二カ所割れた、助手席の開かないボロボロの車でした。叔母の家は北区の鈴蘭台で「山麓バイパス」のトンネルでは毛布をかぶりほこりと寒さを防ぎました。そしてトンネルをぬけるとまるで違う世界にきたようでした。今まで見る景色は倒壊した建物、そしてがれきばかりだったのに、ここでは電気があかあかとつき、店も家もなんともなく、普通に生活をしているのを見ると、何か不思議な感じがしました。

叔母の家に着くとやはり体育館と違って温かく、お風呂にはいると身体も心も安らぎました。念願の洗髪ではさすがになかなかすっきりとしなかったように覚えています。お風呂から出ると従姉妹の作った料理を食べました。避難所ではパンや堅くなったおにぎりなど冷たいものばかりだったので、お茶とともに

にたべる温かい御飯が、普段では感じない有り難さを感じることができました。

食後、従姉妹の2人の子供たちと遊んでいると、5才の女の子が「おばちゃん、何で泣いたん、家がつぶれたから悲しかったん？」と私の母に尋ねました。叔母の家に着いたときに母と叔母が抱き合っていて泣いたのを見て、小さいながらも意味も分からず大変な出来事が起こったということだけが分かったようでした。お風呂には入れたことや、おいしい御飯が食べられただけでなく、叔母の家族との団らんを持つことができました。それに従姉妹の子供の一言で何となく気分が和みました。私達も良い日がくるまで頑張ろうと思いました。

家族を好きだと思った

3年 平野 真由

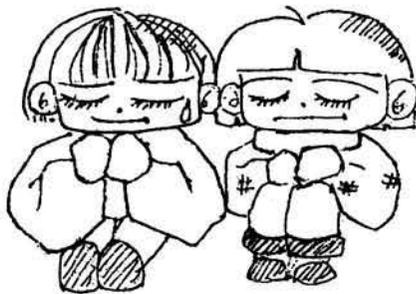
まさか神戸で震災が起きるとは思わなかった。17日早朝、大きな音とともに激しく神戸が揺れた。余りに突然すぎてなんだか良く分からない。たんすが倒れ、食器が割れ、ようやく納まった頃には、家中の建っていた物が全て倒れていた。しかしこの時にはまだその事態の深刻さが分かっていなかった。電気も水道もすぐ元どおりなるだろうと思っていた。甘い考えだった。電気や水、食料もない中、避難所で暗い夜を過ごした。

翌日から戦争であった。食べ物や水に人々がたかり、奪い合い、言い争いの連続だった。救援物資も不足していて全員には行き届かない。それでもなお物資を一人占めするおばさんがいた。見ていた私からは何も言えなくて悔しい思いをした。近所のおばさんも食料集めに目を血走らせている。大人たちが食料や物資の奪いあいでは怒鳴りあっているのを見ると悲しくなった。避難所全体が精神的に不安定な状態だった。

父もその一人だった。この震災で祖父から

受け継いできた店が全壊した。涙を流して消火活動を手伝っていた姿を見て私も泣いた。父はしばらくは放心状態だったが地震への怒りか何かが父を変えてしまった。私が30分ほど避難所を離れたことで私は頬を思いきりぶたれた。何か手伝おうとしても邪魔だと言われた。父のことを怖いと思った。父を変えてしまった地震を憎らしいとも思った。

けれどもそんな父も最近落ち着きを取り戻し、昔の優しい父に戻ってきた。父の笑顔を見るようになり私もほっとした。あらためて家族を本当に好きだなと思った。この地震でなくしたものは本当に大きいけれども、それよりもっともっと大切なものは何かということを感じさせてくれたと思う。この経験を私は一生忘れない。



大震災にあって

3年 立山 優子

私達家族は地震の3日ぐらいたとから避難所生活を始めた。しかし父親だけは家に残った。父の性格は集団生活ができないタイプなので、しかたがないというしかない。父が避難所に行かないのなら私達が家に帰るしかない。でも我が家はもうすこしで取り壊しになるためガスも水道も出ない。そんな不便な生活は送りたいくないと思った。

しかしみんな家で寝たいと思っているはずである。家族の中で一番悩んでいるのが母であった。家には父が残っている。日に日に父は不機嫌になってくる。母は時々家に寝に帰

る。私も家に帰ったときは避難所の話はしなかった。それが私にできる父を怒らせないことだからだ。

父は今の家に住みたいと思っているようだ。それに今ではもう何もおこらなかつたように生活している。ただ一つ気になるのが父がこの頃食欲が無いように思う事だ。ずっとおにぎりだったので普通の御飯を見てもほとんど食べない。父は仕事にもいっているが、それなのに食欲がないということは、かなりこの生活にまいってきているように思う。まだまだこの生活が続くであろうに。

この先、ほんとうにどうなるのであろうか。住まいが無くなるということ、こんなに真剣に悩むとは思ってもみなかった。一家の大黒柱である父は口には出さなくても心の中で私以上に悩んでいるはずだ。これからも不便な生活が続くでしょうが、父の頑張りに期待するしかない。今まで見たことのない両親の力を見たいと思っている。

第一次募集 入居決定者の皆様へ

入居が決定した方は、入居に関する御約束をおこないます(住戸によっては開通しできるものもあります。)ので、2月8日(水)～2月10日(金)に決定者名簿に記載されている番号によって下記の表に指定されている場所へお越しください。

記

1. 手続きに来られる方へ
手続きに来られる方は**申込書本人に限り**ます。なお、身体が不自由でどうしてもお越しになれない方のみ代理人による受付を認めます。(代理人による受付には本市の指定する委任状が必要となりますので、2月8日(水)・9日(木)の両日に下記の指定場所まで取りに来てください。)

2. 当日ご持参いただくもの
① 一時使用住宅入居申込受付確認書(受付印を押したもの)
② 本人であることを確認できる書類・証書
(例)運転免許証、健康保険証、年金証書、税金振替受取証、現金通帳等)
③ 押印(ご持参いただけない場合は押印を拝見いたします。)

3. 契約日時・場所
※契約は**お住まいいただく住居がある区**の下記に指定する場所で行います。必ずしも申し込みをした受付場所とは限りませんのでご注意ください。

番号	お住まいいただく住宅のある区	指定場所	日 時
①	東区	東区センター シアター前	平成7年2月 8日(水)～ 10日(金)
②	東区	東区公会堂	
③	中央区	東区運動場(現水北側)	午前10時～ 午後2時
④	東区	東区公会堂	
⑤	北区	北区役所	いずれの日・時間にお越しただいても結構ですが、8日(水)は振替が予定されますので、できるだけお避けください。
⑥	東区	東区立東区高校	
⑦	東区	東区役所前	※
⑧	東区	北郷町文所	
⑨	東区	東区役所	
⑩	西区	西区役所	

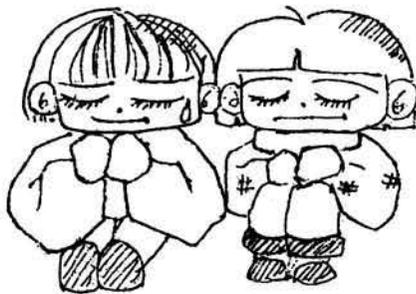
※決定者名簿の氏名・年齢の次に記載されている番号です。

どうしても指定場所にお越しになれない場合は、2月17日(金)までに連絡してください。期限内に連絡のない場合は、入居の権利がなくなる場合がありますのでご注意ください。

(連絡先: 神戸市災害対策本部 一時使用住宅係)
☎(078) 392-9869

受け継いできた店が全壊した。涙を流して消火活動を手伝っていた姿を見て私も泣いた。父はしばらくは放心状態だったが地震への怒りか何かが父を変えてしまった。私が30分ほど避難所を離れたことで私は頬を思いきりぶたれた。何か手伝おうとしても邪魔だと言われた。父のことを怖いと思った。父を変えてしまった地震を憎らしいとも思った。

けれどもそんな父も最近落ち着きを取り戻し、昔の優しい父に戻ってきた。父の笑顔を見るようになり私もほっとした。あらためて家族を本当に好きだなと思った。この地震でなくしたものは本当に大きいけれども、それよりもっともっと大切なものは何かということを感じさせてくれたと思う。この経験を私は一生忘れない。



大震災にあって

3年 立山 優子

私達家族は地震の3日ぐらいあとから避難所生活を始めた。しかし父親だけは家に残った。父の性格は集団生活ができないタイプなので、しかたがないというしかない。父が避難所に行かないのなら私達が家に帰るしかない。でも我が家はもうすこしで取り壊しになるためガスも水道も出ない。そんな不便な生活は送りたくないと思った。

しかしみんな家で寝たいと思っているはずである。家族の中で一番悩んでいるのが母であった。家には父が残っている。日に日に父は不機嫌になってくる。母は時々家に寝に帰

る。私も家に帰ったときは避難所の話はしなかった。それが私にできる父を怒らせないことだからだ。

父は今の家に住みたいと思っているようだ。それに今ではもう何もおこらなかつたように生活している。ただ一つ気になるのが父がこの頃食欲が無いように思う事だ。ずっとおにぎりだったので普通の御飯を見てもほとんど食べない。父は仕事にもいっているが、それなのに食欲がないということは、かなりこの生活にまいってきているように思う。まだまだこの生活が続くであろうに。

この先、ほんとうにどうなるのであろうか。住まいが無くなるということ、こんなに真剣に悩むとは思ってもみなかった。一家の大黒柱である父は口には出さなくても心の中で私以上に悩んでいるはずだ。これからも不便な生活が続くでしょうが、父の頑張りに期待するしかない。今まで見たことのない両親の力を見たいと思っている。

第一次募集 入居決定者の皆様へ

入居が決定した方は、入居に関する例約をおこないます(住戸によっては附随して居るものもあります。)ので、2月8日(水)～2月10日(金)に決定者名簿に記載されている番号によって下記の表に指定されている場所へお越しください。

記

1. 手続きに来られる方へ
手続きに来られる方は**申込書本人に限り**ます。なお、身体が不自由でどうしてもお越しになれない方のみ代理人による受付を認めます。(代理人による受付には本市の指定する委任状が必要となりますので、2月8日(水)・9日(木)の両日に下記の指定場所まで取りに来てください。)

2. 当日ご持参いただくもの
① 一時使用住宅入居申込受付確認書(受付印を押したもの)
② 本人であることを確認できる書類・証書
(例)運転免許証、健康保険証、年金証書、税金振替簿等
③ 印鑑(ご持参いただけない場合は印鑑を押印いただきます。)

3. 契約日時・場所
※例約は**お住まいいただく住居がある区**の下記に指定する場所で行います。必ずしも申し込みをした受付場所とは限りませんのでご注意ください。

番号	お住まいいただく住宅のある区の指定場所	日 時
①	東區 東區区民センター シアターホール	平成7年2月 8日(水)～ 10日(金)
②	東區 東區区民センター シアターホール	
③	中央区 東區区民センター(東水北側)	午前10時～ 午後2時
④	東區 東區区民センター	
⑤	北區 北區事務所	いずれの日・時間にお越しただいても結構ですが、8日(水)は振替が予定されますので、できるだけお避けください。
⑥	東區 東區区民センター	
⑦	東區 東區区民センター	
⑧	東區 東區区民センター	
⑨	東區 東區区民センター	
⑩	西區 西區事務所	

決定者名簿の氏名・年齢の次に記載されている番号です。

どうしても指定場所にお越しになれない場合は、2月17日(金)までに連絡してください。期限内に連絡のない場合は、入居の権利がなくなる場合がありますのでご注意ください。

(連絡先: 神戸市災害対策本部 一時使用住宅係)
☎(078)392-9869

(3) 震災レポート

大震災に学ぶ

2年 東條 紀子

私は1月16日、いつもの通りに過ごし、いつもの通りに床につきました。

翌朝の17日午前5時46分、ゴーという地鳴りと共にマグニチュード7.2の大地震が神戸を襲った。震災が起こり、私は様々な不便さを知りました。どれほど水が食物が大切なのか、今後とも再び起こらないとも限らない。「こんなはずじゃなかった」とならないようにも再度、安全の確認をしようと思った。経験した人々の意見も加えて考えてみることにした。

1. 水

トイレ、食器洗い用の水汲みにこんなものが使える！

飲み水以上にトイレに流す水、食器を洗う水を確保するのが難しかったという声が多い。飲み水はジュースなどで代用できてもトイレに流す水や洗い物に代用できる……そうはいかない。そのため海に水を汲みに行ったという人がかなりいた。問題は容器だった。何を使って水を汲むか、多かったのは洋服などを収納するクリアケース、クーラーボックスなどの箱類。これは容量が大きいので一度に沢山の水が得られるが、持ち運びを考えると、車かバイクがないと不便かもしれない。歩いて水を汲みに行くなればバケツかペットボトル。しかしバケツはどうしても水がこぼれてしまうのでペットボトルの方がいい。またビニール袋の中に水を入れてもうまく確保する事が出来る（私は風呂に入るために電気ポットに自ら湯を沸かして大切に少しずつ使いました。水の大切さがとてもわかりました。）「飲み水確保に豆腐屋をチェック!!」

豆腐を製造するには大量の水がいる。そのため豆腐屋では井戸水を引いていることが多

い。電気が通ってモーターが動きさえすれば井戸水はいくらでも汲み上げることができる。神戸の一部、町の豆腐屋さんが周辺の住民に水を配る光景が見られた。今は数少なくなったけれど町に豆腐屋があるかどうか調べておくといい。

「水のいらないシャンプー」が威力を発揮！

私たちは水がでない状態で3～4週間お風呂に入れなかった。そんなときの水のいらないシャンプーがとても役に立った。不快感をなくすことが出来た。これで何週間か入らなくても大丈夫です。

2. ガス、電気

「ガスの臭いがしたら行動に注意」

地震の後にはもれたガスに引火して二次災害を引き起こす可能性が強い。ガスの臭いに気づいたらタバコを吸わないのはもちろんライターを落としたときの火花にも厳重に注意すること。

「ホットプレート・ガスコンロが大活躍」

普段あまり使ってないけれど震災時に予想以上の働きをしてくれたのがこの二つ。どちらも食べ物を調理するのはもちろんのこと、ホットプレートに薬缶をのせてお湯を沸かすことも出来る。一台持っているとう便利です。

3. 食料品「冷凍しておくだけで非常食に」

パンや残ったごはん・カレーなど常温で解凍すればなんとか食べられそうな食品は冷凍する習慣をつけておこう。味はともかく空腹を満たすことは出来ます。

「カップラーメンは非常食リストに不可欠」

阪神大震災が起きたのは冬のまっただ中。今回の地震で温かくすぐ食べれておいしいカップラーメン類は特に冬場に欠かせない非常食といえる。

「夏場、食中毒に気をつける」

食べてからでは遅い。

4. 電話

「地震後5～10分の間は自宅の電話もつながりやすい」

地震直後は電話回線が混み合っていないせいかつながりやすい。15～20分たつとすぐに回線は混み合っていた。連絡は早いうちに取りおいた方がよい。またカードが使えなかった。(停電のため)10円玉を沢山用意していた方がよい。また携帯電話もとても便利で、地震後持つ人がふえたといえます。

5. 家具「家具類、食器棚は必ず固定する。」

地震後、よくこんな所で生きてられたなあをつくづく感じた。タンスは落ちてきたけれど、あやうく布団で身を守った。今回で身の震える思いをしたから次回いつくるかわからないが、ネジなどで固定するのは絶対必要だと思った。

被災後のライフライン

2年 駒形由紀子

*なぜこの被災後の生活について調べようと思ったのか。

私はなぜこのことについて調べようと思ったのかというと、自分にとっても身近で調べやすいと思ったからです。それと、いろんな意味でいい経験をしたことを残す必要があると思ったからです。

*水について

私の家は、東灘区の深江の方なんですけど、家は住宅なので、その辺の家で水が出ていても、住宅の上の方にあるタンクが直らないと水が出なくて、本当に困りました。あと水が出ても水が汚くて、3日ぐらいは水も飲料水とかには利用できなくて困りましたが、トイレなどには使えたのでよかったですと思います。

水は2月27日にやっと出ました。地震が起

きてから約1か月くらいは、親戚の人が水を持ってきてくれたり、近くに井戸水が出てたのをもらいに行ったりしました。

水がでなくて一番困ったのが最初の1週間ぐらいで、あとの3～4週間はほとんど井戸水と買ってきた水とで何とか暮らしていきましました。あと洗濯の時は一番困りました。1回の洗濯するのに、台車で約4～5回ぐらゐ家と井戸水を移動しました。ただでさえ水はとても重いのに、それを4～5回も運んだときはさすがにへとへとになりました。

水で一番困ったのはとりあえず洗濯のときでした。ちなみに家のまわりはだいたい2月25日から3月5日ぐらゐにはすべて復旧したと思います。

*ガスについて

私の家では一番遅く復旧したのがこのガスでした。地震が起きてから、どうしていたのかというと、ホットプレートを使ったり、カセットコンロを使っていました。ガスが出なくて困ったことは、みんなそうだと思うんですけどお風呂です。うちはガスが出るまで銭湯に行っていました。ガスが出なくて困ったことはそれくらいだと思います。ちなみに家の周りは4月20日くらい～4月30日くらいにすべての家で、ガスが出たと思います。うちは4月23日でした。

*電気について

私の家は地震が起きて一番早く復旧したのがこの電気でした。地震がおきて3日後に電気は復旧しました。復旧するまでは、こたつでずっと家族4人と祖父母6人で寝ていました。電気は通っていなかったのに、こたつの中はとてもあたたかくなっていたのを今でも思い出します。電気が復旧しなくて一番困ったのは夜の明かりでした。夜になると真っ暗になるので懐中電灯でトイレに行ったり、ローソクで部屋全体を明るくしたりしていました。私は地震が起きた直後の時、真っ暗なのが一番印象に残っていて、本当に夜は暗いのが怖

食べてからでは遅い。

4. 電話

「地震後5～10分の間は自宅の電話もつながりやすい」

地震直後は電話回線が混み合っていないせいかつながりやすい。15～20分たつとすぐに回線は混み合っていた。連絡は早いうちに取りおいた方がよい。またカードが使えなかった。(停電のため)10円玉を沢山用意していた方がよい。また携帯電話もとても便利で、地震後持つ人がふえたといえます。

5. 家具「家具類、食器棚は必ず固定する。」

地震後、よくこんな所で生きてられたなあをつくづく感じた。タンスは落ちてきたけれど、あやうく布団で身を守った。今回で身の震える思いをしたから次回いつくるかわからないが、ネジなどで固定するのは絶対必要だと思った。

被災後のライフライン

2年 駒形由紀子

*なぜこの被災後の生活について調べようと思ったのか。

私はなぜこのことについて調べようと思ったのかというと、自分にとっても身近で調べやすいと思ったからです。それと、いろんな意味でいい経験をしたことを残す必要があると思ったからです。

*水について

私の家は、東灘区の深江の方なんですけど、家は住宅なので、その辺の家で水が出ていても、住宅の上の方にあるタンクが直らないと水が出なくて、本当に困りました。あと水が出ても水が汚くて、3日ぐらいは水も飲料水とかには利用できなくて困りましたが、トイレなどには使えたのでよかったですと思います。

水は2月27日にやっと出ました。地震が起

きてから約1か月くらいは、親戚の人が水を持ってきてくれたり、近くに井戸水が出てたのをもらいに行ったりしました。

水がでなくて一番困ったのが最初の1週間ぐらいい、あとの3～4週間はほとんど井戸水と買って来た水とで何とか暮らしていきましました。あと洗濯の時は一番困りました。1回の洗濯するのに、台車で約4～5回ぐらいい家と井戸水を移動しました。ただでさえ水はとても重いのに、それを4～5回も運んだときはさすがにへとへとになりました。

水で一番困ったのはとりあえず洗濯のときでした。ちなみに家のまわりはだいたい2月25日から3月5日ぐらいいにはすべて復旧したと思います。

*ガスについて

私の家では一番遅く復旧したのがこのガスでした。地震が起きてから、どうしていたのかというと、ホットプレートを使ったり、カセットコンロを使っていました。ガスが出なくて困ったことは、みんなそうだと思うんですけどお風呂です。うちはガスが出るまで銭湯に行っていました。ガスが出なくて困ったことはそれくらいだと思います。ちなみに家の周りは4月20日ぐらいい～4月30日ぐらいいにすべての家で、ガスが出たと思います。うちは4月23日でした。

*電気について

私の家は地震が起きて一番早く復旧したのがこの電気でした。地震がおきて3日後に電気は復旧しました。復旧するまでは、こたつでずっと家族4人と祖父母6人で寝ていました。電気は通っていなかったのに、こたつの中はとてもあたたかくなっていたのを今でも思い出します。電気が復旧しなくて一番困ったのは夜の明かりでした。夜になると真っ暗になるので懐中電灯でトイレに行ったり、ローソクで部屋全体を明るくしたりしていました。私は地震が起きた直後の時、真っ暗なのが一番印象に残っていて、本当に夜は暗いのが怖

くていつも懐中電灯を持って歩いたのをよく思い出します。とりあえず電気が通って良かったのは、電気がついて部屋が明るくなったのが私は一番うれしかったです。

みんながいちばん喜んだのは電化製品が使えるようになったことだと思います。電気ポット、炊飯器、ホットプレートなど少しだけけれど、調理ができるようになったことだと思います。今まで親戚が持ってきたおにぎりなどを食べていたのが、ちがうものも作れるようになり食べられることだと思いました。実際、毎日がおにぎりなどではさすがにあきてしまい、2～3日が限界だったような気がします。私は生きるためにはとても電気は必要だと思います。あと水も。この2つがあれば、あとはなくても何とかなるのでは……。と思いました。それくらい、貴重な体験をしてしまったのではと、少し考えています。家の周りは復旧するのに3～7日くらいかかってすべての家に電気がついたのだと思います。

* 交通について

私は深江に住んでいるので、主に阪神電車を利用することになるのですが、阪神が青木まで通ったのが確か1月26日でした。私は地震が起きる前に風邪をひいてしまい、体調を崩していたので、22日の日から奈良へ行っていました。行きは車で行ったので困らなかったのですが、風邪がなおっても神戸に帰れなくて困っていましたが、26日の日に阪神電車が青木まで通り、29日に阪神電車で帰ってきました。私は三宮の方がどうなっているのかこの目で見たくて、どうしても行きたかったのですが、三宮まで電車が通らなかったのであきらめていました。が、代行バスなどが出ているので行きました。交通に困ったのはそれくらいです。

* まとめ

私はこの阪神大震災を体験して、電気と水さえあればどうにか暮らしていけるとというのがわかってよかったと思います。もう二度と

こういう体験はしたくはないけれど、もしもう一度こういう大きな地震が起きたときは、この阪神大震災で体験したことをきちんとして、ちゃんとした生活をおくれるよう努力したいと思います。

多くの人に感謝

2年 奥村 秀人

地震前と地震後では、まったく生活が変わってしまいました。自分の家は全壊で家では住めなくなりましたが、まわりはもっとひどく、自分の家に住めなくなったり、どこにも行くことができなくてテント生活をしている人などと比べると、僕は近くに親戚の家があったので、地震後もちゃんとした家に住むことができました。

親戚の家がガラス店を営んでいるし、両親がその会社で働いており、会社の関係のある人たちが、いろんな地域から水とか缶詰とかカップラーメンとかの食料をトラックいっぱいにもってきてくれたり、様子を見にきてくれたりして、いろいろな人に助けってもらった。すごく環境が変わってこれからどうなるんやろうと思った。



〈我が家の玄関〉

ほんとうは扉は全部地震でふっとんでいたけど、中に誰かが入らないように扉をつけ直したが、全体にゆがんでしまってちゃんと扉が閉まらなくなってしまった。玄関の横の壁は割れて落ちてしまっていたり、インターホー

くていつも懐中電灯を持って歩いたのをよく思い出します。とりあえず電気が通って良かったのは、電気がついて部屋が明るくなったのが私は一番うれしかったです。

みんながいちばん喜んだのは電化製品が使えるようになったことだと思います。電気ポット、炊飯器、ホットプレートなど少しだけけれど、調理ができるようになったことだと思います。今まで親戚が持ってきたおにぎりなどを食べていたのが、ちがうものも作れるようになり食べられることだと思いました。実際、毎日がおにぎりなどではさすがにあきてしまい、2～3日が限界だったような気がします。私は生きるためにはとても電気は必要だと思います。あと水も。この2つがあれば、あとはなくても何とかなるのでは……。と思いました。それくらい、貴重な体験をしてしまったのではと、少し考えています。家の周りは復旧するのに3～7日くらいかかってすべての家に電気がついたのだと思います。

* 交通について

私は深江に住んでいるので、主に阪神電車を利用することになるのですが、阪神が青木まで通ったのが確か1月26日でした。私は地震が起きる前に風邪をひいてしまい、体調を崩していたので、22日の日から奈良へ行っていました。行きは車で行ったので困らなかったのですが、風邪がなおっても神戸に帰れなくて困っていましたが、26日の日に阪神電車が青木まで通り、29日に阪神電車で帰ってきました。私は三宮の方がどうなっているのかこの目で見たくて、どうしても行きたかったのですが、三宮まで電車が通らなかったのであきらめていました。が、代行バスなどが出ているので行きました。交通に困ったのはそれくらいです。

* まとめ

私はこの阪神大震災を体験して、電気と水さえあればどうにか暮らしていけるとというのがわかってよかったと思います。もう二度と

こういう体験はしたくはないけれど、もしもう一度こういう大きな地震が起きたときは、この阪神大震災で体験したことをきちんとして、ちゃんとした生活をおくれるよう努力したいと思います。

多くの人に感謝

2年 奥村 秀人

地震前と地震後では、まったく生活が変わってしまいました。自分の家は全壊で家では住めなくなりましたが、まわりはもっとひどく、自分の家に住めなくなったり、どこにも行くことができなくてテント生活をしている人などと比べると、僕は近くに親戚の家があったので、地震後もちゃんとした家に住むことができました。

親戚の家がガラス店を営んでいるし、両親がその会社で働いており、会社の関係のある人たちが、いろんな地域から水とか缶詰とかカップラーメンとかの食料をトラックいっぱいにもってきてくれたり、様子を見にきてくれたりして、いろいろな人に助けられました。すごく環境が変わってこれからどうなるんやろうと思った。



〈我が家の玄関〉

ほんとうは扉は全部地震でふっとんでいたけど、中に誰かが入らないように扉をつけ直したが、全体にゆがんでしまってちゃんと扉が閉まらなくなってしまった。玄関の横の壁は割れて落ちてしまっていたり、インターホー

ンのついている柱が折れてしまった。

台所は見た感じがひどかった。棚がはずれて落ちそうになっていたし、食器とかはほとんど壊れて下に転がっていた。

2回の物置部屋のような場所は、タンスとかがいっぱい置いていたのが、ほとんど倒れてしまい、そのタンスがベランダのドアのガラスを割ってしまった。



〈風呂場〉

これは浴槽が下にへこんでしまって、壁も割れてしまってボコボコになっている。見た目はここが一番ひどかったように思う。風呂場は去年ぐらいにつくり直して、新しかったからそう思ったのかもしれない。

この地震を体験して一番思ったことは、やはりなんと言っても「こわかった」の一言につきると思う。最初はほんまに夢やと思って外に飛び出すと、遠くでどこかが火事になってたり、誰かの悲鳴とかが聞こえたりして、ほんまに怖かったとしかいいようがない出来事やった。でも、この地震があっていろいろなことを学んだと思う。いろいろな人に助けってもらって、その人たちのありがたさがすごく心に残った。でもその反面、自分のことしか考えられない人とかを見て、なんてバカなことをしてるんやろうと思ったりもした。

僕自身もボランティアで地域の人に食料を配ったりしたけど、そこでも配っている時に「ありがとう」と言ってくれと、すごくうれしいし、「こんだけしかくれへんの」とか言われると、なんでこんな奴のためにしんど

い思いをして食料を配らなあかんねんと思う。最近テレビで見たけど、子供の一番ほしいものが地震前はファミコンとかおもちゃとかだったけど、地震後は「命」に変わったらしい。こういうところは、地震でよくなった点だと思う。でも、こういうことは二度とおこらないでほしいと思う。

震災当時の近所のように

2年 森安 晃久

2月13日に、阪急王子公園～御影間が開通した。JR灘～王子公園～御影～JR住吉とアクセスすると大阪まで1時間で行けるようになった。王子公園駅から灘駅までは歩いてたったの5分。めっちゃ近い。この写真は夕方に撮ったもので、ちょうどラッシュ時と重なった。サラリーマンが駅を目指してもくもくと歩いている。灘駅へ行くまでの道に屋台のおでんとかラーメン屋とかが出ていた。でもJRが完全開通すると風のように去っていった。



阪急王子公園駅西口交差点

JRの住吉～六甲道が不通の間ここは、三宮駅よりにぎわっていた。急に屋台が増えて喫茶店も営業を再開した。灘駅をよく使う人は駅舎を見てビックリしたと思うが、使わない人は何が何だかわからないと思う。実は切符売り場をぶち抜いて出入り口になっているのです。南側はJRの代替バスのターミナルに

ンのついている柱が折れてしまった。

台所は見た感じがひどかった。棚がはずれて落ちそうになっていたし、食器とかはほとんど壊れて下に転がっていた。

2回の物置部屋のような場所は、タンスとかがいっぱい置いていたのが、ほとんど倒れてしまい、そのタンスがベランダのドアのガラスを割ってしまった。



〈風呂場〉

これは浴槽が下にへこんでしまって、壁も割れてしまってボコボコになっている。見た目はここが一番ひどかったように思う。風呂場は去年ぐらいにつくり直して、新しかったからそう思ったのかもしれない。

この地震を体験して一番思ったことは、やはりなんと言っても「こわかった」の一言につきると思う。最初はほんまに夢やと思って外に飛び出すと、遠くでどこかが火事になってたり、誰かの悲鳴とかが聞こえたりして、ほんまに怖かったとしかいいようがない出来事やった。でも、この地震があつていろいろなことを学んだと思う。いろいろな人に助けてもらって、その人たちのありがたさがすごく心に残った。でもその反面、自分のことしか考えられない人とかを見て、なんてバカなことをしてるんやろうと思ったりもした。

僕自身もボランティアで地域の人に食料を配ったりしたけど、そこでも配っている時に「ありがとう」と言ってくれと、すごくうれしいし、「こんだけしかくれへんの」とか言われると、なんでこんな奴のためにしんど

い思いをして食料を配らなあかんねんと思う。最近テレビで見たけど、子供の一番ほしいものが地震前はファミコンとかおもちゃとかだったけど、地震後は「命」に変わったらしい。こういうところは、地震でよくなった点だと思う。でも、こういうことは二度とおこらないでほしいと思う。

震災当時の近所のように

2年 森安 晃久

2月13日に、阪急王子公園～御影間が開通した。JR灘～王子公園～御影～JR住吉とアクセスすると大阪まで1時間で行けるようになった。王子公園駅から灘駅までは歩いてたったの5分。めっちゃ近い。この写真は夕方に撮ったもので、ちょうどラッシュ時と重なった。サラリーマンが駅を目指してもくもくと歩いている。灘駅へ行くまでの道に屋台のおでんとかラーメン屋とかが出ていた。でもJRが完全開通すると風のように去っていった。



阪急王子公園駅西口交差点

JRの住吉～六甲道が不通の間ここは、三宮駅よりにぎわっていた。急に屋台が増えて喫茶店も営業を再開した。灘駅をよく使う人は駅舎を見てビックリしたと思うが、使わない人は何が何だかわからないと思う。実は切符売り場をぶち抜いて出入り口になっているのです。南側はJRの代替バスのターミナルに

なっていた。このバスに乗るのに、だいたい15分ぐらい並ばないと乗れなかった。灘駅に、快速や新快速がとまるので、記念に写真をとってしまった。



JR灘駅北改札口前

王子陸上競技場のサブグラウンドに自衛隊がテントをはっていた。今は仮設住宅が建っている。震災前は、ここによく上野中学校の陸上部が練習に来ていた。小学校の運動会もここで開かれていた。今、だんだん公園が少なくなって来ているのに、これ以上子供の遊び場を取ってどうするのだろうか。仮設住宅を建てるんだったら、神戸製鋼の住宅跡地にすればよかったのに、あそこなら100戸ぐらいは建てられるのに。



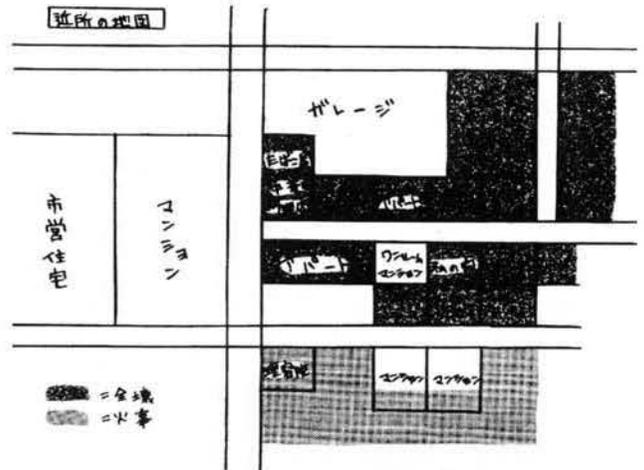
王子陸上競技場前サブグラウンド

被災状況と被災後の居住環境

2年 鎌倉 桂子

1. 近所のように

私の家の回りは、ほとんど全壊しました。下の方は焼け野原になっています。



この辺は本庄町1丁目の辺りですが、森南町からこの辺にかけては、東灘区でも最もたくさん人が亡くなったところだそうです。

- ・濃いところは全壊したところです。
- ・うすいところは火事で焼けてしまったところです。

近所の写真



- ① もっと向こうの方もつぶれています。この辺りで残った家は3件だけです。
- ② 私の住んでいた家です。3階建ての1階がつぶれました。
- ③ このアパートは、たくさん人が死にました。10人くらいだと思います。中学生の子もいっぱい死にました。制服やサッカーボールが、花といっしょに置かれていました。

なっていた。このバスに乗るのに、だいたい15分ぐらい並ばないと乗れなかった。灘駅に、快速や新快速がとまるので、記念に写真をとってしまった。



JR灘駅北改札口前

王子陸上競技場のサブグラウンドに自衛隊がテントをはっていた。今は仮設住宅が建っている。震災前は、ここによく上野中学校の陸上部が練習に来ていた。小学校の運動会もここで開かれていた。今、だんだん公園が少なくなってきたのに、これ以上子供の遊び場を取ってどうするのだろうか。仮設住宅を建てるんだったら、神戸製鋼の住宅跡地にすればよかったのに、あそこなら100戸ぐらいは建てられるのに。



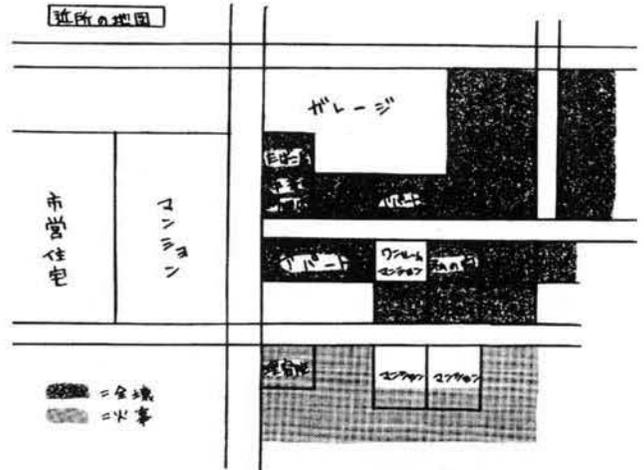
王子陸上競技場前サブグラウンド

被災状況と被災後の居住環境

2年 鎌倉 桂子

1. 近所のように

私の家の回りは、ほとんど全壊しました。下の方は焼け野原になっています。



この辺は本庄町1丁目の辺りですが、森南町からこの辺にかけては、東灘区でも最もたくさん人が亡くなったところだそうです。

- ・濃いところは全壊したところです。
- ・うすいところは火事で焼けてしまったところです。

近所の写真



- ① もっと向こうの方もつぶれています。この辺りで残った家は3件だけです。
- ② 私の住んでいた家です。3階建ての1階がつぶれました。
- ③ このアパートは、たくさん人が死にました。10人くらいだと思います。中学生の子もいっぱい死にました。制服やサッカーボールが、花といっしょに置かれていました。

④ この近所の人達は、このがれきの山を通過して、(高さが1mぐらいあります)自分の家のものを出しに行きました。すごく危ないです。

私も通るとき、怖かった。17日に脱出するときは、はだしだったので、足をいっぱい切った。次の日歩けませんでした。

電柱などもたくさん倒れていて、危なかった。この近くは、通れない道がたくさんありました。

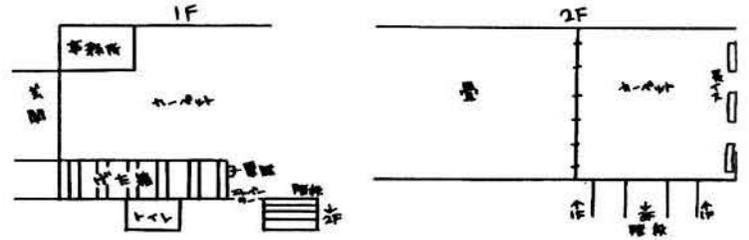
- こういう時にも、自分勝手な人はいるもので、こっちは1つでも多くの荷物を倒壊した家から出したいのに、「早く解体してくれないと、うちの車が出せない」などと怒っている人がいました。解体屋まで紹介しに来たのです。すごく腹が建ちました。
- 解体は、3～4件いっしょでした。こっちに着くと、私と弟の部屋があった3階がもうありませんでした。解体し始めると、台所がなくなり、階段がなくなり、全部なくなりました。逃げる時は、「生きていればいい」と思いましたが、2年10ヵ月住んだ家が全部なくなった時は泣けてきました。私は、まだ解体していない家のガレージの所に座って見ることにできませんでした。

2. 避難所の生活

- 私は今、地震から2回引っ越しをして、家を借りて住んでいます。この前までは6畳2間の文化住宅に5人住んでいました。すごくきゅうくつでした。その前は避難所にいました。避難所は創価学会の神戸講堂でした。(3～4階ぐらいまであります。)約1ヵ月ほどお世話になりました。
- 私の家は玄関がつぶれたので、くつがありませんでした。だから避難所にいる間は、外へ行くときもスリッパで生活していました。スリッパはおばあちゃんにももらいました。
- 避難所では、余震がある度に悲鳴やざわめきがありました。ここは住吉だったの

でガスもれの避難勧告などもあり、すごく大変でした。いつも不安でした。京都から、おばあちゃんのはるばる来てくれた時はうれしかった。くつ下や、水やかんづめなんかをいっぱい、重くて、電車も通っていないのに、持ってきてくれた。本当にうれしかった。

- 避難所 -



私は2階の畳の間で生活していました。来たばかりの時は玄関までぎゅうぎゅうで歩くのも大変でした。

となりにいたおじさんはいい人で、いろいろお話もしました。おかしももらいました。

- 避難所での食事は、おにぎりでした。とてもおいしかった。いつ食べたかは覚えていません。そのおにぎりは奈良からのもので、ラップに包まれたそのおにぎりには、「がんばってください」と書かれた小さい紙がついていました。うれしかった。
- 避難所を出た後も、食事は、近くの小学校で頂いていました。最初の頃はおかずと、サラダみたいなもの、ごはんを頂いていましたが、お弁当になりました。6月頃まで頂きました。

3. 避難所での生活を振り返って

避難所にいる間は、すごく精神的にめいってしまっていて、目が不自由だったり足を怪我して歩いて歩けなかったりしていたということもあったのですが、“何もかもなくしてしまった”という絶望感がそれ以上に私にのしかかっている、何日の何時だということも気

にせずに生活していた様に思います。たいてい、いつも寝ていたのですが、ふと思い出した様に起きて、時計を見てもらうと（自分では目が効かないので）夜中だったり、救援物資のおにぎりが届いたという報告で起きたり、時間感覚がほんとにわからなくなっていました。実際、家はもちろん、集めていた本やCD、それに、高校に入ってからあまり会ってはいなかったけれども、昔からいっしょに遊んできた幼なじみまでなくしてしまったショックは相当ひどかったです。

最初の頃は泣き寝入りばかりしていました。夢にまで17日のことがでてきました。なんだか、生きることをやめたみたいに私は何もなくなりました。これからは何をやっても無駄だと思いました。何を集めても、何をしてもいつかなくなるから。これは今でも思っているけど、でも、私がこんなに元気になったのは、友達や、避難所でいっしょに生活してきた方や、ボランティアして下さった方のおかげだと思っています。

1995年度神商祭

2 学年展示「阪神大震災」を実施するにあたって

阪神大震災は、本校生にとっても、当時の1年生にとっても、それまでの平穏な生活を一変させた。肉親や親しい人を亡くし、家屋は倒壊し、心の傷を負った。校舎も一部が使用不能になり、生徒は家族とともに震災の後片付けをしなければならなかった。とても、授業や学校に行ける状態ではなかった。

震災から10ヵ月になろうとする現在、当時の混乱したようすはなくなったが、今も震災の傷跡は残り、震災に対する思いは一人ひとり異なる。

阪神大震災に関する学年展示を行うにあたり、まず危惧したのは、このような展示をすること自体、問題はないのか、ということだった。震災で痛手を負い、生活環境が変わり、心身ともに疲れた人に震災を思い出させていいのか、フラッシュバックさせていいのかということだった。夏休みの課題として震災レポートを出したが、その中でも「自分は被災者でこのようなレポートを書かせる意図は何か、思い出したくない」という意見もあった。また、マスコミ報道に関して「もし、震災が東京で起こっていれば…」などについて、震災を他人事のように扱っている、人の痛みを共有し、考え、行動することの大切さを訴えるものもあった。

現在、復興に向け、各地で工事が進められている。震災後の課題となった住むところや働く場所の確保、防災に強いまちづくり、心のケアの問題など、まだクリアされなければならない課題も多い。この時代に生き、震災という強烈な体験をした人々が、今後どのように生き、何を行うか。そのための第一歩は事実を記録に残し、考え、実践することだと思う。

心の傷は永遠に続くかもしれない。しかし、心のどこかで“Never Give Up”の気持ちをもって少しずつでもいい、前に進んでいってほしい。

この展示の主な内容は次の5点です。

1. 夏休みの課題レポート「阪神大震災について」から
2. 「阪神大震災の災害状況と活断層」の立体模型の制作
3. 震災当時の学校、長田区、東灘区などの写真
4. 震災当時の航空写真
5. 震災ビデオ

神戸商業高校2年生の生徒のレポートを中心に、立体模型は2学年展示係が9月早々から制作に取り組んだものです。ご覧いただき、生徒への激励をよろしくお願い申し上げます。

1995年11月3日

市立神戸商業高等学校 2学年主任 伊藤 善文

(4) ボランティア体験記

ボランティアをして

2年 脇谷 朋子

1月17日の地震後、私達は母校である吾妻小学校に避難しました。その日は父が出張で家にいなかったのととても不安でした。その分、一人暮らしの伯母と一緒に心強かったです。その日小学校に集まった人数はなんと200人もいたらしいです。教室も空いていたのですが、体育館の方が安全だということで体育館に入りました。水も、電気も、ガスも止まっていたので、夜はライターやろうそく、懐中電灯で過ごしました。運動場ではたき火をしている人も沢山いました。あんなに寒かったのに外にいる人もいました。建物に入るのがこわかったらしいです。電気つかない何日間か体育館では人が亡くなったり建物が壊れたりしているのに、沢山の大人達がビールを片手に鍋を囲んで盛り上がっていました。今思えば、やりきれない気持ちだったのかもしれないませんが、その時は「この人達は一体何を考えてるんだろう。」とっていました。一番すごかったのはトイレでした。姉と一緒に4階のトイレに行くとあふれそうになっていました。3階のトイレに行こうとしたら先生が「どこも一緒だ。」「ガマンしてくれ」と言われました。家の事も心配なのに地震のその日に集まれた先生はすごいと思った。こうして私の避難所生活が4ヵ月間続きました。

私は避難所での4ヵ月間の生活の中で貴重な経験をしました。その中でも一番の思い出はボランティア活動に参加したことです。はじめは大体卒業生がしていました。テントでは部屋別に洗濯がされていて、自転車はいろんな県からの物で貸出をしてくれていました。校舎の時計は5時46分で止まっていた。地震後の一週間は、この運動場でかんぱん、

おにぎり、ジュース、チーズなどをもらいました。初めの間ボランティアは2、3人でした。大変な時に、少ない人数で大人の人が頑張ってくれていました。それなのに配り方が悪いとか言って私の目の前でなぐりあいになりました。その時から私や友達で手伝うことにしました。

初めは地元の人ばかりでしたが、日が経つに連れて東京、長野、北海道など全国からボランティアの人達が来てくれました。ボランティアの主な活動は物資の運搬、分別、配給、名簿作成、炊き出し参加、その他子供と遊ぶなど以外と色々ありました。朝は6時30分か7時に起きて物資を取りに行きます。昼までに朝ご飯を配ると、物資が届きます。昼ご飯の用意、配布、午後は、子供達と遊び、ミーティング、物資の分別。夜にはまたご飯を配り、再びミーティングをして一日が終わり。

部活が始まるまでの時間、私は毎日この生活を続けました。

活動は決して苦痛ではなく、とても楽しかったです。特に良かったと思えることは二つです。一番目は小学生の子供達と一緒に、毎日楽しく遊べたことです。すごく無邪気で地震の悲しさを忘れさせてくれる程元気でした。時には、「友達死んでん。」「家をつぶしたよ。」とか普通の顔で話していました。心の中ではみんないろんな悩みを抱えているように思えました。でも、素直でかわいい友達が沢山できてうれしかったです。もう一つはいろんな素晴らしい出会いが出来たことです。全国各地いろんな所から来た人達に出会えただけでもうれしいのに、沢山のひとと知り合えたことです。上は50~60才、下は同じ年まで、本当に幅広い人達でした。

一人目のリーダーの人は地元の人なので口はすごく悪いけど一生懸命にしてくれるととてもいい人でした。その人も頑張りすぎて倒れ

てしまい、4～5日間休まれてしまいました。それから何人かのリーダーが変わって、東京の山下さんという27才ぐらいの人になりました。その人の口癖は「出会いを大切に」でした。私はボランティアの人達70～80人と話をしました。とにかくいろんな人達と仲良くなりました。写真を一緒に撮ったり、ボランティアルームで一緒に寝たり、ご飯を食べに行ったりと、とにかく楽しかったです。落ち着いてきたら受付も出来て、私も頼りないなりに頑張りました。新聞の配布、自転車の貸出もしました。年をとった人とも家族みたいにかわいがってもらいました。ボランティア活動の中で山下さんの言う「出会いを大切に」を私は守れたと思います。みんなで撮った写真、手紙はつらい気持ちをぶっとばしてくれる大切な宝となりました。そして、ボランティアはつくづく大変なんだとよく分かることが出来て本当によかったです。



生きることの尊さ

3年 小幡 寛満

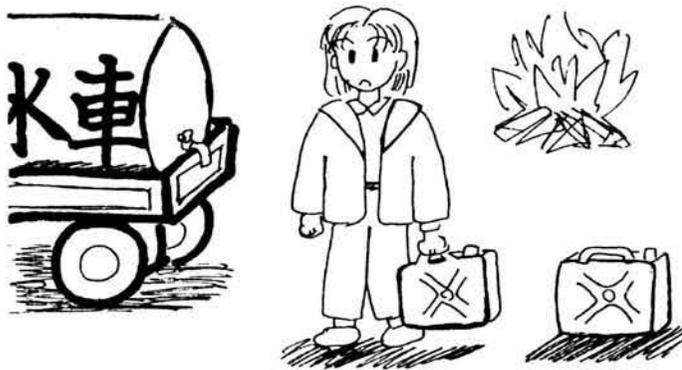
あの震災から6日後の朝、報道で中3の頃同じクラスだった男子の名前が何の前ぶれもなくパッと現れた。朝、眠気が覚めぬうちにそれを見た私はおぼろげなショックと不安感に心を包まれながら朝刊に目を走らせた。と、その紙面の死亡欄には友人の名が間違いなく載せられていたのです。不安が現実の恐怖に変わる瞬間でした。その晩、安置所で“彼”

の姿を見た私は心をもぎ取られるような気持ちになりました。この日は、不意に襲われた現実に驚いた日でもあり、久しぶりに涙を流した日でもあった。それから2日後です。ボランティアをやってみようと思ったのは。

ボランティアをやり始めた当初は、辛くてやたら忙しくて、要領も分からず苦勞のしっぱなしだった。特に町内外への救援物資配りは単純作業ながら、一軒一軒回っていかねばならず、見知らぬ町でもあるのでややこしい仕事でした。他に炊き出しの手伝いや水くみ、子供の世話などもやりました。日毎に慣れてきて落ち着いた頃、やっとボランティアの意義を感じ取りました。初めはとにかく働くという時間だったのが、人とのふれ合いの時間というのに変わっていき、今はごく自然な行動として自分の中にあります。このボランティアを通じて人生に必要な確かなものが身に付いたというのが実感できました。

今回の地震で我々は得たものと失ったものがよく感じ取られたのではないか。約5200人も命が奪われ、あらゆる家屋、土地は焼かれ倒壊し、交通機関は混乱した。人間の自信は崩れ去り、自然の圧倒的な力のもとにひざまずかされた。これらの失われたものは多く、そして大きすぎた。だが反面、得たものもたくさんあったろう。例えば、現代の人間には失われつつあった物の大切さの心である。電気、水、ガス、食物、家、いろいろ失われたために思い知ったことだろう。どれだけ今まで自分達がぜいたくだったか。それを今回の震災は教えてくれた。また、個人的に忘れてはならぬと思ったのがコミュニケーションの貴重さだ。私はボランティアを通してたくさんの人々に出会った。親切で丁寧な人もいた。口が悪く、愛想のないような腹が立つ人もいた。世の中にはいろんな人がいるだろう、だからこそ人に接することは大切だと私は思う。震災を味わった人の心境は様々だろう。だから得たもの、失ったものも同様であろう。様々

てしまい、4～5日間休まれてしまいました。それから何人かのリーダーが変わって、東京の山下さんという27才ぐらいの人になりました。その人の口癖は「出会いを大切に」でした。私はボランティアの人達70～80人と話をしました。とにかくいろんな人達と仲良くなりました。写真を一緒に撮ったり、ボランティアルームで一緒に寝たり、ご飯を食べに行ったりと、とにかく楽しかったです。落ち着いてきたら受付も出来て、私も頼りないなりに頑張りました。新聞の配布、自転車の貸出もしました。年をとった人とも家族みたいにかわいがってもらいました。ボランティア活動の中で山下さんの言う「出会いを大切に」を私は守れたと思います。みんなで撮った写真、手紙はつらい気持ちをぶっとばしてくれる大切な宝となりました。そして、ボランティアはつくづく大変なんだとよく分かる事が出来て本当によかったです。



生きることの尊さ

3年 小幡 寛満

あの震災から6日後の朝、報道で中3の頃同じクラスだった男子の名前が何の前ぶれもなくパッと現れた。朝、眠気が覚めぬうちにそれを見た私はおぼろげなショックと不安感に心を包まれながら朝刊に目を走らせた。と、その紙面の死亡欄には友人の名が間違いなく載せられていたのです。不安が現実の恐怖に変わる瞬間でした。その晩、安置所で“彼”

の姿を見た私は心をもぎ取られるような気持ちになりました。この日は、不意に襲われた現実に驚いた日でもあり、久しぶりに涙を流した日でもあった。それから2日後です。ボランティアをやってみようと思ったのは。

ボランティアをやり始めた当初は、辛くてやたら忙しくて、要領も分からず苦勞のしっぱなしだった。特に町内外への救援物資配りは単純作業ながら、一軒一軒回っていかねばならず、見知らぬ町でもあるのでややこしい仕事でした。他に炊き出しの手伝いや水くみ、子供の世話などもやりました。日毎に慣れてきて落ち着いた頃、やっとボランティアの意義を感じ取りました。初めはとにかく働くという時間だったのが、人とのふれ合いの時間というのに変わっていき、今はごく自然な行動として自分の中にあります。このボランティアを通じて人生に必要な確かなものが身に付いたというのが実感できました。

今回の地震で我々は得たものと失ったものがよく感じ取られたのではないか。約5200人も命が奪われ、あらゆる家屋、土地は焼かれ倒壊し、交通機関は混乱した。人間の自信は崩れ去り、自然の圧倒的な力のもとにひざまずかされた。これらの失われたものは多く、そして大きすぎた。だが反面、得たものもたくさんあったろう。例えば、現代の人間には失われつつあった物の大切さの心である。電気、水、ガス、食物、家、いろいろ失われたために思い知ったことだろう。どれだけ今まで自分達がぜいたくだったか。それを今回の震災は教えてくれた。また、個人的に忘れてはならぬと思ったのがコミュニケーションの貴重さだ。私はボランティアを通してたくさんの人々に出会った。親切で丁寧な人もいた。口が悪く、愛想のないような腹が立つ人もいた。世の中にはいろんな人がいるだろう、だからこそ人に接することは大切だと私は思う。震災を味わった人の心境は様々だろう。だから得たもの、失ったものも同様であろう。様々

であったとしても良いものを得た人が多くいることを私は信じたい。

この震災が自分にとっては全く大切な経験だった。私は自然と人間の関係はとても生きる上で微妙であるということをもまず一つ感じた。そして、もう一つ。それは生きることの大切さである。生きているからこそ自分は未来へ向かっていける。後世に語り継ぐこともできよう、楽しめる、悲しめる、怒れる、泣ける、笑える。生きてさえいれば転んでもまた起き上がれるのだ。今回の災害で亡くなった人達のためにも悲しみや悔やむより、より多く生きる事が、我々にとって大切なのではないかと私は思いました。

ボランティアによって得たもの

3年 長間 宏則

忘れはしない、そう1995年1月17日午前5時46分、この阪神、淡路に史上初の震度7の激震がおそいました。あの時は土曜日からの3連休だったので、ほとんどの人は今日から学校だと思っていたのに違くない矢先の事でした。あの揺れを感じた時、何も出来ずただふとんの中にずっと入ったままでした。人間というのは、自然の力の前では無力に等しいということが分かりました。

揺れがおさまると、電気が消えました。外を見ると、自分の家の周囲はたいして被害がなかったのですが、大丈夫だったんだと思っていたところ、南の方で大火災が始まりました。ざっと見ただけでも5、6の巨大な火の塊があったので、とても驚きました。あとで知ったことですが、火災が最もすごかったのが長田区だったのです。しかし、私が見た光景は、決して長田区とひけを取らないぐらいの大火災でした。

明るくなってから車で南の方の様子を見に行くと、私の所と一変していました。家屋の倒壊があちらこちらにあって、焼け崩れてい

る家屋も多数ありました。南の方に行けば行くほどひどくなっているのです。私は家が上の方で良かったと思いました。

地震直後に、ガス・水道は止められていたので、ストーブがたけず、水は出ないので大変苦労した。水は、必ず昼前と、夕方頃2回はくみに行かないと足りないのです。公園に水をくみに行くのですが、その公園は南に5百メートル行かなければなりません。車で往復しましたが、給水車が通るので100メートルは車が置けないので、ポリタンクを両手に持って6～8往復坂を100メートルも登らなければなりません。もう、筋肉痛がとまらなかったです。でも、40日間ぐらいうると、近所に給水車が来るようになったので、楽になりました。

私は、この17年間災害等の本当の恐ろしさを知らなかった。知識だけの理解は、頭で分かったとしても、天災は体験した人でなければ分からないのものです。自分が積み上げた物が天災というあつという間の出来事によって、財産もなくなり、命がなくなってしまう怖さは、まるで戦争後のような光景にも思えた。映画、TV等の情報システムでは、日本の高速道路、建物は安全といわれていたが、毎日通りすがりに見ていた建物が、次の日に無残な形になってしまうこの現実に、私は夢を見ているような気がした。私自身目を疑ってしまうのは言うまでもなく、この震災がどれだけ大規模だったことか、私はこの身をもって悲劇を味わったばかりに、人の悲しみを知り、被災者とともに悲しむよりは、助けあい、協力し、今までの明るい生活を取りもどせるように私は、奉仕活動をした。しかし、悲しみを背負った人々なのに、顔には出さず今からを一生懸命生きぬこうとする姿が私の心に焼きついた。

1月の寒い中、路上に横たわる人にも毛布を渡した時に、「ありがとう」というその言葉が心の底から伝わってきた。私は今まで奉

であったとしても良いものを得た人が多くいることを私は信じたい。

この震災が自分にとっては全く大切な経験だった。私は自然と人間の関係はとても生きる上で微妙であるということをもまず一つ感じた。そして、もう一つ。それは生きることの大切さである。生きているからこそ自分は未来へ向かっていける。後世に語り継ぐこともできよう、楽しめる、悲しめる、怒れる、泣ける、笑える。生きてさえいれば転んでもまた起き上がれるのだ。今回の災害で亡くなった人達のためにも悲しみや悔やむより、より多く生きる事が、我々にとって大切なのではないかと私は思いました。

ボランティアによって得たもの

3年 長間 宏則

忘れはしない、そう1995年1月17日午前5時46分、この阪神、淡路に史上初の震度7の激震がおそいました。あの時は土曜日からの3連休だったので、ほとんどの人は今日から学校だと思っていたのに違いない矢先の事でした。あの揺れを感じた時、何も出来ずただふとんの中にずっと入ったままでした。人間というのは、自然の力の前では無力に等しいということが分かりました。

揺れがおさまると、電気が消えました。外を見ると、自分の家の周囲はたいして被害がなかったのですが、大丈夫だったんだと思っていたところ、南の方で大火災が始まりました。ざっと見ただけでも5、6の巨大な火の塊があったので、とても驚きました。あとで知ったことですが、火災が最もすごかったのが長田区だったのです。しかし、私が見た光景は、決して長田区とひけを取らないぐらいの大火災でした。

明るくなってから車で南の方の様子を見に行くと、私の所と一変していました。家屋の倒壊があちらこちらにあって、焼け崩れてい

る家屋も多数ありました。南の方に行けば行くほどひどくなっているのです。私は家が上の方で良かったと思いました。

地震直後に、ガス・水道は止められていたので、ストーブがたけず、水は出ないので大変苦労した。水は、必ず昼前と、夕方頃2回はくみに行かないと足りないのです。公園に水をくみに行くのですが、その公園は南に5百メートル行かなければなりません。車で往復しましたが、給水車が通るので100メートルは車が置けないので、ポリタンクを両手に持って6～8往復坂を100メートルも登らなければなりません。もう、筋肉痛がとまらなかったです。でも、40日間ぐらいうると、近所に給水車が来るようになったので、楽になりました。

私は、この17年間災害等の本当の恐ろしさを知らなかった。知識だけの理解は、頭で分かったとしても、天災は体験した人でなければ分からないのものです。自分が積み上げた物が天災というあつという間の出来事によって、財産もなくなり、命がなくなってしまう怖さは、まるで戦争後のような光景にも思えた。映画、TV等の情報システムでは、日本の高速道路、建物は安全といわれていたが、毎日通りすがりに見ていた建物が、次の日に無残な形になってしまうこの現実に、私は夢を見ているような気がした。私自身目を疑ってしまうのは言うまでもなく、この震災がどれだけ大規模だったことか、私はこの身をもって悲劇を味わったばかりに、人の悲しみを知り、被災者とともに悲しむよりは、助けあい、協力し、今までの明るい生活を取りもどせるように私は、奉仕活動をした。しかし、悲しみを背負った人々なのに、顔には出さず今からを一生懸命生きぬこうとする姿が私の心に焼きついた。

1月の寒い中、路上に横たわる人にも毛布を渡した時に、「ありがとう」というその言葉が心の底から伝わってきた。私は今まで奉

仕活動をした事がないので遠くにいる人にも、毛布等を持って行くのが大変なため、何度嫌になった事か。笑顔を作り、励ましの言葉を私に下さったので、私は頑張れる様になり、私がこんなにも喜んでもらったことが嬉しかった。

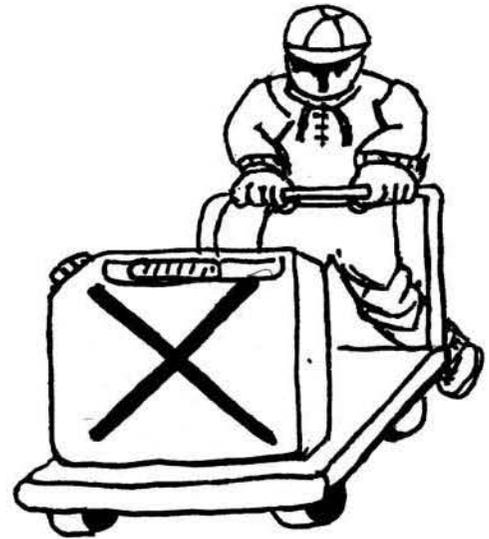
地震発生から5日後、灘区の区民ホールへボランティアをしに行った。まず、区民ホールに届けられた小さな色々な物資を仕分けしていかなければならない。20種類ぐらいあって、数量は多いので置く所がなくなるんじゃないかと思った。1時間半ぐらいで仕分けが終わると、今度は搬出していかなければならない。最低5種類で数量が5～10ぐらいを車で運ぶ。15台ぐらいで一区切りにして、搬入車が区民ホールにくる。これを前者にのべた仕分けする。これをまず三日間した。

四日目からは、区民ホールの整理が出来たので、物資の配給に回された。物資の配給は自動車に積んでから行くので、仕分けよりはずっと楽だった。その日、4回目の配給をした。避難場所では、区民ホールで言われた数量と避難している人数とが食い違いがあった。あとで分かった事では、午前中の人数の集計が区民ホールに届いていて、午後になって避難車が新たに増えた事が原因であった。こういう時は、そこの避難所の関係者が人数が増えたという事を通知しなければいけないと思った。このような状況になると、「ホールには物資がたくさんあるのに届けられる量は少ない。」という人がいる。こういう事を耳にするとカチンとくる。そうすると「人数の報告をしない方が悪い。」と言いたくなる。

物資配給から1週間、ボランティア活動を休憩して、8日目から洋服配りをした。その時一緒に働いてくれた人達がいた。その人達は、はるばる熊本県人吉市から20時間もかけて来て下さった。来て下さった理由を聞いたら、「神戸という大都市が災害にあった。神戸にかぎらず日本中こういう災害が起きたら

私達は手伝いに行く。」と言った。僕は、その言葉を聞いた時、僕だったら他の大都市がこういう災害をうけたらボランティアをしに行くだろうか、などとその時は考えていた。あれこれと考えながら仕事をしていたら、被災者であるのかかわらず、余っている下着を寄付して下さった人もいた。こういう人達に対して僕は心から感謝した。

ボランティア活動をして、色々な人達の気持ちを知る事が出来た。また、こういう機会があったからこそ、(地震の時だから良くはないけど)自分自身を少しは変えていけたんだと思う。自問自答してみて、ボランティアをした事に対してとても満足だ。もし、他の大都市が災害に襲われたとしたら、僕はボランティアをしに行くに心強く刻み込んだ。



母校でのボランティア活動

卒業生 橋田 一義

あの阪神大震災から、もう1年がたとうとしています。

今の神戸は、あちらこちらで解体作業や復旧作業が行われ確実に復興しつつけています。

私は県営住宅の4階に住んでいましたが、地震で半壊し、傾いた家を修理してもらって今はそこに住んでいます。

平成7年1月17日午前5時46分兵庫県南部地震が起きました。揺れた瞬間に目が覚め

仕活動をした事がないので遠くにいる人にも、毛布等を持って行くのが大変なため、何度嫌になった事か。笑顔を作り、励ましの言葉を私に下さったので、私は頑張れる様になり、私がこんなにも喜んでもらったことが嬉しかった。

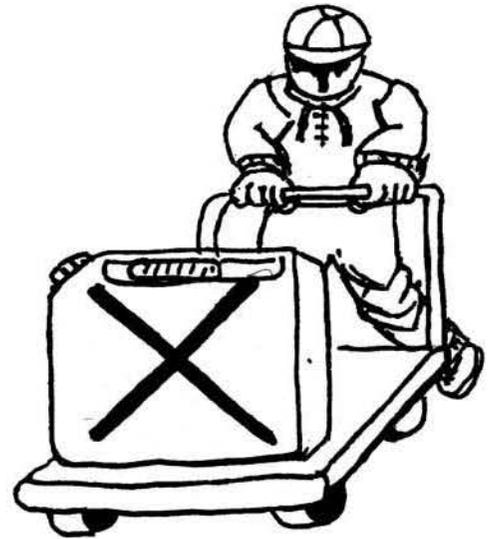
地震発生から5日後、灘区の区民ホールへボランティアをしに行った。まず、区民ホールに届けられた小さな色々な物資を仕分けしていかなければならない。20種類ぐらいあって、数量は多いので置く所がなくなるんじゃないかと思った。1時間半ぐらいで仕分けが終わると、今度は搬出していかなければならない。最低5種類で数量が5～10ぐらいを車で運ぶ。15台ぐらいで一区切りにして、搬入車が区民ホールにくる。これを前者にのべた仕分けする。これをまず三日間した。

四日目からは、区民ホールの整理が出来たので、物資の配給に回された。物資の配給は自動車に積んでから行くので、仕分けよりはずっと楽だった。その日、4回目の配給をした。避難場所では、区民ホールで言われた数量と避難している人数とが食い違いがあった。あとで分かった事では、午前中の人数の集計が区民ホールに届いていて、午後になって避難車が新たに増えた事が原因であった。こういう時は、そこの避難所の関係者が人数が増えたという事を通知しなければいけないと思った。このような状況になると、「ホールには物資がたくさんあるのに届けられる量は少ない。」という人がいる。こういう事を耳にするとカチンとくる。そうすると「人数の報告をしない方が悪い。」と言いたくなる。

物資配給から1週間、ボランティア活動を休憩して、8日目から洋服配りをした。その時一緒に働いてくれた人達がいた。その人達は、はるばる熊本県人吉市から20時間もかけて来て下さった。来て下さった理由を聞いたら、「神戸という大都市が災害にあった。神戸にかぎらず日本中こういう災害が起きたら

私達は手伝いに行く。」と言った。僕は、その言葉を聞いた時、僕だったら他の大都市がこういう災害をうけたらボランティアをしに行くだろうか、などとその時は考えていた。あれこれと考えながら仕事をしていたら、被災者であるのかかわらず、余っている下着を寄付して下さった人もいた。こういう人達に対して僕は心から感謝した。

ボランティア活動をして、色々な人達の気持ちを知る事が出来た。また、こういう機会があったからこそ、(地震の時だから良くはないけど)自分自身を少しは変えていけたんだと思う。自問自答してみて、ボランティアをした事に対してとても満足だ。もし、他の大都市が災害に襲われたとしたら、僕はボランティアをしに行くに心強く刻み込んだ。



母校でのボランティア活動

卒業生 橋田 一義

あの阪神大震災から、もう1年がたとうとしています。

今の神戸は、あちらこちらで解体作業や復旧作業が行われ確実に復興しつつけています。

私は県営住宅の4階に住んでいましたが、地震で半壊し、傾いた家を修理してもらって今はそこに住んでいます。

平成7年1月17日午前5時46分兵庫県南部地震が起きました。揺れた瞬間に目が覚め

ましたが、部屋は真っ暗で、外は物が崩れるような、ものすごい音がして、部屋ではいろいろな物がドサドサと落ちてきて、もう少しでタンスが直撃して死ぬかと思いました。

地震がおさまった後、いったい何がおこったのか、わけがわからなくなり、はじめは夢ではないかと思いましたが、起きて窓を開けたら冷たい風が部屋にふきこんできて、いっきに目が覚めて、これが夢でないことに気がつき鳥肌が立ってきました。

家族の無事が確認できましたが、家は足のふみ場もないほどで、家族みんな外に出ることにしましたが靴を探すのにも苦勞するほどでした。

外に出ると、近所の人が続々とあつまって不安そうにしていたのですが、近所で家が倒壊して生き埋めになった人を助け出しました。

そうしている間に外はだんだん明るくなってきました。水がでないのでみんなトイレに行きたがっているし、家は家具、冷蔵庫などが倒れ食器などはすべて割れ、靴で家に入らなければいけないほどなので、住める状態ではなく、避難場所に行った方がいいと思いました。

私の家は母校である神戸市立神戸商業高校が2分ほどで行ける距離に住んでいたので、1人で一度避難できるかどうか様子を見に行こうと思い母校に向かいました。

学校に行くと、まだだれひとりいませんでした。そして体育館にむかって歩いていると火災報知器の音がだんだん大きくなってきました。講堂のあった西館を見た時には、びっくりしました。職員室のあった1階がおしつぶされかかっている、校舎が傾いていたからです。学校を1人でぐるぐると回っていると体育館はぜんぜん壊れていないことに気がつきました。その横には神戸商業で名物ともいえる湧水が流れていましたが、地震の影響で水はもう流れていませんでした。池の水がたまっていたので、トイレの水は大丈夫だと思

いました。やがて先生方がこられたので、体育館を開けてもらい避難させてもらうことにしました。急いで近所の人達と一緒にふとん片手に体育館に行きました。

夕方ごろになると、続々と人があつまって体育館に入れない人が運動場までたくさんいました。

地震によって家が倒壊し住む所を失った人達。余震の恐怖、2次災害の不安におびえる人々がいました。私もあの日は安全な場所に避難することと、トイレはどうするか、食料はどうなるのか、これからどうなるのか、などとともかく頭がパニック状態になっていました。が、悩んでいてもしかたがないし、体育館にはお年寄りの方が多く避難されていましたので、あの時期に冷たいおにぎりなどの食料はかわいそうだし、あたたかいお湯はインスタント食品などに使えるので必要だと思います。父と一緒に雨よけのテントとかまを作りお粥を作りお湯を沸かすことにしました。

その時、みなさんに「ありがとう」などと言われると、とてもうれしくやりがいがありました。やがて自衛隊の方がこられ、お湯などを沸かしてくださいましたので、1週間ほどだけやっていました。

そして、全国各地から炊き出しに来て下さる方やボランティアに来てくださる方がたくさんいました。

その中には、お寺の僧侶の方やボーイスカウトの方やいろいろな団体のみなさんが私達被災者に暖かい物を作ってくださいました。

そのほかにも、劇団の方が劇をしてくださいましたが、歌手の方が歌を歌ってくださったりといろいろな形で私達の励みになってくださりとてもありがたかったです。

一番印象に残ったことは、鯛、鯖、鰯、鮭、鰯などの魚をもって来てくださった方がいました。その方は大阪のスーパーで働いている方で、仕事が休みということで、大きな魚を焼く機械をもって来て焼いてくださいました。

そして、私は魚を焼く手伝いをしました。魚を食べたのは地震前だったし、大きなガスコンロで焼いた魚はいままで食べたことのないほどおいしく、みなさんがよろこんで食べてくださったので、現在調理師見習いとしてがんばっている自分にとっては、とてもうれしかったし、魚の焼き方などは、勉強になりました。

しかし、魚を焼いていて、たいへんだったことは体中に魚の生ぐさいにおいがついてしまったことです。お風呂にも入れなかった時期だったので、次の日に住吉川に行って体を洗った時はさすがに寒かったです。

その後は全国から送られてくる救援物資や食料などがトラックで運ばれてくるので、その積みおろしをやっていたり、物品を体育館に避難されている方に配ったりしていました。一番驚いたことは、一時期、体育館などに3000人の人が避難されていたので1ℓ牛乳が2000本来た時です。牛乳があまってしまったので、ほかの避難所に運んでもらったりしました。

私も3週間ほど体育館に避難していましたが、一番大変だったことは、水が出なかったことです。水が出ないということがあれほど不便とは思いませんでした。トイレの水は住吉川の水をポンプでプールに入れて、みんなで運んでトイレの水として使っていましたが、洗濯にはみなさん困っていました。川に洗濯に行ったり、コインランドリーに行ったりしていました。

ボランティアをやっていて、うれしかったことは、毎日、全国からボランティアに来てくださったことです。その数は200人以上にもおよぶと思います。みなさん会社や学校があるのに私達、避難者のために来てくださいました。

私は最初は、だれかがやらなければしかたがないなどと思っていましたが、やがて、すこしでもみんなの役に立ちたいと思い、ボラ

ンティアをしました。

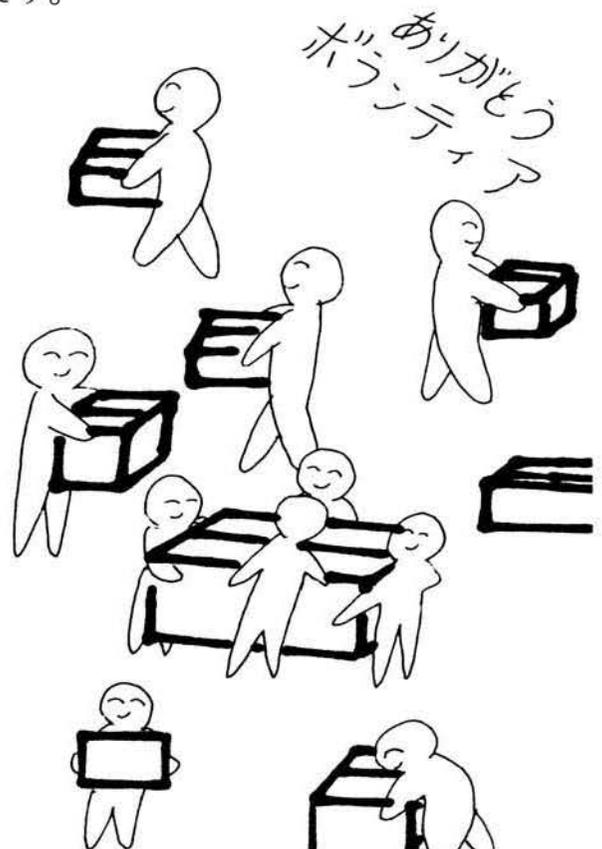
やがて3月末になり、学校や会社が始まるので「神商ボランティア」は解散しました。

3ヵ月館ボランティアをやってきましたが、風邪もひかずにやってこられたのは、全国から炊き出しにこられた方が栄養のある物を作ってくださいましたからだと思います。

高校3年の3学期と言えば、高校生活最後の思い出を作る一番楽しい時期だった筈なのに、授業が最後まで受けられなかったことはとても残念でした。

しかし、地震がなければ、平凡に高校生活を終えていたと思いますが、ボランティアをやっていて、先生方とも話す機会も増え、近所の方や他のボランティア方とも仲よくなれましたし、人間的にも成長したと思います。

もし、どこかで大きな災害がおきた時には、すぐ、その場所に行きボランティアをしたいと思います。そして自分の作った炊き出しの料理を食べてもらうことができたならによりです。



震災時の学校管理をめぐって

～平成7年度 全商秋季総会および研究協議会における発表の記録より～

校長 川崎 凱 史

司会 東京都立赤羽商業高等学校長

篠塚 良一先生

おはようございます。十分ご休憩頂けたでしょうか。昨日は本当にご苦勞様でした。これより秋季総会第2日目の研究協議に入らせて頂きます。

本日の司会を仰せつかりました、東京の赤羽商業高校の篠塚でございます。ご協力のほどよろしくお願い致します。

昨日は先生方の熱心なご協議、ご協力本当にありがとうございました。議長団は昨日選出の皆さんにお願い致します。なお、本日の11時20分には終了したいと思っております。

ご協力下さい。早速これから始めて頂きます。

どうぞ議長団よろしくお願い致します。

議長 奈良県立桜井商業高等学校長

大庭 清先生

それでは議長を代わりまして、私が担当させていただきます。どうぞよろしくお願い致します。発表の先生も色々おっしゃりたいことがたくさんあると思うんですが、時間の制約がございますので、それぞれ発表を30分に、質



交通センタービル（三宮）

疑を入れて35分ということでございますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。それでは今日の第一番目に近畿ブロックから、兵庫県神戸市立神戸商業高等学校長の川崎先生、『震災時の学校の管理をめぐって』ということでご報告をいただきます。どうぞよろしくお願ひします。

神戸市立神戸商業高等学校

川崎校長先生

皆様、おはようございます。ただいまご紹介を受けました川崎でございます。こうしてここに立ちますと、昨年ちょうどこの大会の2日目、まず地震の話からスタートを切ったのを思い出しております。あの折りはまさかあれ以上の地震に私どもが見舞われるとは夢にも思っておりませんでしたし、もちろん、そういった地震等に対する対応なども、何も考えてはおりませんでした。あれから帰りまして、それこそ学校の皆に、「青森ではえらい目におうたで。神戸ではちょっと考えられへんし、本当にええとこに住んでいて良かったと、つくづく思ったことや。」と、そんなふうなことを話したものです。

それから2ヵ月後、震度7という本当に大変な地震に見舞われたわけでございます。

まず、何よりも、1月17日以降、全国の、学校或いは一般の市民の方々から、私共、さらには被災された学校等に激励のお便り、或いは救済物資や義援金等、本当に心温まるご支援を頂きましたことを、高い所からではございますけれども心からお礼申し上げます。

私共の学校について申しますと、宇部商業の校長先生、いらっしゃいましたら、お許し

を頂きたいんですが、春の選抜に出場されるということで、私共の方にボランティアを早速に申し入れを頂きましたけれど、まあまあ足りているということもありましたし、何よりも、選抜に向けての練習にお励み頂きたいと思ひまして、お断わり致しました。本当に失礼なことを致しました。お詫びとお礼を申し上げます。

それでは報告の主題に入る訳でございますが、この青い表紙の冊子ですね。発表というよりも私の記録用にまとめたもので、その最初の方に学校の要約等をつけております。これをもとにして報告させて頂こうと思っております。それからB4の方ですが、補助資料ということで、地震の後、折々に私共の方で用意をし、生徒に配ったり、或いは避難者に掲示でお知らせしたりしたようなものを、裏表ですけれども2枚を綴じて、用意を致しております。また、参考にご覧おき下さい。それでは内容に入らせて頂きます。

まず、私共の学校でございますが、ここに書いておりますように70年の歴史を持っております。市立第三神港商業学校として1923年に創立されました。それから何度かの移り変わり、変遷を経まして、現在の地、神戸市東灘区の西岡本という場所がございますが、こちらに参りましたのが昭和27年でございます。今、西岡本と申しましたが、ここも、或いはご承知かと思ひますが、震災の後、崖崩れなどの危険があるということで避難勧告が出された場所でございます。他の生徒の在籍数等は省略させて頂きます。また、学校要覧に載せている概略図をここに転載しておりますが、大体の位置は、まず山側つまり北側は阪急電鉄、そして浜側つまり南側にはJRの東海道本線が走っており、そのちょうど真ん中辺りに位置しております。また、西側には、六甲山から流れ出ている住吉川というのが流れていて、この川が震災時には大いに役立ってくれました。

話は変わりますが、私は須磨区、神戸市の西側のしかも六甲山の裏側の新興住宅地に住宅を構えております。大体普段ですと、地下鉄、JR等を使いまして1時間10分もあれば通勤できるのですが、この17日は大変でした。実は、私は自動車も単車も運転は全然だめです。さてどうやって学校に行こうかと思っておりますところ、弟が来ましたので、弟の車に乗せてもらって、自宅を出ました。ご存知のように、須磨区、浜側の方つまり旧市内ですね、その辺りから長田区等にかけては火災が発生し、まだ燃えておりました。そうした中を走りまして、学校迄4時間以上はかかったと思ひます。

学校に近づきましたら、先程申しました住吉川の橋の上から本館の屋根が見えてホッとしました。ところが校門に入り、中庭を西方向に右折しますと、真正面に破壊された本館管理棟が目に入りました。これは写真でご覧になりましたように、1階部分が校長室・事務室、そして進路指導室・職員室等となっておりますが、この中枢部分が完全に破壊されておりました。目の前に見える窓枠が全部「く」の字に曲がっておりまして、今にもそれこそ押しつぶされんばかりの状態、これを見まして本当にもうガックリときたのを覚えております。この管理棟は4月に入りましてから取り壊され、現在はここはさら地になっております。学校のすぐ北側には幹線道路が走っておりますが、これに沿って学校では北館と



地割れしたグラウンドと避難テント

呼んでいる校舎があります。これもかなり亀裂が走っておりますが何とか生き残っており、目下その補修をやってもらっております。

この校舎の南側に中庭を挟んで、先ず西に新館といっている特別教室の校舎がございます。3階建てで、現在はこれを管理棟として使っておりますので、本校には特別教室がないという状況でございます。生き残りました北館の方に商業科関係ですとコンピュータの部屋である情報処理の第1教室と第2教室、それからワープロの方も第1と第2といったものが生き残っております。次に、新館の東に大きな校舎で南館と呼んでいるのがありますが、これは内部に入りますと大きな柱等に物凄い亀裂が走っております。どうも北東の方向に傾いているような感じがしますし、床なども浮き上がっている所もございます。教室も2カ所ほどでジャッキアップして天井を支えているところもございます。新しく建て直すかどうか問題になっていましたが、最終的には文部省・大蔵省の査定により今年中に補修・改修で何とかやっけて行こうと決まりました。教員の中には「あそこは傾いとるで、多くの生徒が出入りするのに、ほんまに大丈夫かいな。」と心配する者もいます。揚げ句の果てには「あの4階の危ないところに校長室を持っていったらどないや。」と冗談を言う者も出ますが、私も「一番の年寄りやし、別にかまへんで。」と返しているような状態です。グラウンドの方ですが、こちらも周囲の



解体される阪急三宮駅

塀或いはフェンスがかなり破損しております。また地割れもかなりございましたが、これも来年の3月迄には補修・改修をするようになっております。

さて学校管理にかかわることに移ります。17日には周辺の住民が学校に避難して来られましたが、学校によりましては避難したけれども校舎には入れない。だからガラスを割って入ったということもあると聞いております。しかし、私共の所ではたまたまですが、技術職員の一人がやはり被災しておりまして、彼が家族を連れて朝早く学校に来ましたので、ガラスを割って入られるということはありませんでした。

管理の問題では、やはり、避難者の先ずは生活の場というか条件をきちんとする。いつまで続くか分からない避難生活なので、とにかく安心して出来るだけ気持ちよく避難生活を送って頂けるような条件作りを図ること、これが第1。次に、健康或いは環境衛生の面での管理。やっぱりこういうことが必要だと思いました。

先程申しましたように、私が学校に着いたのは午後ですから、それまでに早くから教頭と数名の教員が来ておりまして、先ず避難場所の体育館をモップで掃除をし、また、薬品等を崩れかけている本館の保健室から持ち出すとか、ゴミ入れやストーブ等を用意したりして、避難者の来校を待ち受けてくれており、大変助かりました。とにかく17日だけで資料にも書いておりましたように、500人程の住民が来られました。

18日には、これもご存知だと思いますが、東灘区の海岸沿いにあるLPGタンクのガス漏れの恐れがあるということで、午前6時に避難勧告が出ました。それで多数の住民が避難されて来られました。18日の午前中で、もう体育館は勿論として、立ち入り禁止にしております南校舎、それにグラウンドも避難者で満ち溢れる状態となりました。ざっとですけ

れど2000名近くの人々が来られました。しかも寒いですからグランドのあちこちで焚き火をされる訳ですが、壊れている管理棟の内部に入って、燃えそうなものを持ち出して焚き火をされるというそういうグループもありました。ですから、「校舎内には入らないようにして下さい。」といったことを、既につぶれかけている校舎の出入り口やその周辺に立って我々が注意をするということもやりましたけれども、もう全然そうしたことは聞き入れてもらえないような状況でした。この日の夕方6時30分頃に避難勧告が解除されましたので、かなりの方は帰られました。それでも、ざっと1300人ほどが学校に残られました。

次に大切なのは水の問題ですが、しかしこれが非常に大変なことでした。ともかくライフラインがストップしておりますので、もう水が一番何とかせないかなと、今後の最大の問題だなと、つくづくこう痛感しました。このたびは、まずはプールから本校の職員たちがポリバケツ等に水を汲んで、これを体育館の前に並べて用意しておくようにしました。しかし、変な話ですけど、トイレも校舎が壊れたため非常に限られた箇所しか使えない状態ですし、しかも、たくさんの方が使うものですから便が山盛りになるんですね。こんな中で、本当に感心しましたけれど、本校の若手の教員たちが「おい、誰々ちょっとすまんけどトイレの掃除に行こうや。」と互いに呼びかけまして、それこそスコップやビニール袋を持ってトイレ掃除をやるということがありました。ところで、プールの水を汲み出す、しかしそのうちにだんだんとプールの水がなくなるということになる訳ですが、幸いなことに私共の学校は、先程も申しましたように、すぐ西側に住吉川が流れておりますので、この川の水を、これもある企業が提供してくれましたポンプで汲み上げてプールに溜める、そしてそれをトイレ等の水に使用すると、こうしたこともやりまし



ポートアイランド岸壁

た。その内に、避難生活が一応落ち着いてくると避難者が自分達でプールから水を汲んで来て用意をするということになりました。

さらに、避難者の人数の把握、また氏名や住所等の把握等も必要な訳で、これにつきましては、本当に余震があり危ない状況にあったんですが、あの壊れた管理棟から教員たちがワープロ等を運び出しましてそれを使い、名簿を作成しました。しかし避難者には出入りがある訳ですから、そうした情報を的確に掴むためにも、体育館の避難者を4ブロックに分けまして、それぞれのブロックから世話役の方を選んでもらい、その世話役を通して人数等の出入りや住所・氏名を確認してもらうということをやりました。

ともかく、避難所内の組織作りも大事なことだと思います。人の管理と申しますか、こうしたことは何よりもまず学校として把握しなければいけない訳で、今申しましたように機器を使って名簿を作る、また各ブロックごとにノートを用意して人の移動や日々の出来事を記録していく、さらに朝と夕方に宿直教員と世話役、そして区役所からの派遣職員の3者でミーティングを行う、こうしたことをやりました。本校教員の宿直は、毎日2名で当たり、6月末迄続けました。このように、組織作りをやり、ブロックの代表や全体の世話役を通して色々連絡をとり、管理運営に当たった訳ですが、そうやりましても、やっぱり長い避難生活ですから時には喧嘩口論も

あり、宿直の教員が、深夜に派出所に飛んで行くということもありました。また、大阪近辺のホームレスがたまたま入り込んでいるということもありましたが、これなどは避難者の名簿を作って行く過程で分かったことです。

次に、ボランティアに関することですが、これには本校の卒業生や神戸大学の学生、それに避難者の中の若い人等が中心になって当たり、運び込まれた食料や救援物資の受け取り、それらの支給等の作業をやってくれました。食料につきましては、18日の朝にパンと飲料水の支給がありました。量が少なく、子供を優先して給付しました。午後になり、避難者にどうにか行き渡る程度の食料が届きました。また、19日以降、大阪の方からのおにぎりの差し入れや、岡山県からのおにぎりや牛乳の差し入れなどもあり、さらに奈良や富山からのボランティアによるシチュウやおでん等の炊き出しにも助けて頂きました。

2月に入り、体育館の南側に風呂を設置してもらいました。これは薪でたくもので、その薪割りの作業にもボランティアが活躍してくれました。

心のケアにかかわることとしては、テレビの設置が挙げられます。体育館の入り口に学校のテレビを1台とそれにNHK千葉放送局からお借りしたテレビ1台を設置し、避難者に提供しました。それから子供を対象にしたチビっ子広場をグラウンドの片隅に設けて、色々な遊びをやりました。生徒会担当の教員や美術担当の教員が中心になって、毎日、凧作りやゲーム等をやりましたが、その辺のことがテレビで放映されたように記憶致しております。また、子供の勉強部屋として、当初は食堂を提供していましたが、食堂がやがて救援物資等の貯蔵倉庫になりましたので、子供用には教室の一つを転用しました。

1月の末でしたか、住吉川向こうの私立の甲南小学校というのがございますが、授業を再開するというので、立ち退きを要求され、

そこにおられた方々がまた本校に避難して来られるということになりました。しかし、もう場所がありませんので、グラウンドの丁度4分の1に当たる部分に自衛隊がテントを張ってくれまして、125名の人達が長期間テント生活をされました。さらに、私立甲南大学からも、大学が再開されるというので、避難していた人達がやはり立ち退きを要請され、3月に入り40名程でしたが、本校へ来られました。このように、なかなか避難者の数は減らないというのが、しばらくの間の、本校の状況でございます。

それから、もう一つ痛感しましたのは、情報・通信等のことですね。伝達などの手段の確保でございますけれども、本校の場合、管理棟がつぶれましたので、電話が全然だめです。しばらくは、「あんたのところに電話しても、ベルは鳴るけど誰も出てくれないな。」と言われたものですが、出られないのは当然で、電源がある管理棟の事務室には入れないのです。入れない所を、当初は私も校長室に10回程入りました。市教委に行きますと、教育長と「先生、もう中に入らんよう皆さんに言うて下さいな。」「分かりました。そうします。」などとやりとりするのですが、学校に行き、職員朝集で「教育長に、こう言われたんで、入らんようにして下さい。」と言っても、その後、私自身が崩れかけた校長室に潜り込んで行くようなことでした。そうやっているんなもの運び出し、それで、生徒や



グラウンドに置かれた仮設校舎用建築資材

教職員の安否確認さらに入試事務等が進められた訳です。しかし、ともかく電話には困りました。そこで、たまたま委員会への連絡のために近くの市立御影工業高校に出向いた折りに、電話のことを話したら、若い電気科の先生と一緒に来てくれまして、事務室に潜り込んでくれ、電話一本を繋いでくれました。本当に助かりました。その後、しばらくしてNTTが避難者用に4台備え付けてくれました。1月30日でしたが、全市の校園長会で市教委から携帯電話が各校に1個ずつ貸し出されましたが、ああいうものはもう少し早い目に対応してもらったなら非常に助かったのにな、とこう思っております。

時間が迫りましたが、避難者と一緒に行った入学式等まだまだ報告することはあるのですが、ともかくこのような状態で、8ヵ月程が過ぎました。先程申しました立ち入り禁止にしている南館には、家庭科の食物関係の教室や商業科の総合実践室等があり、また1・2年のホームルーム教室がありますが、全てだめですので、特にホームルーム教室だけを3月に入り建ててもらった仮設校舎に移しております。仮設校舎はグラウンドの約半分程に5棟建ててもらいましたが、そのうちの2棟は近くの小学校の5年生が使用しています。ですから、現在、本校の生徒は小学校の5年生と共同生活を送っている訳です。

グラウンドの自衛隊のテントが撤去されたのは、神戸市が「8月20日には、学校の機能を回復するために、避難所を解消する。」と公表した後でした。私共の学校は、21日に避難者の数がゼロになりました。最後の方にお会いして、お礼を言われました時には、ついつい涙がにじんでくるという経験を致しました。また、2学期からは、体育館が一応使えるようになりましたが、グラウンドには仮設校舎があり、半分は使えない状態が依然として続いております。南館も修復をするということになっておりますけれど、まだ手はつけられて

おりません。このような状況で毎日を送っているのをごさいます。

学校管理という大きなタイトルを付けておりますが、震災経験を通して重要だと痛感したこと、つまり避難者にかかわること、水のこと、電話のこと等をごく簡単に報告させてもらっただけに過ぎません。本当に概略で、簡単な報告になり、申し訳ございませんでした。実は、8月の中旬に神奈川県から校長先生方が十数名来校されました。その折りには30分の予定でしたが、本校でお話ししたこともあり、1時間30分ほどお話しさせていただきました。それでもまだ不十分な感じがしましたが、今日はもっと少ない時間であり、お分かり頂けましたかどうか分かりませんが、一応、これで終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

《付 記》

この記録は、平成7年10月6日に、高知市で行われた全国商業高等学校長総会・研究協議会で報告したものである。当大会には震災に関する写真を模造紙2枚に貼付し、会場入り口に掲示してもらったが、それを見てもらうことにより報告の内容が参加された全国の商業高校の校長先生方にさらによく理解してもらったと思っている。

なお、報告の内容はほぼ8月下旬迄のものであり、それ以後のことについては当然触れていないので、その後の移り変わりを以下に



解体された本館

概略述べてみたい。

4月以降、仮設校舎で生活を共にして来た本山第2小学校の児童達が母校に帰ったのが10月27日であった。それに先立ち25日に本校のグラウンドで送別の集会を行ったが、互いに記念の品を交換するなど、生涯忘れ得ない行事となったことであろう。

また、神商祭を11月1～3日に予定通り実施した。第2日の音楽祭には、合唱コンクールに引き続き、若手ギタリストである原公一郎氏のギター演奏会を催したが、出席者一同は原氏の奏でる絶妙なギターの調べに、しばしロマンの世界に引き入れられたものであった。翌日の第3日は殆ど仮設校舎を使って一般公開を行った。条件の悪い中ではあったが、訪れる人も多く、例年に劣らず盛況のうちに終始した神商祭であったと言えよう。

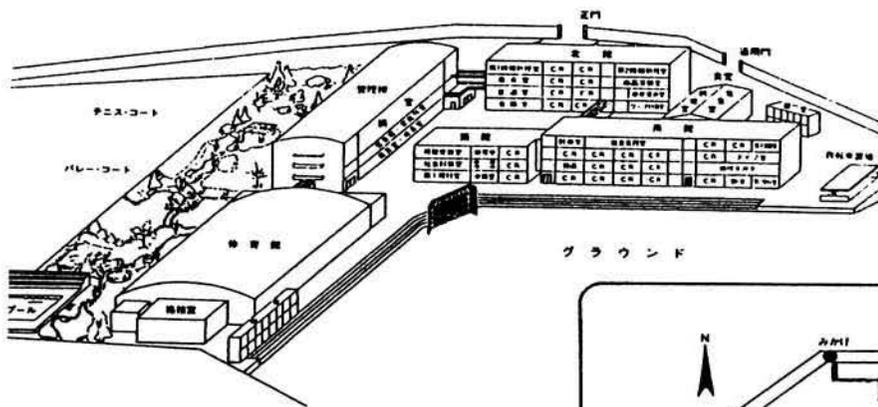
ところで、校舎等の復旧工事も徐々にではあるが進められている。南館の改修が12月末を目途に行われており、またプールやグラウンド周囲のフェンス等も3月完了の予定で着手されている。さらに、本館の取り壊しや新館の管理棟への転用等により失われた特別教室も、年明けには本館の跡地に仮設ではあるが建設されることになっている。これが出来上

がると、仮設校舎の撤去によるグラウンドの復旧と相俟って、来春4月には一応の現状復旧がなり、新学年を迎えることになる。

現在は、その日の一日も早からんことを願って、教職員・生徒共々に耐乏の生活を送っている毎日である。

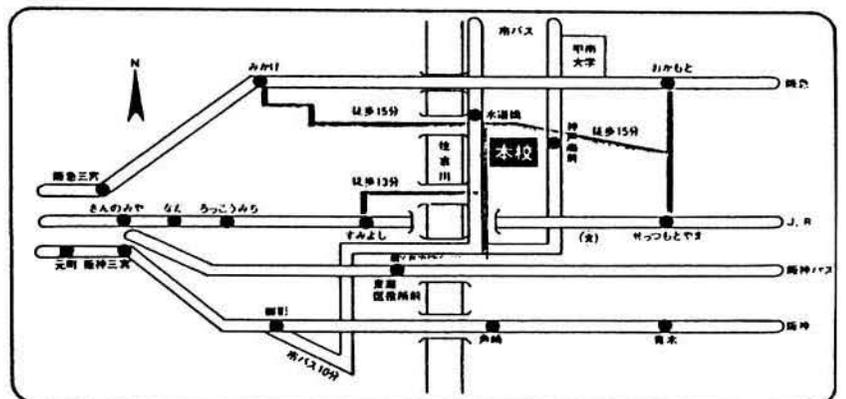


崩壊したビル（信託の信の字がない）



校舎配置図

学校附近案内図



「こころの傷のケア」の調査結果と考察

内 藤 美朝子

1. はじめに

都市を襲った内陸地震、阪神大震災下で心のケアをいち早く推し進めたのはローカルゲートキーパーであった。地域で暮らし地域の事をよく知り被災者に共感できる立場にある人達の直接的なコミュニケーションは、被災者の心の傷を癒す大きな力となり得た。

心的外傷後のストレスを長期化させずできるだけ早期に低減させていく方策は、信頼できる相談相手であり、災害によって生じる心身変化についての十分な情報提供である。

今回実施した「心のケア調査」は高校生の心身変調を知る大切な情報として、ストレスの低減に活用できました、私達一人ひとりがローカルゲートキーパーの支援ができたらと考えた。

2. 調査の実際

1) 調査方法 (表1)

回数	調査日	内 容		対象
		生徒回答	担任回答	
1回目	5月末日	心身の状態 被災状況	所 見	全校生徒
2回目	9月1日	心身の状態		
3回目	1月予定			

2) 心理的変調問診票 (資料1) の採点法

生徒が感じているストレスの強さをはかるための尺度で「はい」と答えた項目の数が多いほどストレス度が強いことを示す。次の4つの得点方法で集計・解析した。

① 総 得 点

(1)~(17)までの17問診項目の中で「はい」と答えた項目の数。

② 再体験得点

(1)~(5)までの5項目の中で「はい」と答えた項目の数。

1項目以上「はい」があればストレスサインとみる。

③ 認知的過緊張得点

(6)~(12)までの7項目の中で「はい」と答えた項目の数。

3項目以上「はい」があればストレスサインとみる。

④ 生理的過緊張

(13)~(17)までの5項目の中で「はい」と答えた項目の数。

2項目以上「はい」があればストレスサインとみる。

3) 身体変調問診票 (資料2) の採点法

生徒が感じている身体変化の強さをはかるための尺度。「はい」の数が多いほどストレス度が強いことを示しているとみる。

4) 留意すること

① 「はい」の数が多ければ、ストレスが残っているとみる。「はい」「いいえ」がはっきり出せない場合や回答のない場合は「はい」として集計する(答えられない場合、調査自体を回避しているととらえる。)

② データーの集計法、解析法は個々の生徒単位に記録して継続的な調査データーを追って解析して対応していくことが大原則である。

<資料1>心理変調アンケート

科 年 組 番 氏名

1. この1ヵ月間に、あなたはつぎにのべるような体験が
つづきましたか。

- ①地震のときの光景がくりかえし思い出される
はい・いいえ
- ②地震のときの光景をくりかえし夢に見る
はい・いいえ
- ③もう一度、地震がおきたように感じてびっくりする
はい・いいえ
- ④地震を思い出させるものを見たり聞いたりするとつらく
なる
はい・いいえ
- ⑤地震のことを思い出すと体がこわばり、緊張する
はい・いいえ
- ⑥地震のことを考えたり、話題にするのをさける
はい・いいえ
- ⑦地震のことを思い出させることや場所をさける
はい・いいえ
- ⑧地震のときのことをよく思い出せない
はい・いいえ
- ⑨大切だとわかっていることでも一生懸命になれない
はい・いいえ
- ⑩ほかの人といっても、その人との距離が遠く感じられる
はい・いいえ
- ⑪ものごとに感動しなくなる、できるだけ感情を抑える
はい・いいえ
- ⑫先のこと、将来のことを考える気になれない
はい・いいえ
- ⑬寝つきが悪くなったり、すぐ目を覚ましたりする
はい・いいえ
- ⑭イライラしがちで、ささいなことにもすぐカッとする
はい・いいえ
- ⑮ものごとに集中できない
はい・いいえ
- ⑯ものごとに過敏になって、眠気も起きない
はい・いいえ
- ⑰わずかなことにもひどく驚く
はい・いいえ

<資料2>身体変調アンケート

2. この1ヵ月間に体の変調がありましたか

- ①いつも頭痛がする
はい・いいえ
- ②頭が重い感じがする
はい・いいえ
- ③肩こりがする
はい・いいえ
- ④便秘をする
はい・いいえ
- ⑤下痢をする
はい・いいえ
- ⑥頻繁にトイレへ行く(頻尿)
はい・いいえ
- ⑦おなかが痛い(腹痛)
はい・いいえ
- ⑧めまいがする
はい・いいえ
- ⑨失神する
はい・いいえ
- ⑩吐き気がする
はい・いいえ
- ⑪筋肉が緊張してこわばる
はい・いいえ
- ⑫食欲がない
はい・いいえ

<資料3>被災状況アンケート

回答日 年 月 日

災害は強烈な体験です。人のところに大きなストレスを与えます。そのため、災害後にさまざまな心理的・身体的な変調を経験する方がたくさんいます。ここでは、大きな災害を経験した人なら、誰でも体験するような心理的状態や身体状態をこれまでの研究をもとにまとめてあります。これらの質問に答えていただくことによって、あなた自身の状況を客観的に知っていただけたと思います。

この震災でみなさんが体験した被害を教えてください。

1. あなたの家の被害はどうでしたか。
- 全く被害はなかった
- 室内に多少被害があった
- 建物が一部損壊した
- 建物が半壊した
- 建物が全壊した
- 火事で建物が半焼
- 火事で建物が全焼
2. 今回の地震で、水道、ガス、電気、電話が使えなくなりましたが、もとにもどるまでどのくらいかかりましたか。
- 水道(何日ぐらい)
- ガス(何日ぐらい)
- 電気(何日ぐらい)
- 電話(何日ぐらい)
3. 地震の後、あなたは自宅で生活できましたか
- 自宅で生活できた
- 知り合いの所へ避難した
- 勤め先が提供してくれる場所に避難した
- ホテル・モーテルに避難した
- 公的な避難所に避難した
- その他(具体的に)
4. 現在の住まいは
- 地震前と同じ自宅
- 新しく自宅を引っ越した
- 知り合いの所へ避難中
- 勤め先が提供してくれる場所に避難中
- ホテル・モーテルに避難中
- 公的な避難所に避難中
- その他(具体的に)
5. あなたの通学方法は
- 徒歩(分)
- 自転車
- バス
- 電車
- 家族の車
- その他(具体的に)

<資料4>担任所見

担任の先生方へ

災害は強烈な体験です。生徒のころにおおきなストレスを与えます。そのため、災害後にさまざまな心理的・身体的な変調を経験する生徒がたくさんいます。

以下の点について、担任の先生の視点でご回答下さい。

科 年 組 氏名

- | 項目 | 積極 | 普通 | 消極 |
|---------|----|----|------|
| 1. 行動面 | 積極 | 普通 | 消極 |
| 2. 情緒面 | 安定 | 普通 | 不安定 |
| 3. 人間関係 | 豊富 | 普通 | 孤立 |
| 4. 学業意欲 | 積極 | 普通 | 消極 |
| 5. 出欠状況 | | 普通 | 欠席がち |

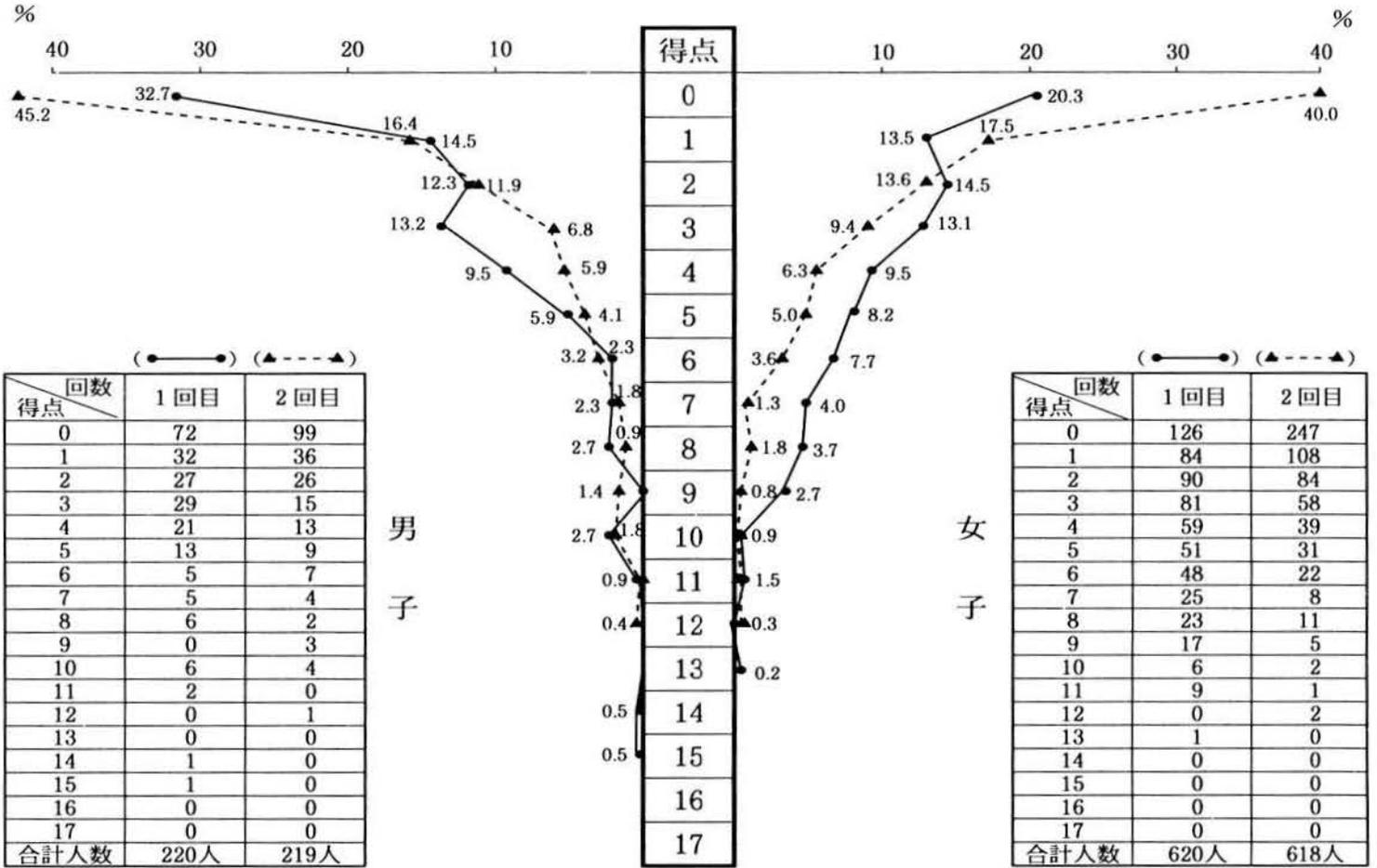
6. 家族の状況(変化があれば、分かる範囲でご記入下さい)

- ①震災による死亡 (統柄)
- ②震災による病気 (統柄)
- ③震災による怪我 (統柄)
- ④震災による失業 (統柄)

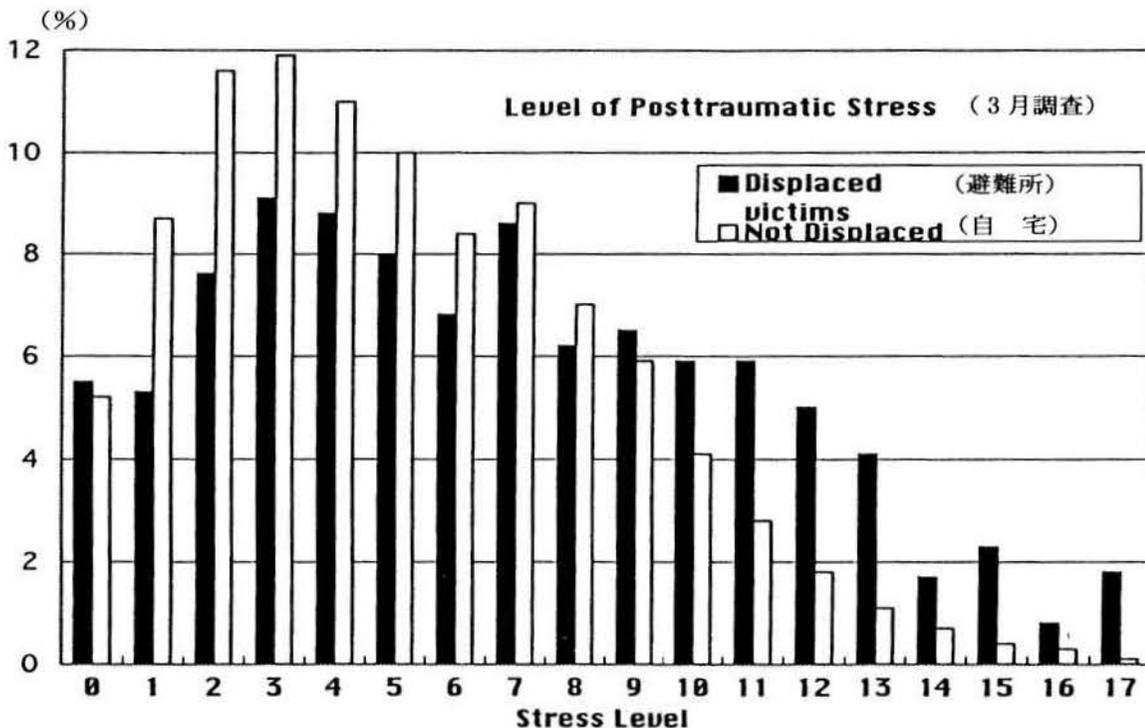
3. 集計結果と考察

1) 心理的変調の集計結果

① 本校生徒の総得点（1回目調査と2回目調査の比較の男女比）（表2）



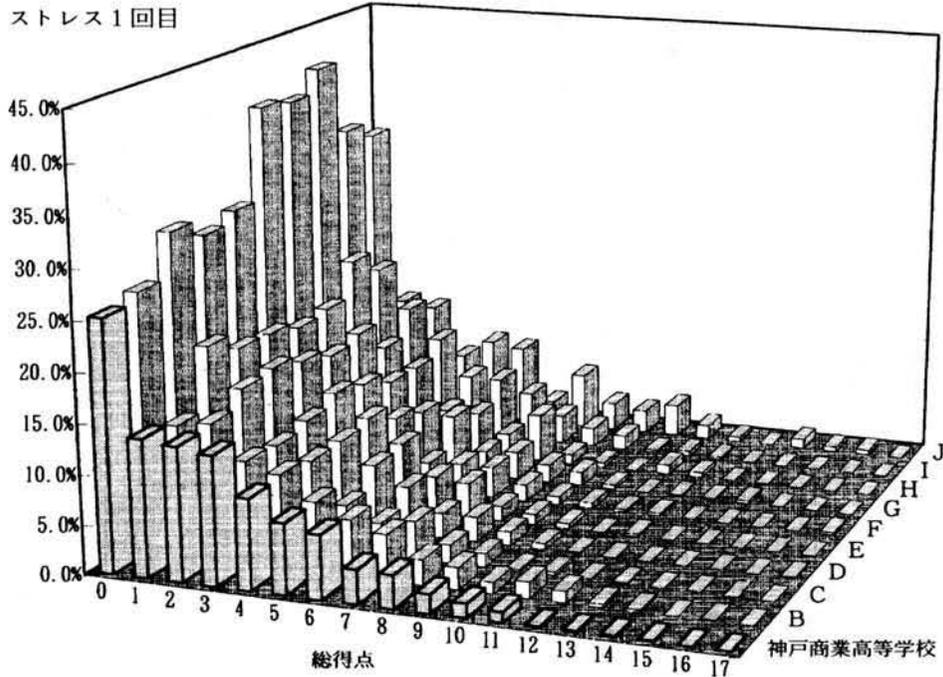
② 兵庫県20才以上の人の調査（避難所生活と自宅生活の総得点）（表3）



①-1 1回目調査より2回目調査の総得点が高い生徒(表4)

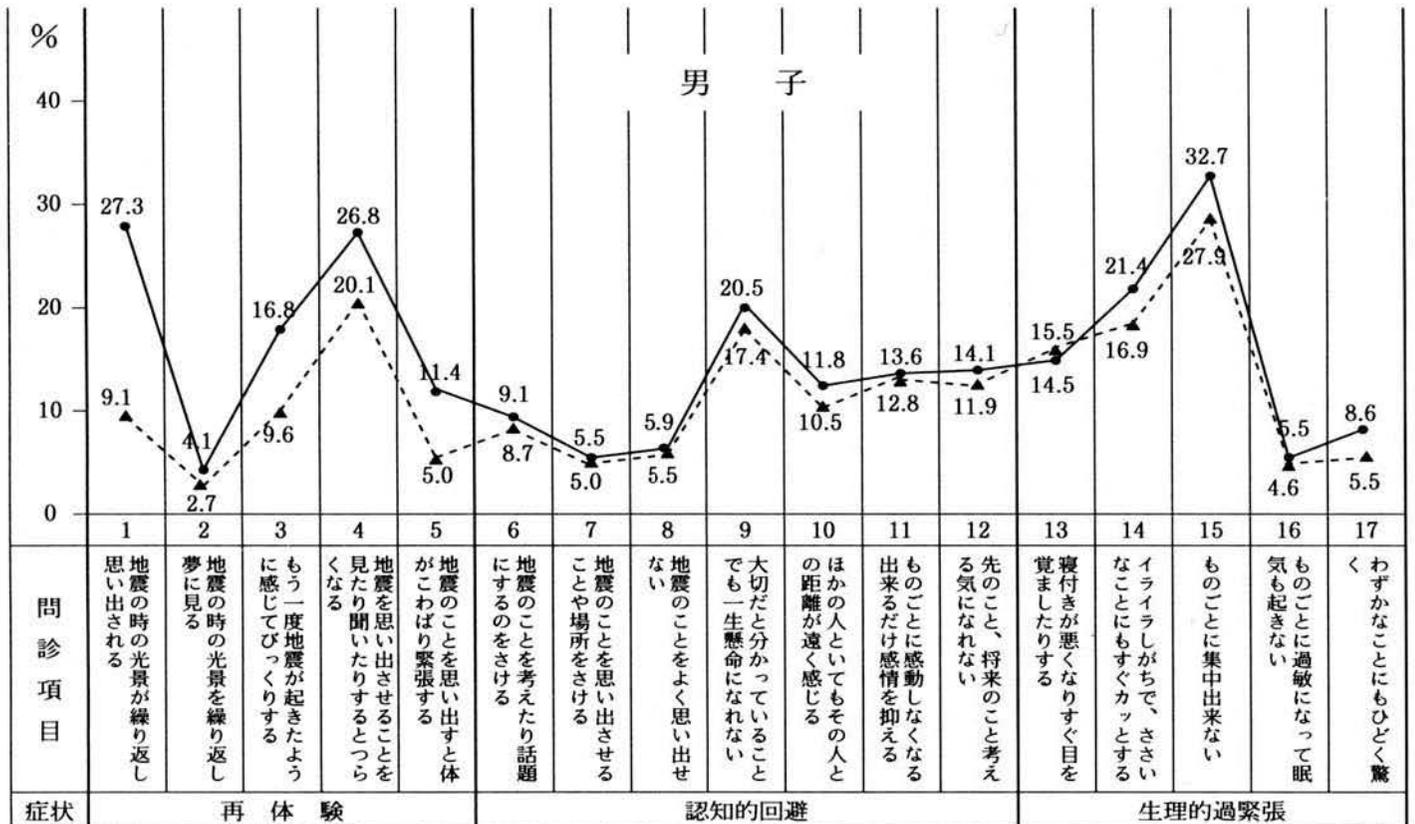
性別	男子	女子
割合(%)	16.8%	12.9%
全体の割合	13.9%	

①-2 神戸市立高等学校(10校)と神商生の比較(表5)



③-1 1回目調査と2回目調査の問診別、症状別割合(本校男子生徒)(表6)

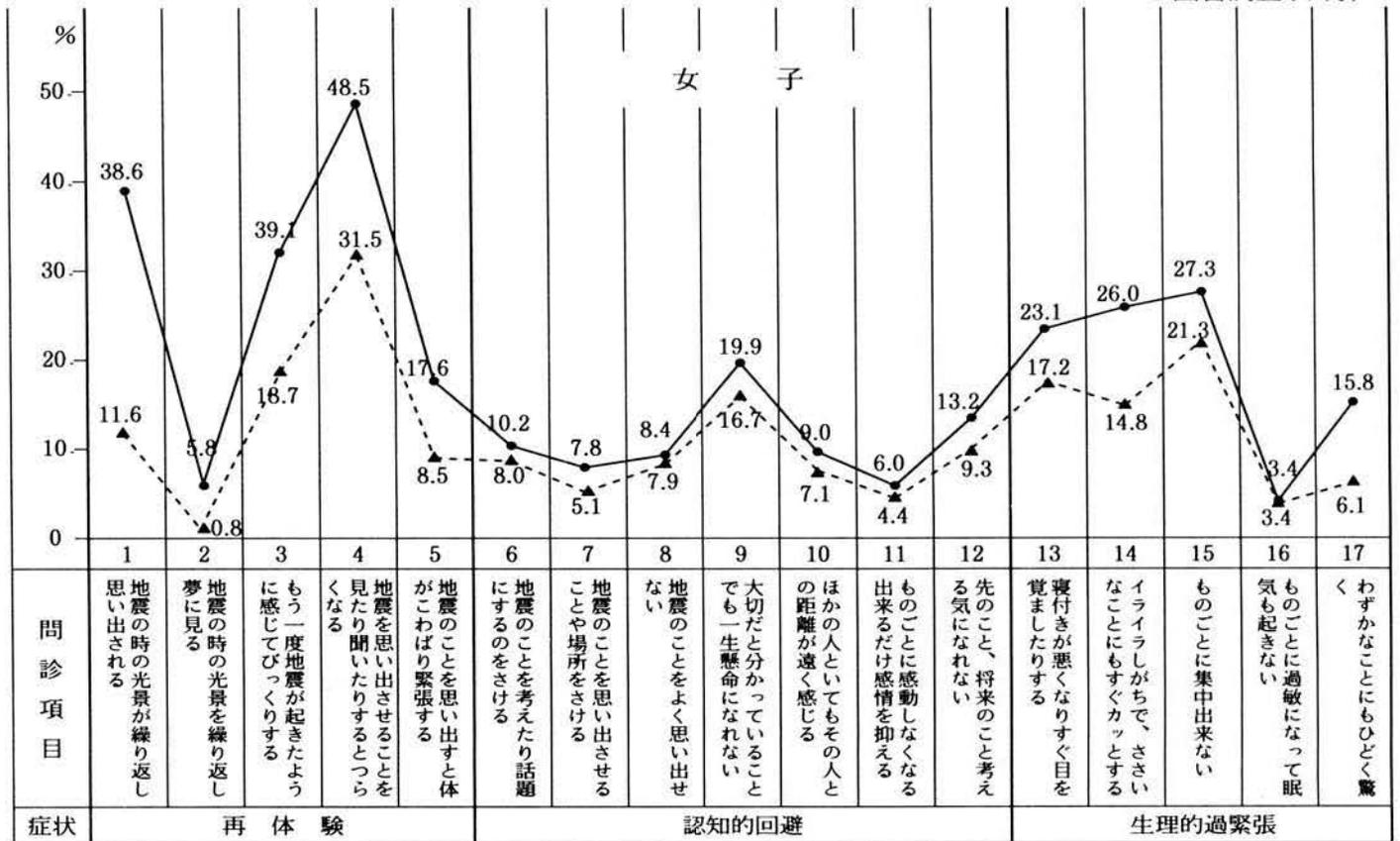
1. この1ヶ月間に、あなたは次に述べる体験が続きましたか(表6) ●—● 1回目調査(5月) ▲—▲ 2回目調査(9月)



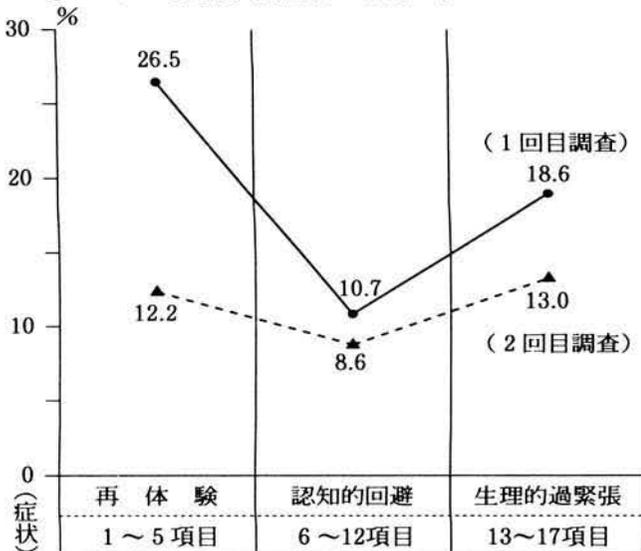
③-2 1回目調査と2回目調査の問診別、症状別割合（本校女子生徒）(表7)

1. この1ヵ月間に、あなたは次に述べるような体験が続きましたか。

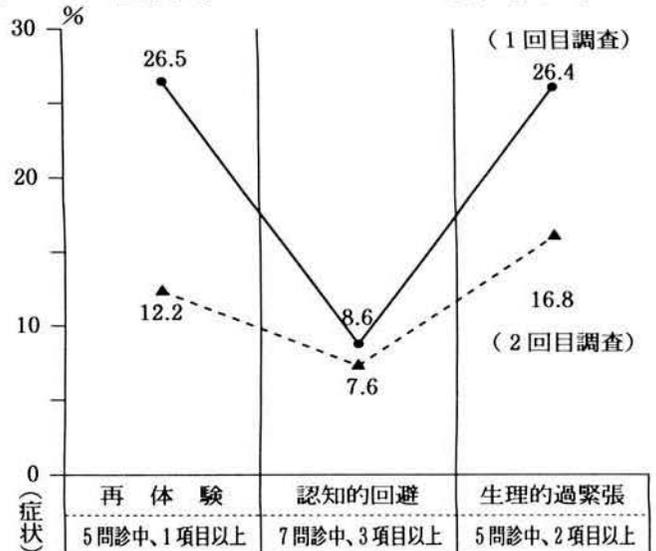
●—● 1回目調査(5月)
▲-▲ 2回目調査(9月)



③-3 症状別推移 (表8)

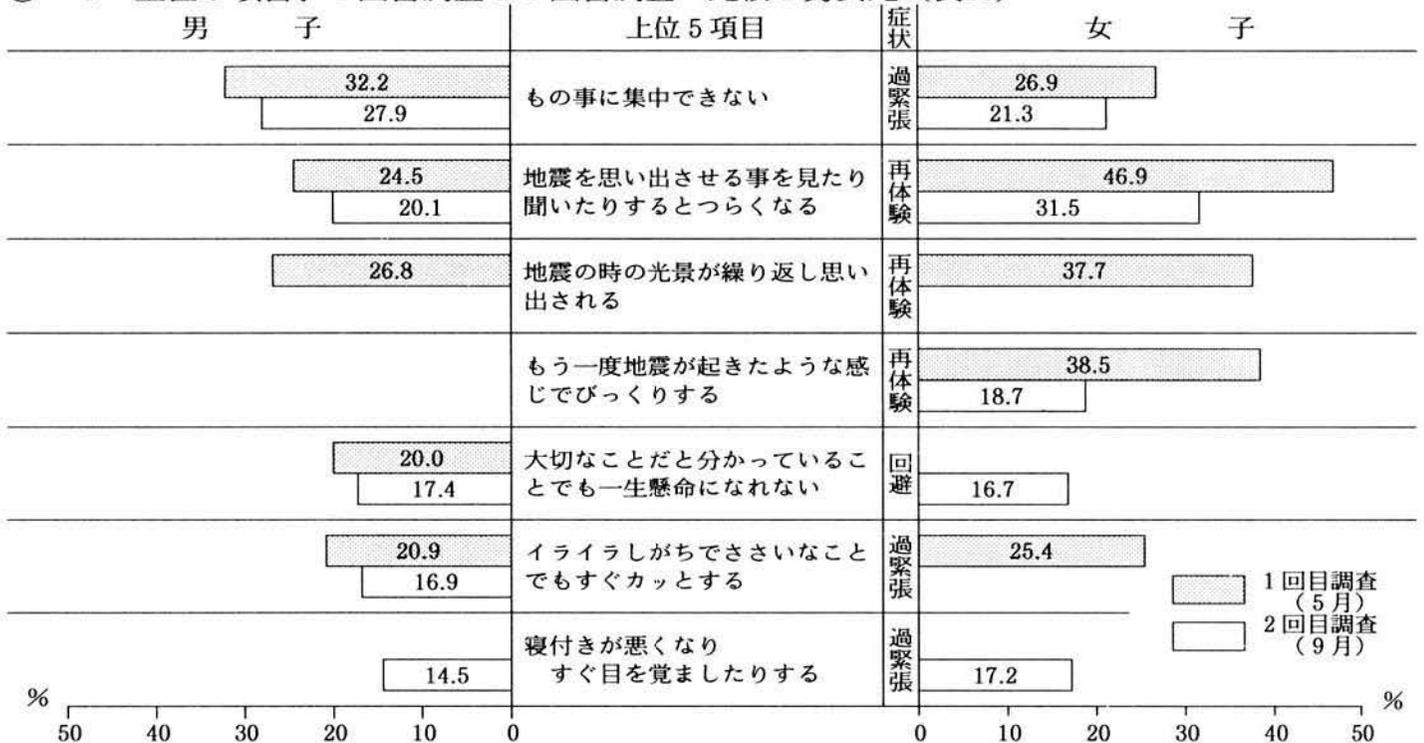


③-4 症状別ストレスサイン度 (表9)



- ※ ①再体験とは、災害体験を心の中で反芻することを通して、少しずつそれを現実として需要していく過程。具体的な反応として、フラッシュバック現象が知られている。
- ②認知的回避とは、自分と災害との関わりをできるだけ否定し、災害による心の同様を抑制する試み。最も極端には災害時の記憶そのものを喪失したり、刹那的生き方がある。
- ③生理的過緊張とは、ストレス負荷により生体の生理的覚醒水準が過度に高く維持されることによる症状。睡眠障害が顕著で過敏反応などが知られている。

③-4 上位5項目、1回目調査と2回目調査の比較と男女比 (表10)



2) 心理的変調の考察

①本校生の総得点 (表2) 20才以上の人の総得点 (表3) を比較した場合、高校生よりも大人がストレスを強く感じている事が分かる。また、自宅生活者は避難所生活者と同じくらいかそれ以上にストレスがあることが分かった。地震当初、避難所中心の活動になりがちで、兵庫県の場合は2月当初から外部ボランティアによる避難所での巡回相談が活発になったが自宅で生活する被災者まで対象とされていなかった。この結果と推測する。

② (表2) の男女比に焦点を合わせると、2つのことが分かる。

- ・女子生徒は1・2回調査とも0得点 (症状なし) の生徒が少なく症状ありは1回目で80パーセント、2回目で60パーセントと高率を示している。
- ・しかし (表4) の2回目調査では男子生徒の方が3.5パーセント女子生徒より高くなっている。

心的外傷後ストレス障害は通常災害直後

6ヶ月以内に発現すると考えられているが10ヶ月後、1年後など症状がおそく出る場合は重篤な症状を示すと言われている。2回目調査の総得点が高い生徒は要注意生徒として診ていきたい。

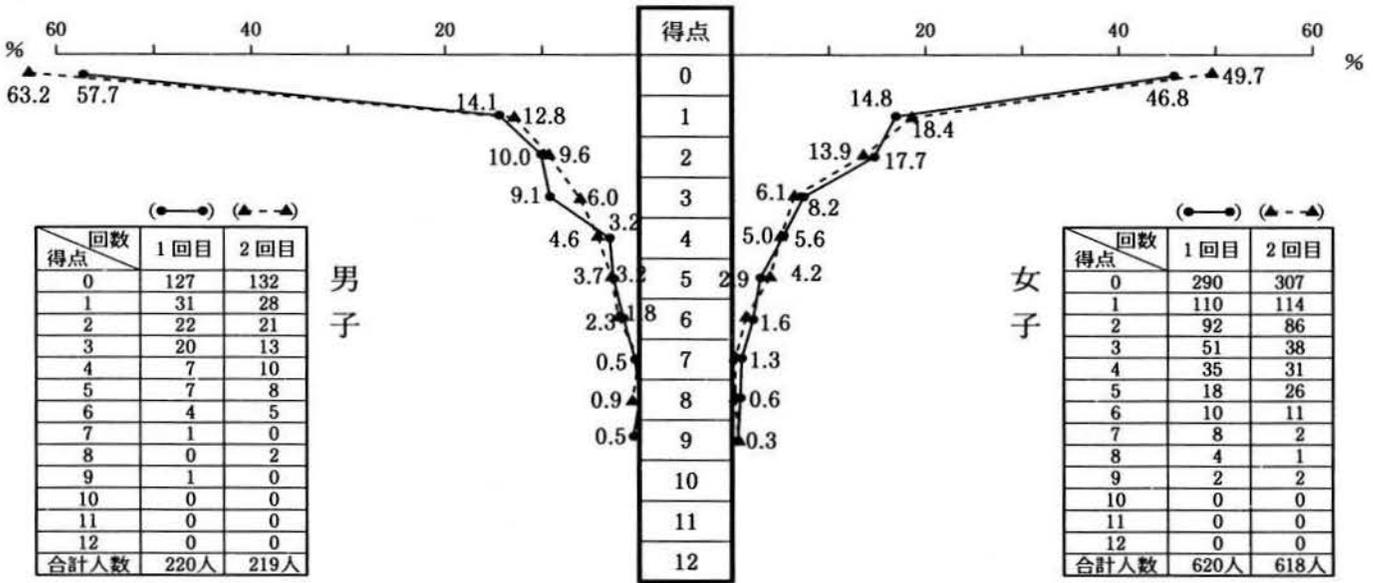
③ (表5) で男子生徒の多い高校と女子生徒の多い高校に分けて解析してみると女子生徒の多い高校が1~17項目で高い率を示した、(1回目調査)。2回目、3回目と比較することが必要であるが総得点 (表2) でも高率を示している。

(表10) でさらに解析してみると女性生徒は、再体験症状に多くの訴えがあるのに対して、男生徒は、再体験と生理的過緊張症状の2症状に分散されている。女生徒の方が災害体験をゆっくり受容していることが分かった。

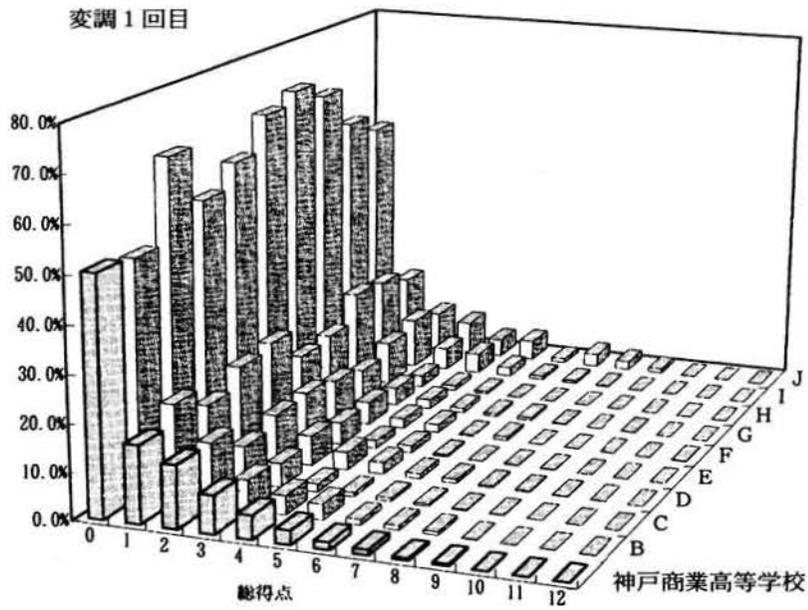
④ (表9) のストレスサイン度は回避症状が1、2回とも変化なく低率を示し再体験+過緊張症状が高率を示したのはPTSDの低減過程の基本路線どおりだ。

3) 身体的変調の集計結果

① 本校生徒の総得点(1回目調査と2回目調査の比較と男女比)(表11)



② 神戸市立高等学校(10校)と神商生の比較(表12)

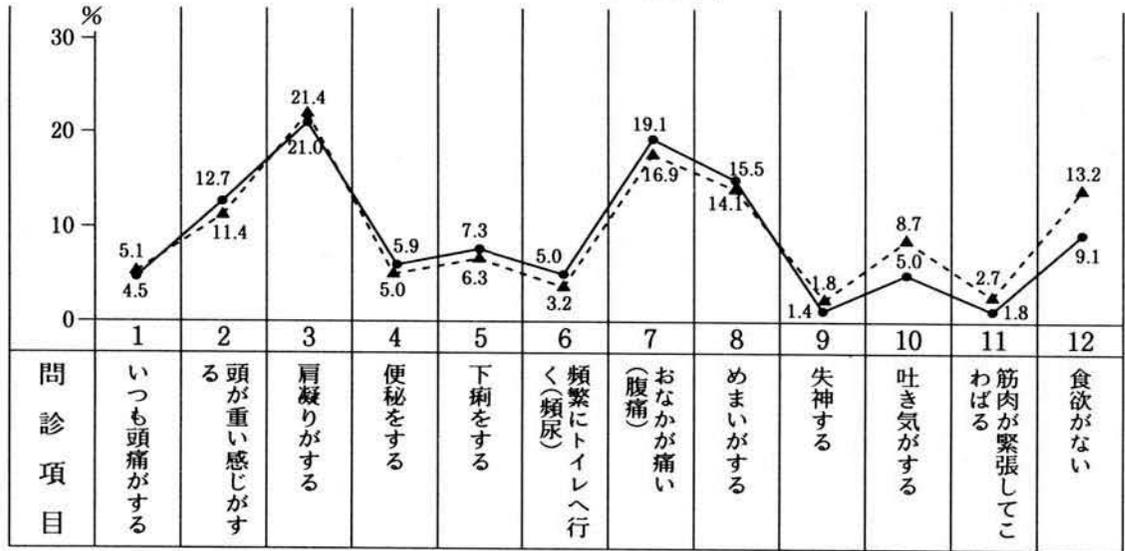


③-1 上位5項目、1回目調査と2回目調査の比較と男女比(表13)



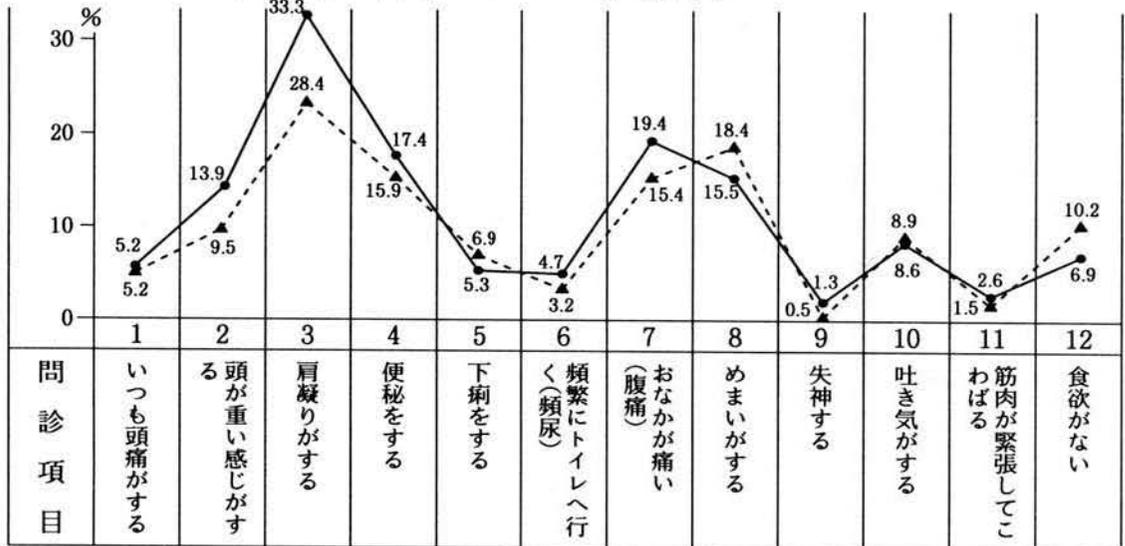
③-2 1回目調査と2回目調査の間診別比較 (男子生徒) (表14)

2. この1ヵ月間に身体の変調があったか。(男子)



③-3 1回目調査と2回目調査の間診別比較 (女子生徒) (表15)

2. この1ヵ月間に身体の変調があったか。(女子)



4) 身体的変調の考察

①表11の総得点は、女子生徒の5割、男子生徒の4割の生徒がなんらかの身体変調を訴えている。心理変調のカーブと比較すると2得点以降はほぼ、同様のカーブで下降していくことが分る。「病いは気から」の諺そのものである。

②表13の上位2項目に「肩凝り」「腹痛」を訴えている。自律神経の働きが悪くなって交感神経、副交感神経の拮抗がくずれ平衡状態を保ち得ない様子がみえる。また、

第3位～5位まで「めまい」「頭痛」など、男女ともに同じ訴えがでてくる。第2の特徴としてマークしておきたい。

保健室来室時の最も多い訴えは「吐き気がする」「おなかが痛い」であった。

③表12の高校別でみると、本校は兵庫商業高校と傾向が類似している。何故、ほぼ同じ傾向を示したのか検討していきたい。

④「食欲がない」が2回目調査で高いのは調査時期が9月初旬であったためと思う。

4. まとめと今後の課題

今回の報告は最終調査（'96年1月）が終わっていない報告でまだまだ、不十分は当然である。例えば、心理変調と被害状況や担任所見のクロス集計や心理変調と身体変調の相関関係、保健室相談事例の分析等々がある。

最も大切で大事なことは、データを机上の数字としてのみ理解するのではなく一人ひとりの生徒の心の変化を見守る手だてとしてしっかりとみつめ、自分には何ができて何が

できにくいのか知り、学校の組織の連携の中で一人ひとりの教師が活かされてはじめて有効な資料となり得る。

また、神戸市立高等学校「心のケア」の取り組みが災害時のディブリーフィング・プログラム開発の一助になるよう努力を重ねたい。

終わりに、研究を進めるにあたり多大な指導をいただきました、京都大学 防災研究所 助教授 林 春男先生に厚くお礼申し上げます。

震災後における体育授業の創意工夫

宮崎 仁 史

1. 本校の被災状況

本校の被災状況は職員室、校長室、事務室などが置かれていた管理棟（鉄筋3階建て）が倒壊して中枢機能が全滅し、普通教室など20室を置く本校最大の校舎である南館が半壊状態で使用不能となった。震災後残った部屋は、普通教室11、特別教室10だけとなり神戸市内の学校でも被害の大きい1つに数えられる。

2. 体育施設の現状

校舎の倒壊の影響と避難住民の対応で体育施設の提供を余儀なくされており、現状は以下の通りである。

(1) 体育館

メインフロアー 被災者の住居空間として提供

男女更衣室 同上

器具倉庫 被災者用生活物資倉庫・大型冷蔵庫

体育教官室 被災者対応宿直室

(2) グランド

西側 仮設校舎5棟使用

東側 被災者用テント村使用

(3) 講堂 校舎倒壊により全壊

(4) プール 全壊

現在使用可能な体育施設は

格技室 150㎡

バレーコート 750㎡

テニスコート 1000㎡

グラウンド一部 900㎡

※ 本山第2小学校5年生5クラスも体育授業で本校の施設を利用しており、週3時間を小学校の体育に提供している。

3. 体育授業の取り組み

(1) 本年度の体育科方針

校舎解体に伴う粉塵、騒音、そして水道もなく、仮設トイレ使用という状況と運動できる場所はごく一部という条件で進められていた新年度授業再開の手続きの中で体育科として体育授業について以下のように確認した。

① 日々学校施設の状況が変化し、いつ、どのような状況になっても、その変化に応じて柔軟に授業を対応させること。

② 生徒たちのストレスを考え運動量ができるだけ確保し単調な運動やトレーニングに陥らないこと。

③ 学校外の体育施設の利用を考える。

以上のことを踏まえてクラス編成、時間割り編成、カリキュラム編成で工夫し柔軟に対処することにした。

4. まとめと今後の課題

今回の報告は最終調査（'96年1月）が終わっていない報告でまだまだ、不十分は当然である。例えば、心理変調と被害状況や担任所見のクロス集計や心理変調と身体変調の相関関係、保健室相談事例の分析等々がある。

最も大切で大事なことは、データを机上の数字としてのみ理解するのではなく一人ひとりの生徒の心の変化を見守る手だてとしてしっかりとみつめ、自分には何ができて何が

できにくいのか知り、学校の組織の連携の中で一人ひとりの教師が活かされてはじめて有効な資料となり得る。

また、神戸市立高等学校「心のケア」の取り組みが災害時のディブリーフィング・プログラム開発の一助になるよう努力を重ねたい。

終わりに、研究を進めるにあたり多大な指導をいただきました、京都大学 防災研究所 助教授 林 春男先生に厚くお礼申し上げます。

震災後における体育授業の創意工夫

宮崎 仁 史

1. 本校の被災状況

本校の被災状況は職員室、校長室、事務室などが置かれていた管理棟（鉄筋3階建て）が倒壊して中枢機能が全滅し、普通教室など20室を置く本校最大の校舎である南館が半壊状態で使用不能となった。震災後残った部屋は、普通教室11、特別教室10だけとなり神戸市内の学校でも被害の大きい1つに数えられる。

2. 体育施設の現状

校舎の倒壊の影響と避難住民の対応で体育施設の提供を余儀なくされており、現状は以下の通りである。

(1) 体育館

メインフロアー 被災者の住居空間として提供

男女更衣室 同上

器具倉庫 被災者用生活物資倉庫・大型冷蔵庫

体育教官室 被災者対応宿直室

(2) グランド

西側 仮設校舎5棟使用

東側 被災者用テント村使用

(3) 講堂 校舎倒壊により全壊

(4) プール 全壊

現在使用可能な体育施設は

格技室 150㎡

バレーコート 750㎡

テニスコート 1000㎡

グラウンド一部 900㎡

※ 本山第2小学校5年生5クラスも体育授業で本校の施設を利用しており、週3時間を小学校の体育に提供している。

3. 体育授業の取り組み

(1) 本年度の体育科方針

校舎解体に伴う粉塵、騒音、そして水道もなく、仮設トイレ使用という状況と運動できる場所はごく一部という条件で進められていた新年度授業再開の手続きの中で体育科として体育授業について以下のように確認した。

① 日々学校施設の状況が変化し、いつ、どのような状況になっても、その変化に応じて柔軟に授業を対応させること。

② 生徒たちのストレスを考え運動量をできるだけ確保し単調な運動やトレーニングに陥らないこと。

③ 学校外の体育施設の利用を考える。

以上のことを踏まえてクラス編成、時間割り編成、カリキュラム編成で工夫し柔軟に対処することにした。

(2) クラス編成

昨年度より選択制を踏まえて、2クラス(80人)を同時開講し3人の教諭で指導する形態をとっていたので、本年度も同じ指導形態をとることにした。

しかし、活動場所、施設、用具の不足から選択制の授業は実施できなかった。そのため男女比の関係から2クラスを3つのグループに分け(①男子20人、②女子30人、③女子30人)、狭い活動場所を少人数で有効(3か所)に使用し授業を行なうことにした。

(3) 時間割り編成

教務部に依頼し1単位時間に3クラス以上の授業が重ならないように時間割りを編成した。

(4) カリキュラム

従来の年間カリキュラムによる単元編成が不可能であり、本年度の年間カリキュラムを作成するについて、体育館やグラウンドの復旧状況が予測できないため、学期ごとの編成及び月毎の体育科打合せによる変更等を確認した。

1学期は修復をしないで使用できるバレーコート、テニスコートでそれぞれバレーボール、ソフトテニス在全学年に振り分け、雨天時でも活動できる場所が格技室しかないため剣道を1、2年男子で行い、同じく剣道で使用しない時間に女子ダンスを組み込んだ。

(5) 単元計画

2年生の週3単位の内2単位を連続授業として編成し、外部施設(県立健康センター等)を利用しての活動を可能したり、住吉川の河川敷での活動を取り入れることができるように時間的な余裕をとった。(2学期10月より県立健康センターのプールを利用し水泳授業を行う予定)

また格技室を有効に利用するため、剣道とダンスを取り上げ、剣道は昨年より教育課程の改訂で1年生で武道を行っていなかったため、2年生男子に2時間連

続で取り扱うことにした。またダンスも同様に2、3年生で扱うことにした。

4. 3カ月の経過と今後の課題

本校は商業科の教育課程であるため、体育科の配当時間が8単位時間と普通科より少なく、また女子が全体の70%を占めているため1単位時間に3クラス以上の重複やクラスのグループ分けが比較的容易に行えたように思う。その点ではバレーボール、ソフトテニス、剣道、ダンス、住吉川のランニング等で単調な活動にならないよう、狭く分断されている施設を有効に活用できているようである。

しかし、2年女子のダンスなどはプレハブ2F建て食堂の2階、30畳程の部屋を整理し使うなど不便な授業を強いられている。特に雨天の活動場所が格技室だけとなり、教室で体育理論などの講義に切り替えざるを得ない状況である。

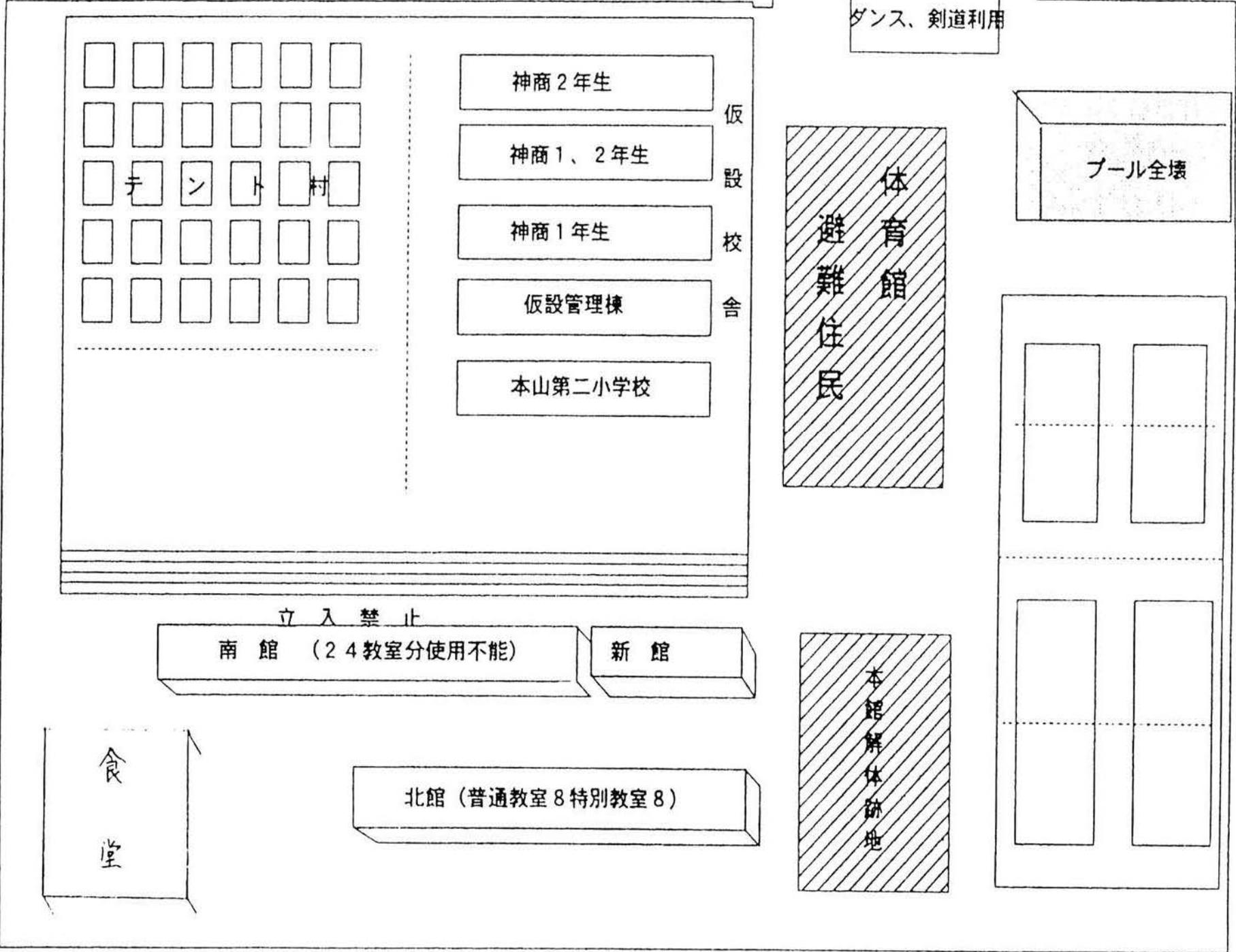
1学期はなんとか生徒も事情を理解し活動してきたが、2学期以降どのようなカリキュラムが組むことができ、生徒たちの活動意欲を満足させることができるのかが今後の課題といえる。また、体育館やグラウンドの復旧が徐々に期待できる状況になってきたものの、震災で紛失した備品や用具が十分に回復される予算措置が組まれておらず、これらの不足が心配される。そして、狭く分断された活動場所はあるが中途半端な広さで、大きな場所が1つ確保されるのは2～3年先という見通しで、長期的な視野にたったのカリキュラムや単元の検討や抜本的な見直しが必要ではないかと思う。

体育科として卓球やダンスのできるプレハブの体育室建設や2学期から再開する近隣の温水プールの使用を要望したり、グラウンド用のスタンド式バスケットゴールを購入するなど具体的に授業計画案を検討しているが簡単に対処できるものと相当の予算の必要なものとあり今後とも創意工夫を重ねる必要に迫られている。

平成7年度体育科年間カリキュラム

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
1年 男子	実技	1	集行	団動	バレーボール								陸上競技							サッカー																
	剣道	2	剣道								剣道																									
1年 女子	実技	1	ソフトテニス								器械体操							バスケットボール																		
		2	集行	団動	ソフトテニス								陸上競技																							
2年 男子	実技	1	剣道								剣道							水泳																		
		2	剣道								剣道							水泳																		
		3	バレーボール								バスケットボール							サッカー																		
2年 女子	実技	1	住吉	川	ラン	ニ	ン	グ	バレーボール					バスケットボール																						
		2	住吉	川	ラン	ニ	ン	グ	バレーボール					バスケットボール																						
		3	住吉	川	ラン	ニ	ン	グ	バレーボール					バスケットボール																						
3年 男子	実技	1	住吉	川	ラン	ニ	ン	グ	バレーボール					バスケットボール																						
		2	住吉	川	ラン	ニ	ン	グ	バレーボール					バスケットボール																						
3年 女子	実技	1	ソフトテニス								バレーボール							長距離走																		
		2	ソフトテニス								バレーボール							長距離走																		
2年	保健	1	現代社会と健康										健康と環境					生涯を通じる健康					集団の健康													
		2	現代社会と健康										健康と環境					生涯を通じる健康					集団の健康													

現在の校内の状況



避難所状態続く学校

授業・クラブ活動に工夫

阪神大震災の被災地で新学期が始まった。混乱の中で終わった三学期から心機一転、教師たちは「出来るだけこれまでに近い形で授業をしたい」と、春休みから準備

須磨区の神戸総合運動公園が、被災地の小、中、高校に施設の一部を無料提供したため、それを活用した。例えばソフトテニス部は、電車で神戸ローンテニスクラブへ

てられている。駐車場や救護物資を置くテントなどもあり、クラブ活動で使えるのは四分の一ほどの広さしかなかった。だが、四月になつて避難している人たちの協力

が生活する。体育主任の宮崎仁史教諭は「今年の時間割は、グラウンドの都合があり、体育を優先して組んでもらいました」。グラウンドの半分は仮設教室に当て

て授業を受ける。体育の授業は神戸商高のグラウンドを小学生が使い、テニスとバレーのコートは高校生が使うといった形で調整し合い、小学生と高校生の授業時間を確保している。宮崎教諭は「とりあえず一学期を乗り越えるのが目標。このままの状態があと一年続く覚悟はしている。授業をしながら、都合の悪いところはさらに工夫していきたい」と話している。

他校教室・学外施設も活用

備に走り回った。だが、地震で壊れた校舎の解体や改修の作業が進み、避難所になつたままの学校もある。

神戸市東灘区の本山南中は、一日も早く普段の生活を取り戻そうと、春休みからクラブ活動を再開した。避難所になっているグラウンドや体育館が使えないため、ひと工夫した。中央区の神戸ローンなど市内四方所のテニスコートと

「交通費の負担や途中で事故でもあつたらと心配しましたが、うちがよそで練習すれば、ほかの部が校庭を使えますから……」と顧問の増田和幸教諭(三三)。

で、三分の二を確保できた。それでもソフトテニス部のほか、野球部、陸上部、体育館が使えない男女のバレー部と男女のバスケット部が、狭い空間を分け合う。

広いグラウンドが必要な野球部は、昨年までよく借りていた市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

西宮市の上ヶ原中は近くの関西学院大のグラウンドを借り、体育の授業をこなせるめどがついた。しかし、期間は一学期といった約束で、その先の見通しははっきりしないのが悩みのたねだ。西宮市や芦屋市などは、避難所の統廃合で四月中に学校教育の場を確保するめどを立てている。だが、被災家庭が多いことから神戸市の場合、避難所解消の見通しは立っていない。これまでのところ、小、中学校、高校などの約四割に当たる百三十七校が避難所になつたままだ。

同校ではいまも、約二百人が体育館と校舎の一部で避難生活を送っている。足りなくなった教室を補うため、グラウンドの半分近くを使ってプレハブの仮設教室が建

た。広いグラウンドが必要な野球部は、昨年までよく借りていた市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

その本山第二小でも、約百人が避難生活を送っている。校庭に目いっぱい仮設教室を建てたものの、それでも教室が足りず、五年生五クラスは神戸商高に、三年生四クラスは東隣の本山中に間借り

た。市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

同校ではいまも、約二百人が体育館と校舎の一部で避難生活を送っている。足りなくなった教室を補うため、グラウンドの半分近くを使ってプレハブの仮設教室が建

た。市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

市営野球場に仮設住宅が建ち、使えなくなった。顧問の青田敏教諭(三三)は「雪国のことを考えてみる。グラウンドが使えなくなつても、工

震災を事例とした地理学習の教材開発

「防災からみた都市問題－神戸とサンフランシスコを比較して－」を事例として(試案)

伊藤善文

1. 事例設定の理由

地理Aの学習指導要領のうち、「(3)現代世界の課題と国際協力」の「(イ)諸地域からみた地球的課題」について、これまで教科書で取り扱われている事例は、人口問題、食料問題、森林破壊、環境汚染、都市問題などであった。これらの問題は、地域の実情、地域間格差などの社会・経済的背景が、一国内だけでなく、地球的規模で考えないと解決できないものとして提示され、授業の留意点は、生徒の身近で興味・関心のあるものと関連づけることであった。

ところで、筆者は1995年1月17日の阪神淡路大震災に遭った者として、地理教師として、被災体験のある生徒に、何を教え、何を引き出し、何を考えさせたらよいか、フラッシュバックさせることの是非を含めて、随分迷った。地震のメカニズムは地学だろうし、震災後の心のケアは保健体育だろうし、防災教育は家庭科が一番だろうか、と教科の住み分けも考えなければと思った。今回の震災は、地理的見方・考え方の1つである「自然環境及び社会環境と人間との関係について考察する」という点では絶好の地理教材である。震災を地理教材として扱う場合、もっとも適切な箇所は、学習指導要領でいう「(2)世界の人々の生活・文化と交流」のうち、「ア、自然環境と人間生活」の項目であろう。教科書では、自然環境を生活の舞台ととらえ、地形や気候と関連した世界各地の特色ある人間生活を記述している。地震は世界の山脈と地震帯との関連で、自然災害は火山爆発や暴風雨、地震などを事例として扱っている。

しかし、自然災害や防災は、単に「自然環境と人間生活」という平時の観点だけでよいのだろうか。都市直下型の地震で都市が壊滅的な打撃を受け、自然の活断層とともに社会的な断層(阪神淡路大震災では、インナーシティの密集地域での老朽木造家屋の倒壊・火災などで、高齢者や社会的弱者の多くが犠牲になった)も明らかになった。日本付近には4つのプレートが集まり、特に今年になって、環太平洋地域を中心に世界各地で地震が頻発している。

地理教材としての都市問題に、防災都市づくりの観点が入る余地がないのだろうか。サンアンドレアス断層が通っているカリフォルニアでは、これまでの教訓をもとに防災都市づくりが進められているという。ロサンゼルスでは都市の内部構造や社会階層と震災時の問題点が指摘され、メキシコシティやリマなど発展途上国の大都市では、農村からの流入人口がスラム化し自然災害時の危険性が指摘されている。震災後の神戸では、「防災」をキーワードに復興計画が具体化されている。

以上のような理由から、震災後の神戸市の防災まちづくりを手掛かりに都市問題を考え、「諸地域からみた地球的課題」の事例としたい。

2. 教材化の視点

地理教材としての都市問題で教科書では、発展途上国における人口集中にともなうスラムや大気汚染の問題、先進国におけるインナーシティ問題やスプロール現象、ニュータウン計画などが記述されている。しかし、地球的規模で人々が移動し、情報が行き交う今日、都市問題を発展途上国と先進国というステレオタイプに分ける考え方は適切でないと思う。世界各地の大都市は人口を引きつける力が働き、農村部は人口を押し出す力が働いている。その結果、大都市はさらに巨大化し、新たな都市問題が発生しているし、地域によっては突発的な自然災害の危険が潜んでいる。本指導案では、流入人口の増大による都市問題をその都市の自然環境をも含めて考えたい。

3. 指導計画と指導内容

第1時 発展途上国の都市問題－過密に悩むメキシコシティ－

第2時 先進国の都市問題－ロンドンのインナーシティと再開発－

第3時 防災からみた都市問題－神戸とサンフランシスコを比較して－〈本時〉

4. 指導のねらい

- 第1時 発展途上国の巨大都市は農村からの人口流入など人口が急増している。その結果として発生したスラムなどの都市問題の実態や課題を考えさせる。
- 第2時 先進国の巨大都市では、同心円的に都市機能が分化していたが、都市中心部から人口・産業の分散を図った結果、インナーシティで人口が減り、生活環境の悪化が新たな都市問題として発生した。これらの実態や課題を考えさせる。
- 第3時 社会階層によって被災状況が異なることが明らかになった神戸の防災都市づくりを1989年のロマ・プリータ地震で被災したサンフランシスコの教訓を参考に考えさせる。その際、都市の内部構造にもふれ安全で住みやすい土地利用についても考えさせる。〈本時〉

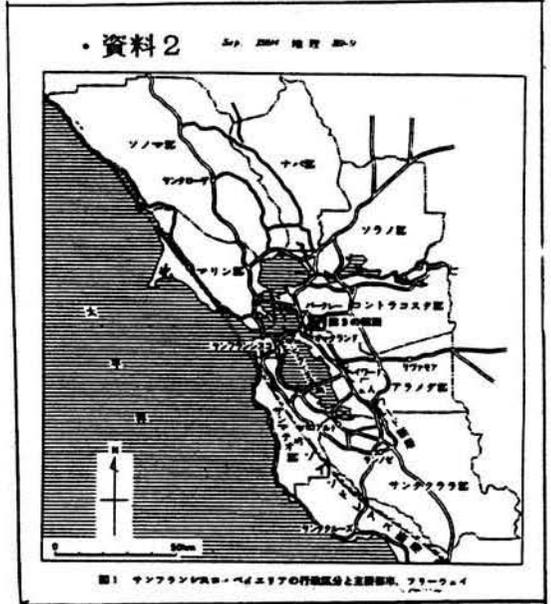
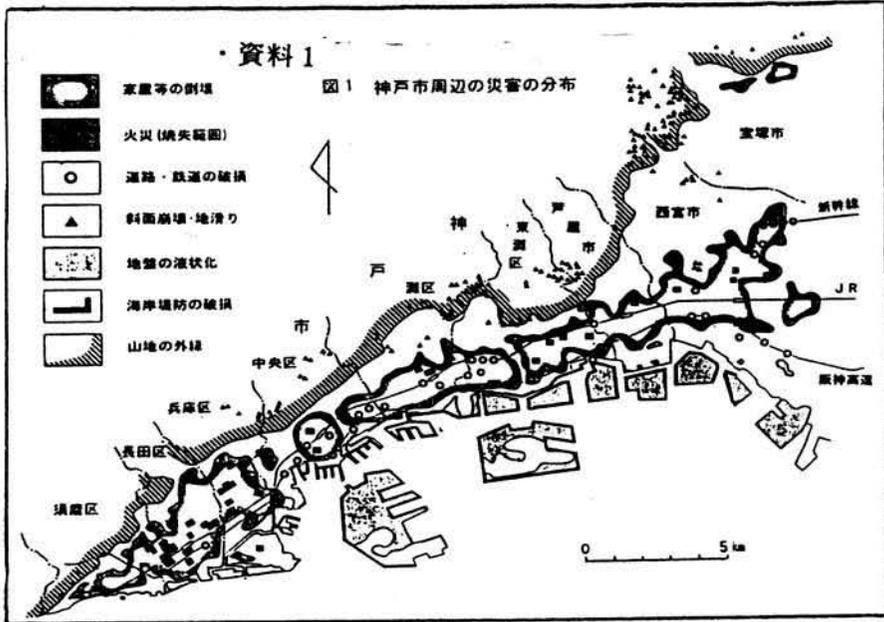
5. 指導展開例

指導過程	学習内容 (主な発問)	学習活動 (予想される発言)	指導上の留意点	資料
<p>・導入 〈課題 把握〉</p>	<p>・阪神大震災1995年の被災地域(神戸)を確認する。</p> <p>・ロマ・プリータ地震1989年の被災地域(サンフランシスコ)を知る。</p> <p>・世界の地震帯</p>	<p>・環太平洋造山帯に位置する日本やカリフォルニアには地震が多い。</p> <p>・神戸とサンフランシスコはともに断層上に位置している。</p>	<p>・地震災害については、概要にとどめ、地震のメカニズムについては深入りしない。</p> <p>・近畿地方の活断層、サンフランシスコのサンアンドレアス断層及びハイワード断層にふれ、ともに断層上に都市が立地していることを理解させる。</p> <p>・大阪湾とサンフランシスコ湾はほぼ同じ広さであり、都市圏規模も似ており、比較しやすい。</p>	<p>・道路倒壊などの写真</p> <p>・阪神大震災の被災地図(資料1)</p> <p>・ロマ・プリータ地震の被災地図…十分なものではないが(資料2)</p>
<p>・展開 問題の設定 〈仮説〉</p> <p>〈検証〉</p>	<p>・都市構造との関連はどうか 〈自然条件のほかに社会的条件もあるのではないか〉</p> <p>・阪神大震災で甚大な被害地域はどのようなところか。</p>	<p>・神戸市街地の被害は、山の手より浜の手がおおきかった。</p>	<p>・都市の発展過程などを時系列的に概観し、経済成長との関連などにふれる。</p> <p>・インナーシティの地盤の弱いところで、特に被害がおおきかったことに注目させる。</p>	<p>(資料1)</p>

(次ページにつづく)

5. 指導展開例 (つづき)

指導過程	学習内容 (主な発問)	学習活動 (予想される発言)	指導上の留意点	資料
<今後の課題>	<ul style="list-style-type: none"> ・ロマ・プリータ地震で被害の大きかったところはどのようなところか。 ・都市構造と地震災害および防災体制について、神戸とサンフランシスコの共通点と相違点はなにか ・復興まちづくりの課題はなにか。 ・ハード面（建物・構造物）の問題はなにか。 ・ソフト面（組織・情報）の問題はなにか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人口密集地域，高齢者居住地域，老朽木造家屋居住地域の被害が大きかった。 ・資料3を読む。 ・神戸の被災状況と自然条件や社会的条件が比較的良好に似ている。 ・災害に強いまちづくりを考える。 ・道路・港湾・交通・街区の整備などを考える。 ・行政と自治会，まちづくり協議会などの活動を考える。 ・神戸市長田区のアジアバザール構想を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インナーシティは高齢者や社会的弱者が比較的多く住み，都市機能は住工混在地域で，戦後あるいは高度経済成長期に人口流入の激しかった地域であることを考えさせる。 ・耐震規制の対象にならない小規模木造住宅の倒壊とその結果として，労働者が家や職場を失ったことを考えさせる。 ・共通点である社会的弱者の居住空間を考えさせる。 ・相違点である防災体制の整備について考えさせる。 ・神戸の復興まちづくりとサンフランシスコの教訓を考えさせる。 ・防災まちづくりに国際的な情報ネットワークを生かすことにふれる。 ・都市計画と区画整理の問題点，居住地移転と経済負担について考えさせる。 ・カリフォルニアでの活断層上の土地利用規制にふれ，同様の施策が日本でも適応できるかを考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> (資料3) ・神戸市復興計画ガイドライン (資料4)。 ・まちづくり協議会資料 (資料5) ・サンアンドレアス断層上の土地利用規制に関する新聞記事 (資料6)
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・防災まちづくりの地球的課題は何か。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際的な情報交換を考え，実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・普遍的な都市問題に防災の観点を導入する。 	



資料3

サンフランシスコ市は、六二〇万の人口を擁する大都市圏の歴史のなかで、常に中核としての機能を果たしてきた(表1)。ただしその人口七二・四万人は、大都市圏全体の人口の十一・五%にすぎない。サンフランシスコオー克蘭ドリサンゼレイト連合大都市統計区(表2)は、アメリカ国内で現在、ニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルスに次ぐ第四の大きな都市圏である。この地域は南はサンタクルーズから北はサンタローザまでの南北約二〇〇キロ、太平洋岸から海岸山脈の東麓に近いリヴァモアまで東西約六五キロの広がりをもっている。ここには九つのカウンティに属する数百のまちがある。サンフランシスコを取り巻くようにして分布している。地域全体としてはベイエリア(海岸地域)という名前がつけられている(図1)。そのなかでサンフランシスコとその南に接する地域をペニンシュラ(半島地域)、サンフランシスコからベイ(サンフランシスコ湾)を隔てた対岸の地域をイーストベイ(東岸地域)と呼んでいる。さらに、サンフランシスコ湾南側のサンノゼを中心として、ハイテク都市の集まる地域はシリコンバレーと呼ばれている。このベイエリアの大部分の地域には中核都市であるサンフランシスコと同様な自然的・人為的災害の原因が存在している。自然的要因のなかで最も重要なものは、北北西-南南東に延びるサンアンドレアス断層帯から発生する地震である。地すべり、洪水、液状化、山火等の危険は地震に比べれば局地的である。こうした自然災害がライフライン(例えば交通、通信、上下水道、貯水池、電気・ガス、食糧の供給、医療体制)に損傷を与える危険性は普遍的に存在する。また、ほかの巨大都市地域と同様にベイエリアでは、日常的な人為的危険(交通渋滞、空気や水の汚染、有害な化学物質の廃棄、都市的犯罪)にもさらされている。

資料5

新長田駅北地区
細田町4・5丁目
まちづくり

2

平成9年7月17日

(有) 細田町4丁目・5丁目まちづくり協議会

まず、区画整理事業の是非についての議論から始めるべき。そのためには協議が必要。

- 神戸市は誰が何を言っているかを考慮せずに、賛成があったから進めようとか、今まで出来なかったことをこの機会めようとしており、そういう姿勢は困る。なぜ、区画整理が入ったのかも説明せずに、自分達で勝手に決めてしまうのはおかしい。世にしている人間の意見をしっかりと聞いてほしい。
- また元の場所に戻って、住むなり開発を進めたいと考えている人は、家を建てられないんじゃないかと不安に思っている。
- 住民サイドとしては、区画整理を賛成にすることが望ましいという気持ちがある。住民の中で、区画整理に賛成か反対か、そこから始めないと何も解決しない。
- 住民が賛成すれば何もそれほど強行に進めることはできないはず。ただ本当に区画整理事業の必要性があるのか、必要性があるとするばどうすればいいのか。それぞれの条件の中でこんなやり方がある。あんなやり方があるというように、個別の問題を話し合うのが協議会だ。
- 個々で対応できる問題ではないし、だからといって何もせずにいるわけにもいかない。この会で協議し、長家と意向調整、修正を何度でも繰り返していけばいい。
- 区画整理に賛成した時のメリット・デメリット、反対した時のメリット・デメリット、それぞれあると思うので、検討していけばいい。
- 道路のことについても何にしても、我々がまだまだ協議していかなければいけないことがたくさんあり、それなしに賛成も反対もない。また企業の方も、住民の問題は自分達とは関係ないというのではなく、お互い同じ所で発生している者として、それぞれが抱えている問題を協議していくことが必要。

資料4

安全都市基準のフレーム

安全都市づくりをめざし、以下の3つの課題のもとに都市の総合的な防災性能を高めています。

この3つの課題を実現するため、安全都市基準のフレームとして「11の目標」を設定します。

課題	目 標
防災生活圏	1 生活の広がりに応じた快速で安心な防災圏域を形成します。 2 安心でゆとりあるすまい・住環境をつくります。 3 ともに守り安心できる地域社会をつくります。
防災都市基盤	4 地形の特性に応じた防災対策を講じます。 5 災害時でも被害を最小限に抑えるまちをつくります。 6 災害から人命の安全を確保します。 7 被災時でも都市機能が維持できるまちをつくります。
防災マネージメント	8 平常時から危機管理システムを整えます。 9 被災時の緊急対応体制を確立します。 10 迅速な復旧を推進します。 11 ともに守り安心できる広域の協力を推進します。

資料6

活断層による土地の利用規制をめぐり意見も出る。今何もしないままに放置していてもいいが、それには我々が懐疑的である。よかりフォルニアの例が出ているが、同州のサンアンドレアス断層は年間一―二センチと現在動いている帯(ほう)なもので、だれにも判(わか)りやすく、その上建設物を作る人はまずいなくて、規制するまでもなからう。また、広大な土地がある國(くに)の路(みち)なので代(しろ)地(ぢ)も見つけやすい。

我が國(くに)の都会地のような、人口が密集し、地価の高い所で、いつ動(うご)くかもしれない活断層のしかも推定地という現状では、利用の規制そのものは現実性が無い。既に私の場合がそうで、多額のローンでようやく入手した不動産を却(かえ)り地(ぢ)に新たに求めるのは経済的にも精神的にも大変な負担である。まして、その他の複雑な形のある場合はなおさらである。それゆえ、私どもとしては断層構造を再(た)ったした建物(たてもの)に助(たす)むことがせいぜい現実的(じやうじき)と考(かん)えている。

＊ロマ・プリータ地震

1989年10月17日午後5時、サンフランシスコの南東部約100kmのロマ・プリータ山付近を震源とするマグニチュード7.1の地震が発生した。この地震で、死者62人、負傷者3737人を数え、約12000人の人々が家を失い、サンフランシスコ湾兩岸の産業基盤や由緒ある建築物に被害をもたらした。オークランドの沖積粘土層（ベイマツ）上につくられたフリーウェイが延長2.4kmに渡り崩壊した。また、ベイブリッジの上層の橋げたが落下して下層をふさいだ。サンフランシスコ市街北東の埋立地では古い家屋に大きい被害があり、地震動によって火事も発生した。この地震の3カ月前にはハイワード断層を震源とするマグニチュード7.5の地震を想定した防災訓練が実施され、公表された評価では、連邦政府、州、カウンティ、地方自治体その他の対応は妥当なものであった。（資料2の本文の一部を修正して記述）

<資料の出典>

- ・資料1 国土地理院災害地理調査班作成「神戸市周辺の災害分布」
（日本地理学会秋季大会予稿集，1995年）
- ・資料2 ラザフォード・H・プラット「サンフランシスコ・ベイエリアの自然災害」挿入図
（古今書院『地理』39-9，1994年）
- ・資料3 前掲，資料2の本文の一部
- ・資料4 神戸市「復興計画ガイドライン」（1995年）
- ・資料5 『阪神大震災 復興市民まちづくり Vol.2』（学芸出版，1995年）
- ・資料6 田中真吾「地理学者の震災」神戸新聞1995.3.9

6. 付記

（1）国際化の進展等社会の変化や科目の専門性にどう対応したか

国際化の進展にともなう日本の都市問題の一つに、流入外国人労働者の増加がある。移民の国・アメリカ合衆国の都市では、以前から都市機能の郊外分散化が図られ、かつてのダウントウンに低所得者が流入し、スラム化する事例が報告されている。ニューヨークが然り、ロサンゼルスが然りである。

阪神大震災で被災した神戸市では、インナーシティである長田区を中心に戦前から在日韓国・朝鮮の人々のほか、今日ではベトナムの人々が住み、働いている。

活断層がとおり、さまざまな民族が集まるサンフランシスコ、活断層のほか社会的断層も明らかになり、復興計画のなかで、アジアバザール計画のある神戸、両市の防災都市づくりを生徒の実体験をとおして、行政の施策と住民の意向の両面から検討し、地理的見方・考え方を育成したい。

（2）指導計画の作成をとおして明らかになった検討課題

都市問題が地球的課題であることは事実だが、震災と都市問題がどのように結びつくかは検討課題である。本報告は、生徒にとって身近で強烈なインパクトのあった阪神淡路大震災を事例に都市問題の一端にせまったが、おもな留意点は次の3点である。①世界の都市を比較してその発展過程や問題点を時系列的または空間的に考え、共通点や相違点を見いだす、②突発的な自然災害に対応する防災の観点を検討する、③身近な地域をとおして世界を考える視点を育成する

（3）学習指導法の工夫

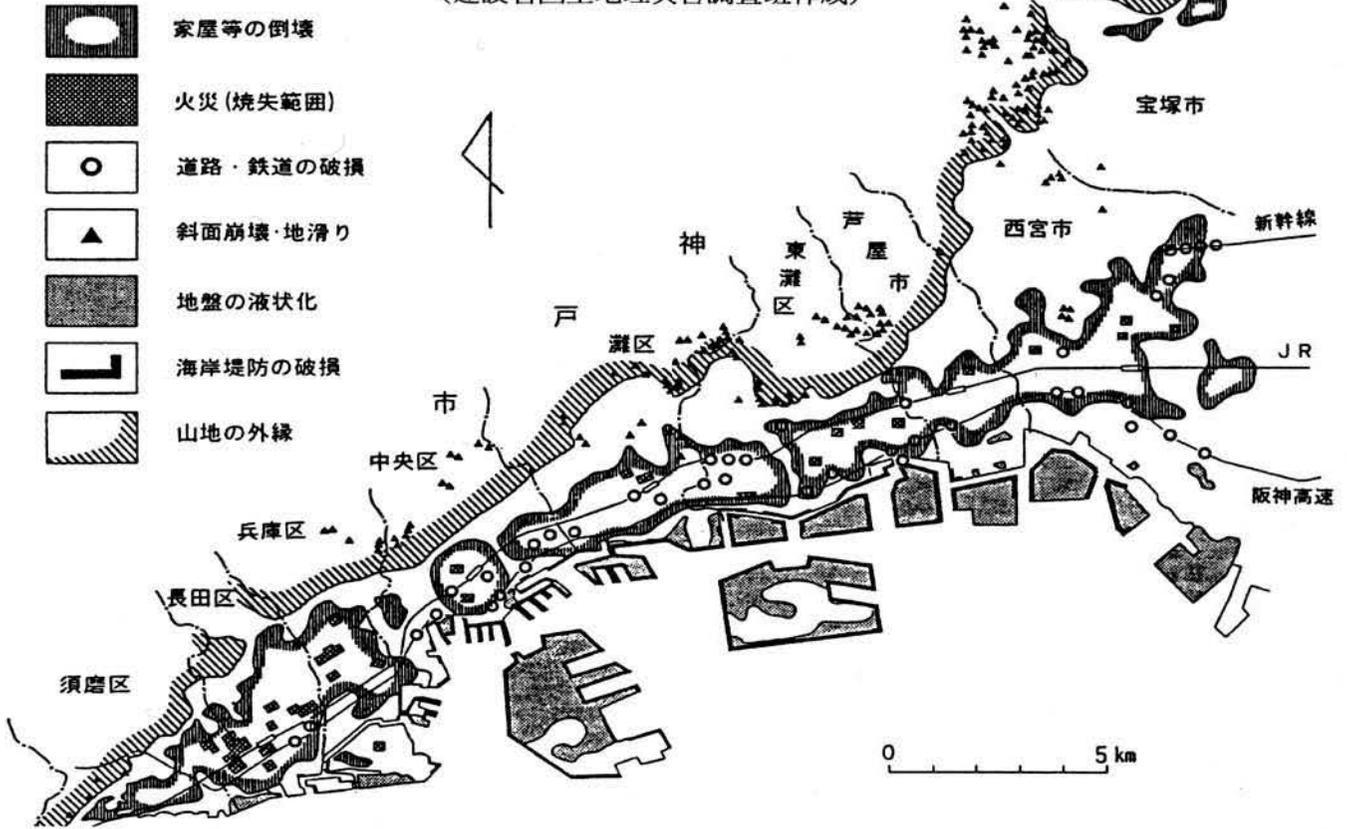
都市問題を生徒の実体験や実態地図、他地域の資料を用いて、多面的に学習ができるようにした。ただ、実体験があるといえども、扱う資料が難解で、比較地であるサンフランシスコの内部構造や施策については理解しがたいので、平易な資料を準備する必要がある。

＊本報告は、1995年11月6～7日、徳島市で開かれた「平成7年度西部地区高等学校地理歴史科・公民科研修講座」で発表したものを修正・加筆した。

<震災関連資料>

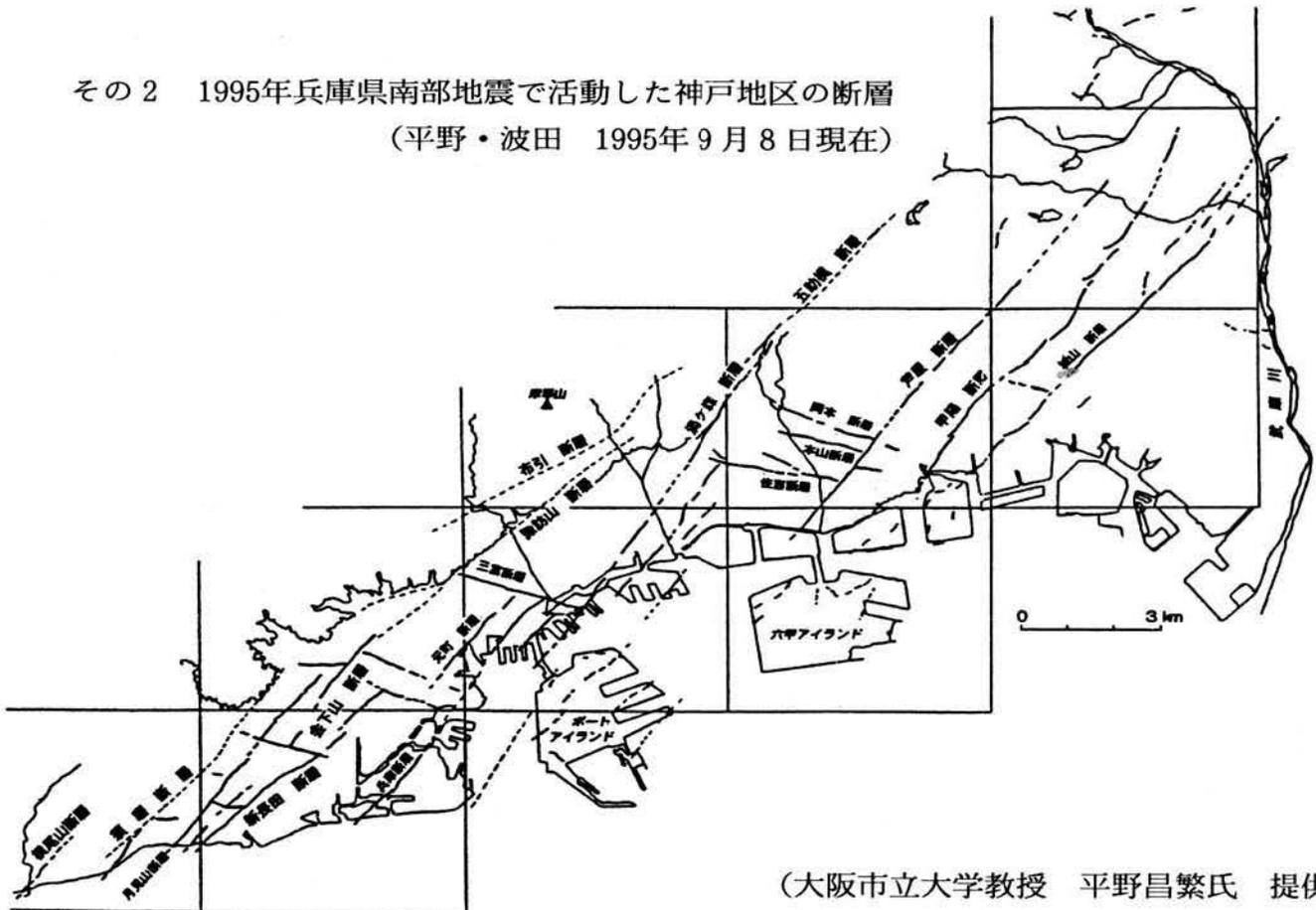
その1 神戸市周辺の災害の分布

(建設省国土地理院調査班作成)



その2 1995年兵庫県南部地震で活動した神戸地区の断層

(平野・波田 1995年9月8日現在)



(大阪市立大学教授 平野昌繁氏 提供)

全国からお見舞いと励ましをいただきました。

◆ 救援物資を頂きました。（順不同、敬称略）

- 岡山県立岡山南高校
- 数研出版(株)関西本社
- 松本筑摩高校分会
- 和歌山県高校教職員組合
- 尼崎東高校
- 岡山南高校
- 東京都高校教職員組合
- 岩手県立遠野高校情報ビジネス校硬式野球部

◆ 義援金を頂きました。（順不同、敬称略）

- 龍神会
- 龍神会 西川禎二
- 龍美会
- K B S シラカワ白川欽一
- K B S シラカワ白川侑子
- K B S シラワカ卒業生有志
- 高野恵美子さんご両親
- (株)塩入スポーツ
- 代々木アニメーション学院
- (株)日本漢字能力検定協会
- スタミナ食品(株)
- 神戸経理コンピュータ専門学校
- 青山短期大学（大阪）
- (株)福武書店
- 日本高等学校教職員組合
- 高松市立林小学校
- 学習研究社
- 神戸商業を励ます会
- 鳥取県立米子高校生徒会
- 全国公立高等学校事務長会
- 野寄住宅自治会
- 小林 芳子
- 滝山 常男
- 宮川 武史
- 仙台商業高校分会
- 長野県高校教職員組合
- 岩手県遠野情報ビジネス校生徒会
- 神戸市立高校教職員組合
- 全日本教職員組合

その他、電話・ファックスなどで多数のお見舞い・激励を賜りました。

ありがとうございました。

編集後記

それぞれに思いのある阪神淡路大震災から1年が経過しました。震災当日から本校は避難所となり、多くの人々が本校を拠点にして生活し、重く苦しい時間の中にも人間の温かさやつながりを感じ、助け合いながら過ごしてきました。

本校では10年前から教育誌『湧水』を発行していますが、今回の10号は震災記録文集として、タイトルを『阪神大震災、あれから1年』としました。特に今回は震災後の教職員の行動や教育活動の記録に留めず、震災に対する生徒の感想、さらに、震災を契機に交流のあった避難者やボランティアの方々、昨年4月以来仮設校舎と一緒に生活した本山第二小学校の児童にも感想を寄せていただきました。ご多忙のなか、原稿をお寄せいただいた方々、編集に際してご助言をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

なお、小誌に載せた写真は本校教員撮影のもののほか、東灘区在住の牧野修三氏の提供によるものもあることを感謝をこめて申し添えます。

被災地域では今、復興の槌音が響いていますが、人々の心の問題も含め、完全に元の状態にもどり、新たな創造をするには時間が必要だと思われます。小誌がこの時代に生きた人々の記録として、何らかの形で役に立てば幸いです。震災で亡くなった多くの方々のご冥福を心からお祈りするとともに、震災で生まれた人々のつながりを大切にしたいと思います。

編集委員

岡田孝久	伊藤善文	中村健樹	木村史人
小玉巧	田中孝明	田中義人	長尾洋治

小誌は本校関係者以外にも教育関係の各機関、神戸市立中央図書館、兵庫県立図書館、国立国会図書館に寄贈する予定です。表紙右上に記している「ISSN 1341-8734」は、『湧水』に割り当てられた国際標準逐次刊行物番号で、国立国会図書館に登録される番号です。この番号はパリに本部のある逐次刊行物国際センターにも登録され、国際的な刊行物の情報交換にも有効で、世界中の人々が希望すれば『湧水』を読むことができます。